

---

# スタリオン・サーガ

関麻

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スタリオン・サーガ

### 【Nコード】

N2529D

### 【作者名】

関麻

### 【あらすじ】

その星は神、魔法、剣、冒険に溢れていた。舞台はある大陸の西岸側、二つの国の戦争を引き金に人間と妖魔との生き残りを掛けた壮大な戦いが始まった！時代を駆ける少年少女達の巻き起こす風は、人間と妖魔の世界に平安をもたらすことができるのか！？魔術師ウィザード、戦士ファイター、僧侶クレリック等様々な人物が織り成す奇跡のファンタジー、星々の伝承スタリオン・サーガ ここに開幕！！

## 序章 星は歌う

大空のわたつみに神々の星々が煌く夜。

銀色の月は燦然と大地を照らす。

太陽は遙か遠くで孤独に燃え、星の海に輝く。

星々の流す涙は降り注ぐ輝き。

虚空に愛は木霊する。

## 第一部 年代記： 星の夜

「往ってくるよ」

暗闇の中に蠟燭が灯っていた。灯からほんの少し離れただけで姿が消えてしまう程の漆黒が彼らを包んでいた。蠟燭の燃える音が静寂の中に響く。蠟燭の火が届く範囲しか眼に映るものはなく、互いの体がどれくらい近くにあるのかも判らぬほどの暗闇。

彼らは怖がっていた。暗闇ではなく、これから事を。

いくつかの蠟燭の辺りに眼を凝らせば、その空間は壁に囲まれているのがわかっただろう。僅かな数の煉瓦が火の光を浴びて、やわらかな黄色に彩られた部屋。

彼らは待っていた。

「気を付けて下さい」

愛する男が戦に出向く前に、生きて再び逢う事を約束するような女性の声。男が郷にいない間は、己が護らなくてはならないと決意した気高い声。声の主は灯に近づき、その顔を光に当てた。

白色の肌に、腰まで届きそうな長く豊かな髪を垂らし、美しい顔立ちを前に向けた。唇はわずかに振るえ、彼女はその昂ぶった気持ちを押さえ込むのに精一杯だった。両手は胸の前で組まれ、愛し人の生還を神に祈る許婚の姿のようだ。その赤い眸は全てを眼に焼き付けておくかのように、彼を見つめていた。

「無茶はするなよ、友よ」

また一人、その姿を光の下に晒した。鍛えられた逞しい筋肉は、人生の半分を既に越えた人間のものとは思えない程に膨れ上がり、

多くの傷痕が残っていた。短く刈り込んだ頭髮、人生の苦悩を顔に刻み込んだ皺、何事も見落とさんとする鋭い眼差し。縦にも横にも大きく引き締まった体軀はまさに戦うために生まれてきた戦士といったところだ。

そして何より彼には生まれながらにして定められた帝王たる者の威厳と偉大さを備えていた。

「ああ、心配するな。今まで通りさ」と彼は応えた。

暗闇の中、辛うじて見えるのは彼が全身を黒ローブで纏い、フードで頭を覆っていることくらいだ。頼りない蠟燭の火は彼の表情を僅かに照らし出すだけに留め、フードから流れ落ちる銀色の長髪を輝かせていた。

彼はフードを取り、その非人間的な美しさを秘めた顔を顕にした。肌の色は浅黒く、耳は大きく尖っていた。彼を初めて見た人は海を渡った遙か西の国に住み、この世の全ての美しさをもってしてもその種の美しさの足元にも及ばないと伝えられる 妖精<sup>エルフ</sup>の血を引くと云われれば信じたであろう。それほどに彼の顔は美しく端整であった。

「僕がいない間は国を頼みます」

女性が見れば誰でも虜になってしまいそうな笑顔であった。

その言葉はその場にいる全員に云ったのだらう。部屋の天井がかなり上の方にある事を、声の響きが示していた。

「任せておけ」

暗闇から若い男の声が云った。その声は誰よりも大きく、そして自信に満ち溢れていた。

「あんたがいない間は俺が軍を率いて国を護る。安心しろ」

「頼んだよ、ディオーン」

「閣下」

さきの女が今にも途切れてしまいそうな声で云った。

「どれ程永い年月が経とうともお待ちしております」

彼の澄んだ眼は赤い瞳を見て「ありがとう」と云った。

彼女は彼に近づき目を閉じ頭を下げた。蝋燭は二人を照らし、ただゆらゆらと燃えていた。

「時間です」と暗闇が云った。

すると今までその場にいた気配すらしていなかったのに、彼と同じく黒いローブを着た男達が出てきた。まるで、今暗闇から生まれたかのように姿を現し、手を前で組みながら彼の横に立った。

その男達は歩いているのにも関わらず、全く足音がしていなかった。顔はフードに隠れ、表情を窺うことはできない。その不吉を感じさせる姿は、気の弱い女子供が見れば悲鳴をあげてもおかしくないだろう。

しかし、その光景は彼らにとっては昔から知っているものだった。彼らは小さい頃からその姿が何であるかわかっていたので、何の疑問も感じなかった。彼らは魔術師<sup>ウィザード</sup>だった。

ローブ姿の魔術師の中の一人が、緩慢な動きで彼に何かを問うように顔を向けた。

彼は魔術師に顔を向け、頷いた。

魔術師は返事も頷き返すこともしない。

「手筈通り、この塔から退去してください」

男性はわかっている、という風に頷いた。

「さらばだ、友よ」

男性は彼女と後ろにゆつくりと退き、暗闇に消えた。衣擦れと煉瓦にぶつかる靴の音だけが聞こえる。蠟燭の火が揺らめき、静寂が空間を包む。

どれくらいの時間が経っただろうか。この空間では時間は意味を成さず、彼はただ待っていた。

魔術師の男は彼に体を向けた。すると彼はロープを脱ぎ、床に座った。表情は穏やかで、むしろその状況を楽しんでいる様子にも見える。

魔術師の一人が何事か呟きながら右の手を動かした。暗闇の中にさらに蠟燭が現れ、宙に浮き、彼を取り囲んだ。魔術師達は移動してその蠟燭の間に立った。

男は全員を見渡し、頷いた。同時に魔術師達は、組んでいた手を離し、右手を彼に翳す様に挙げた。

彼の座っている床に黄色に輝く魔方陣が顕れ、魔術師の右手からも同じような光が立ち昇った。暗闇の中に輝くのは、揺らめく怪しげな光だ。

魔術師達は異口同音に呪文を呟き、両手を動かした。右手を彼に向け、左手は宙を描いている。

立ち昇る光は見るものを魅了する透き通る輝きを放っていたが、今彼らにそのような思惑は無縁だった。

彼は無意識の中で、延々と唱えられる呪文が終わるのを待ち続け、その時が来た。

魔術師は左手を下ろし、最後に一言何かを呟いた。

彼らの右手から迸った光は彼を貫き、衝撃が体を駆け巡る。魔方阵の光は愈々大きくなり、彼らを包み込むまでになったが、それでもそれは拡大し続け、上に伸びた。

光は塔を包み込むまでに大きくなった。光は空高く伸び、夜空を貫き、星空に消えた。

街に愛は木霊する。それは悲しい歌だった。

時にカナン暦一六三〇年銀の月、第四週第三の日。後に 星の夜と云われる日の事であった。



一話 竜巢の谷 (一)

「またここに居たのね」

彼女は探していたものをようやく見つけたような調子で云った。  
悪戯道具を見つけた子供のように嬉しそうな顔をしている。

「お客様が来られたから、馬の世話を手伝って。私だけじゃ手が回らないわ」

色とりどりの花が咲き乱れる花畑に颯爽とその少女 年は十六、七歳に見えるが、まだその顔には幼少の頃のあどけなさや清纯さがあつた は現れた。服装は年頃の女の子らしく、サンダルを履いて白スカートを穿き、上着には桃色の薄着を着ていた。肩から先は素肌が出ており、胸元を強調するような造りになっていた。

彼女は誰もいない事を確認してから花の中央に座っている黒髪の人に眼を据え、走り出した。座って背を向けている男に近づいた少女は、しゃがんで後ろから手を回し相手の目に被せた。

「だーれだ」

柔らかい唇から笑い声が漏れる。そよ風が少女の長い髪を靡<sup>なび</sup>かせる。

「ライカ？」

目を隠された男 声からして、若い男のものだった も顔を綻ばせ、云った。

「ぶーっ。はずれ」

「こんなことをするのはライカくらいさ」

女の子は口を膨らませ幾分不満げな顔を作ったが、すぐにいつもの顔に戻って笑った。無邪気にはにかんだ彼女の顔はまるで天使のようだった。

青空は眩しく、暖かかった。空にある白雲は疎らな孤島を創り、東に流れる。木々は歌い、鳥は歓びに鳴いていた。

彼女は手をどけて男の首を抱き、肩に顎を乗せた。

「お母さん達が探してるよ。手伝って欲しいことがたくさんあるって」

彼女は男にしか聞こえないくらいの小さな溜息をついた。

「手伝うのが厭なのかい？」

彼は訊いた。甘い香りがする。いつも花に囲まれて生活する人々にしかこんなに甘い蜜の匂いは染み込まないだろう。

「ううん。ただ他にもっとやりたいことがあるし、まだ今日の仕事は全部終わってないのにまたやることができちゃったから」

「僕がその新しい仕事もやるから、したいことをやりなよ」

彼は少女を慰めるつもりで云ったのだが、彼女はまた溜息をついた。

「お母さんが仕事は皆平等にやらせる人だって知ってるでしょ。私

だけ好きなことをしてたら怒られちゃうもの」

「僕からライラさんに頼んでおくからさ」

彼女は息を大きく吸い、男にわざと溜息を聞かせるように息を吐いた。

「お母さんはほんとにシルヴァンの頼みだけは断らないからなあ。羨ましいわ」

彼は苦笑した。彼女の云う通り、ライラは彼の頼み事にはできるだけ応えるようにしていたし、彼のことも信頼していた。それも彼が他の人より能率よく仕事をこなし誰よりも働いてくれ、仕事の量が増えても文句一つ云わないからだ。

彼女は抱いていた腕を離して立ち、青空の下、大きく背伸びをした。深呼吸をして空気の匂いを嗅ぎ、満足そうに

「さつ、遅れたらまた何云われるかわからないから往きましょう。あ、その前にお花も少し摘んでいきましょう。お客様方が来てるから、何か花瓶に飾らなくちゃね」

彼女はそう云い、体を屈めて辺り一面に咲く花を選別し始め、手に花を集めていく。

男もその姿を見ながら微笑み、ゆっくりと立った。

シルヴァン、と呼ばれたすらりとした男はゆったりとした造りの肌色の服を着けていた。上着もサツシュも、田舎に住む人が都会で流行っている高価な服を一生懸命真似て作ってみたような感じに作られていた。黒革のブーツを履き、見た目はすっきりしていた。

彼らの住む村ではその格好は羨望の眼差し　特に若い男女から

で見られていたのだ。

大人の男にしてはやや身長が高めで、無駄な脂肪は一切なく、体のバランスが良く整っていた。小麦色の肌は滑らかで、輪郭がはっきりとした顔も綺麗に整っており、もし彼が都市に出かけたら暇をもてあましている金持ちの女や、貴族の遊び好きの女から声をかけられるかもしれない。

また、青色の澄んだ瞳と流れるような黒髪は見る者を引き付けてやまない。風が吹く度に優しく揺れる長髪も若者の憧れの的だった。

「じゃ、戻ろうか」

ライカの手の中に溢れんばかりに集まった花を見て、シルヴァンは云った。

彼らが居る花畑は今まで村の長い歴史の中で誰も見つけることはできなかったが、その場所を最初に見つけたのはシルヴァンだった。

グレイ・マウンテン  
灰色山の渓谷にある入り組んだ道の中に一本だけとある洞窟に通じるわき道があり、そこを進み短い洞窟を通ると山の中腹にある大きな窪地に着くのだ。そこに花畑はあった。

ライカはでシルヴァンの手を取って歩き出した。

「この場所は ドラゴン・テイル 竜巢の谷に住む人にしか教えちゃいけないから、カルダンさんに見せられないのが残念ね」

「仕方ないよ。それがここの新しい掟だからさ」

「あの方は特別よ。わたし、あの方にたくさんいろんな事教えてもらったもの。都会の事や流行っている服装とか、勉強のことと北の国の神秘的なお話だって。少しくらい教えて差し上げてもいいのに」

「そんな事したら長やライラさんに怒られるよ」

シルヴァンは苦笑した。ライカは不満げに口を膨らませた。

彼らは薄暗い洞窟を抜けて渓谷を通り、山の麓に着いた。山の麓から南を見渡すと、村の美しい景色が広がっていた。

鮮やかな色の花々が咲き乱れ、太陽の光を受けて宝石のごとく輝いていた。

そこが彼らの住む 竜巢の谷 の村だった。

灰色山 から村に通じる道の両脇には、よく耕された農地と丁寧に栽培されている花畑が連なっていた。

シルヴァンとライカは家に帰る道を歩いていた。ライカは家に来た“お客”の中に徴兵されていた父親が混ざっていた事を話していた。彼女の父ハイデンは妻のライラと村で花を栽培して生計を立てていたが、昨年村で年に数人徴兵される人の内の一人になってしまった。バスティア公国の首都に派遣され、一年間の兵役を終えて帰ってきたのだ。

賓客として招かれたカルダンはハイデンと小さい頃からの知り合いで、カルダンの方がハイデンより十歳近く年上だったが彼はライラの双子の妹ネイラを妻に娶<sup>めと</sup>っていた。つまりカルダンは年下であるハイデンの義弟にあたるのだ。

カルダンはバスティアーラで有名な仕立て屋を経営しており、ガイザード帝国をはじめカンバルド連合公国の国々に招かれて展示会を開いたり、発表会への参加要望がきていたりしていた。

「今度ここから近いガイザードの都市バヤードで発表会をするから、そこに往く前に寄ってくださいなんですって。兵役の終わったお父さんの見送りに兼ねてね」

「じゃあしばらくカルダンさんはここに泊まるのかい？」

「たぶんね。どれくらいになるのかは聞いてなかったけど、できるだけもらいたいなあ。また色んなお話聴かせてもらいたいし」

彼女はそう云ったきり小さい頃にカルダンから聴かせてもらった物語の中に想いを馳せていたので、まだ自分がシルヴァンの手首を握っているのに気付いていなかった。シルヴァンは気付いていたが、彼女の真剣な表情を見て黙っていることにし、青空を見ていた。

しばらく歩いていると、シルヴァンは前から歩いてくる少年を認めた。少年の方もつくに二人に気が付いていて、十メートルほどに近づいたところで彼は声を掛けた。

「やあ、いい天気だね、シルヴァン。それにライカも」

最後の部分はわざと取って付けたように云った。その時ライカはじめて少年の存在に気付き、一瞬体をビクツとさせた。

「おふたりとも仲良く手を繋いでどこに往ってたんだい？ 羨ましいねえ」

少年は顔をニヤつかせた。その言葉には幾分誇張も含んでいたが。

「な、なに云ってんのよ！」

ライカはそう云いながら自分がシルヴァンの手首を掴んでいることに気付き、すぐさま手を離れた。彼女は道中ずつと手首を握っていたことを思い出し、心の中で自分に悪態を吐いた。

見る見るうちに彼女の顔が髪の色と同じくらい朱に染まっていくのを少年は目敏く見つけ、腕を組みながらやっぱりな、という感じ

でからかった。

「いいなあ、シルヴァンは。オイラも肖<sup>あや</sup>りたいもんだぜ」

「ちょっと、いい加減にしなさいよ、グレド！ 殴るわよ！」

彼女は耳まで真っ赤にしながら殴る格好をして叫んだ。

「おお、怖いなあ。シルヴァンも大変だよな。ライカと付き合うなんてさ」

グレドは手をあげて身を守る真似をした。彼女がその言葉の意味を悪くとったのか良く取ったのかは誰も知ることはないだろう。ますます彼女の顔は赤くなっていた。

「ま、二人ともお幸せにな。じゃ、シルヴァン、また後でな。用事を終わらせたら会いに往くよ」

グレドはそう云うと危険を察知したのか、すぐさま彼らが来た道を走って往った。シルヴァンは苦笑いするしか他になかった。

「あんたなんか二度と家<sup>うち</sup>に來なくていいわよ！ シルヴァンには会わせないから！」

ライカはグレドの後姿に向かって大声で叫び、グレドが走って往った方向を睨んでいた。しばらくすると彼女は振り返り、本来往くべき道を大股で歩き出した。シルヴァンもやれやれとそれに従った。

「なによあいつ。勘違いにも程があるわ」と、ライカはシルヴァンに聞こえないようにイライラと小言で呟いていた。

まだ顔がほんのり赤い。道を歩いている最中、彼女はできるだけシルヴァンの方を見ないようにしていたが、ちらっと横目で彼の表情を窺っていたりした。

彼女は先程より周囲を警戒するようになり、人とすれ違う時はシルヴァンの隣を歩かないよう少々小走り気味になっていたが、知り合いを見つけた場合は必ず彼より五メートルは前を歩くよう気を付けていた。

やがて道の先に大きな家があった。家の横にある馬小屋にはいつもより多くの馬が入っていて、来客の訪問を示していた。

ライカは自分の家の庭を通って扉の前に立ち、ベルを鳴らしてから家の中に入った。

ライカは靴を脱いで笑い声が聞こえる居間に向かった。

シルヴァンはライカの後に続き、居間では机をはさんで椅子に座りながら女ひとりと男ふたりが談笑しているのを認めた。背が高そうで胸が大きく、三十歳を越えているがどう見ても二十代半ばにしか見えない女は<sup>ひと</sup>ライカの母ライラであった。

「お帰りなさい、ハイデンさん」

シルヴァンは髭を生やした男の方を向き、少しばかり頭を下げて云った。髭を生やした男性はライカの父ハイデンだ。徴兵されただけあって往く前よりも筋肉質になっており、血管が浮き出て太くなった腕は頼もしそうだった。

「お久しぶりですね、カルダンさん」

シルヴァンはハイデンの横に座っている恰幅のいい 少々太り気味ではあった 男性に向かって頭を下げた。



富豪の象徴である大きな宝石の付いた指輪を左手の薬指にしており、高価な服をゆったりと羽織っていた。

「ただいま、シルヴァン」

ハイデンは云った。そう笑った渋い顔と鍛えられた体を見れば、夫に不満を持つ同年代の女性がコロツと心変わりしてもおかしくはない。

「おお、久しぶりだね、シルヴァン」

カルダンは笑って云った。その笑顔は誰もが（ああ、この人は良い人なんだな）とすぐに理解し得るくらい無邪気で素直だったのだ。二人は上から下までシルヴァンを眺め、顔にはわずかに驚きの表情が見て取れた。

「本当にシルヴァンか？ 見違えたぞ、ここまで良い体付きになっているとは」

「まったくだ。去年見た時よりも元気そうじゃないか」

すっかり農夫から兵隊目線になってしまったハイデンが低く唸った。カルダンも思わず頷いている。

「おかげさまで。もうさすがに良くなりましたよ」

一通りの挨拶が済むとシルヴァンは「カルダンさん、ちょっと太られましたか？」と訊いた。

その発言を聞いてハイデンとライラは笑いを堪えているように見えるが、当の本人は苦笑いをしてお腹を擦った。

「やはり君にもそう云われたか。先日はハイデンに、さつきはライラにも云われてな。まったく、結婚生活とは辛いものだよ」

カルダン は言葉の割にさほど辛そうでもない口調で云った。結婚前はすらりとしていた体も、愛しの妻の手作り料理を食べることで横に大きくなってしまったのだ。

「ネイラさんはお元気ですか？」

「ああ、もちろんさ。わたしが家に居ない時も使用人達と一緒に家を守ってくれている。わたしは幸せ者だよ」

本当に幸せそうな顔でさつきとは反対のことを云った。カルダンはなぜか周りがクスクス笑っているのに気付き、

「それにしても、ライカもすごく綺麗になったね。もうすっかり大人の仲間入りか」と話の矛先を変えた。

ライカはまた顔を赤らめた。しかし、

「まだまだですよ。ご近所の男の子よりもお転婆で困ってしまうわ。早くいい相手を見つけて結婚してくれば嬉しいんですけどねえ。当分先になると思いますよ」と母親は頭を振りながら溜息交じりの声で云った。

ライカはムツとして

「わたし、馬の世話をします」と云い残し、大股に居間を出て往こうとした。

しばらく黙っていた父親は心配そうな声で訊いた。

「この辺りでライカにちょうどいい男の子はいないのかい？」

「ヒューネのところの子供さんはまだ十歳を過ぎたくらいだし、カリエの息子は確かもう相手が決まってるって聞いたわ」

「もう決まってるのか。彼は確かライカの一つ下だったな」

「そうよ。でもあんまり贅沢云々と罰<sup>はち</sup>があたるから。やっぱりちょうどいいのはサリミアのところのグレドかしら」

シルヴァンはライラがそう云った直後に玄関先で大きな溜息がするのを聞いた。

夜、自室に引き取ったシルヴァンは寝台に座って窓の外にある星空を見つめていた。今夜は満月だった。星はいつものように光り輝いていた。

しばらく見つめていたシルヴァンはふと疲れたように寝床に潜り込み、目を閉じた。眠りは速やかに彼を夢の中に誘った。

一話 竜巢の谷 (一) (後書き)

用語辞典

・メーラ・・・長さの単位。一メーラは約一メートル。

## 二話 竜巢の谷 (二)

眩しい日差しが山に、谷に光を投げかける。獣は淡い眠りに就きながら眼を瞬きしばた、鳥は囀りやんす木々は爽やかな陽光を浴びて緑を照り煌めかせる。

ドラゴン・デイル  
竜巢の谷

に朝が訪れた。

人々は朝早くから仕事を始める。最初の仕事はその日のはじめの食事を作り、一日に備える。家族揃って食卓を囲み、何気ない会話を交わす。それでも、その特別でもなければ独特でもない一連の動作が、彼らの楽しみであり幸せであった。

ライカは居間で編み物をしていた。母のライラも同じく別の部屋で毎年この時期くらいにしか使わない織機を手際よく動かして布を織っている。ハイデンは家畜の飼育小屋で餌を与え、シルヴァンはいえは 自室に居た。

珍しく今日はいつもより寝起きが悪かった。彼はなかなか下に下りようとはせずに部屋の中で考え事をしていた。その物憂げな姿は見る者の心をも悩ませるほどに秀麗だった。

ひとりを除いた家族全員が仕事に勤しんでいる中、扉のベルを叩く鈍い音がした。ライカは手を止め、母親が来訪者に気付いていないと察すると玄関に向かい、扉を開けた。扉の前に体が大きく少しばかり太った男の姿が現れた。両手で大きな箱を大事そうに抱えていた。

「やあ、おはよう、ライカ」

「おはようございます、カルダンさん」と彼女もにこやかに挨拶した。

「お母さんはご在宅かな？」

「ええ、今呼んできますね」

ライカは母が働く部屋の前に立って、大きめの声でカルダンの来訪を告げた。機織の音が止み、急いで出てくるライラの姿があった。

「おはよう、ライラ」

「おはようございます」

「仕事中だったかな？ 邪魔をしてすまない。また出直そうか？」

「いえ、いいんですよ。そろそろ休憩にしようかと思ってたところですよ。さ、あがって下さいな」

「そうかい。すまないね」

ライラは客人を家に招き入れ、居間に案内した。ライカは編んでいたものを片付け、カルダンが荷物を机に置いて座るのを待ってからライラとともに座った。

「実は今日贈り物を持って来ましてな」

カルダンは前置きもせず云った。この後の反応を楽しみにしていたからだ。その言葉を聞いて、ライカは眼を輝かせた。つつい顔の筋肉を緩めてしまう。

カルダンは楽しそうに箱の鍵をはずし、中からものを取り出した。その手の中にあるのはたくさんの書物だった。

「バスティアラで買ってきたんだよ。最近特に売れ行きがいいものや、よく私塾で採り上げられているものばかりだ」

カルダン は笑って云った。

「確か誕生日はまだ先だったと思うが、その時になってここに居れるかどうか知らないから、少し早めの贈り物だ。これを君にあげよう」

ライカの反応はカルダンの望んだ以上だった。

「え、本当に、こんなに頂いていいんですか？」

「ああ、勿論だとも」

ライカは満面の笑みを浮かべ、白い歯を見せた。見開かれた目は目の前の状況を理解しようとして一生懸命だった。このまだ幼い笑顔を見るためにカルダンはバスティアラで本を購入したのだ。

「あ、ありがとうございます」

ライカは思わず立ち上がり、少し震える声でお礼を云って頭を下げた。頭を上げた彼女はおずおずとカルダンの手に収まる本をまるで黄金の財宝を触るかのようにつとと受け取った。印刷されたばかりの独特の香りが彼女の鼻腔を<sup>くすぐ</sup>くすぐり、何とも云えない心地良さを感じさせた。彼女は渡された本の感触や厚みを感じ、そつと一番上の本の表紙に目を走らせる。

表紙を見終わった彼女は目を上げてカルダンに向き直り、深々とお礼をした。彼女は小走りで居間から出て往きかけ、「ありがとうございます」と再びお礼をして二階に上がっていった。

居間に取り残された男女は微笑んだ。

「いつもいつも本当にすいません。もっと安くて小さな物でも構いませんのよ」

ライラも頭を下げた。ライカとは違う意味でのお礼ではあったが。

「いえいえ、お気になさらず。わしの個人的な楽しみでもあるので、どうしても彼女を見ていると、まるで自分の娘のように思えてくるもので」

カルダンは少しばかり愁いを含んだ声で云った。彼　と妻のネイラ　は結婚してもう十年以上経つが、未だに子供は生まれていないのだ。

「ネイラに妊娠の兆候はないんですの？」ライラは心配して訊いた。

「ええ。何人もの高名なお医者様にも診ていただいたんだが、どうやら妊娠の可能性は低いと云われましてな。血の繋がった子供を授かることは諦めたくないが、現実はなかなかそう望み通りいかないものでな」

「養子の件はどうなりました？」

「妻とも話し合ったが、わしも精神的には健全だがそろそろ体の方がそれに追いついて来なくなつてな。若い頃は元気だったが、肉体が老いてきたんだよ。だからもう少し様子を見て、駄目だったら養子の件は前向きに考えることに決めたよ」

「そうですか。産まれるといいですね」



「ああ」

ライラもカルダン夫妻のことが心配であった。双子の妹の体の事も気になるし、なにより妹の家族に子供が授からないのだから。

少しばかり重い雰囲気包んだ。ライラはなんとか空気を換えようとして早めの昼食に誘った。物思いに沈んでいたカルダンはライラの言葉で元の世界に引き戻された。

「それじゃご馳走になるよ」

二階ではドタドタという音と少し床が軋む音が響いた。同じく物思いに沈んでいたシルヴァンは階下で訪問者が訪れたことはもう知っていて、階段を駆け上がる音で現実に戻された。

音の発信源が彼の部屋の前で止まり、扉を叩くのを感じた。

「いいよ」

ガチャ、と扉を開けた主　もちろんライカだった　は手に本を抱え、興奮した顔つきをしていた。

「見てよ、これ。カルダンさんから贈り物を頂いたのよ」と、手にある書物を掲げ、自慢げに云った。

「そうかい。それは良かったね」

シルヴァンはまるで自分も贈り物を貰ったかのように微笑んだ。ライカは極上の笑顔を浮かべて自分の部屋に向かった。シルヴァンは立ち上がり、ライカの後を追った。ライカは自分の部屋の扉を開けっぱなしにして、部屋の中でなにかを漁っているらしい。

彼女の部屋は彼の部屋と一部を除けば全く変わらない造りになっていた。寝台の横には彼の部屋にはない勉強机と椅子、床には大きな木箱がある。

ライカは木箱の中を漁っていた。彼女は探していた物を見つけ、手を止めた。その手にあるのは本だった。それもかなり擦り切れ、所々破けたり千切れたりしている。彼女は小さい頃から集めている本をそこに保管しているのだ。彼女は大の本好きだった。

ライカは幼い頃にカルダンから貰った絵本に魅せられ、それからというもの様々な分野の書物を読んでは自らの知識とすることを趣味にしていた。今まで貰った本は隅から隅まで読みつくしていた。

「これよ」

ライカは贈り物を机の上に置き、その内一冊を取って探していた本と見比べた。彼女は満足そうに頷いて寝台に腰を掛けた。

「高そうで頼めなかったけど、前に頂いた本の続きを頂いたの。すごく嬉しいわ」

彼女は早速表紙を捲っていた。シルヴァンもその熱心な姿を満足そうにして見ていた。パラパラと軽く中身を見て逆にもっと興奮した彼女は云った。

「将来都に留学したとき役に立つように今のうちから勉強しておかないとね」と、つい彼女は自分の野望を吐露してしまい、ハツとした。

しかし、訊いているのがシルヴァンだけなのに気付くと安堵した。竜巢の谷に住む村人の大半は村からあまり出ることなくその生涯を終える。

彼女は都に留学して色んな学問を修めることを夢見ていた。彼女

は物心がついたときにはもうその夢を持っていた。前にその夢を親に云ったとき、親は悲しそうな顔をして働き者の娘を諭そうと頑張ったものだ。

それからというもの、彼女はその夢を胸の奥にしまっではいたが、諦めていなかった。いつか叶うと信じて。

ライカは自分の夢を親の他にはシルヴァンにだけ告げていた。さっきの言葉もシルヴァンは何度も聞いたことがあるので別段驚きもしなかったし、彼女は彼だけは夢を応援して信じてくれる、と信じてやまなかった。

シルヴァンは微笑んで「そうだね」と云った。太陽のような笑顔だった。そんな笑顔で応援してくれば、どんな女性だったとえ高望みだとしてもその夢を諦めはしないだろう。

ライカは照れた顔を見せまいとして顔を床に背けた。シルヴァンは部屋の中に入ってライカの隣に座った。

「ライカはきつと大きな都市の塾で好きな学問を学ぶことができるよ。僕はそう信じてる」

彼はそう告げた。ライカは天使のような笑顔で頷き、「ありがとう」と云った。

階下に下りたシルヴァンは居間を覗き込んだ。

シルヴァンはカルダンにちよつと遅めの朝の挨拶をし、カルダンは昼食をご馳走になる旨を伝えた。シルヴァンは机の上に目を留めた。

彼の視線に気付いたカルダンはニヤリと笑い、バレたか、という風に肩をすくめた。カルダンは箱の中から大事そうに革の袋で包まれた細長いものを取り出した。

紐を解き中身を出すと、綺麗な一本の剣が出てきた。熟練の刀鍛冶に研ぎ澄まされたそれは何度も灼熱の炎を浴びて鍛えられた傑作

だ。

「また良いものを見つけたんですね。今度は何を買ったんです？」

よくぞ訊いてくれた、という風にその言葉を待っていたのはカルダンだ。

「ガイザードの東にあるオーシアン大陸の半分を占めるともいわれる広大なネサハル砂漠を越えた先にある、スイーンという水の国で作られたものだ。その昔、国で一番の職人が幾年もの時間をかけて作り出した傑作が、商人の手によって海を渡り南方の大陸に運ばれ、また縁あってオーシアンの大陸に戻り、ガイザードやペイトアを経てセスタリアのとある骨董屋の店主の手に渡った。運良くその店を知ったわしは何度も何度も店主に頼み、いろんなものを買っては店主の機嫌を取るよう気を遣ったものだ」

まだ口から奔流のように言葉が出てきた。ライラもシルヴァンも周りを気にせず話すカルダンを半ば啞然としながらも面白そうに眺めていた。

「そしてようやく二十年越しの願いが実り、店の主はわしに譲ること　無論タダじゃなかったさ　を決めたのさ」

ようやく話し終えたカルダンはあたかも自分がその剣を作ったかのように自慢げな顔をした。ライラとシルヴァンは共に苦笑した。カルダンは骨董品や昔の武器に目がなかったのだ。

「今度の発表会でも知り合いの方々と自慢し合っんですか？」

カルダンは腕を組んで勿論だ、と云い、

「前は相手方のものの方が良かったからの。今回は負けないように大枚はたいて買ったんだよ。負ける気がせんな。だが流石に財布の紐を緩めすぎた感じはしたかな」

ライラは「ネイラに怒られませんでした？」と訊くとカルダンはウツと唸って難しい顔をした。凶星だったのだ。シルヴァンはこんな人にもそんなところがあるのだな、と思っつてつい笑ってしまった。ライラもつられて笑い、終いにはカルダンですら笑ってしまった。彼らはこんな日がどこの家でもいつまでも続けばいいのにと思っ

### 三話 災厄は嵐の如く

星は流れ、月は沈み、太陽は昇る。果てしなく定められた宇宙の理は<sup>ことわり</sup> 神々の御手によりて 今日も行われる。

大宇宙の《黄金率》 数多の星の住人はその言葉の意味を知ることはない。

神々さえも黄金率の内に囚われているのだ。

夜。あらゆるものが寝静まる宵闇の中で、《それ》 空を翔<sup>と</sup>ぶ巨大な“もの”は 灰色山の窪地に静かに降り立った。その姿を見たのは空に輝く星のみか。

朝 赤い太陽が昇る。金色に輝く貌<sup>かお</sup>を変え、その不吉な兆しを地上に晒す。その日、その星の歴史が始まって以来幾度か起きた《転換期》が今まさに訪れようとしていた。神ならぬ身の誰が運命神<sup>テサーナ</sup>の神意をはかることが出来ようか。

ライカとシルヴァンは部屋で休んでいた。ふたりとも朝のこんな時間まで仕事をしていないことはなかった。しばらくしてシルヴァンが、後に続いてライカが階下に下りて来た。

シルヴァンは家の花畑に往って花の世話をし、ライカは編み物をしていた。

昼過ぎ頃、来客があった。カルダンだった。

「今日も失礼するよ」と、礼儀正しく挨拶し家の中に入った。

居間には家族全員揃っていた。カルダン、ハイデン、ライラそしてライカは椅子に座り、シルヴァンは自分の居場所はどこだとしても

云うようにいつもの場所　入口の左横の壁　に腕組して寄りかかっていた。

短い間世話になった、と切り出し、

「明後日の朝に村を発ち、バヤードへ向かうことを決めた。実を云うともう少し長く滞在したいんだが、バヤードには余裕を持って到着したいのでな」と告げた。

彼は家族ひとり一人にお礼を云った　ライカに「次会うときはもっと美人になって、素敵な恋人もいるんだろうなあ」と　シルヴァンの方をチラッと見て　云って彼女を慌てさせた。彼なりのユーモラスな冗談のつもりだったのだろう。

シルヴァンにもお礼をし、何かに気付いたように少し考え込んだ。

「そういえば、シルヴァンがこの村にやってきてそろそろ二年かな？」

「いえ、あと半年程先です」

「ふむ。もうそんなに経つのか。君が　竜巢の谷　に記憶を失った状態でいきなり現れてもう一年半か」

「そうですよ。谷の道に倒れてたんです」

そのときの第一発見者であるライカは云った。彼は発見された当初衰弱状態にあった。村に二ヶ所ある医療施設で治療され、彼の体が回復しかけた頃どこの家で保護するかと話し合いになった時、彼女は第一発見者であるというただそれだけの理由を振り回して村人を納得させた　無理矢理だったが　のだ。

他の家からも「我が家で世話をする」という申し出　裕福で若い娘が居る家庭　が跡を絶たなかったのだ。その後しばらくは、ライカは村中の女子から恨みがましい目で見られることとなったのだが。

「　確か、シルヴァンが現れた日の前夜はものすごく星が光ってたな」

ハイデンは思い出して云った。ライラもカルダンも肯<sup>がえ</sup>んじた。シルヴァンだけは俯<sup>うつむ</sup>いた。

「まだ思い出せないんです。三年前以前のことを」

彼は辛い言葉を口から搾り出した。顔には苦渋の表情を浮かべている。

「記憶の断片すら戻ってこないのかい？」とカルダンも心配な顔をして訊ねた。

シルヴァンは首を横に振った。

「極稀に何かを思い出しかける感じはするんですが、あと一歩のところですり抜けてしまふんです。無理に思い出そうとしたら頭が痛くなってしまうし」

家族、村の知り合い全員でなんとか解決する術<sup>すべ</sup>を考え実行したもののだが、それもうまくいかなかった。最後はシルヴァンが「もういいです」と云って断念したのだ。

「そっといえば、珍しいわね、その服を着るのも」とライラはシルヴ



アンの服装に眼を留めた。

シルヴァンは「ああ、なんとなく今日は着てみようかと思ってたんです」と云った。全身を黒できめた服装は今から約二年半前、この村に突如として彼が出現した時に着用していたものだった。

とりあえず会談が終わり、カルダンカルダンは旅に同行している従業員とともに宿泊している宿屋へ帰った。ハイデンハイデン一家は仕事に戻った。

その日は夏であるのにも拘らず上着を着てしまうくらい肌寒かった。空は曇り、今にも雨が降りそうな湿り具合だ。家畜も気が立っており、運動をさせるのにも一苦労だ。

ライカは変な胸騒ぎを覚えた。

誰かが話しかけてくる。何度も何度も。それもひとりやふたりじゃない。たくさんの方が。

言葉が上手く聞き取れない。だがその言葉からは差し迫った響きがある。何を告げようとしているのか？

ライカは集中し耳を澄ました。だが聞こえるのは静寂のみだった。

シルヴァンは手を止め、空を見上げ、眉を顰ひそめた。

しばらく空を見つめていた彼の口から「来るな」と低い呟ささやきがした。その言葉の意味は一体なんなのか？ 彼は自分が言葉を漏らしたことすら気付いておらず、ただ東の空を睨にらんでいた。

「あら、進み具合が良くないわね。どこか調子でも悪いの？」

昼過ぎになってようやく空は明るくなり始めたが、寒さは衰えることを忘れてしまったようだ。さらに寒くなった気がする。ここ数年でもこんなおかしなことは起きなかった。何かが起こる前兆か。

「いえ、何でもありません。ちょっと気になることがあったんで考え事をしてました」とシルヴァンは云った。

「あら、ライカもどこか悪いの？」

「え、いや、なんでもないわ。ただちょっと食欲がないだけ」

母親の言葉に意識を取り戻したが、我ここにあらずといった感じだ。さつきから全く食事に手をつけていない。心配そうな顔をした父親と母親が顔を覗き込む。

それでもなかなか食べようとしないライカは「外に往つてきます」と告げて食事を後にした。

ライラとハイデンは顔を見合わせて頭を傾げた。

「病気にでも罹<sup>かか</sup>ったのかしら」

ハイデンは難しい顔をして考え込んだ。

「ここ数日シルヴァンも調子が悪そうだが、流行り病か？」と怪訝<sup>けげん</sup>な顔をして云った。

ライラは首を横に振った。

「村でそんな噂は聞かないし、近くの村からそんな病気が発症したなんてことも聞いてないわ」

「どこも悪いなんて感じはしないんですが」

シルヴァンはそう云うと食事 雀の涙くらいしかない、いつもの量 を平らげ、気分転換に外に出ると告げた。

夫婦はまた顔を見合わせた。

「ふたりとも恋煩いかしら」

外に出たライカは家畜小屋の方に向かった。その方角から声が聞こえるのだ。

誰？ 何？ 一体何を私に云おうとしているの？

風の音が鼓膜を振動させるが、何も聞こえない。

小屋に入った彼女は馬が一頭抜け出しているのに気付いた。

もう、父さんたら、すっかり繋いでおかないんだから。

再び外に出、周りを見渡すと外に置いてある牧草を食べている馬を見つけ、安堵した。馬に近寄り、手綱を引っ張った彼女はハツとした。

今、誰かが話しかけてきた。

思わず辺りを見回す。

どこ？ 誰？

彼女は周りを見ても誰もいないことを認めると、肩を落とした。

（僕はここだよ）

はつきりした声が彼女の耳に聞こえた。初めてしっかりと聞き取れた。彼女は声が出た方を振り向くと、馬がいた。しかもその馬の手綱は彼女がしっかり握っている。

彼女は馬を上から下まで穴があくほど凝視し、有り得ないとわかっていながらも「あなた？」と話しかけた。

馬と眼があったような気がした。しかし、馬は頭をめぐらせただけだった。彼女は馬を軽く見ながら「まさかね」と呟いた。

家の方からシルヴァンがやってきた。お互いの顔を見つめあうと、何故かわからないがふたりは似たような感覚を共有、もしくは実感していると瞬間的に分かったのだ。

「何か感じるか？」

シルヴァンもいつに気が立っているらしいのが、口調からわかる。

「うん」

ふたりとも東の空を見つめた。その先にはなにがあるのか？ シルヴァンは考え事をしているらしい。

ふと、何かを決めたようにシルヴァンは頭を振った。

「これから僕の云うことをしてくれるかい？」

そう頼んだ顔には決意の眼差しがあった。ライカは一瞬気圧されたが、踏みとどまって頷いた。シルヴァンは表情を和らげた。

「村中の人を避難させてくれ。嫌な予感がする。東の方から災厄が襲ってくる。理由はわからない。だけどそう感じるんだ。こちら辺はライカに任せるよ。ひとりでも多くの人を、竜巢の谷に通じる道の北西にあるバーナム森林地帯か、北東側の森林に避難させるんだ。あそこなら一先ず安心できる」と、シルヴァンは口早に云った。

ライカは頻りに頷いていた。

「僕は村の東側に往って住人を避難させる。信じてくれない人がいてもいいから、とりあえずたくさんの家に訪れて知らせるんだ。信じてくれる人が増えれば、信じなかった人達も不安になって跡を追うだろう。できれば大げさに触れ回ってくれ。荷物は大切なものを少しだけと、護身用の道具だけならいいと伝えてくれ。理由を問いつめられたら僕の名前を出せばいい。僕に云われてやった、という風に」

云い終わって、不安そうな顔をしているライカの顔を見ると微笑んで肩を叩いた。

「大丈夫さ」とだけ云い、シルヴァンは小屋に往って馬を出し、颯爽と駆けて往った。

ライカは彼が往った方を見つめ、自分のしなくてはならない事を思い出した。ふと馬を見て、（本当にお前じゃないの？）と心の中で訊いてみた。すると、今度は紛れも無く眼があい、馬は低く嘶いた。彼女は驚き、今まで話をかけてきた正体のひとりが彼馬であつたことを確信した。馬に向かって頷いた彼女は馬に乗り、知らせを携えて駆けて往った。

シルヴァンは村のとある民家の前にやってきた。鮮やかに飛び降りた彼は急いで家の扉を叩いた。家の主が玄関まで来るこの時間ですら惜しい。彼の心を駆り立てているものは何なのか、彼自身もよく解っていない。

扉が開き、彼より頭一つ低い可愛らしい女の子がでてきた。年はライカと同じくらいだ。彼女は訪問者がシルヴァンであることに驚いた。まさか村中の憧れの的である人物が、自分の家に来るなんて夢にも思つてなかつたのだらう。彼女は何を云えばいいのか必死に考えていると、

「お父さんかお母さんはいらっしゃるかい、ミリア？」とシルヴァンは変に違和感を与えないよう微笑んで云った。

ミリアはどきまぎしながらも両親は外で仕事をしていることを伝えた。

「じゃあ、ご両親に伝えておいて欲しいことがあるんだ。それを後すぐに伝えてくれるかい？」

シルヴァンは口早に先ほどの話を掻い摘んで　納得してもらいやすいよう小さな嘘を少しずつ織り交ぜて　話した。

「しっかり伝えておいてね。それと、その次はこの辺りに住んでいる人達にも伝えてもらいたい。できれば子供達　それも君達くらいの年齢の人がいいかな。何か訊かれたら『シルヴァンがそう云ってた』と云えばいいから」

最後に「よろしく頼んだよ」と手を握り肩を抱きながら　本人に悪気はないのだろうか　付け加えたので、ミリアの眼はどこか遠いところを見ているようだった。

シルヴァンは華麗に馬に飛び乗り、別の民家に伝えるべく駆けた。その様子をボーッと眺めていたミリアはふわふわとした足付きで両親のところへ向かった。

同じ頃、ライカも奮闘していた。

大人に説明すると必ずといっていいほど疑惑の眼を向けられたが、最後に「シルヴァンがそう云ってた」と付け加えると少し考えてからライカの話信じることにしたのだ。その大人の理不尽な考え方に腹を立てながらも我慢して別の家に往った。

それに比べ、自分と同じくらいの年齢の人を説得するのはなんら難しくなかった。

例のグレドにも伝えると彼は信用してくれたらしいが、グレドの親は息子が云ったことをあまり信じてくれなかったので、ライカがグレドの家に往って親を説得するのに時間を食ってしまった。

日が傾いてきた頃、村に住む約三千人強の人口のうち約三分の二

くらいの人々が家畜を引き連れてバーナム森林地帯に差し掛かる野原に集まっていた。いつにない喧騒が森林に響いている。

残りの人達もポツポツと疎<sup>まば</sup>らな間隔を作って森林に向かって来るのが見える。

多くの男性はシルヴァンの言葉通り、護身用のナイフ、剣 中には料理包丁を持つ者もいた やら、狩猟に使う弓矢を身に付けていた。

群になる人々の中で人集<sup>だか</sup>りができている。ハイデンとライラは事態の説明に追われていた。

「一体何があつたんだ」

「盗賊でも出たのか」

「お宅の子供のでまかせじゃないのか」

等、彼らには答えようがない質問が飛び交っていたが、「わたし達も他の人から聞いたんだ」としか云いようがなかったのだ。

ライカは誰かを探していた。何故自分がその人を探しているのか解らないし、何故今自分が考えていることを伝えようとしているのかも解らなかった。そもそも、こんなこと自体が解らないことだからなのだから。彼女の頭の中に不意にある“こと”が思い浮かび、それを伝えるべく人探しをしていた。

ようやく、ライカはグレドを見つけた。彼女は彼の肩を叩き、自分を気付かせた。

「お前、こんな所にいたのか。みんなお前を探してるぞ」

「知ってるわよ」

「なんでこんなとこに人を集めたんだ？」

「わたしにもよく解らないの。ただ、こうした方がいってシルヴァンと話し合っただけなのよ」

グレドはハアと溜息を吐いて呆れ顔をした。そんなことはお構いなしにライカは話を続けて、

「でもものすごく嫌な予感がするの。何かが起こりそう」

「女の勘は鋭いつて云うしなあ」と半分茶化し気味に云った。

ライカはムツとしたが、また我慢した。

「あんたにはやってもらいたいことがあるの。引き受けてくれるわよね」

グレドは「しょうがない。乗りかかった船だ」と呟き、次の言葉を待った。

「みんなに伝えて欲しいの。私があんたに合図したら、あんたがして、みんながつてな風に。これを取り越し苦労になつてくれれば嬉しいけど」

グレドは「わかったよ」と云って早速実行しに人の山に向かった。その後姿を見届けたライカは周りを見て、カルダンと旅に行っている従業員の一団を発見した。従業員達はそれぞれ背中に大きな荷物を背負っていた。恐らく発表会で使用する生地や今年の新作だろう。カルダンも然り、馬の背に荷物を背負わせていた。



ライカは知らないが、恐らく荷物の中には大切な“剣”を入れているだろう。

シルヴァンは村の東側にいた。全民家に話が行き渡るのを確認しなければならなかった。

彼は東の空を見ていた。もうそろそろで太陽が地平線に沈んでしまふ。辺りを夕闇が支配しかけていた。

不意に彼は何かを感じたように身構えた。その口からは「来る」とだけ聞こえた。

すると、彼の眼は村に入ってくる“もの”を見つけた。それこそ、災いの知らせだったのだ。

#### 四話 紅き災いは闇夜と共に

《それ》はやってきた。馬と人の形をして。

飛脚だ。馬は口から涎を垂れ流し、乗っている中年の男も汗と埃まみれだ。

「何があつた！」

「ウルギア盗賊団だ！」

男は大声で応えた。

シルヴァンは顔を顰<sup>しか</sup>めた。

ウルギア盗賊団　カンバルド連合公国の悩みの種。オーシアン大陸に轟くその悪名は絶望、殺戮、略奪をもつて迎えられる。

わずか二百足らずの集団はカンバルド連合にある小さな村々を標的に金品、女、食糧を強奪する。しかもその手法は残虐無慈悲として知られる。連合軍は十数年間も盗賊団を追い続けているが、その機動力に勝るのはヴァリノイア王国軍の銀竜騎士団、ガイザード帝国軍　第一の将　 balan 率いるパラスラ騎士団しかないとも云われる。

連合軍が何年もその尻尾を掴むことができないのは、少数人数であるが故に山地など険しい地域を楽々通り越すことができるためである。

それが、よりによってこの村に来るとは

「あと二十分もしたら村にやってくるぞ！」

瞬時にシルヴァンは考えを決めた。

「こつちだ！」

馬を巧みに操り、西 グレイ・マウンテン 灰色山 に向かう。道を怒涛の勢いで駆け上る。道を進んでも通行人の姿が見えないのは、住人が速やかに避難したからだろう。

そろそろ野原に着く、という距離になったところで通行人を発見した。

シルヴァンは男に「先に往ってくれ」と云い、馬を止めた。

「急ぐんだ！ はやくしないと、盗賊が来るぞ！」

通行人は驚き、質問を浴びせるかわりに走った。

シルヴァンも馬を飛ばした。彼はまだ避難しきっていない人に警告を与え、野原に向かった。

野原に着くと、住人が屯たむろしていた。何人かがシルヴァンの姿を認め、彼に指を差し始めた。

「ウルギア盗賊団が来たぞ！ はやく森の中に逃げろ！」

シルヴァンは大音声で呼ばわった。明らかに何を云ってるのか聞こえていないらしく、村人はきょとんとして彼を見つめた。

「ウルギア盗賊団だ！ 森に避難しろ！」

彼はさらに声を張り上げた。村人の中に動揺が走る。だが、ざわつくばかりでなかなか移動しようとはしない。

「はやくしろ！ あいつらに殺されてもいいのか！ あと十分もしたら村に来るぞ！」

シルヴァンは痺れを切らし、脅すような口調で云った。いつもの彼を知る人は驚き、これは只事ではないというのをようやく理解した。

次々と人々は森の中に入っていくのを見、シルヴァンは「家族と離れ離れになるな！ 一纏めになるんだ！」と注意した。

「武器をもって戦える男は集まってくれ！」

ヴァリノイアを囲むように木々が発生しているバーナム森林地帯と灰色山の麓の東側にある森林は深いので、住民が入りきらないということはない。

激しい人の流れの中、シルヴァンに近づいてくる人影があった。村長のフェンド、ハイデン夫妻、馬を引き連れたライカ、カルダンに続いて屈強な男達が近づいてきた。シルヴァンは馬から下り、ハイデンから弓矢と小振りな剣を受け取った。

「本当にあの盗賊団が来るのか？」

シルヴァンは武器を装着しながら頷く。

全員の顔が曇った。

村長は前に出て、「無駄だとは思うが交渉になればわしが代表として立ち会う」と辛そうに告げた。

「宣戦布告してきたらすぐ戦おう」

男達は頷く。

ライカはその様子を見て、「わたしも残ります」と云い、ライラとハイデンを狼狽させた。

「何を云ってるの！ あなたの出る幕じゃないわ。はやく往きまし

よう」とライラはライカの手を引つ張った。

しかし、ライカは重い石のように動こうとしない。母親の手を振り解き、  
り解き、

「村が滅ぶかもしれないのに、ただ手をこまねいて見てるだけなんてできないわ！ わたしも戦います」

と、云った。

母親は夫を仰いだが、ハイデンはライカの決意をひめた双眸を見つめ、諦めたように首を振った。ライラは驚いて娘と夫を交互に見比べ、最後にシルヴァンを懇願するように見たが、彼も首を振った。そして彼女も諦めた。

「わかりました。でもわたしもここに居させてください。娘と夫を見殺しにできないわ」

ライラは限りなく優しく、悲しい声で云った。

娘は小さく「ごめんなさい」と謝り、母は「いいのよ」と幾分微笑んで応えた。

複数の男女 夫婦と思しき人物達が近づいてきた。彼らの話によれば、子供達は遊びに往ってシルヴァンの知らせを伝えることができなく、こっちに來てるのではないかと思っていたが見つからない、というのだ。

男達の顔が翳った。知り合いにも探してもらったかと訊ねたが、未だに見つからないらしい。仕方が無いので、彼らにもここに留まってもらうことにした。

太陽は西の彼方に没し、星が輝く時間帯になった。

ライカは森の中に入ったグレドを探し、すぐに見つけた。

「作業は順調？」

「まかせとけ。子供達にも広めるよう云い付けたから、もうみんな知ってるだろ」

グレドは自信満々に云い、ライカは安堵の溜息を吐いた。こういうことに関して彼の右に出る者はいない。こんなところで役に立つんだから。

「盗賊が来るってのは本当なのか？」

「あら、シルヴァンが云うことを信用できないの？」

「いや、そんなんじゃないよ。ただ、信じられないんだ。あんなやつらが俺らの村を襲うなんて」

「わたしもよ」

ふたりは俯いた。

辺りを静けさと闇が覆う。人々が不安げに話し合っているとき、誰かが叫んだ。

「ああ、あれを見る！」

誰もがその声の先を見た。  
炎。

村の東側に浮かび上がり、人々の眼を引き付ける鮮やかな赤い光は、盗賊の襲来を告げる警報のなにものでもない。

ついに来た。

森の中にドドドドと馬の蹄の音が轟く。母親は泣く赤ん坊を抱き、少年と少女は互いに手を取り合っていた。誰もが儚い希望を胸に抱いて。

その災厄は家を、土地を荒らして 灰色山 に向かってきた。

総勢二百弱の盗賊団。

数からして見れば三千対二百では到底勝ち目はないが、彼らは最初から“勝つ”気などないのだ。ただ、略奪行為をしたいだけなのだから。

その悪魔が、ついにその魔手を ドラゴン・テイル 竜巢の谷 まで伸ばしてきたのだ。

野盗達が野原に来、シルヴァン達と対面した。

見るからに野蛮そうで目が血走っており、下品な笑いを浮かべていた。腰には数本の蛮刀を差している。

フエンド村長はゆっくりと前に出た。

盗賊達の中から笑い声がおきた。盗賊は群の中心に向かって「お頭！」と呼びかけた。

盗賊は道を開け、大きな馬に乗った男が現れた。男は右目に眼帯を掛け、酷薄な笑みをしていた。盗賊団の首領、ウルギアである。

彼が馬から飛び下りると、周りの数名も下馬した。彼はずいとな前に歩み出て来て健気にも対抗しようとする一団をじろりと見た。

「どんな魔法を使った？」

ウルギアは大声で云った。一団は沈黙する。お前達とは口も利きたくもない、とでも云うかのよう。

「久しぶりに人里にやってきたと思ったたら家には誰も居やしねえ。

どういうことだ？」

まだ沈黙する。

だが、その方が好都合とでもいうかのようにウルギアはニヤリとした。

「せっかく村に来たつてのに誰もいないんでよ、手に負えない手下どもが家に火を放ちちまってよ」

盗賊の間から下品な笑い声がした。彼らは久しぶりの獲物にありつけると喜んでいる。

フエンド村長も眉間に皺を寄せる。  
へらへらと気持ち悪く笑うウルギアはまだ続けた。

「なあ、こつちはただ村に食料を買いに來ただけなんだ」

「ごろつきにやる物なぞ何もない！」

村長は顔を紅潮させている。

ウルギアは驚いた表情を見せたが、一瞬後には元の汚い顔付きに戻った。

「そうかい。なら仕方ねえ。こつちもあんまり手荒な真似はしたくないんだがな」

ウルギアは後ろを向き、手下に向かって何か命じた。すると、群の中から男達が出てきた。三人の少女と七人の少年を引きずりながら。

一団の中から「ああっ！」という叫び声がした。逃げ遅れ捕らわれた人質に息子や娘がいるのだ。親は子供のもとに駆け寄ろうとし



て、男達に止められた。

子供達の様子はひどかったが、今まで彼らが聞いてきた盗賊団の蛮行と比較すればまだとても優しい方だろう。髪を引っ張られ顔を苦痛に歪めている女子はまだ酷い行為を受けた様子はない。

男子の状態は酷かった。見るからに顔に痣<sup>あざ</sup>ができ、顔から血を出している。中には気を失って地面に投げ出されている者もいる。

ウルギアは「さて、こいつらをどうしようか」とフェンドに問いかけた。しかし、最初<sup>はな</sup>からフェンドの交渉に乗るつもりはないのだ。フェンドは見るに見かねて

「ま、待ってくれ！ 金なら出すし、食料も出す。だから子供達には手を出さないでくれ！」

「もう遅い」

ウルギアは冷酷に云い放った。その顔は無表情で、より一層恐怖を醸<sup>かも</sup>し出している。いや、この野蛮人に人間的な表情などないのかもしれないぬ。

彼は「だが、」と続け、

「今すぐ五百万ルーア用意するなら話は別だ」

「こゝ、五百万！」

無理も無い。バスティア公国における大人ひとりの一日の平均的な収入が約六十ルーアだ。五百万ともなれば小国の国家予算にも相当する。

「無理だ、そんな大金がこんな小さな村にある訳がない！」

「じゃあ、諦めるんだな」

その言葉を待ってたとでも云うかのように、ウルギアは凄惨な笑みを浮かべた。この血に飢えた野獣には人の血が通っているのだからか　そう思わない人間が果しているのか。

「早速楽しませてもらうぜ」

歓声が上がる。

人質となっている少年が抜け出そうともがき始めた。盗賊のひとりがそれを見て少年に近づき、顔を思い切り殴った。嫌な音が聞こえる。少年は一瞬で気を失い、口からは血が出てきた。

「ダイ！」

一団の中にいた母親が叫んだ。母親の悲痛な声を聞いて、殴った男はこれ見よがしにさらに殴りつけた。母親は気を失った。

親達は手を組み、「ああ、テサーナよ。わたし達が何をしたとおっしゃるのですか！」と運命を司る神を呪った。

男達はいつでも戦えるよう刀を抜いて身構えた。肉体を怒りが支配している。

「てめエらが悪いんだぜ。せつかくこつちが下手に出てやったのに。馬鹿なことをしたなあ」

ウルギアは後ろに退き、部下に合図を送った。すると手下達は満面の笑みを湛えて少女達を地面に押し倒した。

悲鳴が響き渡る。

「見せしめだ。やっちなまえ！」

ウルギアは高らかに嘲笑した。

誰もが絶望した。遠くで見える星と炎の輝きだけが鮮やかだった。ライカの中で怒りが頂点に達しようとしていたその時、何かが起きた。

#### 四話 紅き災いは闇夜と共に（後書き）

##### 解説

オーストリア大陸の1年は12月、1月は5週、1週は6日で構成されている。

月は色で表され、1年のはじめの月から順に白、黄、青、紫、藍、緑、金、赤、橙、茶、銀、黒。

##### 用語解説

・ルーア・・・お金の単位。ルーア＝二百円の価値。

## 五話 白く汚れた閃き

その場にいる誰もがブン、ドンという鈍い音を聞いた。

ライカは素早く音がした方を見て眼を見張った。

矢継ぎ早に二度目の音が聞こえて盗賊も気付いたらしく騒がなくなつた。

ライカは四つの“こと”を全て同時に見たような錯覚を覚えた。

音の源を見るとそこにはシルヴァンが立っていた。その手には弓が握られていた。

彼は矢筒に手を回し五、六本の矢を引き抜き、一度に全て射った。狙い撃ちとは思えないほどの素早さだ。

だが動体視力のいい者が見たならば、さらに驚くべきものを見ただろう。彼は一度にその全部の矢を撃ったわけではない。一本一本しっかりと弦に固定して狙いをつけて撃ち、また固定しては撃つという行為を刹那の瞬間に行ったのだ。

三度目の射撃で二十本近くあつた矢は全て無くなつた。

シルヴァンは腰に差していた剣を引き抜き、身を屈めた。ライカは彼の曲げられた大腿筋だいたいきんが膨れ、撓しなるのを目撃した。

彼は、跳んだ。

黒い光が一閃し、彼は盗賊の前に降り立った。

少年を掴んでいた男や少女を押し倒していた男も地面に崩れ落ちた。例外なく彼らの頭部に矢が突き刺さっている。

シルヴァンは剣を閃かせた。瞬く間に顔を切り裂き、刃を突き立てる。

まるで貴族の舞踏会で踊る麗人そのものだ。鮮やかに身を翻しては剣を自分の体の一部のように操り、軽やかに繰り出す足技に男達は成す術なく斃たおれる。

一瞬の間に剣だけで十人以上の敵を斃し、なおその動きは止まらない。

野盗達は驚き慌てた。その白刃から逃れようとして我先にと後ろへ退がる。

辺りを罵声が飛び交う。

シルヴァンの後ろ　村の一団の方には敵の死体と啞然としてシルヴァンを眺める子供達がいた。子供達は我に返り、森の方へ逃げて駆けつけた大人達に介抱された。

敵はシルヴァンの相手をするのに精一杯だった。気を失っている子供を助けようと勇敢な男達が戦場に駆けつけて子供を連れ戻して森に消えた。

その間にもシルヴァンは銀光を迸らせてゆく。

反撃しようと試みる盗賊団だったが、ほとんどが逃げ腰になっていた。

「馬鹿野郎、押すんじゃないえ！」

「ぶっ殺せ！」

「弓を使え、弓を！」

「んなことしたら仲間当たるだろうが、馬鹿野郎！」

その様子をライカは見ていた。また何かを今か今かと待っていた。もうそろそろか　と思った時、またあの声が聞こえた。

（今だよ）

彼女は隣にいる馬を見た。馬も頭をめぐらせて彼女の方を見た。馬が促したように感じたが、今はそのことを考えるのを止めた。彼女は森に近づき、叫んだ。

「グレドオ！　今よ！」

グレドは森の最前列で合図を待っていた。その言葉を聞いた彼は後ろを振り向いた。手を口に当て、声を張り上げる。

「いくぞお！」

一呼吸おいて、

「せーのっ！」

と、森の中から凄まじい叫び声がした。大地を震わすかと思える程の。もしそこに事情を知らない人が通るかかったら、遙か昔に死火山となった 灰色山 が火山活動を再開したと思うことだろう。

森にいる村人全員が腹の底から声を出した。

「才才才才！」

その絶叫が盗賊団に齎もたらした効果は凄まじかった。野盗どもはいきなり聞こえた大音量の叫びに驚き思わず耳を塞ぎ、馬の手綱を放してしまった。

馬も耳を劈くような訳の解らない音に動揺して暴れた。手綱を握つていない者は落馬し頭を地面に打ち付けて気絶し、鉄蹄の下敷きになった。あちこちで嫌な音と悲鳴が聞こえる。

シルヴァンだけはなおも艶やかに敵を屠ほふっていた。敵は白刃の餌食となってゆく。

ひとりがシルヴァンの剣を受け、別の男がシルヴァンの持つ剣の横腹に蛮刀を打ち付けた。柄の方に大きな罅ひびが入った。

二、三合も打ち合うとその部位が大きく欠けた。あと十回も打ち合えば真つ二つだ。

男の顔に汚らしい笑みが広がる。

案の定、すぐに剣は折れてしまった。

シルヴァンは森に向かって駆け出した。

その少し前、彼の剣の調子がおかしいのを見てカルダンは急いで荷物の中から宝物の剣を出していた。

せつかくの宝物だが、やむを得まい。

そして、彼はこっちに向かってくるシルヴァンに「武器だ!」と叫び、皮袋ごと放った。

大切に使ってくれよ。

シルヴァンは新しい武器を受け取ってすぐ取り出す。

背を向ける彼を討ち取るうと、男は剣を振り上げ　振り下ろしたが剣の重みを感じない。訝しく思<sup>いぶか</sup>って右手を見ると　手がなかった。なんでだ、と思って前を向くとシルヴァンの剣が振り下ろされる場所だった。彼はそこで事切れた。

シルヴァンは心地良い重みを感じていた。ほどよく重く、それに扱いやすい。水の国随一の名匠が造ったと云われるだけのことはある。

彼の前に敵はいなかった。手が動くだけで敵は地に伏し、起き上がることはない。

彼が躍っている時、略奪者に追い討ちをかけるような事態が発生した。

「お頭ア!　警備兵が来たぞオ!」

「なにイ!　なんでだ!　尻尾は掴めてねエはずだ!」

「知らねエ!　もうすぐそこまで来てる!」

バーナム森林地帯からは見ることはできないが、村側にいる盗賊



には確認することができた。土煙が朦々と立ち込めている。数えきれないほどの蹄の音が聞こえる。

（おかしい。何故だ。警備兵の眼は欺いたはずだ。しかも、なんでここまで俺らに気付かれずに近づけたんだ）

ウルギアは必死に考えた。頭の中では今は逃げることを最優先にしなければならいと冷静に判断した。彼は決めた。

「逃げるぞオ！」

彼は叫びながら山 灰色山 を指差した。

「付いて来い！」

彼は馬に飛び乗り、一目散に山に逃げた。その姿を見て、部下も慌てて後を追う。

戦場には累々たる死体の山が折り重なっていた。シルヴァンの手によるものだ。

逃げていく盗賊を見て、彼は「逃がすか」と呟いた。彼は死んでいる盗賊の頭から矢を引き抜き、撃った。村の男達も横を通り過ぎようとする盗賊に一矢報いようと矢を射った。

シルヴァンは馬に乗って跡を追う。男達も森の中から馬を連れ出し、シルヴァンに続いた。

盗賊は 竜巢の谷 に向かっている。そこに追い込むべく、後ろから矢を撃ち続けた。略奪者は這這の体で逃げていた。

先頭が谷に入り、果たして生き残りは皆谷に入りきってしまった。シルヴァン達村の男は谷に入る手前で馬を止めた。

「深追いするのはよくない。獣が跳梁する刻限だ」

「戻って来れないように、入口のところに松明を炊いて置こう」

男達は作業に取り掛かった。

野盗どもは村人が追いかけて来なくなってもまだ逃げ続けた。五、六人ほど疾走しただろうか。辺りを暗闇が支配していた。

「止まれ！」と命令が下り、団体は停止した。皆肩で息をしている。

何人かが松明を出して灯をつけた。闇の中に百人ほどの男達が浮かび上がる。

「ちくしょう。一体何だつてんだ」

「なんで警備兵が来るのが分かんなかったんだ」

「わからねエ。気が付いたらすぐそこまで来てやがった」

「しかもあんなちっぽけな村になんであんなに強い野郎がいやがるんだ」

「くそつたれ。次会ったらぶち殺してやる！」

首領はあそこまで追い詰められた理由を考えていたが結論が出せなかった。何度もあんな修羅場は潜り抜けてきたはずだ。それがな

んで。ウルギアは考えるのを止めた。

「このまま谷を抜ける。食料が少ないのは辛いところだが、仕方ねエ。

「いつか必ず復讐してやるぜ」

部下は賛同した。やり返さなければ腹の虫が収まりそうにない。そのように盛り上がっている時、ふと唸り声が聞こえた。

誰もが氷のように固まる。

何も起こらない。

安心し、胸を撫で下ろした。

その瞬間、獣の咆哮と悲鳴を聞いた。

血飛沫が舞う。悲鳴はすぐに止んだ。

炎に浮かび上がる姿は、絶滅したと聞く伝説の獣だった。黄の毛に黒い斑点がある四足の野獣。口から飛び出た牙は血塗られていた。金色の双眼があやしく光る。

彼らは何所から来たのか。答えはすぐに出た。上だ。

何十頭もの怪物が空から降ってきた。次々と襲い掛かり、人を、馬を捕食してゆく。

絶叫する。彼らは一目散に逃げた。

仲間の断末魔をあとにして。

ウルギアはひとりで逃げていた。仲間と逸れたのはかなり前だ。もう悲鳴も聞こえない。

彼は途中で馬を大岩に正面衝突させて即死させてしまったので歩いていた。

彼は休むべく、光苔が蔓延る岩に腰を下ろした。

また唸り声がして顔を上げると、目の前には黄色に輝く二つ眼があった。

彼の顔から血の気が引いた。

周りの暗闇からいく対もの“眼”が見える。

光る眼はどんどん彼に近づいた。

彼の断末魔は獣の咆哮にかき消された。

村に駆けつけた警備兵団は驚愕していた。

ウルギア盗賊団が去った後の村は血の海と化すと風の噂に聞くが、目の前の状況は確かに血の海だ。

しかし、違うのは犠牲者だ。

無残な死骸を晒す盗賊団。幾千もの命を奪ってきた張本人達が小さな村を襲撃して返り討ちにされたという信じがたい事実。

しかもそのほとんどがひとりの青年によるものだということも。

そして、村の犠牲者がひとりもない。

警備団と村に滞在する医師の庇護の下、人質とされた子供達は傷の手当てを受けていた。

大人達は消火活動に当たり、何も用のない人は家に戻った。

皆幻を見ていたような顔をしている。盗賊に襲われたことさえも夢ではなかったのか。

その夜は誰も眠らなかった。

## 年代記：竜が居りし光陰

ドラゴン・デイル  
竜巢の谷

遙か昔、竜がまだこの地上で暮らしていた時代。

深く入り組んだ谷と無機質な岩石が剥き出しになって聳え立つ  
グレイ・マウンテン  
灰色山の奥地に在る、尖った岩石の最上部を 息吹 で削って窪地を作り、翼を休めていたといわれる 竜の巢 は侵略に護り易く、多くの竜が好んでその地で卵を産み、育てたためにそう呼ばれていた。

灰色山 は何処にも植物が生えていない不毛の土地だが、時折風に乗って聞こえる遠吠えは確かに何かが生息していることの証であつた。

その谷に竜が住むと聞いた命知らずのハンター達は、決して傷付かず暁星のごとき輝きを放つ竜の鱗と、食べれば永遠の生命を得ることができるといわれる心臓目当てに、 灰色山 の麓に住む村民の制止も聞かずに入ってゆく。

ドラゴン  
竜ハンターの多くは長い距離を歩く疲労、何も変わらない灰色だけの景色に恐怖し、道を引き返して村に戻り家路に着く。大抵往きより帰りの人数の方が少なく、往きも帰りも同じ数だったことはめつたになかった。そして残りの帰って来なかった者達は、道半ばにして飢え死んだか、村人ですら恐れる得体の知れない生物の食べ物になったか、運良く竜と会う事ができた者は例外なく幼竜の餌となった。

それらの後、竜狩りの危険はハンター達の間を広まり、誰も竜狩りなどしなくなり、村にはただ竜の住む 竜巢の谷 だけでも拝も

うとする観光目当ての者だけが来る場所となった。

やがて時代は過ぎ、増えてきた人間によって住処を奪われた竜達が安住の地を求めて西の海を渡り始めた頃、 竜巢の谷 から竜は消え始めた。一頭が消え、また一頭が旅立ち、日に日に竜の数が減っていった。そして谷にやってくる竜はいなくなり、 竜巢の谷の竜達もほとんどいなくなった。

そしてある日、最後の一頭になってしまった黒竜が谷から空へ翔び、村の方を真紅の眼で見つめた。村人が集まってその美しい姿に魅せられていると、黒竜は大地が震える程悲しみに満ちた咆哮を放って、西の大空に消えた。

二度と竜が谷に来ることはなかった。

村の伝承はそう伝える。

## 六話 夜明け前（一）

夜が明けた。

バスティア警備兵団は 竜巢の谷 周辺の警備を強化するべくいくつかの部隊が駐屯することとなった。

彼らはまず村周辺を巡回し、盗賊団の残党が襲ってこないよう警戒していた。

壊された家々の修復は村人総出で行った。見る見るうちに新築が建っていくが、完成にはあと一週間ほどかかる。

農地や花畑も荒らされていたが、深刻な被害はなかったので村人は安心した。

警備兵は盗賊の死体を処理していたが、その顔は納得がいつていないようだった。連合軍をてこずらせてきた犯人の結末がこんなお粗末なものになるとは。

昼過ぎ頃、竜巢の谷 に下りた村人の報告によると、道の途中で鞍や鎧、刀が散乱している場所があったらしい。そこ一帯の地面は血でどす黒く染まっていたが、馬や人の死体は全くなく、骨すらも見つからなかった。そして、獣が踏み荒らした跡があったという。復興作業は一日中続いた。

夕方、ライカが家に戻ってきた。その顔夢を見ているようだった。シルヴァンが色々訊いても芳しい応えは返ってこなかった。何かを隠そうとはぐらかしていた。

日が落ちかけてきた頃、カルダンが訪れた。居間の椅子に座った彼はどう話を切り出そうか迷っているようだったが、ようやく重い口を開けた。

「実は今日頼み事があって来たんだ。これは友人としてではなく、仕事の依頼で来たと思っていただきたい」

彼の珍しい口調にハイデン達は戸惑った。

「実は、シルヴァンを護衛として雇いたい」

彼はハイデン達の驚きの表情を眼に留めながら続けた。

「昨日の戦いぶりをみて決心した。わたしも何十人か護衛を雇ってはいるが、道中は常に危険と隣合せだ。今回の事件も起こると思っていなかったしな。もし道中で似たような荒くれ者に襲われた時、無事でいられるとはいいがたい。だが昨日の戦いだけしか見ていないが、シルヴァンがいればそれこそ百人力だ。村人をすぐ避難させる気転の良さ、二百人近い敵を前にして真っ向から勝負を挑む度胸の強さ。そして、圧倒的な力と危険を察知する感覚だ」

カルダンはシルヴァンに最大級の賛辞を送った。

「だから、彼を護衛として雇いたいのだ」

彼は居間にいる顔を見回した。ハイデンとライラは迷っているようだ。当のシルヴァンは無表情だった。

ライカはその話を聞いて、シルヴァンにバヤードのお土産を買ってきてもらおうと考えていた。

「無論、シルヴァンには契約金も支払うし、十分な食事と宿も提供する。それに、君達一家にもお金を支払う予定だ」

カルダンは気前よく言った。

「あと、もう一つ。シルヴァン、君はそのままガイザードで傭兵か、



職業軍人として暮らしてみないかい？」

その言葉を聞いて、一番驚いたのはライカだった。見るからに動揺している。

「わたしは正直言つて、このまま君の素晴らしい才能を埋もれさせるのは良くないことだと感じた。ガイザードは文学よりも武芸、魔法関係を推奨している。君がその素晴らしい力を発揮できれば、かなりいいところまでいくことができるだろう。近いうちに帝国の首都で開催される 剣闘技大会 に出場すれば恐らく優勝も夢ではないと思う。運良くバヤードに駐屯している騎士団の中に偉い役職に就いている知り合いがいるから、そいつに紹介してガイザード軍に入隊することもできる。どうだね？ やってみないか？」

シルヴァンは考え込んだ。脈あり、と見て、

「どうだろう、契約金と報酬の他にわたしが買ったあの剣を君に贈ろう。適材適所と云うし、わたしが持つより君の手元にあった方が剣も喜ぶはずだ。大金を支払ってまで手に入れた宝を手放すのは惜しいが、知り合いの中から 剣闘技大会 優勝者が出るのは非常に名誉なことだ」

シルヴァンはなおも考え込んでいたが、

「ハイデンさんやライラさんの許しが頂ければ、その申し出をお受けたいと思います」とだけ言った。

ハイデンとライラはふたりで何事か話し合った。ライカはそれをじっと見つめていた。

「もともとシルヴァンはわたし達の子供ではないから、最終的な決定はシルヴァン自身に委ねるよ。家族が減るのは悲しいことだが、シルヴァンも大人だし、なにより昨日の戦いぶりを見たらそれが一番いいことだとわたし達も感じた。彼がいるべきところは他にあるはずだ。シルヴァンが往こうと思うのなら、わたし達は止めはしないよ」

ハイデンは微笑んで言った。

カルダンはシルヴァンを見た。

「どうする、シルヴァン？」

「わかりました。お言葉に甘えて、お世話になろうと思います」

カルダンは手を叩いた。

「よし、決まりだ。それでは、さっそく出発の準備をしてくれ。出発は明々後日の朝の予定だ」

詳しい内容は明日にでも話そうと言い、カルダンは嬉々<sup>き</sup>として帰っていった。

ライカだけはひとり悲しそうな顔をしていつもより早めに床に就いた。寝室に向かう足取りは覚束<sup>おぼつか</sup>無く、危なげだった。

朝、ライカは寝室にいなかった。

ライラは心配したが、シルヴァンの出立の準備に追われて急がしかったので考えている余裕がなかった。むしろ忙しい時にどこにいるんだ、と怒っていた。ハイデンは妻が働けない分仕事に精を出さなくてはならないので、手が空かなかった。シルヴァンは近所の人に旅立つことを伝えに往った。

夜、日が暮れてもライカは返って来なかった。

さすがにライカは心配して、シルヴァンに探してもらおうよう頼んだ。

まだ二年半しか一緒に暮らしていないが、彼には彼女が今どこにいるか大体検討が付いている。

彼はバーナム森林地帯に入り、少しすると空き地が見えてきた。

空き地のはずれにある大きな木の下で彼女は蹲うつくまっていた。

彼は彼女の隣に腰を下ろし、木に凭もたれた。

どちらも口を開こうとしない。

風のない夜だった。

「往っちゃうんでしょ」

シルヴァンでなければ聞き取れないくらい小さなかすれ声でライカは言った。

「ああ」

沈黙が世界を占めた。

「わたしも往きたかった。ここよりも大きな街に往って、色んなことを勉強したかった」

まるで、もう夢は消えてしまったような云い方だ。

「もうわたしにそんな機会は来ないわ。わかるの。お父さん達はわたしが村を出て往くことを望んでいないことも。もうこれ以上家族が減ることも」

シルヴァンは黙って彼女を見つめていた。

「あなたが羨ましい。わたしにはできないことができるから」

彼女は顔を上げてシルヴァンを見上げた。暗闇の中、彼はライカの眼が赤くなっているのを見ただろうか。

「わたしだって村の人を助けたり、避難させたわ！ 盗賊が襲ってきた時も何もできなかった大人達よりがんばったし、あいつらを脅かす作戦を考えたのもわたしだわ！」

彼女は激しく捲<sup>まく</sup>し立てた。

月光が流れる涙を透明に彩った。

彼女はシルヴァンの胸に顔を押し付けた。

「なんでわたしは往けないの？ なんてあなただけなの？ わたしは長いことそれだけを夢見てきたのに」

シルヴァンはそつと彼女の髪を撫でた。

「ごめんなさい。シルヴァンは必要とされてるんだもんね。きっとわたしより役立てることがあるから呼ばれたんだわ。それなのにあなたを責めてごめんなさい。わたしってきつとヒドい女なんだわ」

シルヴァンはどうすればいいのかわからなかった。

こんな時に抱きしめる勇気があれば、と思った。

「寂しくなるわ。いつこつちに戻ってこれるのかしら？ 三年後？ 五年後？ 十年後？ 二十年后？ もしかしてもう帰ってこないの？」

彼女は静かに泣いた。

「わたしもあなたと一緒に往きたかった……」

彼女は最後にそう呟いて深い眠りについた。

シルヴァンだけが森の中に孤独に取り残された。

彼女を抱き抱えて家に戻ったのはもう夜遅くになっていた。寝室に彼女を寝かせ、下に下りたシルヴァンは居間に入った。ちょうどカルダンとハイデン夫妻が話し合っているところだった。

「おお、やっと来たかね」

「遅れてすいません」

「ライカは寝てる？」

「はい。ぐっすりと」

「そうか。では急ではあるが、君に出立のことについて詳しい説明を聞いてもらうよ。出発は」

「お待ちください」

シルヴァンは手を上げて制した。

「その前にお話したいことがあります。契約金はいりません。報酬もいりません。頂いた剣もお返しします」

カルダンも夫妻も驚いた。

「な・・・・・・・・それはバヤードに往くのをやめるといふことかね？」

「いえ、約束は破りません。ただ、ひとつだけお願いがあります」

「なんだね、云ってみなさい」

「それは」

部屋には暖炉の炎が暖かく燃えていた。

## 七話 夜明け前（二）

太陽は今日も眩しい。空は西にあると聞く海のように青かった。ライカはなかなか起きてこなかった。シルヴァンはそつと部屋の扉を叩き、寝室に入った。

彼女は寢床にいた。

彼は彼女の枕に染みがあるのを見た。おそらく彼女の涙だろう。一晩中泣いていたのだ。

そつと肩を叩き、起こす。

くぐもつた声がした。

「お母さんとお父さんが話があるから起きなさいって言ってたよ」

「うん」

ライカは顔を見せないようにしながらゆっくりと起きた。眼が腫れてるを見られたくないからだ。

状況を察知したシルヴァンは先に外に出た。

身支度を整えたライカは居間に向かった。彼女は昨日から精神が不安定になっている。この数日でいろんなことが起きたせいだ。

居間にはカルダンもいた。三人は彼女の登場を待っていたのだ。

彼女は椅子に座るが、顔は伏せたままだ。

ライラは娘の様子を見かねて切り出した。

「ライカ、今日は大切な話があるの」

「うん」

風に掻き消されてしまうような声だった。  
数秒の沈黙が流れた。

「ライカ、シルヴァンと一緒にバヤードに往きなさい」

ライカは時間をかけて顔をゆつくりと上げた。母親が何を云つて  
るのかよく解っていないようだ。

「カルダンさんも了承してくれたわ。あなたはバヤードの私塾で学  
問を学べるのよ」

沈黙。

「え・・・・・・・・・・？」

ライラとハイデンとカルダンが微笑んでいるのが眼に映った。

「どうして？」

「昨日の夜シルヴァンから頼まれたのだよ」

カルダンは優しく告げた。

「彼は何ひとついらないから、代わりにライカもバヤードに連れて  
往ってくれと頼んだんだ。そしてその私塾に入塾させてくれる  
ね」

「彼はそう云つて、我々の目の前で床に手について頼んだんだよ。  
『お金はいらないから、ライカを私塾に入れさせてあげてください』  
と言つてた。真剣な眼差しだったよ」



ライカはようやく飲み込めてきたようだった。

「ライカ、都ほど大きな学問所ではないけど、そこで勉強したい？  
それともしたくない？」

「　　したいわ」

今の彼女にはそう云うことが精一杯だった。

「でも条件が一つ。勉学に関する経費は全部カルダンさんが面倒を見てくれるわ。ただ、バヤードでカルダンさんの仕立て屋の手伝いをしなさい。それだけよ」

「　　うん」

「決まりね。じゃ、ライカ、早速近所の家を回って、出発することを伝えてきなさい」

「　　え、でも　　」

「ほら、早くしなさい！　明日の朝にはもう出発しなきゃいけないのよ！」

母親の激語に驚き、慌てて居間を出た。  
もう往ったか、というところで扉からヒョッコリ顔を出し、

「あ、あの　　」

「シルヴァンなら家の花畑よ」

そう聞いてすぐに玄関の扉が開く音がした。

「本当にいいのかい？」

「……いつかはこの日が来てしまつて感じました。あの子はいつもそう夢見てきたんですから」

ライラは夫に寄りかかりながら泣いた。ハイデンの眼からも雫が流れた。

花畑では、シルヴァンが村での最後の仕事に精を出していた。彼はふと顔をあげ、淡い赤の髪をした女の子がこちらに向かって走ってくるのを認めた。

ライカはシルヴァンの近くまで来ると、自分より体が一回り大きい彼の体を抱きしめ、顔を胸の中に埋めた。シルヴァンもそつと抱いた。

「ありがとう」

その日は、優しい風が吹いていた。

日がまだ昇る前、彼らは慌しく出発の時を待っていた。  
肌寒い朝、彼らは別れを惜しんでいた。

「それでは、往ってきます」

「気をつけてね、シルヴァン」

「達者でな」

シルヴァンは親とも言えるふたりの恩人を抱きしめた。

「いつか必ず戻ってきます」

シルヴァンは後ろに下がった。

夫婦は娘を見た。

「往ってきます」

母と父は強く娘を抱きしめた。手から離れれば、消えてしまうのではないかと思われるほど儚い宝石を。

「無茶はしないでね。シルヴァンとカルダンさんの云うことをしっかり聞くのよ」

「うん」

娘は親から離れた。

眼に熱いものが込み上げている。

彼女はついに我慢できなくなつて、親の胸で泣いた。

彼女は涙で濡らした顔で微笑んだ。

「いつか、いつかちゃんと素敵なお婿さんを連れて帰ってくるわ。それまで待っててね」

その場にいる誰もが微笑んだ。

「娘をよろしく頼むよ、カルダン。それにシルヴァン」

カルダンは頷き、シルヴァンは頭を下げた。

「　　往きなさい」

娘は離れた。

ライカはシルヴァンに支えられて馬に乗り、続いて彼も彼女の後ろに乗った。

彼らはもう何も云わなかった。云ってしまえば、何かが崩れてしまうのがわかっていたから。

カルダン一行は静かに、発った。

ふたりの夫妻だけが残った。

「往ってしまったね」

「ええ」

彼らは微笑んでいた。彼らは知っている。娘と息子がいつの日か必ず帰ってくることを。

「さ、中に入ろう」

夫は妻の肩を抱き、優しく云った。  
日に照る花は優しく彼らを包んだ。

「ねえ、シルヴァン」

「なんだい」

彼ら　総勢五十人ほどの団体　はバヤードに向かう街道で馬に揺られていた。よく人とすれ違う活き活きとした道だ。

「これからわたしが云うことを信じてくれる？」

シルヴァンは笑っていた。

「勿論だよ」

「実はね、一昨日<sup>おととい</sup>　盗賊が襲ってきた次の日　なんだけど、わたし　灰色山　の花畑であるものを見たの」

「何をだい？」

「<sup>デリリン</sup>竜」

シルヴァンは押し黙った。それは彼が彼女の突拍子もない話に呆れたわけではなかったのだ。

驚くほどの衝撃が彼の頭の中を駆け巡った。

「すごく綺麗で、大きかった。血のように赤い竜だったわ。《彼女》は傷付いてたの」

「・・・・・・・・」

「血はそんなに出てなかったけど、見るからに傷付いてた。とてもかわいそうだったわ。だからわたし手当てをしようとしたの。だけど、彼女は『この傷はすぐ治る。だけど、わたしより何倍も苦しんでいる方がいる。それに比べたら大したことはない』って云ったの」

「・・・・・・・・」

「何かしたかったんだけど、結局何もできなかったわ。でね、元氣が出るように、ほら、わたしとシルヴァンしか知らないあの花畑の隅に咲く透明な赤い薔薇の花をあげたの。そしたら、『ありがとう』って云ってくれたわ。でも、今日の出発の前に花畑に寄ったらいなくなってたの。多分昨日の夜に飛んで往ったんだわ」

「・・・・・・・・」

ライカはシルヴァンの方を振り向いた。

彼は無表情だったが、その実、その話が彼に与えた衝撃ははかり知れなかった。

「ちょっと、シルヴァン、聞ってるの？」

「え・・・・・・・・ああ、ごめんごめん、ちゃんと聞いてたよ」

「どうせ信じてないんでしょ」

ライカは少しムツとして不満を漏らした。

「僕が本当に信じてないと思うかい？」

彼は笑いながら云った。

ライカは天使のような笑顔で微笑んで云った。

「ありがとう」

## 七話 夜明け前（二）（後書き）

御礼

さて、以上でスタリオン・サーガの第一部、というか本編への導入部分が終了しました。こうして物語は始まった、って部分ですね。次回から第二部の幕開けです。徐々にこの物語の世界観や世界状況を少しずつ明かしていきたいと思っています。どうぞご期待ください。

あと、一話一話の長さが他の方の作品を参考にしてみるとちよつと長い気がしたので、次回以降はちょうどいい区切りができれば前より気持ち短めにして、小まめに投稿するようにしてみます。今後ともよろしく願います。それでは第二部でお会いしましょう。

## 第二部 一話 夢出でし（前書き）

人物紹介

・シルヴァン・・・ 竜巢の谷 出身の青年。約二年半以前の記憶がない。

・ライカ・・・ 竜巢の谷 出身の少女。都の私塾で学ぶことを夢見る。

・カルダン・・・シルヴァンとライカの保護を務める。大商人。



## 第二部 一話 夢出でし

ピタ、ピタ

天井から垂れる水が囚人を夢の世界から呼び起こした。

その地下牢は薄暗かった。

通路にある蠟燭が牢屋全体に明かりを提供していた。

地下牢には誰もいなかった。唯ひとりの囚人を除いて。

薄汚い服装の囚人　まだ二十になるならなくらいの若者は壁に寄りかかっていた。

非常に衰弱している。ろくに食事も摂っていないからだ。

元気な頃は輝きに満ちていたであろう金色の髪は、今は美しさの欠片もなくぼさばさに伸びている。

夢から醒めた眸だけが爛々とその強靱な意志を示していたが、その表情はどこか虚ろだった。

「来た」

乾涸<sup>ひから</sup>びた唇から微かな音が漏れた。

「よくぞ我がところに来てくれた」

その口調はなにか切羽詰ったものを感じさせる。

「もう少し。あともう少し」

彼　男だった　は夢遊病者のごとき緩慢な動作で右腕を上げた。

力など全く残っていないのに、彼はそれでもあらん限りの力を振り絞って手を上げ、何かを掴もうとしてもがいた。

「我はここだ。ここにいる。はやく来て、我が魂の呪縛を解いてくれ」

彼はそう呟き、気を失った。

深い闇の世界へ。

ライカは起きた。

彼女は急いで暑苦しい布団を押しつけた。体中から汗が噴き出していた。寝具はびしょびしょに濡れている。

夢から醒めた彼女は肩で息をしていた。

落ち着いた彼女は周りを見渡した。

変わらない光景だ。隣には数人の女性が同じように眠っていた。

どの顔も安らかだ。

彼女達はカルダンの下で働く女性従業員だった。今回の出張に行っているのだ。

ライカは頭を押さえた。最近になってよく同じ夢を見る。不吉を感じさせる夢を。

彼女は汗が引くと風邪を引かないように薄着に着替えて再び寢床に入った。

今度は安らかに彼女を眠りに誘った。

「もう少しでバヤードだ」

太陽が傾きかける頃、彼らは灰色煉瓦で舗装された街道を通っていた。

自由国境地帯を抜け、帝国領内の最南端にして最西端の最大都市バヤードを北に向けていた。

バヤードはヴァリノイア、バスティア、ペイトアなど各国の貿易拠点として栄えていた。帝国首都ガイズへ向かう異国の貴族、商人達はまずこの地に辿り着き、首都へ向かう。故に街中には、貴族御用達の高級商店が引切り無しに立ち並んでいる

朗らかに話しかけた大柄の中年男性　カルダンカルダンは総勢五十強から成る団体の中心にいた。

「夕暮れ前には着くから、もう少々我慢してくれ」

「はい」

返事をした少女　ライカも馬に揺られていた。淡い桃色の髪をした、もう少しで十八歳に成り、成人として認められる年を迎える少女だ。

ライカの後ろに乗る青年　二十近くに見えるが、十七と言っても二十三と言っても通用しそうな男　は周りの景色に目を捉えていた。夜空のように黒く光る髪は美しかった。

その街道の周りは文明都市が近いだけあって村落や集落を幾度も過ぎ、都市部に近づくに連れて多くの家が見えてくる。畑では都市へ向けて送る農作物の栽培をしている農家の姿がちらほらと見える。家の感覚が徐々に短くなってきたと感じてきた頃、遠くに検問所が見え、その奥にある大きな建物の群も見えてきた　目的地は近い。

大きな検問所を何事もなく通過した彼らは、バヤードに踏み込んだ。

帝国の第二の首都と言われるだけのことはあって、入るとすぐに大きな建物が並んでいた。土産物を商う商店の数々だ。不思議な果実カラクリを売る店、おかしい機械玩具カラクリを売る店、絵を売る店もある。

検問を抜けてすぐある大路を長いこと進み、大きな通りが行き交

う広場を横切った。

大きな噴水があり、そこで遊ぶ子供や洗濯をする女性達はその一隊を目にした。そこまでは彼らにとって日常的な風景だった。だがその団体が広場を通り過ぎ、街の中心まで続く大路に面する非常に大きな建物の前で止まった時、女性達は驚いた。

その建物はカルダン達の仕事場　衣服の新作発表会場兼販売会場だった。

数年に一度しか開催されない発表会にはオーション大陸中の国が参加するので、開催された都市にとって非常に名誉なことなのだ。また、参加・出展できる者は参加国の選りすぐりの仕立て屋、デザイナーなのでその者達にとっても光栄なことだった。

建物の入口にはオーナーと主催者が彼らの到着を待っていた。カルダン一行は皆馬を下り、挨拶した。

「ようこそ御出で下さいました」

「やあ、待ってたよ、カルダン」

「お招き頂きありがとうございます。カルダン・エリアースです」

カルダンははじめに挨拶した細身の男性と握手を交わし、続いて彼と同じくいかにも“商人”といった風貌の男と抱擁し合った。

「久しぶりだね、クロージェンド」

「何年ぶりだろう。前の発表会以来か？」

「ああ。本当に久しぶりだな」

「そうだな、会いたかったよ。少し太ったか？」

「余計なお世話だ」

カルダンもクロージエンド、という人物也大いに笑った。

「残念だが、まだ話はしたいがまた今度にしよう。主催者はやらなきゃいけないことが多すぎる。次回は別の人に代わってもらいたいよ」

「既に三度も主催しているくせに。本当にそう思うならこの国際衣服組合キルトの長の座を辞めればいい」

「まあそう言うな。これでもけっこう辛いものさ。それはそうと、あとで部下に会場を案内させよう。荷物は販売会場の方で保管してもらって構わないからな」

「何から何まですまないな。じゃ、またあとで」

オーナーと主催者は立ち去った。

「では、中に荷物を運んで、我々の販売場所設営をしてくれ。発表会まであと一週間もないが、十分間に合うだろう。シルヴァン、発表会までは君にも手伝ってもらおうよ」

「わかりました」

先程の青年　シルヴァンは返事をした。

軽々と重たい衣装道具を持ち上げては軽快に運んでゆく。長旅の疲れも彼とは無縁なのか。

作業は順調に進み、いよいよ明日に本番を迎えた。

ライカは教えられたことをしっかりとこなしていた。衣装運びから配置まで一生懸命に行っている。

休憩時間に従業員に教えてもらっている裁縫の腕も、めきめきと上げていつてる様子だ。とても活き活きしている。

その日の暮れ、シルヴァンはカルダンから紹介状を受け取った。ガイザード軍入隊に関する手紙だ。

「それを持って街の中心にある軍の兵舎に往きなさい。今はウェイブラス騎士団が駐屯している。もしかしたらわたしの知り合いのマルスヘルムがいると思う。彼はガイザードの第六の将 アリオンの副将のひとりだ。うまく会えるといいんだがな」

「わかりました。何から何までありがとうございます」

「気にするな、大したことではない」

「ところで、お知り合いの方との骨董話はどうするんです?」

「ま、なんとかなるさ。本当に困ったら、君が 剣闘技大会 で優勝することを自慢するかな」

シルヴァンは苦笑した。

## 第二部 一話 夢出でし（後書き）

お待たせいたしました、 スタリオン・サーガ 第二部が始まりました。第七話を投稿した日に、今までで一番多いアクセスを計測することができました。これも読んでくださってる皆さんのおかげです。本当にありがとうございます。今後もこれで満足せぬよう頑張っていきます。

第二部では世界観や魔法、妖魔と神々などの関係性を少しずつ明かしていきたいと思つてます。それでは、引き続きスタリオン・サーガをお楽しみください。

## 二話 暁星は現る

発表会初日、会場は満員になった。

封切から大体二、三週は金持ちが優先的に入場し、気に入った商品を購入するのだ。おそらくバヤードの上流階級は、今日展示された衣装の話で持ちきりだろう。そして後日、自宅に届けられたそれを身に纏う紳士淑女がごまんといえるはずだ。

次々と見せられる煌びやかなドレスに、感嘆の声があがる。一通り見終わった人は気に入ったドレスを購入するべく我先にと販売会場に押しかけていた。

カルダンの店も盛況で、見習いのライカも駆り出されていた。彼女はそんな忙しさをなんとも思わなかった。

こつという日が来るのを楽しみに待っていたのだ。

一方、シルヴァンは開場直前まで手伝いをしていて、貴族が詰め掛けると同時くらいに解放された。

しっかりと煉瓦で舗装された道を歩いていく。たくさん種類の店が立ち並んでいる。遠目にいかにもいかわしい店や客引きも見える。

通りで彼を見かけた若い女性達は皆その場で立ち尽くした。見たこともないほど玲瓏<sup>れいろう</sup>な美貌を目の当たりにして。男慣れしていそうな女達は彼を見ながら怪しい笑みを浮かべ、ヒソヒソと何かを話していた。

彼は兵舎へ到着した。

大理石でできた大きな建物は優に五千人を住まわすことができそうだ。

「マルスヘルム准将殿はおられますか？」



「何者だ、貴様」

門の前に立つ複数の番兵は彼を不審の目で見た。

「紹介状を預かって参りました。ウェイブラス騎士団に入隊したいのです」

そう言い、番兵に手紙を渡した。

番兵は手紙を受け取り、中を開いて読んだ。読み終わると仲間と話し合った。

「ちょっと待つてろ。今お伺いを立てて来る」

その兵は兵舎に入って往き、まもなく帰ってきた。

「マルスヘルム閣下が直々に会って頂けるとのことだ。光栄に思え、決して失礼のない様にしろ」

シルヴァンは頷いた。

宿舎内は質素で、軍隊に不要な物は一切なかった。そこには寢床、食堂、演習場等必要最低限のものしかない。

演習場は屋内と屋外があり、マルスヘルムは屋内の方にいた。

演習場は灰色の大理石できていて、とてつもない広さに感じたが、飾り付けが一切ないためだ。

数百組の兵士が一对一で組み、剣と楯をぶつけ合っていた。全員胸当にウェイブラス騎士団の“色”である黄色に彩られた革や鎧を着用していた。

演習場の奥の方に数人の部下を引き連れ、戦いを見物している人物がいた。マルスヘルムだ。

「閣下、只今連れして参りました」

「うむ、ご苦勞」

口に髭を蓄えた白髪交じりの男性は頷いた。戦列から離れてもおかしくない年齢に見えるが、鋭い眼差しはまだまだ現役であることを物語っている。

彼はシルヴァンの方を向き、上から下を見回した。

「君がカルダンが紹介してきた者か」

「シルヴァンと申します。バスティア公国の 竜巢の谷 から参りました」

シルヴァンは頭を下げた。

「そうか。彼とは古くからの友人でな、今回もこの紹介状がなければ直接会うのは断っていただろう。今は非常に忙しい時期だからな」

「恐れ入ります」

「入隊の動機を聞かせてもらおうか」

「己を鍛えることと、己がどれくらい強くなるのかを見極めるためです」

「ふむ。満点、とはいかないが真つ当な理由だ。今ガイザードは傭兵でもいいから人材を欲しがっておつてな。ひとりでも多く入隊して欲しいのが本音だ」

「はい」

「早速だが、君の実力をを見せてもらいたい。カルダンによれば相当の実力者らしいな」

「恐縮です」

「よろしい。では、相手は誰にしようか」

彼は後ろに控えている部下に問いかけた。

「タクリッドはいかがですか？」

「同感です。彼ならちょうどいいのでは？」

屈強な男達が言った。

「よし、タクリッドを呼べ」

部下のひとりが組み合っている兵士達の中から、シルヴァンと体格が似ている若い男を連れてきた。

「彼は百人隊長のタクリッドだ。タクリッド、彼の実力を見たい。ほどほどに手加減をして相手してくれ」

「了解しました」

筋骨隆々とした男はシルヴァンを向いた。

「得物は何を使う？　俺は大剣<sup>ソード</sup>が得意だが、剣<sup>セイバー</sup>でもいけるぞ」

「剣でお願いします。というか、それしか使ったことがないので」

タクリッドは微笑んだ。

「よし。では楯はもちろん使うな？」

「いえ、使ったことはありません」

タクリッドもマルスヘルムも少々驚いた。

「ああ、そうか。だが戦闘における楯の使い方とかは見ただことあるだろう？」

「いえ、今まで楯を使った実戦を見たことはありません。剣も今まで狩りをする時に使っていたくらいです」

マルスヘルムを含め、話を聞いていた男達は失笑した。　やれやれ。楯の使い方も知らん者が我が軍の門を叩くとは。

「もうよい、では剣のみを用いて闘ってくれ」

かくして、タクリッドとシルヴァンは対峙した。

合図がすると同時にタクリッドの方から突っ込んできた。マルスヘルムの言うことも聞かずに、面倒なことは早めに終わらせようとしたのだろう。

彼は自分が百人隊長であるという自信を持っていたので、相手を傷付けるとは思っていなかった。

素早く繰り出される一撃一撃を、シルヴァンは軽やかに、紙一重

のところであわしてゆく。あまり剣を用いず、軽やかなステップだけで相手をかわしている。ベテランの者ならわざとギリギリで避けているように見えなくもない。

マルスヘルムは心の中で褒めた。

動きは良いな。

「どうした、避けたり受けるだけじゃ意味がないぞ！」

終始防戦一方のシルヴァンに痺れを切らし、タクリッドは叫んだ。他の者も同じように感じていた。

彼は大きく振りかぶり、シルヴァン目掛けて振り下ろした。

シルヴァンは避けるか剣で受け流すだろうと彼は思っていたが、シルヴァンは剣を構えようとせず、避けようとしなかった。

ぶつかるというまさにその一瞬、シルヴァンの口元に笑みが広がるのを見たものはいない。

一瞬、タクリッドはシルヴァンを見失った。

神速の如き速さで真横に避けたシルヴァンはタクリッドが剣を下げきったところを狙って、高速の剣で相手の柄付近を思い切り叩き付けた。

凄まじい音が演習場に響いた。

あまりの衝撃に手を離れた剣は叩きつけられた勢いそのまま床にぶつかり、刃が大きく欠けて二ダールも跳ね上がった。

何があったのかと兵士達は対決を止め、音の元を捜し求めた。

その瞬間を見ていたものは、シルヴァンのあまりの動きの早さ、力強さに皆茫然自失した。

タクリッドも震える手を押さえずに剣の残骸を見つめていたが、気が付いたように前を向くと、喉にシルヴァンの切っ先が向いていた。

静寂の中、シルヴァンは剣を鞘に収め、

「いかがでしょう？」

と訊いた。

「ご、合格だ」

しばらくしてマルスヘルムは喉から声を絞り出した。

「入隊を認めよう。明日の朝、執事にお前の入る部屋を案内させる。必要な物はその時に持って来なさい。明日からは軍隊生活だ」

「ありがとうございます。それでは、失礼いたします」

彼はそう言い残し、宿舎を後にした。後に残ったのは、啞然とする兵士達だけだった。

街中を散策してから帰ったシルヴァンは上機嫌だった。首尾よく入隊できたし、街では面白いものも見かけた。中でも神殿に目を引かれた。

神々を祀る神殿がたくさんあり、この日も熱心な信者は神を崇めていた。

夕方頃建物に戻るともう人はいなくなっていた。その日の営業が終了したのだ。

販売会場にはぐったりとしたライカがいた。

「お疲れ様」

とライカの苦勞を勞った。彼女は眠そうにうーんと唸った。

「こんなに疲れるとは思ってなかったわ。わたし、二月ももつかしら」

カルダンがやってきた。顔には笑みが浮かんでいる。大成功だったのだろう。

「安心しなさい、辛いのは最初の二週ぐらいだ。あとは一般の人がゆっくりとやってくる」

「お疲れ様です、カルダンさん。どうでした、売り上げは？」

「初日としてはいい感じだな。このまま続いてくれれば嬉しいが。それより、入隊はどうだった？」

「そうよそうよ、どうなったの？」

ふたりは間違いないと予想していたが、それでも気になっていた。

「合格でした。マルスヘルム准将の目の前で実戦形式で組合をして相手を倒しました」

ライカはどうだ、と言わんばかりだった。

「やっぱりね。シルヴァンが負けるはずがないわ」

カルダンも満足そうに頷いた。

「そうかそうか。やはりちゃんとわしの頼みを聞いて実際に君の腕を見てくれたのだな。さすがマルスヘルムだ。こんな忙しい時期にも拘らずな」

「まだガイザードとヴァリノイアは戦ってるんですか？」

ライカはカルダンに訊ねた。

「数年前に戦争が勃発して以来、まだ公には交戦状態と発表されてはいるが、ほとんど休戦状態のようなものらしい。ガイザードは緒戦は押し進んだらしいが、それ以降はヴァリノイアに押され気味だそうで、占領した土地の多くも奪還されたいらしいな。ほら、ヴァリノイアには妖魔や強力な魔術師ウィザードが多いからな」

ライカは難しい顔をした。彼女は一度でいいからその妖魔を見てみたいと思っているのだ。

「はやく戦争が終わって欲しいですね」

「それだけじゃない。今年になって北方大陸から奇妙な妖魔が現れて、ヴァリノイアやガイザードを襲っているらしい。ヴァリノイアの北を制圧しているガイザード軍は実質的にその敵から我々を守ってくれていることになるんだよ」

カルダンも複雑な顔をした。

シルヴァンは無表情だった。その顔からは何を考えているのかわからない。今聞いた話を吟味しているようにも見える。

「まあ、今日はシルヴァンの入隊と初日の盛況を祝ってささやかだが宴会でも開こう」

「わあ、いいですね」



「よっ、さすが社長」

話をちらちらと聞いていた従業員が喜んだ。

「すいません。そんな祝わなくても構いませんよ」

シルヴァンは遠慮した。

「何を言っているんだ。いいから、君も参加しなさい」

カルダンはシルヴァンの肩を叩いて大声で笑った。  
ライカも喜んでいた。

その日の夜、シルヴァンは意外にも酒に強いことが判明した。何  
杯飲んでも酔わず、先に勧めた方がいびき軒をかき出した。  
まだ成人になっていないライカは酒を一杯飲み終わる前に酔いっ  
ぶれた。

### 三話 夜空色の髪の戦士（前書き）

#### 人物紹介

・マルスヘルム・・・ウェイブラス騎士団副将。准将。

### 三話 夜空色の髪の戦士

翌日、ライカの寝起きは悪かった。ほとんど酒を飲んでいないのに、二日酔いしたらしい。

彼女は宿の食堂に往くとシルヴァンや従業員達も朝食を食べていた。彼女は寝惚け眼を擦っていたので目に入らなかったが、女性従業員の多くは彼の方をちらちらと見ながらうつとりとした視線を送っていた。それに彼女が気付かなかったのは幸いと言うべきか。

「おはよう」

「おはよう」

呂律が回っていない。

シルヴァンの前の席に着いたライカは食卓に頭をつけた。

「調子が悪いのかい？」

「わたし、もう二度とお酒は飲まないわ」

ライカは顎を机に付けたまま宣言した。

シルヴァンはそれを笑って聞いた。ライカは彼の顔を恨めしげに見つめた。

「なんであんなに飲んだのに元気でいられるのよ」

「さあね。どうしてだろ」

とあしらいつつ、どんどんと食事を続けていく。

ライカは溜息をついた。

「まだ発表会は始まったばかりだよ。元氣を出さないと」

彼女は唸った。

「ねえ、シルヴァン、ちょっと変なこと訊いてもいい？」

「なんなりと」

「動物と人の言葉で会話したことある？」

「いいや」

「動物と精神感応テレパシーを使って意思の疎通をしたことは？」

「僕は魔法使いメイジじゃないからそれはないけど、長く動物とふれあっている相手は何をして欲しいのかわかったりはするけど」

「違うのよ。それはわたしだってあるけど、相手が何を考えているのか、何を伝えようとしているのかはつきりとわかったことってある？」

シルヴァンはライカの言わんとしていることがわかってきた。

「わたしあるのよ。最近だけど。家から連れてきた牡馬と」

「プラーナかい？」

ライカは頷いた。

「わたしだって信じられなかったけど、最近では大分話が通じるようになってきたの。でもたまにわたしどうかしちゃったんじゃないかって思う時はあるわ」

シルヴァンは手を止めて考え込んだ。

「君が嘘をつくとは思えないし。となると本当なんだろうな。おそらく」

「わたしが嘘をついたと思ってたの？ ヒドイわ。あなただけは信じてたのに」

ライカはニヤニヤしながら言った。シルヴァンも笑い返した。

「君が僕に嘘をついたことなんてないだろ。でも不思議なことだな。僕は彼としゃべったことはないよ」

「なんでわたししか会話できないのかしら。正確には頭の中で会話してるんだけどね。テレパシーの一種かしら」

「仮にプラーナにその特殊な能力があったとしても、あの馬は生まれた時から君の家にいるんだろ？ それじゃ家の誰かが気付くだろうし、君に能力があったとしたらとつくに気付いてもおかしくないのに」

「そうよね。どっちにしても昔から気付いてるわよね」

「或いは、最近になってどちらかにその能力が<sup>ちから</sup>発現したか」

ライカもその可能性について考え込んだが、結論は出せずじまいだった。

「他の動物とは話せた？」

「いいえ、プラーナだけ」

その理由をふたりは考えたが、解らなかった。

「あとね、もう一つ話しておきたいことがあるの」

「なんだい」

「これも最近なんだけど、毎日同じ夢を見るの」

「暗い部屋の中に座っている少年かい？」

ライカは驚いた。あぐりとだらしなく口を開けたままだ。

「あなたも見たの？ わたしだけじゃないんだ」

「僕も最近その夢ばかり見るよ。ちょうど僕達が帝国領内に入った頃くらいかな。牢屋みたいな空間に金髪の男の人が座っている夢だろ？」

「そう。わたしもそれくらいから見始めたかな」

「そのテレパシーのことといい、夢のことといい、僕やライカに何かが起こる予兆かな」

「不気味ね」

ふたりはそう言ったきり机を眺めていた。ライカはしばらくして出てきた朝食を無理矢理口に入れていた。シルヴァンはなおも考え込んでいた。

早朝、シルヴァンはカルダン達にしばらくの別れを告げた。軍の規律で、当直や勤務ではない日にしか私用の外出は許されない。

彼は休みの日には必ず立ち寄ることを告げた。ライカもカルダンから幾日かは休みをもらえるので、その日はふたりで街中を探索することも約束した。

シルヴァンは兵舎に赴き、執事に部屋に案内された。宿舎兼練習場の居住区域は全て相部屋で、一部屋に三、四人が寝泊りしている。寝台は二段ベッドになっている。

彼の部屋には先に三人が住んでいた。朝早くなのに彼らはもう身支度を終え、軽装の戦闘着に身を包んでいた。

「よお、新人か。話はもう聞いてるぜ。これからよろしくな。俺の名前はグライド。十人隊長だ」

部屋に入るとすぐ大きな男が挨拶してきた。続いて他のふたりも挨拶と自己紹介をしてきた。二十代後半の男はギース、二十になったばかりの男はハーンと名乗った。

「シルヴァンといいます。よろしくどうぞ」

三人の男の朗らかな挨拶に彼も愛想良く応えた。

三十過ぎのグライドはシルヴァンの肩を叩いた。彼がこの中で一番の年長者だった。

「そう固くなるなって。もっと楽に構えな。そんなんじゃすぐに疲れちまうぜ」

面倒見の良い男だった。

「ここの生活は規律も訓練も厳しいが、他の騎士団よりは結構いいと思うぜ。ただ、早朝からの訓練はちと体に堪えるがな」

他のふたりも苦笑しながら頷いた。

「朝から訓練ですか」

「そーよ。マルスヘルム准将もアリオン將軍も規則や訓練に対して厳格な方だが、非常に親身であられる。俺ら下っ端にも優しく接して下さるんだ」

ハーンもギースも同意した。

「だから俺らはあの方達の顔に泥を塗るような真似は決してしないのよ」

誇らしげに言い、すぐに彼らは演習場へ向かった。もうすでにその方向から剣と剣がぶつかり合う音が聞こえる。

シルヴァンも持ってきた荷物を広げ、戦闘着に着替えた。

しばらくすると男が部屋にやってきて「マルスヘルム閣下がお呼びだ」と告げた。

昨日と同じく屋内の演習場に向かうと、入ってすぐのところにマ



ルスヘルムはいた。

演習場に彼が入るのを見かけた何人かは手を止めて彼を見つめ、仲間内で話し合っていた。

「手を休めるな！」

昨日もマルスヘルムの後ろにいた男が叱咤<sup>しった</sup>した。おそらく相当上の位に就いているのだろう。すぐに組合は再開されていた。

「シルヴァン、だったな」

「はい」

「昨日お前が闘った相手は百人隊長のタクリッドと言ってな、この中でも相当の実力者だ。その彼を圧倒したお前の実力はそれを遥かに凌駕しているだろう」

シルヴァンは頭を下げた。

「力と言えばおそらく千人隊長の彼ら 後ろに控える数人の部下を指し示して ともいい勝負をするだろう。だから新参者のお前をすぐに千人隊長に抜擢しても構わないはずだ。理論上はな。」

だが、新参者がいきなり千人隊長になるのをよく思わない者は多いだろう。それは軍の規律を乱すことに繋がりがねん。それに、千人隊長ともなると軍を率いる戦略も知らねばならん。ただ強いというだけでなれるものではないのだ」

「はい」

「だから如何にお前が実力は上でも、しばらくは新入りとしての立

場を我慢してもらわねばならん。十人隊長くらいであればすぐになれると思うがな」

「お褒めの言葉ありがとうございます。ただ、自分は地位を目当てに入隊したわけではありません。閣下の命令があればすぐにでもバヤードの警備部隊に加わります」

マルスヘルムは笑った。

「よろしい。よく言ってくれた。規律を守ろうとするその姿勢は立派なものだ。では、手頃な相手を見つけて組合を始めなさい。君が所属する班は今日中に決めておく」

「はっ」

そう言ってシルヴァンは駆け出して往った。

その日、彼に勝てる男は皆無だった。

夜の訓練が終わって部屋に戻つてると、部屋の住人達も帰つてきた。彼らは朝訓練の後は一泊中宿舎周りの警備にまわっていたのだ。顔には微笑みと驚きがあった。

「おい、今日聞いたけどよ、お前昨日あのタクリッドとサシで勝負して勝ったって本当かよ」

勢いよくハーンが言った。

「それによ、今日の訓練でお前が強すぎて誰も歯が立たなかったってのも聞いたぜ」

ギースも訊いた。

「ああ、おそらく聞いた話の通りだと思うよ」

シルヴァンはこれから同じ天井の下で暮らす仲間として、敬語は使わないように勧められたので親しく話しかけるようにしていた。

「こりやスゲエゼ。まさか新人りにタクリッドがやられちまうとはどつりであいつ、いつもより気合が入ってたよな」

グライドは唸った。

「もしかして、この中で一番の出世頭はシルヴァンかもな。おい、お前らも負けないうで早く十人でも百人隊長でもいいから昇格しろよ」

ハーンとギースは苦笑した。ふたりは曖昧に返事をして、早々と就寝した。明日も朝は早いのだ。

グライドは首を振った。

彼とシルヴァンは部屋にある小さな椅子に腰を掛けた。

「まさか俺らと同部屋になったやつがこんなに強いとはな。お前さんが俺を顎でこき使う日が来るのもそう遠くないかな」

グライドもシルヴァンも笑った。

「だが、このままお前さんが台頭していけばアリオン將軍やマルスヘルム閣下に注目されることは間違いない。そうすれば来るきた剣闘技大会に推薦されてもおかしくないぜ」

「仮に出場できたとしても、話題だけじゃ駄目だろ」

「いやいや、参加者即ちその騎士団の代表みたいなもんだ。最初<sup>ハナ</sup>から弱い奴なんて選ばれるわけがないのよ。」

それと、参加するにはある程度の位に就いてないと駄目だ。歴代の参加者は例外なく最低でも十人隊長になっている。というか位も持っていない者が参加するのは騎士団の恥と思われるかねないからな。逆に言えば、新入りのお前は参加者のひとりに選ばれば確実に十人隊長の位が与せずに手に入るんだ」

「何人選ばれるんだい？」

「その年や騎士団によって違う。いい奴が多い年は五人近く参加させる騎士団もいるが、できが悪けりゃひとりしか出さない年もある。弱いのを出場させて騎士団の恥さらしになるよりはマシだしな」

「大会の参加資格は？」

「ガイザードのいずれかの騎士団に入隊していること、さつきも言ったが位を持つてること、一度も大会に参加したことがない者一度参加したらもう二度と参加できんのさ、の三つだけだ。それを満たした者の中から各騎士団の将軍が選抜するんだ。」

それに、大会の優勝者にのみ与えられる恩恵が拍車をかけて出場を狙う男どもは大会の年のこの時期からピリピリし始める。大会は二年に一度だから、競争率はハンパじゃないぜ」

シルヴァンはその恩恵、というものが何なのか訊いた。

「お前本当になんにも知らないんだな。ガイザードじゃなくてもカインバルド連合の国の出だったら知ってると思ってたが」

「生憎田舎出身なもんでね」  
あいにく

「おいおい、冗談だつて。」

ま、たくさんあるぜ。一つ目は大会の主催者であられる皇帝陛下が直々に賞金、冠、王者の剣を下さる。最後のふたつは儀礼的なもんだから大して使い物にはならない。名誉にはなるがな。圧巻は賞金だ。なんとよ、五十万ルーアだぜ。ガイザードでも二年間は何もせず豪華な生活ができる。

二つ目はな、優勝者は英雄だ。帝国領内ならどこへ往くにしても最高の待遇が待ってる。服だつて食べ物だつて好きな物を好きなだけもらえる。

それに騎士団での扱いも変わってくる。そいつは騎士団の顔だからいやでも高い位に就く。そして将来は次期將軍の候補にも挙がる。国の決まりで將軍は過去の剣闘技大会の優勝者が勤めることになってるからな。

あと騎士団ごとの優劣にも関係してくる。我々ウェイブラス騎士団はアリオン將軍が百人長時代に優勝したのを最後に優勝から遠ざかっている。もう二十年くらい前の話だ。アリオン將軍は全く悪くないが、閣下が運悪く第六の将になっているのも合わせて、他の騎士団、特に上の將の位の騎士団からは下に見られている。いつか見返してやりたいぜ。

だけどな、最後の一つに比べたら待遇も賞金も大したことはねえ」

ここでグライドはもったいぶって話を切り、相手の反応を確かめた。シルヴァンは彼の話に集中していた。それを満足げに目に留めて、大きく息を吸った。

「三つ目はな、皇帝陛下に何でも一つだけ願いを頼むことができるんだ。と言つても、毎回の優勝者はほぼ例外なく同じ事を頼む。それは、『マジック・ウェポン 魔法戦闘具の精製』だ」

グライドは何も知らないシルヴァンの驚き具合を見て満足した。

「マルスヘルム閣下もアリオン將軍も優勝者だから、専用の魔法武器を所持している。それは個人個人によつて形状、魔法効果も様々だ。だが、唯一同じと言えるのはそれがもつ爆発的な攻撃・防御能力だ。それが剣<sup>セイバー</sup>であれば魔法によつて何でも切れる能力にすることもできるし、鎧<sup>シールド</sup>であれば見えないバリアで敵の攻撃を防ぐ。どっちにしても金じゃあ買えない代物だ」

グライドはシルヴァンを見た。彼はもし自分がなにかを貰えるとした何にするのか考えているようだった。

そんな彼の肩をグライドはドンと強く叩いた。

「なれるかどうかも分からねえのに今から考え込むこたあないって。時間はたっぷりあるんだぜ」

グライドは笑った。それにつられてシルヴァンも笑った。そして彼らもその日の疲れを癒すべく床に就いた。

### 三話 夜空色の髪 of 戦士 (後書き)

#### 解説

ガイザード帝国軍の七大騎士団は、それぞれ神の名を騎士団名の冠にしている。

#### 四話 淡恋色の髪の学徒

ライカは営業準備をしていた。

あと一時間もすれば客が詰め掛けてくる。開場前は建物の前に長蛇の列ができ、開場後も販売会場前には行列ができる。

ライカの主な仕事は生地調達と接客だった。生地が足りなくなったら地元の仕立て屋に赴いて、顧客の指定したものを購入する。仕立て屋の生地もすぐなくなってしまうのでしょっちゅう店を変えなければならぬ。

カルダン達プロはと言えばふたつのグループに分かれていた。接客班と製作班だ。

「ライカ、生地がなくなったわ。仕入れてきてちょうだい」

「ライカちゃん、今手が離せないからお客様の対応お願いね」

「ライカ、この紙と資料を製作班の連中に渡してくれ」

「わかりましたー」

仕事がひとつ終わればまた新たな仕事が出てくる。目が回るほどの忙しさだが、ここ数週間働くと流石にもう慣れてきた感じがあらる。

作業をそつ無くこなす彼女の姿を保護者のカルダンは我が子の成長を目にしている親のように見ていた。

約二ヶ月の開催期間も半分が過ぎようとしていた頃、ライカはカルダンから待望の一声を受けた。

「ライカ、よく働いてくれた。君の働き振りには本当に感謝してい



る。お礼と言つてはなんだが、予定では発表会の終わり頃にしようかと思つていた私塾の編入試験を、今週受けなさい。わたしの友人を介して、塾の老師に直接君の力を見てもらえる。彼の眼鏡にかなえば君はそこで学ぶことができる」

「ほ、本当ですか？　ありがとうございます！」

「気にすることはないさ、そういう約束で働いてもらつていたんだからな。ただ、合格してもあと一ヶ月、つまり発表会が終わるまではこの手伝いを続けてもらいたい。その後であれば君は晴れて私塾の生徒になれる」

「わかりました」

「試験までは仕事を休んで勉強しても構わないよ」

「え、いいんですか？」

「大切な試験だからな。それで君の将来が決まると言つても過言ではないだろう。だが、おそらく合格できると思う。そんなに難しい問題は出ないという風に聞いたよ。じゃあ、試験勉強を頑張りなさい」

「はいっ」

それから数日間、ライカは文字通り寝る間も惜しんで勉強に励んだ。

数日後、カルダンに付き添われて向かったのはバヤードでも一、二を争う有名な私塾だった。バヤードは外国から比較的来やすい地

理に位置するので、多くの留学生はこの都市で学んでいく。

目の前に建つ横に大きい建物が彼女が入るであろうイー・チェン・イエンス塾だった。

水の国スイーンから来た塾長のイー・チェン・イエンスは東方と西方の神秘学を研究し、独自の前衛的な授業は高く評価され、支持されている。ライカの持つ書物の中に少なくとも一冊は彼が著述した本がある。彼女がその塾の名前を聞いたのも初めてではない。

ライカは緊張して塾の扉をくぐった。

建物内を歩いていくと、多くの教室から教師陣の声が聞こえた。

塾は大体が七年制で、この塾には約二千弱の生徒がいる。

ライカは塾内に綺麗な庭があるのに驚きつつも足を進めた。何もかもが新鮮だった。

やがて大きな部屋の前でカルダンは足を止め、扉を叩いた。

「お約束していたカルダンという者です。入ってもよろしいですか？」

すると部屋の中から老人らしき人物の声がした。

ライカはカルダンに続いて入室した。

その部屋は普段の授業ではなく講義をする時に使われるらしく、後ろの方に椅子が並べられていた。彼女の目の前には横長の机と椅子が一つずつと、ひとりの老人が立っていた。

白い髪と髭を蓄え、ゆったりとした着物を着た東方系の老人がイー・チェン・イエンス この塾の長 だった。

彼はにこやかに挨拶した。

「はじめまして。ここの塾長を勤めるイー・チェン・イエンスです」

「ご高名な先生にお会いできて光栄です。バスティアで仕立て屋を営んでおります、カルダン・エリァースと申します。こちらが、今

回試験を受けさせていただきますライカと申します」

カルダンに紹介されたライカは何度も練習した自己紹介をした。

「ライカと申します。バスティアの 竜巢の谷 から参りました。今回は試験を受けさせていただき、まことにありがとうございます」

彼女は深々と頭を下げた。

イー・チエン・イエンは笑った。

「ホホ、そこまで鯨張<sup>けいばう</sup>らなくともよろしいぞ。そうか、君がライカ君か。話は聞いておるよ。わしも長年生徒を見てきたが、 竜巢の谷 出身の生徒は持ったことがなくてな、君が初めてというわけだ。お会いできて嬉しいよ。後々その村の話でも聞いてみたいものだな」

「あ、あの、その、きよ、恐縮です」

老師に話しかけられたライカはせっかくの練習を無駄にってしまった。

彼女の慌てぶりをみた老師もまた笑った。

「では、さっそく試験を行おうか。問題は簡単なものばかりだから難しく考えることはない。約二時間程で終わるが、その間はどうかさる？」

と老師はカルダンに訊いた。

「私は先に失礼させていただくことに致します」

「よろしい」

「じゃあ、頑張りなさい。君なら合格できるさ」

とライカを激励するとカルダンは部屋から出て行った。

「さて、その席に着きなさい。紙と筆はこちらで用意した。これから問題を渡すから、時間内にできるだけ多く解いて解答用紙に記入しなさい」

「はい」

彼女は席に着いて深呼吸した。

「それでは始めなさい」

試験が終了した後のライカは精根を使い果たしていた。結果がどうであれ、一生懸命頑張ったことと疲れたことに変わりはない。

「ふむ、素晴らしい」

とイー・チェン・イエンから褒められて、彼女はビクッと身を起こした。

「非常によろしい。三年目の生徒達の中でも上位の成績に食い込めるだろう。一、二年の授業はおそらく君にとって退屈しかないかもしれない」

ライカは次の言葉を待っていた。  
老師は微笑んで言った。

「おめでとう。合格だ」

ライカの中で幾百もの想いが、可能性が駆け巡った。

「カルダン殿から話は聞いておる。一月後に君が入ってくる時に置いてかれてないように、教材を渡しておく。指定してある箇所を勉強しておきなさい」

「あ、あの・・・」

「どうした？」

「わたし、本当にここの生徒になれるんですか」

老師はにっこりと笑って告げた。

「そのとおり」

ここにきて、初めてライカは笑った。

いよいよわたしの人生が始まるんだ。

彼女は老師の後に続いて塾内を見学していた。実験教室や通常の教室では、顔立ちも年齢も性別も違う人が同じ場所で学んでいた。窓越しにハンサムな顔付きの生徒と目が合い、思わずドキッとした。ここでわたしも勉強するんだ、と思うと胸が高鳴る。

会場に戻るとその日の後片付けをしているカルダン達の中にシルヴァンがいるのを見かけた。

彼らも彼女の登場に気付き、「おかえり」という言葉と「どうだった？」という言葉が入り乱れた。

「合格よ！」

彼女は笑いながら言った。

すると、一斉に大きな拍手と口笛が響いた。

「おめでとう！」

「よくやった！」

「今日はお祝いね！」

彼女は次々にかけられる祝福の言葉にお礼を返した。  
戦闘着姿のシルヴァンはすうつと前に出て、彼女に手を差し出した。

「おめでとう」

ライカは手を握る代わりに彼の体に飛びついた。拍手と揶揄と口笛が一層大きくなった。

鳴り止まない拍手の中、彼女は笑っていた。

## 五話 『闇毒』のマルスヘルム（一）（前書き）

### 人物紹介

- ・グライド・・・ウェイブラス騎士団マルスヘルム軍所属の十人隊長。シルヴァンの上司。三十歳過ぎ。
- ・ギース・・・グライドの部下。シルヴァンの同僚。二十代後半。
- ・ハーン・・・同上。シルヴァンと同年。二十歳。

## 五話 『闇毒』のマルスヘルム（一）

金の月。オーシアン大陸西部で最も暑い季節が始まろうとしていた。

シルヴァンがウェイブラス騎士団に入隊して約一月が過ぎた。

バヤードに駐在するマルスヘルム軍の猛者達は早くも今年の剣闘技大会出場を諦めていた。それもこれも、最近入隊してきた男がおりえない程強かったからだ。

百人隊長、十人隊長、兵士が彼に勝負を挑んではあっさりと敗北した。極め付きはマルスヘルム軍に四人いる千人隊長の内ひとり。彼と勝負し、これもほんの数合剣を打ち合わせただけで決着がついた。

何か弱点はないかと得物を変えさせて勝負をした者もいた。それはいい効果を発揮はできた。完璧に見えたシルヴァンにも得手不得手があったのだ。が、無意味だった。彼は聞いたことも見たこともない武器をその場で手渡され、すぐに対決した時もあったが、あっという間に武器の特性を掴み、自分の技とした。

同じ部屋の住人。シルヴァンは彼らと同じ班に所属することになった。も対決したが、結果は見るまでもなかった。しかし、敗北した彼らの顔には誇らしげなものがあつた。

「お前ならきつと大会に出られるぜ」

「おおよ。マルスヘルム准将は必ずお前をアリオン將軍に推薦してくれるぞ」

他の誰よりも、ハーン、ギース、そしてグライドはシルヴァンの健闘を自分のように喜んでいた。彼らは自分達の班、部屋から大会に出場する者が出てくると信じていた。



金の月、第二週第二の日、グライド達はバヤードの北西地区の警備を担当していた。

首都へ通じる大街道に繋がる大路の警備が彼らの仕事だった。人の行き来が激しく、宿をはじめ商店が立ち並んでいた。

シルヴァンはギースと二人一組ツーマンセルを組んでいた。巡回する途中途中で他の班の連中を見掛けたりしたが、サボっている者は唯のひとりもいなかった。

彼らは大路から小さな路地を進み、その地域では比較的貧しいと分類される地区に入った。

立ち並ぶ家々は大体が自宅兼仕事場みたいなものだった。小さな八百屋を商っているものもあれば靴の修理屋を営むものもあった。シルヴァンはその中に花屋があるのを見かけ、フツと表情を和ませた。彼はその店に立ち寄った。種類は違えど懐かしい香りが彼の鼻を擽った。

店の奥から女主人と思われる年配の女性が現れた。

「あら、お勤めご苦労様です。今日はどうなさいました？」

「いえ、懐かしいなと思ってつい寄ってしまつて。昔花屋のご家族の家に居候させてもらつてた時のことを思い出してね」

ギースはシルヴァンから彼が竜巢の谷の村から来たことを思い出して微笑んだ。

「お邪魔してすいません。すぐに出て行きますから」

「いいんですよ。どうぞゆっくり見て行ってくださいな」

女主人に勧められてシルヴァンは鮮やかな花々を見渡した。どの

花も村で見た花より小振りだが、見た目の美しさは変わらない。

ギースも一緒に花を手にとって香りや色を楽しんでいる時、遠くで女性の悲鳴が聞こえた。

たちまちギースは店を出て声のした方向に走り出した。シルヴァンも「失礼しました」と告げ、後を追った。

遠目に女性が走っているのが見えた。その奥に、何かを抱えて逃げている男がいるのも見かけた。通りに人があまりいない時を狙った犯行だろう。店先から顔を出す者はいるが、犯人と思しき人物を捕まえようとするものはいない。

「どうした?!」

ギースは走り寄って大声で訊いた。

女性は振り向いて

「あの男に小包みを！ お金が入ってるんです！」

と叫び返した。

その横をシルヴァンが風のように走り抜け、ギースはその後姿に「あいつだ！」と投げかけた。

瞬く間に男とシルヴァンの差は縮まり、迫ってくる足音を気にして男は後ろを振り向いた。

男がシルヴァンの速度に驚いてつい足を止めかかった時、シルヴァンは三メートルも跳躍し、空中で身をひねって男の前に音もなく着地した。サラサラと流れる長髪が美しかった。

その鮮やかな動きに男は一瞬呆気にとられたが、すぐさま踵を返して逃げようとした。が、シルヴァンは後ろから足をかけて男を激しく地面に倒した。うつ伏せにさせられた男は左腕をねじ上げられ、思わず手にしていた包みを放した。

少ししてギースと被害女性がやってきた。

「今応援が来る。もうちょい待ってくれ」

と言い、ギースは犯人が落とした小包みを手にとって女性に渡した。

「これかい？」

「は、はい。ありがとうございます。助かりました」

「後で事情聴取しなきゃならないからもうしばらく待っててもらおうよ。それにしても、そんなに大切なもんだったらもつと慎重に持ち運びしなきゃ駄目だぜ」

「は、はい、すみません」

「にしてもよ、スゲエぜ、シルヴァン、お手柄だぜ。こりゃご褒美が楽しみだ」

ギースはしゃがみ込んで男に言った。

「お前さんも運がないな。コイツにかかったちゃ誰も逃げられねーよ。せいぜい後でテサーナを呪うんだな」

男は何か言い返そうとしたが、シルヴァンが強く腕を締め上げたので呻いた。

「ま、しばらくはムシヨ暮らしを謳歌しな」

「畜生！」

男は罵った。

シルヴァンはこのやり取りを笑いながら聞いていた。犯人を目の前で捕まえても、これしきの事件は彼にとって些細なことではな  
いのかもしれぬ。

グライド、ハーン、それに加えて同僚達が駆けつけてきた。

男は縄で縛り上げられ、連行された。被害女性は事情聴取を受け  
たがすぐに解放された。彼女はシルヴァンとギース達に何度も俺を  
していた。

一息つくくと、グライドは彼らを労った。

「お前らよくやった。今日は俺がおごつてやる」

「俺じゃなくてシルヴァンスよ。こいつひとりで全部やってくれ  
たんだぜ」

「まさか。あんたのおかげだよ、ギース」

「よせやい、照れるじゃねーか」

「ふたりともよくやった。おそらく今日のことはマルスヘルム閣下  
の耳にも届いているだろう。そうすれば、シルヴァン、お前は十人  
隊長に昇格できるかもな」

「お、じゃあ今日は前祝か？」

三人組の中で一番若いハーンが言った。

「かもな。とりあえず、後の報告を待とうぜ」

その晩、マルスヘルムは兵舎にいる兵士を全員屋内の演習場に集まらせた。マルスヘルムが指揮する軍は約四千人で、常時その半数近くがバヤード周辺の警備に当たっている。

グライド達はシルヴァンが昇格するのか、と期待していたが、わざわざそんなためにこんな大人数を集めるはずはないと気付いた。集められた兵士は准将の口から何が出るのか予想していた。彼の口から出た言葉は多くの者が予想していたものだった。

「赤の月の末に行われる剣闘技大会まで残り二月を切った。あと二週もすればアリオン将軍が他の部隊の参加候補者を連れてここに来る。その時までにはわしも候補者を絞らなくてはならん。今日皆に集まってもらったのは他でもない、候補者の決定を行う」

人々の間をざわめきが走ったが、注意する者はいない。

「少なくとも、わしが目星を付けた者はここにいるはずじゃ。残念だが、今警備に当たっている者が候補者に入ることはないだろう」  
わしは多くてふたり、アリオン将軍に推薦しようかと思っておる。だが、誰も推薦しないこともありえるかもしれん」

マルスヘルムはここで一息つき、続けた。

「率直に言おう。この中で『我こそは剣闘技大会への出場を望まん』と思う者がいれば前に出るのだ」

## 五話 『闇毒』のマルスヘルム（一）（後書き）

### 用語解説

・金の月・・・第七月。オーシアン大陸西岸側は年始と年末の時期が寒く、中盤は暑い気候。

・赤の月・・・第八月。ガイザード帝国ではこの月の末頃に剣闘技大会が開催される。

## 六話 『闇毒』のマルスヘルム（二）（前書き）

### 人物紹介

・タクリッド・・・ウェイブラス騎士団マルスヘルム軍所属の百人隊長。シルヴァンの入隊試験の際相手をして敗北した。

## 六話 『闇毒』のマルスヘルム（二）

またざわめきが広がり、多くの者がシルヴァンの方を見た。  
ギースやグライドは彼を小突いた。

「願ってもない機会だ。チャンスこん中にお前の右に出る男なんてそうそういない。大丈夫だ」

そう言われ、シルヴァンは整列する兵士の間を通って前に出た。  
彼が何を考えているのかは、その無表情な顔付きから窺い知ることができなかった。

彼が前に出ると、マルスヘルムの目が光った。

（ほう、やはり来たか）

別の列から男が出てきた　タクリッドだ。彼はシルヴァンを見るとニヤッと笑った。この前の借りは返すぞ、と言わんばかりの粹な表情だ。

マルスヘルムは「もういないか？」と群に訊ねた。

「私もです」

と言ったのは、マルスヘルムの後ろに控えていた男だ。兵士達は驚くと同時に納得の表情を浮かべた。

（やはり来たか　　）

（マルスヘルム准将直属千人隊長の筆頭　　）



（来ないはずがないもんな。千人隊長の四人の内一人はあいつに負けてるんだし）

（それよか、あの人もあいつと闘いたいような感じだぜ）

「ほお、お前も出るか、ユリウス」

「はっ」

と返事をした男は頭を下げた。大きな体付きをした彼は、マルスヘルムを除けば彼こそがこの中で最強と目されていた。シルヴァンが現れるまでは。その地位が既に揺らぎ始めているのを彼も感じたのだろう。

マルスヘルムは顎鬚をなでた。

「他にはおらんかの」

徐々に騒ぎも静かになっていく。

「それでは……どうしようか……この場で闘ってもらおうかの」

途端に、「オオ！」という声が兵士達の口から洩れた。

「まず、そうじゃの。シルヴァン、百人隊長のタクリッドと闘うのだ。その勝者がユリウスとやり、最後に勝ち残った者を將軍に推薦しよう」

演習場の興奮は頂点に達しつつあった。もう既に誰が勝つかに賭け出す者までいた。

「シルヴァンに三百ルーア！」

「タクリッドに二百五十！」

「ユリウスに五百だ！」

その喧騒を尻目に、タクリッドはシルヴァンに近づいた。

「また闘えて嬉しいぜ」

「こちらこそ」

「今度は前みたいにはいかないぜ。油断するなよ」

「そっちこそ」

二人は握手を交わした。

「よろしい！ それでは戦士に道を開けい！」

マルスヘルムを先頭に、三人の戦士は演習場の中央に進んだ。

見物人達は彼らを円状に取り囲んだ。

千人隊長のユリウスは円の最前列に座って闘いの行方を見守ろうとしていた。

タクリッドとシルヴァンは向かい合い、彼らの間にマルスヘルムは立った。

「用いる武器は自由。原則としてどちらかが負けを認めなければ試合は続けるものとする。ただし、明らかに勝敗がついた場合やその

ようにわしが判断した時は独断で中断させる。また、相手を死なせてしまった場合はどちらにも負けとする。よいな？」

「はっ」

「はっ」

シルヴァンは左腰から剣セイバーを抜き、右腕を下方に垂らした。

一方、タクリッドは背中から百セートもありそうな大剣ソードを引き抜いた。戦など大人数相手ではその有効性を十分に発揮できる武器だが、一対一になるとどうしてもその重さや大きさが邪魔になってしまふ諸刃の剣でもあるが、あえてそれを選んだのには彼がその武器で今の地位を確立させた意地と誇りがあつたからだつた。

タクリッドはソードを後ろに構え、体勢を低くした。ちょうど腰に差した刃を抜くかのように。

シルヴァンは右腕を垂らしたままだつた。

マルスヘルムは右腕を上げ、

「はじめいッ！」

サツと振り下ろした。

はじめに動いたのはタクリッドだつた。シルヴァンに飛び掛り、片腕でソードを薙いだ。

シルヴァンは避けずに両手で柄を握つて攻撃を受けた。しかしあまりの力強さに彼はもといいた位置からずれることとなつた。

タクリッドは続けざまに得物レイピアを刀剣のごとく巧みに操つて切り結んだ。

しかしどれも悉くシルヴァンに受け流されている。

このまま続けても無意味と素早く判断したタクリッドは二歩ほど後ろに下がり、一気に突いた。しかし、前回同様彼はまた目標を見

失った。

彼は上を見上げた。それは照明を遮り、影を彼に投げかけた。タクリッドは結果的に後ろを振り向くことになった。一瞬何が起きたのかわからなかったが、状況を思い出して構えなおした。彼も瞬時に理解したのだろう。今の一瞬ほどの時間さえあればシルヴァンが突きを繰り出して彼を負けに追い込むのは容易いことだと。

次に動いたのはシルヴァンだった。彼にしてはゆっくりめに動いたらしいが、その力は普通ではなかった。

セイバーを持つ片手のどこにそんな力があるんだと思わざるを得ないくらいの打ち合いの音が響く。今度のタクリッドは防戦一方だった。しかも両手で受け流しているのに、手に伝わる衝撃は半端ではなかった。

受けているうちにだんだんと手が痺れてくるのを彼は感じた。

その時、シルヴァンは相手の右手首に剣の横っ腹を打ちつけた。

タクリッドは呻き、左手に持ち替えたがそこへまたセイバーが振り下ろされた。彼は果たしてソードを落とした。

すかさず攻撃者は落ちた武器を拾い、両手に構えた剣を交差させクロスて相手の首すれすれに当てた。

「ま、負けだ」

タクリッドは宣言した。ギョアップ途端に、歓声が兵舎中に響き渡った。

シルヴァンはソードを下ろし、持ち主に渡した。

互いに喋る声が聞こえないような騒ぎの中、タクリッドはシルヴァンを褒め称えた。

「見事だ。前よりもはっきりと君の凄さを知ることができた。手を叩かれた瞬間、戦場だったら俺の戦士生命は死んでいた。あの時二回も俺の手を叩いた剣がまっすぐに俺を捉えていればな。本当に凄かった」

シルヴァンは礼を言った。

大きな拍手がした。今の勝負　そしてふたりに対して。  
マルスヘルムが再び中央にやってきた。

「両方見事！　シルヴァンの勝ちとする」

彼は宣言してシルヴァン側の手を上げた。

敗者は勝者に礼をし、群衆の中に入っていた。

すぐに新たな相手　千人隊長ユリウスが現れた。

「休むか？」

「大丈夫です」

と言ったシルヴァンに向かってユリウスは不敵な笑みを浮かべた。

「ほほ、せっかちじゃな」

マルスヘルムは笑った。

ユリウスは剣　彼もセイバーの使い手だった。今回の闘いは戦<sup>ファ</sup>士として、そして同じセイバーの使い手として負ける訳にはいかな  
いのだ　を引き抜き、構えた。構えも眼も真剣そのものである。

油断すれば重傷は免れないとシルヴァンは感じ取った。彼は今度  
ははじめから構えた。

「では、はじめいッ！」

勝負はほんの数秒で決着が付いた。しかし、その内容を全て理  
解できたものはいたのだろうか。

合図がすると同時に、両方が跳んだ。空中で交差する瞬間、セイバー同士が打ち合う音がし、両者は相手がさっきまでいた位置に立っていた。構えも全く変わらずに。

再び影は交差し、自分がもといいた位置に舞い戻った。

また跳んだか、と思った瞬間には既に両者は中央で切り結んでいた。

そのスピード 全てを目で追うのは難しかった。

シルヴァンもユリウスも上下左右から相手に技を繰り出し、同じように繰り出されたセイバーを受け流す。両者の中で時間は意味を成していなかった。周りの雑音もゆっくりにしか聞こえない感覚だった。

見ている者には、足で蹴りを出しているところや、体を回転させて見事に攻撃を避けてすかさず守備から攻撃に移ったところが映った。

足技をかけられ、転んだのはシルヴァンだった。打ち下ろされるセイバーを彼は受け止め、床に横になりながらも相手の足を引っ掛けて転ばせた。

両者は同時に立ち上がり、再び組み合った。

人々は息を呑んだ。

すると、剣の動く速度が遅くなってきた。力の均衡が崩れてきた証拠である。

シルヴァンは切り込んできた相手の柄付近にセイバーを繰り出し、腕で大きく円を描いた。その動きに合わせて相手の得物は腕ごと押しのけられた。

その瞬間、シルヴァンは相手の喉にセイバーを当てた。

「俺の負けだ」

沈黙が流れ、大歓声が響動もした。

「やりやがったぜ！ あいつ！」

「だから言っただろ、あいつが勝つてよ！」

「おい、忘れんなよ！ 四百ルーアだからな！」

またしても勝者と敗者は近づき、熱い握手を交わした。

「これほどの者とは。 完敗だ」

「こんなに強い相手ははじめてでしたよ」

ユリウスは笑い、礼をした。拍手は鳴り止まなかった。

「見事！ 勝者、シルヴァン！」

この日一番の拍手、歓声、口笛が鳴り響く

マルスヘルムは右手を上げ、「静粛に」と言つと直ちに群衆は静まった。

マルスヘルムは重々しく言った。

「皆が見た通り、彼は二度闘い、二度勝者となった。彼を推薦することには異存はないな」

「はい」

誰もが異口同音に応えた。

「これほどの強者であれば我々が騎士団約二十年ぶりの剣闘技大会優勝も夢ではない。わしは嬉しいぞ。」

だが、だからこそ、本当に素晴らしい戦士のみを将軍に推薦したいと思う。残念だが、このままだと彼を将軍に推薦することはできない」

兵士達は驚いた。

しかしマルスヘルムは続けた。

「確かに彼はかなりの実力者ではある。それは認めよう。だが、彼くらいの実力者であればわしは何人も見てきた。剣闘技大会に出場すればそんな者はごまんといる」

騎士団はざわついた。中でも、シルヴァンと親しい者達は怒って文句を言った。

だが、本当に彼らが驚いたのは次に彼の口から出た言葉だった。

「故に、わしが直々に彼の腕前を見よう。無論、真剣勝負でだ」



## 六話 『闇毒』のマルスヘルム(二)(後書き)

### 用語解説

- ・セート・・・長さの単位。一セートは約一センチ。

## 七話 『闇毒』のマルスヘルム（三）

ウェイブラス騎士団の兵達<sup>つわもの</sup>は耳を疑った。何を言ったのか聞き取れなかったように。

マルスヘルムは笑っただけだった。

「わしは魔法戦闘具<sup>マジック・ウエポン</sup>を使う。よいな、シルヴァン」

問われた方は頭を下げた。彼は息も切らしていなかった。

准将はゆっくりと歩き、タクリッド、ユリウスと同じようにシルヴァンと対峙した。

兵士達の驚き具合は異常だった。十人隊長にもなっていない新参者が、畏れ多くも剣闘技大会の優勝者にして將軍を除けばウェイブラス騎士団の頂点に立つ男と闘うなど

奇怪な音がした。そこにいるほとんどの者が初めて聞いた音だった。金属をこすり合わせたような高い音だが、なぜか心地良い響きを持つ音。人々はマルスヘルムが両手を天高く上げたのを見た。

「ユゲニ・バンソー・ドンウォ・リ・バーレー ユガナオーデ  
エルノハーレル・フィーレー」

誰も理解できない言語 言うなれば魔法語を、奇妙な抑揚をつけてマルスヘルムは唱えた。四十年近くも前、彼が帝国お抱えの魔術師達によって精製された魔法戦闘具を受け取るに際して教えられた言葉 呪文だった。

空中に現れた光が、どんどん彼の両手に吸い付くように集まった。それは大きさを増し、両手は光によって見えなくなり、そして、突如として《それ》は現れた。

いや、光が形を成した、とでも言うべきか。

天高く上げられた双拳には、黒い鋼鉄拳ナックルがあった。

マルスヘルムはゆっくりと拳を下ろして感覚を確かめるように腕を動かした。

「お、おい、俺初めて生ナマで見たぜ」

「俺もだ。あれが准将閣下の魔法武器」

「スゲエ………」

「前に一度だけ見たことがある。あれが准将の二つ名の由来だ」

「もしかして、あれがかの有名な………」

騎士団は誰もが小声で周りの連中と話し合った。

「懐かしいの。約二年振りか。北方大陸の妖魔と戦った時以来だ」

マルスヘルムは懐かしむように言った。肘まで覆う程の大きさである鋼鉄拳は金属や硝子でできているようだった。誰も見たことがないような形状のナックルだった。グローブのようだ。

「では、やろうかの。ユリウス、合図を頼む」

「は、はいッ」

ユリウスは慌てて前に出た。もう既に両者は構えていた。彼は危険を察知し、

「はじめッ！」

と言うと同時に後ろへ逃げた。

両者は消えた　　ように見えた。光が一閃し、空中高くでぶつかり合った。

ユリウスの時と同じように相手の立ち位置に着地した、と思ったのも束の間、マルスヘルムはシルヴァンの方にありえないほどの速さで跳躍し、組み合った。

見ている者がはつきりとわかったのは、闘っているという証拠である音の連続のみだった。

まるで残像が闘っているかの如く、彼らは次々に場所を移動していた。

マルスヘルムは、その命のやり取りの最中で喜びに浸っていた。

最後にこんな心躍る状況があったのはいつの日か

彼は見た。激しい戦闘の真っ只中ですら対戦相手も自分と同じように笑っているのを。

彼は本能的に感じた。今闘っている敵は、最高の闘いの中に己を見出す戦士であることファイターを。《我々》と同類だ。

彼は喜んだ。久しく見なかった、新たな好敵手が現れたことを。

彼は喜びを噛み締めるように、一度敵から離れた。敵もそれが得策であると感じたようである。

両者は再び対峙した。最初の位置と全く変わらない位置に。

見物人達はその闘いが自分達と次元が違うことを悟った。彼らは息をするのも忘れて固唾を吞んで闘いの行方を見守った。

「こんなに素晴らしいとは思わなかった。　その強さに対して敬意を表そう。わしも本気を出す」

マルスヘルムの武器に変化が起こった。シルヴァンも驚き、目を剥いた。

ナツクルの先端　硝子質の攻撃部分が、毒々しい緑色に光った。さらに、マルスヘルムの体に沿うように、はつきりとした妖しい青い光が彼を包んだ。魔法武器がその真価を発揮する時が来た。魔法が発動されたのだ。

「これは　ブラックナツクル　黒鉄拳　と言つてな、魔法武器の御多分に洩れず、魔法を発動させると光る。その効果はこの先端　ナツクルの光る部分を示して　に触れると、毒が感染する。なるべくこれに触れないことを勧めるぞ。触れすぎるとお主は重い“病”を患うことになる。不治の病だな」

誰もが息を呑んだ。

「解毒方法は？」

シルヴァンは聞かずにはいらなかった。

「残念だがない。解毒、中和、治療方法がないからこそ、これが魔法武器と呼ばれる所以だ。ゆえんどうする、やめてもいいぞ？」

その質問に答えるように、シルヴァンは構えた。見物人の中からいくつか「やめろ！」という声がしたが、戦士の血がそれは不可能だということを告げていた。

「その勇氣に対して、もういくつか教えよう。この武器は空気感染しない。つまり、毒を侵すためには直に叩かなくてはならない。そして、この毒はわしにだけは通じない」

「それが准将の二つ名、『ダーク・ポイズン闇毒』の由来ですか」

「その通り。だが、他にもいくつか理由はあるがな」

と答えると同時にマルスヘルムは動いた。シルヴァンも遅れて動いた。再び、戦闘は開始された。

今度は、金属音の他に緑光が尾を引いて宙に描かれた。またも群衆はその光の恐ろしさも忘れて戦いに見入っていた。

マルスヘルムは既に気付いていた。早めにこの戦いを終わらせるべきだと。

高速の動きの中、マルスヘルムは敵の顎目掛けて右突きを放った。シルヴァンは後ろに転回し様に、剣を閃かせた。またしても、彼は剣の横っ腹でマルスヘルムの顔を叩いた。が、流石に体をひねりながら攻撃したせいかなマルスヘルムの顔からわずかに血が流れた。マルスヘルムの繰り出した突きは空中で回転したシルヴァンの髪に触れた。

彼らは対峙した。

すると見よ、シルヴァンの髪が先の方からどんどん白くなってゆくではないか。これが『闇毒』のマルスヘルムの魔法武器、ブラックナックルの効果だった。

シルヴァンは背中まで伸びていた髪を首のところですっぱりと切った。髪を切ることでそれ以上の毒の侵入を防ぐのだ。

両者は構えるのを止めていた。

マルスヘルムは血を拭った。彼は両手を天高く差し上げた。すると鋼鉄拳は光になり、宙に消えた。柔らかな音を残して。いつの間にか寒さも元に戻っていた。

決着は付いた。

「よろしい。シルヴァンをアリオン將軍に推薦しよう。彼の力は本物だ」

准将が褒めても群衆は歓声ひとつあげなかった。

「だが、まだ戦いの最中に非情になり切れていないな。それでは戦士として失格だ。肝に銘じておくように」

「はい」

「それでは解散とする。シルヴァンはこのままここに残っておれ。話すことがある」

夢を見ているような表情でウェイブラス騎士団の面々は部屋に引き取った。

誰もいなくなった演習場にはマルスヘルムとシルヴァンだけが残っていた。

「わかつているだろうが、先の闘いはお前の勝ちだ。それをお主が一番わかっておろう」

返事はなかった。

マルスヘルムは笑った。

「あんなに楽しく闘ったのはいつ以来かの。わしの全盛期の時でもお前さんに勝てたかどうかからん。いや、負けていただろう。わしは見たぞ、闘いの最中、お前さんの目はわしが今まで闘ってきたどの相手よりも強いということを物語っていた。あの時感じた戦慄、恐怖というべきか」

「アリオン將軍よりも？」

マルスヘルムは答えるのを渋っているようだった。

「わからん。だが、おそらく」

沈黙が世界を占めた。

「ひとつ訊きたい。風の便りに聞いたのだが、お主が来たというバスティアの竜巢の谷だが、ここに来る前にウルギア盗賊団に襲われたらしいな。しかし、悪名高い盗賊団はひとりの少年の前に成すすべなく撃退された、と。」

しかも、だ。村人に死人はなく盗賊団はほぼ壊滅状態と聞いた。わしにだってその青年がお前さんだってことぐらいわかる。だが、村人に被害が出なかったのは何故だ？ わしはそれが気になって仕方なかった」

「・・・・・・・・」

シルヴァンは黙ったが、

「わかりません・・・・・・・・」

と呟き、首を振った。

再び沈黙

「わかった。そう答えてくれただけでも良しでしょう」

マルスヘルムは晴れやかに、

「そういえばお前さんが今日街で盗人を捕まえたと聞いた。褒美として十人隊長の座を進呈しよう。剣闘技大会に出るのにも必要だしな」



「ありがとうございます」

「正式な発表は明日とするが、別に他の者に言っても構わん。戻ってよいぞ」

シルヴァンは演習場から退出した。

大きな空間の中、老人はひとり物憂げな顔をしていた。

部屋に戻ったシルヴァンは陽気な祝福を受けた。部屋の住人から酒を浴びせられ、無理矢理胸上げまでされた。その夜は遅くまで騒がしかった。隣近所の部屋の連中も宴に参加してきたのだ。

兵舎が祝宴会場になっている時、グライドは寝台に腰掛けるシルヴァンの隣に座った。

「凄かったぜ。ありやあ、俺達とは別の世界の技量<sup>レベル</sup>だ。今日、改めてお前さんの強さがわかったよ」

「ありがとう」

「これで晴れて剣闘技大会に参加できるな。あのお嬢ちゃんに早く伝えてやりなよ」

「ええ」

「そっぴや、お前さんとあの女の子は付き合ってたのか？ いつも休みの時は街をうろついてるって聞くけど」

「いや、そっぴや関係でもないんだ」

シルヴァンは苦笑いした。

「なんだそうだったのか。まだだったのか。いや、それなら今が最高の機会チャンスだぜ。剣闘技大会に出場できるだけでも有名になれる御時世なんだから、そのことは有効に使えよ。断るはずがないぜ」

「いや、彼女と僕はそういう間柄にはならないよ。彼女はきつと僕じゃなくて、他のいい男と結ばれる。……そんな気がするんだ」

急に寂しく、悲しげな顔付きになったシルヴァンを見てグライドは驚いた。彼のそんな表情を初めて見たのだ。彼は遠い目をしていた。

グライドは（これは俺のお呼びじゃねーな）と察し、改めてシルヴァンの昇格を祝い、騒いでる輪の中に入っていた。

シルヴァンは部屋の窓に近づいて空を見た。

村と違って、星がよく見えなかった。街の灯りは明るすぎる、と彼は思った。

## 七話 『闇毒』のマルスヘルム(三) (後書き)

あとがき

お待たせしました。全体でもう十七話目ですね(序章も入れれば)。先日初めて一日のPVアクセスが二百を越えました。とても嬉しかったです(笑)本当に読んでくださってる皆さん、どうもありがとうございます。

さて、今回の話では初めて魔法戦闘具というものができましたが、武器の実態や精製の過程も今後内容に取り入れていきたいと思っています。

一応まだ第二部は続けていく予定でしたが、話の区切りのにも丁度いいかなって思ってたこの話で第二部を終わらせてもいいかなって思っちゃったりもしました(笑)でも、当初の予定では第二部は剣闘技大会をピークにもってくるつもりだったので、計画に狂いがないようまだ第二部という形で続けさせていただきます。

第一部を旅立ち偏とするなら第二部は剣闘技大会偏ってことになるかな(笑)

なにはともあれまだまだ物語りは続きます。今後ともよろしくお願いします。

## 八話 邂逅こそは縁成りき（一）

その男 質素なローブを羽織り、頭まで深く被った奇妙な人物は神殿から出てきた。

まったく、我が神は一体何を考えておられるのやら。

と自分が頭の中で至高なる神を冒瀆していると気付き、頭を振り払って急いで懺悔の祈りを唱えた。

神よ、私めの不実をお許してください。

道行く人々は彼を振り返っては面倒ごとに巻き込まれないように目を逸らした。そんなことも構いなしにその男は目を閉じ、歩きながら悔い改めていた。目をつぶって歩いていたせいか、途中で石らしき物に躓いて転びそうになった。

しまった。これも神を冒瀆した罰か。

とつさにそんなことを考え、地面に体をぶつけるという瞬間彼は何かを支えられ衝突を免れた。

ゆっくりと身を起こした彼は助けてくれた人物を見た。

「大丈夫ですか？ お怪我はありませんか？」

その青年 中性的でとても美しく、首辺りで切り揃えられていた黒い髪は陽に輝いていた。そして最も彼を惹き付けたのは、その青い瞳 は男に訊ねた。

男は青年の瞳を見つめ、深く考えた。

神よ、この人物があなたのおっしゃっていた人間ですか。

男はにっこりと笑った。

全ては御心のままに。

「助けて頂きありがとうございます。こんなみすばらしい男を助けになれるとは、あなたはとてもご親切な方であられる」

彼は滑稽な位深々と頭を下げ、礼をした。  
青年は手を振った。

「いえいえ、お気になさらず。当然のことをしたまでですから」

「ほお、謙遜されるところもまた素晴らしい。ここで会ったのも何かの縁です。少しあなたの相を相<sup>み</sup>させていただけませんか？」

青年は訝しんだが、人受けの良い笑顔を浮かべて手を差し出した。  
ローブ姿の男は両の手をじつくりと、指の相まで凝視していた。  
観察し終わった男は、

「失礼、あなたの眼も相ていいですか？」

「ええ」

青年より頭一つ小柄な男は背伸びし、青年は少々屈んだ。  
青い眼と緑の眼が合う。何事もなく十数秒が過ぎた。  
男は眼を逸らし、足を楽にした。

「ありがとうございます。なかなか面白いものを見ることができましたよ。私、こう見えても神に仕える身でして、占いや星占術は熟知しております。いやいや、それにしても面白いものを見れた」

「そうですか」

「一体その面白いものとはなんですか？」という返事を予想していた男は感心した。

わたしの予想が外れるとは、さすが神が選んだ男。こうでなくて

は。面白くなってきた。

「おや、珍しい。普通こういうことを言えば、大抵の人は『その面白いものとはなんですか?』とか訊いてくるものなんですが。特に運命とかに興味はないのですか?」

「無宗教なもので」

男は驚いた。

「いやはや、まさかこのオーシアン大陸で無宗教と称される方にお会いできるとは。いかに生活から神々という存在が遠い人であつても、どれかひとつの神の教義は信仰していると私は信じていたのですが」

よもや神が選んだ男が無宗教などとは。いや、嘘をついている可能性もなくはないが、考えにくいな。

「例外がいたようですね」

青年は笑って言った。

一瞬ポカンとした男はニヤリと笑った。子供のような無邪気な微笑だった。

「今日この場でこのような方に出会えたのも全てはテサーナの思し召し。良ければ、名を教えてくださいませんか?」

「シルヴァン」

青年ははつきりと言った。

「竜巢の谷のシルヴァンです」

「シルヴァン……綺麗な名ですね」

「あなたは？」

男は被っていたローブを下げて人懐っこい顔を陽の下に晒した。  
二十代前半らしいが、それよりも結構若く見える。見るも鮮やかな金髪だ。

「トリスタン。トリスタンと申します。姓は神に仕えた時に捨てました」

「かつこいい名前ですね」

「私はテサーナ神の僧侶クレリックです。人は私のことを 契約者コントラクターと呼びます。ま、そう呼ぶのはテサーナに仕える神官や僧侶達くらいなものですが」

「ほう、面白いですね」

「何故、とお訊きにならないのですか？」

シルヴァンは微笑んだ。

「あなたは話したいことがあれば自分から話しそうな人とお見受けしました。だから、話さないことを質問してもおそらく答えてくれないでしょう」

トリスタンは笑った。

わたしの用意していた回答と同じだ。ますます気に入った。

「一本取られました。素晴らしい。」

ではその優れた洞察力を評して、ひとつお伝えしましょう。あなたは信じないかもしれませんが。

先程、わたしは神殿で我が神から神託を受けました。簡単に言えば、私が『神殿を出てから最初に話す人物を占う』、と……」

「おそらく、その神託の詳しい内容も教えてくだらないのでしょ  
う?。」

「その通り」

二人は声高らかに笑った。

「お会いできて嬉しかったですよ、シルヴァン」

「こちらこそ、トリスタン。もしよければ、今後友人として付き合い  
うのはどうです?。」

「よろしいので?。」

「勿論」

「ではそのご好意に甘えて。今度から友人として接させていただきます  
ます」

「ええ」



ふたりは握手を交わした。

「では、僕は用事があるので失礼します。またお会いしましょう」

青年は背を向けて去っていった。

「ええ、会いましょう。それも極近い将来」

トリスタンは石造りの人ごみに消える背中に投げかけた。誰にも聞こえないくらい小さな呟きだった。

「あら、今日はちょっと遅かったわね」

休みの日は必ず立ち寄っている宿でシルヴァンはライカと会った。ライカはカルダンから頂戴した服を着ていた。そんなに高くはないが、彼女の魅力を引き出すのには十分だった。

「ごめん。途中で面白い人に会ってね。そこで時間を食っちゃったんだ」

「ふん。まあ別にいいけど。まさか女じゃないでしょうね」

「そうだったら？」

「もしそうだったとしても、わたしには関係ないわ。わたしももうすぐ立派な大人になるんですから、シルヴァンに変な女ができてわたしは口を挟まないわ」

シルヴァンは苦笑した。

「男の人だよ」

「なあんだ。つまんない」

「ライカも早く良い男でも見つけなよ」

「余計なお世話、よ」

ライカは天使のような微笑を浮かべた。たいていの男だったらイチコロだろう。

「それより、今日はどこに行きたい？」

「実はね、バヤードの中央にある大広場にガイズから妖魔が来るんですって。わたしそれを見に行きたいわ」

「妖魔？」

「そ。ガイザードがヴァリノアと戦争を始めた時に捕まえたらしいのよ。そういう妖魔を見世物にして旅をしてる一座なんだって。その中の一部が今日来るらしいの」

シルヴァンは顔を顰めた。しかし、ウキウキしているライカはそれに気付かなかった。

「楽しみだわ。どんな妖魔なのかしら」

「あんまり喜んではいけないよ。妖魔を見世物にして商売するやつ

らは奴隷商人と同じさ。僕の大っ嫌いな部類の人間だ」

「う、うん。わかった」

ライカは少ししょんぼりした。

太陽が頂点に達する頃、シルヴァン達は大広場に向かう前に露店を探検していた。まだ制覇していない地域を回っていた。

彼らはバヤード市内にある人工樹林の公園の周りを歩いていた。あまり人気がなく、店もそんなに多くはなかった。

樹木を左手にして歩いていると、森の方から小さな泣き声が出た。ライカは声の主を探した。

森の手前にある半ダールほどの高さの岩の上に、猫<sup>ミャオ</sup>がいた。

「うわ、見て、シルヴァン。あれ多分猫よ、猫。わたし初めて見たわ」

彼女は黒猫にそっと近づいたが、猫は逃げずに尻尾をくねくねと動かしていた。猫が欠伸をするとライカはビクツとしたが、おずおずと手を伸ばしその猫に触れた。

「や、すごく気持ちいいわ。シルヴァンも触ってみたら」

彼女は大はしゃぎして、猫の髭を引っ張ったり、尾を掴んだり、肉球を押して遊んでいた。

シルヴァンは側でその姿を見守っていた。

（くすぐったい）

ライカははっとして手を止めた。また《あれ》が聞こえた。この

猫からはつきりと。

その衝撃に追い討ちをかけるように、

「今くすぐったいって言ったのは君かい？」

シルヴァンはライカの背中に訊ねた。

またもライカは驚いて振り向いた。

今度はシルヴァンにも聞こえたんだ。

「いえ、何にも言っていないわ」

「あれ………そうか。空耳か」

シルヴァンは頭をひねった。

「いえ、シルヴァン、わたしにもくすぐったいってのは聞こえたわ。おそらくそう言ったのはこの子よ」

ライカは猫を脇から抱いてシルヴァンに突き出した。

「くすぐったいって言ったのはお前でしょ？」

ライカがそう問うと、だらしなく彼女の手からぶら下がった猫は

「ニャー」

と鳴いた。

シルヴァンは首をかしげた。

「本当にこの子かい？」

（おいらだよ）

ふたりははつきりと猫が返事をしたと確信した。頭に響く声の主は確かに猫の方から聞こえたのだ。

「うわ、すごいわ。この猫、わたし達と話ができるのね」

「他の人にもこの子の声は聞こえるのかな？」

とふたりが論議していると、

（あんだ達だけさ。おいらがしゃべってるのを聞けるのは）

と猫の方から返事があつた。猫の声が頭の中に響く時、猫の口もパクパクと動いていた。

「すごいわね。黒猫がしゃべれるなんて」

「面白いな」

「そうだ、この子を飼いましょう。そしたらなんでわたしとシルヴァンが会話できるのか解るかもしれないし。餌ぐらいだったらなんとかなるわ」

（おいらひとりでも大丈夫だい）

猫は拒否し、もがいた。

しかし、ライカの情熱は収まらなかった。

「いいえ、絶対飼うわ。そうだ、名前を付けましょう。そうね、なにがいいかしら……。猫<sup>ミヤオ</sup>……。ミヤオ……。そうだ、マオってのはどう？ いい名前じゃない。決めた、お前は今日からマオよ。いいわね、マオ」

もし猫に不満を表現する顔があるんだったら、この顔だなとシルヴァンは思った。

猫は不満も頭に唸っていた。付けられた名前が不満だったのだらう。

（もつといい名前はなかったのか。それに、おいらにはちゃんとした名前があるんだぞ）

と愚痴をこぼした。

名付け親は浮かれていたせいか、猫が突然暴れだすと放してしまった。

猫は軽やかに着地するとシルヴァンの肩にジャンプして見事に乗った。

「ニャー」

「んもう、戻りなさい。餌あげないわよ」

「ニャー！」

まるで抗議しているようだった。

シルヴァンは猫が乗った方の腕を伸ばしてライカに向けた。

「戻った方がいいよ」

猫はシルヴァンを残念そうに振り向いて、すたすたと腕を歩いて飛び降り、ライカの足元に行き着いた。

「よし、後でご褒美よ」

また猫は不満そうに唸ったが、ライカが歩き出したのを見てそれに付いて行った。

大広場に着くと、そこは人ばかりで前が見えなかった。

ライカは見える場所を探し、噴水の階段にスペースを見つけた。階段の一番上からは大広場中を見渡せ、目当てのものもすぐに発見できた。

布を被せられた大きな直方体状のシルエットがあつた。距離を開けてそれを取り囲むように人は集まり、シルエットの周りには数人の男達がいた。一座の者だろう。

しばらくするとひとりの太った男が前に進み出た。

「皆さん、ようこそ来ていただきました。我々は国から国を歩き回っては妖魔を皆様に見せて行く旅芸人の一座です。

帝国首都ガイズにて畏れ多くも皇帝陛下に謁見を賜り、本日はこのような機会を設けさせて頂くことを許可されました。

皆様にもぜひ素晴らしい商品を見ていただきたいと思います。もし、ご満足であれば御捻りを賜りたいと思います。よろしくどうぞ」

と挨拶すると、疎らな拍手がした。

シルヴァンは『商品』という単語を聞いて顔を歪めた。

「さて、それではご覧に入れましょう。ヴァリノイア戦役の際、ガイザード軍が捕らえた妖魔です。きっと驚かれること間違いなし。

まさに仰天ものです」

客は「いいから早く見せろ」と言わんばかりに期待し、興奮していた。

男は満足そうに頷いた。

「では、ご覧ください！」

他の男達が布を引っ張ると鉄格子の檻が現れた。  
その檻の中にいたのは



## 九話 邂逅こそは縁成りき（二）

檻の中にいたものは

衰弱しきつた男だった。引き締まった体は無残にも竄れ、肋骨が浮き出ていた。

いや、だが違う。

上半身は確かに人間の男のものだった。だが、<sup>へそ</sup>臍から下は馬であつた。

「いかがでしょう。これがかの有名なケンタウロスでございます」

そう、ケンタウロス　人頭馬身の存在だった。

「ケンタウロスは上半身は人間、下半身は馬であります。また、牡には頭に角が生えておりまして、このように曲がった角があります」

男　飼育係兼司会は手に持った鞭でケンタウロスを打った。彼の体は鞭の痕でいっぱいだった。ただでさえ痣や内出血で痛んでいる肌から黒い血が流れ出た。肌はもう健康的な色を保たず、部分的にどす黒くなっていたり紫色に変色していた。

「おい、立て！　このクズめ！」

男はケンタウロスを罵ったが、ケンタウロスはピクリともしなかった。

しだいに、見物人の中から「死んでるんじゃないか？」という疑問の声があがってきた。

男は軽く舌打ちし、

「おい、起き上がれ！」

と顔を鞭打った。

すると、横になっていた人頭馬身はゆっくりと眼を開いた。そこにいる誰もがハツとした。

ケンタウロスは上半身を起こし、自分の置かれてる状況を理解しようとして周りを見渡した。驚嘆の声と、初めて見た妖魔に恐怖した子供の泣き声交ざる。

男はケンタウロスが起きるとビクつきながら彼の近くの床を叩いた。

「このうすのろめ！ さつさと起き上がれ！」

ケンタウロスは緩慢な動きで立ち上がった。その高さは大の大人よりも頭二つほど高く、頭に生えた二本の角は畏怖の象徴でもあった。

「お客様にあいさつするんだ！」

男は命令した。

しかし、ケンタウロスは何も耳に入らなかったように彼を無視した。

飼育係の男は体を震わせ、再度命令したがまたも拒否された。怒った男は鞭をケンタウロスの首目掛け振った。鞭はケンタウロスの首に巻き付き、彼は苦悶の表情を浮かべた。

男は苦しめるように鞭を引っ張り、ケンタウロスは抵抗するようには鞭を掴んで解こうとした。

シルヴァンは顔を歪め、ライカもハラハラしながら成り行きを見守っていた。

ふいに、マオ 猫はシルヴァンの肩に飛び乗り、檻の方を見た。

彼 猫は一瞬固まり いきなり体中の毛を逆立て、「ニャー！」と咆えた。

暴れだし、檻の方に向かおうとする猫をシルヴァンは必死で止めた。もかく猫の爪は容赦なく彼の手を傷付け、血を流した。猫は我を忘れていたようだった。

ライカも抑えようと手伝ったが、シルヴァンは彼女が傷付くのを危惧して制した。

一方、檻の方ではケンタウロスが鞭を解いた。

飼育係は解かれた鞭を再び振った が、ケンタウロスは振り下ろされる鞭を片腕で掴んだ。鞭の引っ張り合いが始まった。

そして、すぐにそれは起きた。

誰もがケンタウロスに生じた変化を目撃した。暴れていたマオも暴れるのを止めた。

彼の体は見る見るうちに変わりつつあった。腕の筋肉は盛り上がり、上半身が膨れ上がり、顔付きはまさに妖魔 獣化しつつあった。眼は怒りで赤くなり、角は太く伸び、二本の牙は口から出ていた。先程よりも体が一回り大きくなったような錯覚を覚えた 実際大きくなっているのかもしれない。

客は後退<sup>さし</sup>った。

ライカも驚愕しながら、

「ねえ、シルヴァン もしかしてあれって………」

「ああ、おそらく、『妖力解放』だ」

彼らの視線の先にある妖魔は、さっきとはまるで別人のようだった。彼は掴んだ鞭を引っ張り、男を引き寄せた。

「ヒイッ！」

男は情けない悲鳴をあげて鞭を放した。それが九死に一生を得ることとなった。

標的を捕まえられなかったケンタウロスは鉄格子から手を出し、男を捕まえようと暴れた。ケンタウロスは鉄格子を掴み、こじ開けようとした。徐々に、二本の鉄棒の間隔が開いていった。

固まっていた旅芸人達は我に返り、手に持っていた鞭や棍棒でいっせいにケンタウロスを叩いた。

弱っていたケンタウロスは膝をつき、気を失って床に倒れた。すると、みるみるうちに体付きが変化前に戻っていった。

客は啞然としていた。

倒れていた男はよろよろと立ち上がり、そとケンタウロスに近づき、機を失っているのを確認してこれみよがしに彼の体を蹴った。腹いせが終わると、男は客を振り向いて

「いかがだったでしょうか、今回の妖魔は？ 皆様のお気に召されればよろしいのですが。もし満足いただけたら、御捻りの方をお願いいたします」

と言った。

見物客は静まり返っており、そろそろと帰っていく人が見えた。金の集まりのほうも捗捗しくなく、ほんの数人しか硬貨を投げなかった。

旅芸人達は苦い顔をしたが、仕方が無いような表情だった。彼らにとつても『妖力解放』は想定外の出来事だったらしい。

客が少なくなると旅芸人達は帰り支度を始めた。

シルヴァンとライカは残っていたが、猫が消えているのに気が付いた。周りを探したが見当たらず、仕方なく諦めた。

ふたりも暗い表情で帰途についたが、シルヴァンだけは考えに耽っていた。

夜、勤務でなかったシルヴァンは兵舎を出てライカのいる宿に向かった。

彼女は部屋にひとりきりで、都合が良かった。

「どうしたの、シルヴァン？」

「付いて来てほしい」

「どこまで？」

「あの一座が泊まっている所まで」

「え、もしかして」

「そう。なんとしてでもあのケンタウロスを助け出す」

「無茶よ。多分警備されてるし、ばれたら危険よ」

「大丈夫。その場合の策は考えてある」

「でも」

「頼む、今は君が必要なんだ」

「わかったわ」

彼の真摯な願いに負け、ライカはしぶしぶ了解した。自分がどこでどう役に立つかは解らなかったが。

バヤードの空き地にその一座の天幕はあった。十数個ある天幕の

うち明かりがあつたのは二つだけだった。

ふたりは音もなく天幕の密集地に近づいた。

シルヴァンは明かりのついてない天幕の中に忍び込み、中を確認した。ライカは見つからないようにおどおどと周りを警戒していた。最初の二、三個は目当てのものがなく、代わりに奇妙な動物がいた。だが、シルヴァンにはその奇妙な動物と妖魔の区別がつかなかった。妖魔とは『人間に近い知能を持つ人外の生物で、特殊な能力を有する』と定義されている。特殊な能力の代表例が『妖力解放』または『妖力発動』と称されるものだ。故に、その動物達が例え妖魔だったとしても、彼がその能力と知能の有無を確かめねばならなかった。しかしそんな時間はない。

彼は別の天幕をくまなく探し、ついに見つけた。大きな天幕の中には鉄製の檻が置いてあるだけで、その檻の中にケンタウロスが倒れていた。

ふたりはそつと忍び込み、シルヴァンは蠟燭を取り出して火をつけた。闇の中に浮かび上がったのは、体中血だらけの人頭馬身と一匹の黒猫だった。血腥なまぐささにふたりは顔を顰めた。あの後、暴行を加えられたのだろう。

ケンタウロスは息も絶え絶えだった。今、一つの命が失われようとしていた時だった。その側に立つ黒猫は、宛さながらら命の灯火が消えることを告げる死神のようであった。

檻の側に彼らは膝をつき、呼びかけた。が、反応はない。

シルヴァンは鉄格子の間から手を伸ばし、体を揺すった。しばらくしてようやく眼を開けたケンタウロスだったが、眼は何も映していないようだった。なんとか彼の気を引こうと何度も呼びかけ、揺すったが駄目だった。

諦めかけていたその時、ケンタウロスの腕が動いた。その腕は弱々しい力だったがシルヴァンの腕を掴んだ。

## 九話 邂逅こそは縁成りき（二）（後書き）

### 解説

・妖力解放（発動）・・・妖魔が用いる特殊な能力。己に秘められた力を一時的に解き放つことで強力な力を発揮する。妖魔によってその能力は様々。

## 一〇話 邂逅こそは縁成りき（三）

シルヴァンはハツとし、相手の顔を見つめた。ケンタウロスの眼はまっすぐ彼の顔を捉えていた。焦点も合っているらしい。そして、小さくその唇が動いた。

彼はその動きを確認すると激しく振り向いた。

「ライカ！ 君の出番だ！」

「え、何をすればいいの？」

「彼が何を言ってるのか教えてくれ」

「え？」

ライカは驚いた。まさかそんな質問をされるとは思ってもみなかったのだ。

「わたしそんなことできないわ」

「いや、君ならできるはずだ」

「できないわ」

「できるさ。ケンタウロスは人語を解するから、聞き取ろうと思えば僕にもできないはないと思うが、猫の声も馬の声も聞こえたのは君だけだ。それには何か理由と秘密があるはずだ。僕にはできない。君の方が彼らの心をよく聞けるはず。やってみてくれ」



「うん」

ライカは頷き、シルヴァンの側にしゃがんだ。彼女はケンタウロスに眼を凝らし、耳を澄ませた。ふと彼女は瞼を上げ、手を伸ばしてケンタウロスの手を取った。

「わたしは　あなたを　知っている・・・・・・・・どこかで　見た記憶が」

ライカの口を使って別の誰かがしゃべっているような口調だったが、声音そのものは彼女のものだった。

シルヴァンは驚いた。彼はケンタウロスにあったことなど記憶にない。いや、あるとすれば三年前以前　彼の記憶から欠如している部分の頃のことだ。彼は好奇心を抑えきれず、先を促した。

「いや・・・・・・・・あなたに似たような　人だったかもしれない　わたしは・・・・・・・・あなたに会ったことがない　かもしれない　だが・・・・・・・・確か　見たことがある　その青い瞳　それはあの人の・・・・・・・・似ている」

彼女がそう言い続けている間にもケンタウロスの口は僅かに動いていた。ほんの僅かだがケンタウロスの口から言葉が洩れているような気がする。だが、シルヴァンにはわけの解らない言語だった。

「それは誰だ？」

そう問うようにシルヴァンはライカに言った。

「それは誰？」

彼女は半ば正気を失っているようにも見える。そう言ったのも機械的な動作だった。

「『 あああ 頭がおかしくなりそうだ 何もわからない  
記憶が………飛ぶ あああああ わからない 助  
けて………』」

「ゲット・ア・ライフ  
しっかりしろ！」

シルヴァンは叫んだ。

「教えてくれ、僕、いや、その僕に似た人とは誰だ？」

ライカは唾を飲み込んだ。

「『 それは 』」

と、そこまで言ったところでケンタウロスは口から血を吐いた。

「おい、大丈夫か！」

ケンタウロスは大量の血を流しながらも、最後の抵抗を試みるかのように起き上がろうとした。しかしそこで彼は力尽き、動かなくなった。手は力なくライカの両手から滑り落ちた。

ふたりとも押し黙ってしまった。

猫はただケンタウロスの遺体に眼を注ぐのみだった。しばらくして彼は静かに天幕から去った。あとに残ったのはシルヴァンとライカだけだった。

シルヴァンはケンタウロスの臉をそつと閉じ、うなだれた。  
ふたりが檻の外で佇んでいると天幕の外で人が歩く音がし、灯り

が近づいてきた。

「何者だ！ 盗人か！？」

いきなり眩しい光を浴びせられてライカは怯んだ。

シルヴァンは動じず、無機質な視線を音源に送った。逆にたじろいだのは彼の顔を見た男達だった。一見して無表情に見えるが、彼の心の動きを読み取ったからか。気を取り直して旅芸人らしき男は問い質した。

「答えろ！ 何者だ！」

その言葉を聞いてシルヴァンは立ち上がった。男達が後退ったのは、彼の腰にある一刀を見たためか、はたまたその異様な雰囲気を感じ取ったためか。

「このケンタウロスが欲しい」

旅芸人達は一瞬何を言われたのかわからなかったようにポカンとし、顔を見合わせた。

「いくらだ？」

「なんでこんな死に損いが欲しいんだ？」

男は唾を飲み込み、言った。だがどうやら言葉選びを間違えたようだ。

その言葉はシルヴァンの逆鱗に触れた。彼は怒りを抑えるために全神経を集中させなくてはならなかった。ライカですら初めて見たシルヴァンの全身から溢れる怒りに満ちた黒いオーラ。数年一緒に

暮らしているが、彼女が初めて彼に恐怖した瞬間だった。

一座の男どもは全身冷や汗をかいていた。

「知りたいか？」

シルヴァンは訊いただけだったが、男達を恐怖させるにはそれだけで十分だった。

「いえ、結構です。そんなにこいつが欲しいなら売りましょう。一万ルーアでは？」

「このケンタウロスはもう既に死んでいる。確認してみるがいい」

その言葉には何か強制させるものがあつた。男達の中の一人がおずおずと進み出、檻の鍵を取り出して錠をはずし、体を調べた。

「た、確かに死んでいる。痛めつけ過ぎたか」

またもシルヴァンの眉が上がる。

「で、では、な、七千？」

シルヴァンはジロリと男を冷たく見下ろした。男は慌てて訂正した。

「こ、五千？」

まだその視線は男に向けられていた。

「に、二千五百？」

男ははやくその視線から逃れたかった。寿命が縮まる思いだった。そのためには値を下げるしかない。

「せ、千八百？」

「千だ」

旅芸人達は驚き呆れた。

「だ、旦那。そりゃあんまりだ。ケンタウロスは生きたまま取引されれば一万は下らないし、死んでも需要はあるから六千、七千は妥当なところだろう。千ってのはナメすぎてやしないか？」

入口にかたまっている中の大柄の男が答えたが、すぐに後悔することとなった。

シルヴァンはゆっくりとその太った男の方を見た。男は自分に眼を向けられて尻込みした。シルヴァンは柄に手を置いた。

「聞こえなかったか？」

「い、いや」

「千だ」

彼は男がまだしゃべろうとしたのを遮った。一座の男どもはこれ以上逆らうと痛い目を見ることを察知した。熟練した戦闘士でなくてもわかる。体から漲る殺気は、いつ切り込まれてもおかしくない。

そして不思議なことに、彼らは揃いも揃って（死ぬくらいならま

だマシだ」と思ったのである。彼と戦えばそれ以上に恐ろしい目にあう　そう本能的に感じ取った。

「わ、わかりました。千ルーマでお譲りします」

代表らしき男がそう言うと、シルヴァンは懷から銀貨を十枚取り出しその男の足元に投げた。

「運ぶ物も用意しろ」

男達は急いでその場を去り、荷台車を用意した。ケンタウロスの体はとても重かったが、シルヴァンは辛い顔をしながらもライカと協力して荷台に遺体を乗せた。運ぶ準備ができると、それを見ていた男達に言った。

「バヤードにいる帝国軍に通報しても無駄だ。僕はウェイブラス騎士団員だ」

男達は頷いた。もし通報したことがわかれば殺されるだろう。そんな気がした。

「忠告しておく。僕の前に二度と顔を見せるな。でなければ殺す。また同じようなことをしてるのが分かれば、殺す。わかったら消えろ」

男達は最後の言葉を聞く前に一目散に逃げ出した。

シルヴァンはバヤード市内の墓所に向かっていた。道中、彼の隣を歩くライカは何を話せばいいのか分からず、黙っていた。色々なことが起こった。初めて彼女がシルヴァンに恐怖を覚えた日で

もある。しかし、今、彼の背中はどこか哀愁が漂っていた。彼女は慰めたい気分に駆られたが、その術を知らなかった。いや、知らない方がよかったかもしれない。少なくともシルヴァンは自分一人の世界に引きこもっていたかった。

墓所に着くと管理者のいる建物に赴き、管理人と交渉した。夜遅くに、しかも妖魔の遺体を焼くことに難色を示していたが、金を見せると表情を一変させて了承した。

外で火葬の準備をしている時、黒猫がやってきた。口にはラベンダーの花が咥えられていた。組み立てられた木の上に安置されているケンタウロスに一瞥を投げ、

「これを」

と言つてシルヴァンに花を渡した。無論実際の会話ではなくテレパシーだった。シルヴァンはそれをケンタウロスの横に添えた。

夜、燃え盛る炎の上、白煙が舞った。煙は天に還る魂の如く夜空に昇って行った。星々は優しくその葬送を見守っていた。

一〇話 邂逅こそは縁成りき(三)(後書き)

用語解説

・ルーア・・・お金の単位。ルーアは約二百円ほどの価値。銅貨一枚⇨ルーア、銀貨一枚⇨百ルーア、金貨一枚⇨五千ルーア。



## 一話 アリオンの憂い

石造りの都　ガイザード帝国首都ガイズ。

帝国発足初期に召集された世界最高峰の建築士達が己の技の全てを出して作り出したと言われる帝国の中枢　その中心にそれはある。

ダレアース宮廷　。白、灰、黒の三色を基調とされ、建物の大部分が大理石でできている壮大な造りの宮廷。その大きさ、美しさ、精巧さは世界最高とまで褒め称えられる。

そのさらに中心部　将の間と呼ばれる一室　帝国の最高幹部が集まり、軍議の場を設ける場所で物語は進む。

「アリオン殿、そちらの調子はどうですか？」

「調子、とは？」

質問に応えた男　白に近い金髪、高い鼻、引き締まった顎、端正な顔立ちをした男　彼がウェイブラス騎士団將軍にして最高司令官、アリオン・ハンサーネスだった。

彼は将の間に向かっていた。

「決まっておられるでしょう。剣闘技大会のことですよ。もう参加者は決められたのですか？」

そのアリオンに質問した男　彼も将の間へ通じる回廊を歩いていた。

「いや、まだですよ。この会議が終わった後にバヤードにいるマル

スヘルム准将の所へ、他の部隊の候補者を従えて行く予定です。おそらくそこでマルスヘルムの推薦する人間　　いたらの話ですがも交えて最終的に決定するつもりです」

「そうですか。なかなか大変ですねえ」

「お互い様ですよ。そっちの方はどうなんです？　いい人物は見つかりましたか、ジェイス・ランバルディーン殿？」

アリオンにそう呼ばれた男　ジェイスは　第七の将　だった。七人いる将の中で彼が最年少だった。そして、その出立ちは他に見る戦士とは少し違った。

彼は数年前、剣闘技大会で優勝した時、当時の皇帝に魔法鎧の精製を依頼した。優勝者が武器ではなく防具系の魔法戦闘具を要求するのは実に約百年ぶりだった。

彼は鮮やかな、海のような全身青色の鎧を着用していた。他の魔法戦闘具所持者は概その武器の大きさ、形状のため通常時は邪魔になっってしまうのに比べ、彼の魔法鎧は常時装備していても日常の動作に差し支えがない。また、その鎧が彼のトレードマークともなっていた。

鎧はその頑丈さだけでなく、造形美も優れたものだった。無論、魔法発動時にはなんらかの絶大な効果を発揮する。彼は戦場で文字通り何度も無傷で帰還し、その功績と強さを認められ将の一人に抜擢された。

二人は赤絨毯を歩き続けた。

「ところで、あの噂、お聞きになりましたか？」

「噂、ですか。初耳です。どのような？」

「わたしも確かめた訳ではないので確証はないのですが、なんと、剣闘技大会始まって以来、初めて女性に参加するらしいんです」

アリオンは驚き、足を止めた。

「それは本当ですか？ もしそれが本当ならば良くも悪くも問題ですな」

「全くです。皇帝陛下がなんとおっしゃられるか」

「わたしはそれよりも上の将の者達の方が気になりますね。陛下は即位以来あのような感じの方になってしまわれたし、おそらく容認すると思いますよ」

「そうですか。それにしても一体どこの騎士団でしょう」

「さあ。まったく見当が付きませんね。なにしろ女性の参加は禁止しているわけではないが、もともと女性が参加すると思ってこの大会を始めた訳でもないのでしょうか？」

「まさしく。男性のみの参加を想定して規約も規則も決めたわけですから。いまさら変えるわけにもいかんでしょう」

「クインランと陛下、そして《アイツ》次第でしょうな」

アリオンは最後の言葉を嫌な顔をしながら言った。それに同意するようにジェイスも深く頷いた。

彼らはそう話しながら、将の間の大扉の前に着いた。番兵がふたりの到着を告げ、扉を開けた。

部屋に入ると、横五メーラ、縦十五メーラは優に越える豪華な黒

大理石で作られた長机があった。長机の右側に四個、左側に三個椅子があり、上から見るとギザギザになるように配置されていた。左側は最も上座側、右側は上座側から二番目の席に人が座っていた。

「おお、遅かったじゃねえか、アリオン。それにジェイスも」

埋まっている席の中で最も上座に座する男は言った。

「お久しぶりです、ハイヴアーン殿、クインラン殿」

「ご無沙汰しております、ハイヴアーン將軍、クインラン將軍」

アリオンとジェイスは挨拶した。

「やあ、遅かったじゃないか、アリオン將軍、ジェイス將軍。君達が最後だよ」

もう一人、席に着いていた男は言った。

「申し訳ありません。ちょっと仕事が長引きまして」

「気にすることはない。まだ陛下は来られていないことだしな」

アリオンは左側の末席に、ジェイスは右側の末席に着席した。

將の間の席には各騎士団の將軍しか座することを許されていない。

たとえ代理の者であってもだ。故に、空席の後ろには各騎士団の代理人 副將や准將クラスの者だろう が直立していた。空いているのは第一、第四、第五の將の席だった。

「おや、バラン殿はご不在ですか？ パラスラ騎士団はガイズに駐

屯していると聞きましたが」

アリオンは訊いた。

「そうですが、 balan 將軍には最近大変なことが起きましたからね。仕方が無いでしょう」

アリオンはその原因を思い出して軽はずみな質問をした自分を心の中で責めた。

「そうでしたね。軽率な質問をして申し訳ない」

第三の將 の席にすわる男 目は細く、額に赤い宝石を付け、長髪を後ろで束ねて編んでいる典型的な東方系の男 は手を振った。

そのやりとりを 第二の將 の席に座る男は笑いながら見ていた。普通の人が見れば酷薄な笑みだと思いかもしれないが、アリオンは相変わらずだなと思った。

部屋の高い所にはガラスが張られており、青空の光が差し込んでいた。

「ギーラン・ダレス皇帝陛下の御出座！」

張り声と共にラツパの音が巨大な部屋に響き渡る。一斉に座っていた將軍達も起立し、上座を向いた。

部屋に現れたのはまだ二十歳になるならずの青年だった。身につけているのは金の冠、金の刺繍が入った厚地の紫のマント、銀の鎧だった。金では手に入らない物ばかりを身につけ、そのどれもが略式のものだった。

それに従うようにマントの裾を持つ小姓、その後ろに控えている

小姓が数人入室してきた。

だが、その中で一際目立った存在　若者のすぐ横を歩く不気味な影　黒ローブを着け、いつも頭をフードで隠している男　魔術師　が現れた。

先に部屋に入っていた男達は頭を下げた。

若者は彼らのそんな行動を目に入れようとせず、上座に着席した。その少し後ろに奇妙な人影は立っていた。

「よいぞ」

と若者の口から発せられると、頭を垂れていた者達は顔を上げ、着席した。

「皆の者ご苦労。このような忙しい時期に集まってくれて重畳だ。

今日はヴァリノイア遠征部隊及び北方大陸の妖魔からの守備報告、剣闘技大会の開催にあたる中間報告を主に話し合う」

「はっ」

「まずヴァリノイア制圧部隊の報告だ」

「はっ」

第四の将の席の後ろに立つ男は返事をした。

「第四の将　リマニウス・ルードアント將軍率いるクルバルティス騎士団は、依然北方大陸の妖魔とヴァリノイア軍に挟まれる形で緊張状態が続いています。しかし、続くヴァリノイア軍の抵抗と妖魔の侵攻に騎士団は疲労しており、会戦当初ヴァリノイア北部の約七割を占拠していた領土は約三割になるまで奪い返されてしまい

「

「だらしねーなあ、オイ！」

報告の途中に割り込んだのは 第二の将 ハイヴァーンだった。

「さすがクルバルティス騎士団だぜ。あっさりとせっかく奪った領土を奪い返されるとはよ。情けねえなあ。それでもガイザード帝国の第四騎士団かよ？ 俺の騎士団がやればよかったな」

長髪を後ろで縛り、細く白い顔立ちをしているハイヴァーンは顔を歪ませ、冷酷な笑みを口元に浮かべた。顔付きが端整であるだけに、皮肉に満ちたその表情は醜く残酷だった。

「まあまあ、ハイヴァーン、そう言うな。彼らも辛いんだよ」

と笑いながら相槌を打ったのはクインランだった。

アリオンはそのやり取りを嫌そうに見ていた。帝国内でハイヴァーン、クインランの両名とクルバルティス騎士団の確執を知らない者はいないのだ。

（蛇め）

アリオンは心の中でそう毒づいた。

リマニウスの代理の男は身を震わせ、拳を強く握ったが忍耐強く耐えた。

「よい、続ける」

皇帝は命じた。

「はつ。同じくヴァリノイア東部のバーナム森林地帯から攻めたクルバルティス騎士団ですが、さすがに首都ヴァルアに近いだけあって激しい抵抗にあい、森林地帯からの撤退を余儀なくされていきました。新しい戦力の投入か、もしくは東部からの攻撃は全面的に諦めて撤退することをリマニウス将軍は進言しておられます」

「情けねえ腰抜けどもだぜ。なにが第四騎士団だ」

「もうよい、ハイヴァーン。いらぬ雑言はよせ」

「しかし陛下、このままだとゆくゆくは制圧地域も奪い返されてしまいます」

口の悪いハイヴァーンだったが、さすがに皇帝にそう口を利けたものではなかった。

「仕方がない。もともと東部からの攻撃は抵抗と失敗を想定してのものだ」

「だから申し上げたでしょう、我々の騎士団を配属を」

皇帝に対してそれは無礼な物言いだだったが、ギーラン皇帝 若者は口元に笑いを浮かべた。

「そちの騎士団を遠征に行かせたらここの守りはどうする？ 守護の要がいなくなつてはどうにもならん」

「忝かたじけなきお言葉」



ハイヴァーンはいやに礼儀正しく頭を下げた。

「では、ヴァリノイア東部からの攻撃は中止だ。東部遠征にあたるクルバルティス騎士団は物資の供給を済ませた後、ヴァリノイアの制圧地域に回れ。そして、リマニウスには大会も近いからそろそろ必要なだけの騎士団を同行させて帰還しろと伝えておけ」

「はっ」

「なにか意見のある者はいるか」

何も応<sup>いら</sup>えはなかった。

「よし。次は妖魔討伐部隊だ」

「はっ。第五の将　フラウフェン將軍のトゥアドラン騎士団は依然妖魔と交戦中。しかし、最近は妖魔の攻撃が比較的弱まっており、膠着状態、もしくはこちらの優勢状態が続いております。ですが妖魔の逃げ足はやく、戦況が不利と見るやすぐさま北方へ逃げてしまうのでこちらも追いようがありません」

「なかなかしぶといな、北の妖魔どもめ」

ギーランは呟いた。

「だが、状況有利なら問題はない。このまま戦闘を続け殲滅させ、だが深追いするなと告げる。あと、フラウフェンにもしばらくしたら戻ってくるように伝えておけ」

「はっ」

「これで大体の軍事的な話し合いは終わったな。他に報告のある者はいるか」

「はい」

「クインランか。なんだ」

東方系の男は立ち上がった。

「私がしばらく前に巡回していたネサハル砂漠と帝国領の境目あたりにあるサンドル・フォースの妖術師<sup>ソーサラー</sup>のことでございます。いまだ魔術師の塔にてサンドル・フォース一帯にバリアを張っており、進入ができませんでした。帝国の科学研究所の連中が開発した爆薬を何度か試したのですが、すぐに修復されてしまいます。まだしばらくの間、サンドル・フォースの制圧は厳しいところかと」

「あの妖術師は何か言ってきたのか？」

ギランは腕組みしながら訊いた。

「いえ、まだこちらとはなんの接触<sup>コンタクト</sup>も取ってきておりません」

クインランがそう答えるとギーランは少し考え、

「それならこちらから必要以上に攻撃を仕掛けるのも無意味だろう。その件に関してもあまり深く追求しなくてもよい。サンドル・フォースの制圧は大会が終わった後にも本腰を入れて取り掛かるとしよう」

「了解しました」

クインランは頭を下げ、着席した。

「他にあるか？」

誰も答えない。

「では議題を来る剣闘技大会に変えるとする。クインラン、報告を」

またクインランは立ち上がって一礼した。

「剣闘技大会についての報告ですが、今のところ運営に関する支障、遅延はありません。会場の警備等についてもうまく進んでいます。残る作業といえばトーナメントの組み合わせの決定くらいです。ウェイブラス騎士団以外の騎士団のエントリーはもう決定しております。アリオン将軍、近いうちに出場者の報告をお願いします」

「わかりました」

アリオンは頷いた。

「以上で報告は終了です」

「クインラン将軍」

末席に座っていた男 ジェイスは手を上げた。

「おお、どうなされました、『<sup>ブリスン・ケージ</sup>界檻』のジェイス将軍？」

「噂に聞いたのですが、今回の大会に女性が参加するのですか？」

「もう知っていましたか。ええ、本当ですよ」

その回答を聞いた者は驚いた。ハイヴアーンは顔に形容しがたい笑みを浮かべていた。

「いいのですか？ 女性を神聖な大会に参加させても」

「私も考えましたが、最終的には陛下に了承を頂きました」

「陛下、女性を大会に参加させるのは危険ではありませんか？」

クインランに二つ名で呼ばれたジェイスは皇帝に訊ねた。

「その件について余も考えたが、近年の剣闘技大会の人気低迷を考えると喜ばしい事態だと判断した。より一層盛り上がるだろう。それに危険だとそちは言ったが、弱い女であれば参加しないだろう。大会は常に死と隣りあわせだ。おそらく男勝りの実力者だろうな。お前はと思う、アーバイン？」

ギランは後ろに控える不気味な影に訊いた。誰もが ハイヴア  
ーンやクインランですらもビクツとした。

影は僅かに身動じろぎし、口を開いた。

「まさしく、陛下のおっしゃられる通りかと」

それは深く、重く、人間が出すような声ではなかった。

「聞いての通りだ。アーバインもこう言っている。異見はないな？」

誰もが押し黙った。そのアーバインとかいう男が喋ってから場の雰囲気が冷たくなったが、ギーランだけはそれに比べると陽気にしゃべっていた。

「ちなみに、どこの騎士団から出場するんですか？」

それにはクインランが答えた。

「フラウフェン將軍のトゥアドラン騎士団ですよ」

人々の口から驚きの声が洩れた。  
だが、一人だけ高らかに笑っていた。

「ハッハッハッ！ さすがフロウのおっさんだぜ。面白いことを考えてくれる。伊達に年だけはとってねえな！」

その声の主は勿論ハイヴァーンだった。  
そして、クインランは笑いながら付け加えた。

「ちなみに、その女性はトゥアドラン騎士団の一番手として登録されています」

皆「えッ？」と困惑の表情を浮かべた。

「それは何かの間違いじゃないんですか、クインラン將軍？」

「いや、わたしもそう思って問い合わせたら間違いないと回答されましたよ」

ハイヴアーンはクツクツと笑っていた。

「流石だぜ。こんなに面白いことは久しぶりだ。今年の大会は楽しみだ。最近の大会はスリルに欠けてつまらなかったからな。フロウのおっさんに礼を言わなきゃな」

「余もそう思うぞ」

ギーラン・ダレスもそう言った。面白い見世物が見れるのを楽しみにしているような顔だった。

皇帝の言葉を聞いて、アリオンだけは物憂げに考え事をしていた。面倒なことになりそうだな。

## 年代記：木洩れ日の宮廷

「父上」

その少年は父親の背中に向かって言った。

「どうした、息子よ」

父親は振り向き、優しい笑みを子に投げかけた。

「父上、今日は一体何を教えてくれるんですか？」

息子は屈託のない顔で訊ねた。

父親は笑い、

「ついてくればわかる」

とだけ言い、マントを翻して再び歩き始めた。

息子は足早に歩く父に追いつこうと小走りした。

そこは回廊だった。その回廊には赤い絨毯が延々と敷かれ、両方の壁には彼らの先祖の肖像画が置かれていた。

父親は足を止め、肖像画を見渡した。

しばらくしてまた彼らは歩き出した。

階段を下り、また長い通路を通り、外へ出た。

中庭に出た。石畳で敷き詰められ、花壇があり、噴水があり、花や蝶が美しいまでにその空間を埋めていた。

父親は中央に進んだ。息子もそれに従う。

父親は足を止め、上を見上げた。

「息子よ、これが誰だかわかるか？」

上を見たまま問いかけた。

息子は父を見、《それ》を見た。

青銅でできた銅像。土台の上に聳え立ち三メーラを超える高さの偶像。兜と鎧を身に着け、右手に握られた剣は天を指していた。

「はい、父上。帝国の人間であれば誰でも知っています」

「言ってみよ」

息子は息を吸い、答えた。

「ガイザード帝国初代皇帝、ダレアース 我々の始祖であり、先祖であり、英雄であり、建国の父です」

父親は宮殿の上に掲げられた旗を指差した。

「息子よ、なぜ我らの国の旗があのようになっているかわかるか？」

「はい、父上」

「言ってみよ」

「伝承によれば約二千年前、オーシアン大陸全土を統合しようとした凶暴な妖魔の一団 其中最強だった ツィヘット・ドラゴン 双頭竜 ガイザーンの二首を我らの始祖ダレアースが ドラゴンベイン 竜殺しの大剣 で切り落とし、彼はその大地を双頭竜の名にちなんでガイザードと名づけ、ガイズの帝国を建国しました。

旗の赤は双頭竜の血の色、天を貫く大剣はドラゴンベイン、その



剣に首を巻く二首の竜はガイザーン　力の証です」

父親は頷いた。

しばらくして、父親は歩き出した。

彼らは宮廷の地下深くに向かっていた。

螺旋状の階段を下り、辿り着いたのは大きな扉だった。扉の前で番をしていた兵はその来訪者に気付くと敬礼し、錠をあけた。

「父上、ここはなんですか？　初めて来ました」

「宝物庫だ。ここにはガイザードの宝が眠っている」

番兵達は先に中に入り、部屋に明かりをつけた。蠟燭の赤い光が瞬く。

鎖や錠で嚴重に管理されている箱が埃まみれで所狭しと並び、たまには剣や楯、書物等が剥き出しになって置かれていた。それらは全て高価で、金では到底買えないような代物だった。

奥に進むと彼らの前に再び扉が現れたが、最初の扉よりは大きくなかった。番兵は錠をあけ、恭しく扉を開いた。

その扉の奥には切り出された石でできた大きな部屋があった。不思議なことに、その部屋に光の元はないのに白く明るかった。部屋の中心には台座があり　大剣があった。

親子は前に進み出、番兵に扉を閉めるよう言った。

そこは静かな空間だった。何もいない。部屋の床には埃一つ落ちていなかった。そして荘厳な雰囲気漂わせる。

彼らは台座に近づいた。

「父上、これは？」

息子は自分の背丈よりも大きいソードを見上げた。

「これがドラゴンベインだ」

父親は言った。

「これが……」

息子は驚いた。

伝説の武器が目のあるなんて

そのソードは刀身だけで二メートルは越え、幅も今まで見たことないほど太かった。飾り気のないソードは、戦闘のみに重きを置いた武器だと一瞬にして見る者を理解させた。

「皇帝家に伝わる、最大にして最高の宝だ」

父親は台座に乗り、ソードの柄に手を添え、力を込めて引き抜いた。

息子は父の姿に驚嘆した。

父は二、三度振ると台座にソードを戻した。

「お前もいつかは お前が皇帝になる時、この剣をわたしのよう  
に軽々と持ち上げられるようにならなくてはならん。それが王者の  
絶対条件だ」

息子は唾を飲み込んだ。

「皇帝に相応しくない者はこの大剣を台座から引き抜くことはでき  
ん。そして、国民の前でこのドラゴンベインを振ることができなけ  
れば皇帝になる資格は失われる」

息子は初めて皇帝になるための真の条件を聞いた。単にダレアースの血を引いてるだけでは駄目なのだ。

息子は父親の腕が何故あんなにも太く、強い力があるのかわかった。それだけの力がなければ皇帝にはなれないのだ。

父親は台座を下り、部屋を出た。息子はその後を追った。

息子は帰りの宝物庫で面白いものを見つけた。

「父上、これはなんですか？」

父親は振り向き、息子が手にしている物を見ると微笑んだ。

「それか。それは、古い友人から友情の証に貰った物だ」

息子は手に持った物　約五十センチの長さの綺麗な杖を見た。

「こんなに綺麗な杖は初めて見ました。魔法<sup>メイジ</sup>使いの使う杖とは全然違う」

「それはヴァリノイアで造りだされた物だ」

「ヴァリノイアですか」

「そう。我々が幼い頃、現ヴァリノイア国王イリニウス・ヴァリノイウスから友情の証として譲り受けたものだ」

息子はじっくりとその杖を観察した。不思議な杖だった。先端に埋め込まれた赤い水晶、所々光る硝子、茶色い木　不思議な組み合わせだった。とりあえず、彼の周りにはこんな奇形をした杖を所有する魔術師はいない。

杖に飽きると息子は杖を元の位置に置きなおした。  
彼らは宝物庫をあとにした。

彼らは宮殿の中枢にいた。先の小宮殿とは違い、なにもかもが大きかった。

彼らは謁見の間にいた。皇帝が将校達に顔を見せる場所だ。特別な時にしか使われない。

そこには歴代の皇帝、皇后、皇族の肖像画、銅像が並んでいた。

父親は一枚の肖像画の前で足を止めた。

「母上ですか」

息子は父に言った。

「教えてください。母はどんな人だったんです？」

父親はフツと笑った。

「お前の知っている通りだ。優しく、美しく、清らかでいて民の平安を祈る女だった。まさに理想の女性だった」

「どうして死んだのですか？」

息子は父親に訊いた。

「流行り病で亡くなったと聞きました。でも、信じられません」

父親は溜息をついた。  
ついに。

「そう、それは嘘だ。お前の母親は妖魔に受けた傷の影響で死んだ」

息子は愕然とした。

「特殊な妖魔だった。どの文献にも載っていない、小さく、素早く、空を飛ぶ妖魔だ。わたしはその妖魔をはじめて見た。そいつは白昼堂々、わたし達の目の前で彼女の心臓に毒の針を付き立てた。わたしは我を忘れてそれを叩き切った。

彼女は三日三晩苦しみ、だが安らかにこの世を去ったのだ」

「何故ですか、父上！？ それなのに何故父上は妖魔との共存を望むのですか！？」

息子は激昂して言った。

父親は息子の顔を見て諭すように言った。

「死ぬ間際ですら、お前の母がそう望んだからだ」

息子は黙った。

「彼女は妖魔が傷付くのも、人間が傷付くのも望まなかった。すべては平安と平穏、平和のため。彼女こそ、この国の帝王に相応しかった。わたしよりも。」

約二百年前、我々の国と妖魔の国　ヴァリノイアが戦争したのはまだ記憶に新しい。それ以降些細な衝突はあったが、概うまくやってきていた。それをここで崩すわけにはいかない。

息子よ、お前は誇り高い母の血を引く者だ。母の遺志を継ぐのだ。全てはお前自身の名誉のため。皇帝家のため。父のため、母のため。帝国のために」

自然と涙が頬を伝う。

「はい」

「二百年前の戦争後、当時の皇帝は帝国の繁栄のため、妖魔との共存を選択した。わたしもそれを望む。誰も傷付かず、誰もが幸せになるために。争いは争いしか生まん。

約四十年前、妖魔大戦が勃発した。ヴァリノイアと北方大陸の妖魔による大戦争だ。ヴァリノイアの妖魔と人間は、彼らの同族とも言える妖魔から身を挺してガイザードの民を守ってくれたのだ。我らはその恩を忘れるわけにはいかない」

「はい」

父親は息子の眼を見た。

妻に似ているな。優しさの中にある、強靱な意志。それは死ですら侵すことはできなかった

父親は息子の成長を目の当たりにして笑った。

「息子よ、お前に見せたいものがある。付いて来なさい」

「はい」

彼らは謁見の間を出ようと扉に近づいた。すると、扉が勝手に開いた。

彼らは足を止めると、扉の向こうから《それ》は現れた。

「何用だ、アーバイン。呼んだ覚えはないぞ」

父親の顔が曇る。

ローブを着た不気味な影は跪いた。

「とんだご無礼、お許しください、陛下。少々陛下の耳に入れておきたいことが」

「なんだ。早く申せ」

「はい。先日、帝国科学研究所にて開発を進めていた実験の報告に参りました」

「それなら後で聞こう。余は今忙しい」

「承知しました」

父親はその人影と話したくないかのように話を早々に切り上げ、扉に向かった。

「おお、ギーラン皇太子殿下、お初にお目にかかりますな。私、帝国に仕える魔術師のアーバインと申します。以後お見知りおきを」

通り過ぎようとした息子に、影は話しかけた。

息子は何か答えようとしたが、

「いくぞ、ギーラン」

と父に催促され、まだ何か言いたそうにしていたが父の跡を追った。

謁見の間から誰もいなくなると、そこには跪く影が残った。影は立ち上がり、顔を上げた。

そのフードの奥にある両眼は、怪しい紅に光っていた。

親子は回廊を歩いていた。

「ギーラン、あのアーバインという男には気をつける」

しばらくして、謁見の間が遠ざかると父は足を止めて息子に忠告した。

「あの男、どこか不気味だ。何か得体の知れないものを感じる」

「はい」

彼らはまた幾つもの回廊と階段を進んだ。

やがて、綺麗な扉の前に行き着いた。

父親は両手で扉を押し、進んだ。

そこは、外だった。

宮廷の屋上　最上階　。隔てるものが何ひとつない、静かで  
気持ちのよい空間。

夕暮れだった。風が気持ちよかった。

屋上には小さな塔があり、彼らはその塔を上った。

塔の一番上からは全方位を臨むことができた。

息子は感動した。初めてこんな高いところに来れたのだ。

父親は太陽の沈む方向　西を指差した。

「息子よ、あの方角にヴァリノイア　妖魔と人間が共存する、理想郷がある」

息子はその方角を見た。遙か先、緑と茶色の大地の向こうにはバ



―ナム森林地帯が地平線の先まで続いていた。

「あの森林を越えれば、『オーシ안의真珠』と呼ばれる都　ヴァリアがある。ヴァリノイアの首都だ。その先には砂の丘が広がり、海がある。

そして、ヴァリアにはお前の許婚もいる」

父親は息子を少しからかうつもりで言ったが、息子は雄大な景色に見とれていた。

「息子よ、周りを見るのだ」

息子は父に言われた通り、全方角を眺めた。今まで見たどの風景、景色よりも美しい大地が広がっていた。遠くには湖、山脈があった。豊かな大地はオレンジ色に染まっていた。

「お前も時期にこの国を統べることになる。この国の頂点に立つ者として」

息子は頷いた。

「　　今では帝国建国の伝説もただの伝承と化している。英雄達は忘れられ、皇帝家に流れるダレアースの血も薄れつつある。おそらく、民の中には伝説など全く信じていない者がいるだろう」

父親は急に悲しい顔をした。

「そんな　　」

「それが事実だ。残念だが。」

だが、息子よ、たとえそれが作り話であつたとしても、我々は信じて進まなくてはならない。民を導くことが帝王の義務だ。民なくして王はありえない。そして、正しい道を進めば必ず民は理解してくれる。それがどんなに困難で辛い道であっても。

帝国での妖魔との完全な共存は、わたしの代では無理かもしれない。まだ人々の中には妖魔に対する恐怖が植え込まれている。

しかし、お前ならばできる。わたしはそう思う」

「はい」

「お前こそ、この国にあのヴァリノイアのような理想の生態系を築けると信じている。」

息子よ、そう誓ってくれるか？」

「ダレアースの血にかけて」

息子は皇帝家の者が神聖な誓いをする時に用いる文句を唱えた。

「それでこそ我が息子だ。」

息子よ、わたしにもしものことがあれば、帝国を頼むぞ」

「はい、父上。必ずやこのギーラン・ダレス、誓いを守り通します」

息子は誇らしく言った。

父親もそんな息子を見て誇らしく思った。

妻よ、そなたの遺志は息子が引き継いだぞ。

父親は息子の方に手を乗せた。自分の想いを託すかのように今まさに、太陽は西の彼方に没しようとしていた。

## 一二話 麗しのヴァルア

自然と人間と妖魔が共存する都、ヴァルア。

古の時代よりそこ　オーシアン大陸西岸部の北西に位置する国  
ヴァリノイア　には妖魔が住み着いていた。

正式にヴァリノイアが妖魔と人が共存する国の建国を宣言した年  
を記念して、カナン暦が始まった。それは今から約千六百年以上も  
昔のことだった。

そしてその共存とは、ただ単に同じ地域に同じ思想を持って生活  
するだけではなかった。彼らは神聖な契り、誓いによって妖魔と人  
間の婚姻をしていた。妖魔の血は人間に、人間の血は妖魔に受け継  
がれ、今ではヴァリノイアの地に完全な妖魔の血や人間の血を有す  
る者はあまりいなかった。つまり、ほとんどの者が妖魔の血を受け  
継いでいるのだ。

ヴァルア宮殿　世界で最も美しいと言われる白大理で作られた  
宮殿　その中の一室でも物語は進む。

白大理石のテーブルの横には六つの椅子が置かれ、席を二つばか  
り空けていた。

「兄<sup>けい</sup>よ、東のガイザード軍は撤退したのですか？」

白髪で鼻が高く、白色肌の若い青年は隣に座る男に訊ねた。

「ああ、やつらはようやくバーナムの森から撤退した。美しい森が  
あいつらに蹂躪されて約三年、やっと森は解放された」

「そうですね。ですが森の被害は大きかったのでは？」

「確かに酷かった。木は無残に切られ、焼け野原になっていた箇所も少なくない。予想していたよりも酷かったな」

青年は悪態をついた。

「銀竜騎士団の方はどうだ、ウェイザー？ 《彼》の搜索の首尾はどうなっている？」

「正直はかばかしくありませんね。各国に潜入させている間諜からは良い報告がありません」

「そうか」

「搜索の件については主に赤竜騎士団が担当されていますから、あとで騎士団の誰かに訊いてみたらどうです？」

「そうしよう」

彼らはそこで一旦会話を止めた。

部屋は静かで、白石が明るく部屋を照らしていた。豪華な椅子に座っているのは三人の男と一人の女だった。

中でも目を引くのが女だった。髪は肩で切られ、唇を固く閉じ、顔は下を向いて動く気配がしなかった。しかし、印象的だったのは彼女が“青かった”からだ。髪、唇も、瞳の色も青だった。肌の色は健康そうだったが、着ている服すらも青を基調としていたのどこか病めいたものを感じさせた。

作戦会議室の扉の向こう側からガシャガシャと大きな音が近づいてきた。

扉を開けて登場したのは金の鎧を身に付けた金髪の大男だった。二メーラは軽く越えているはずだ。大きな音の正体は彼の歩く音と

それにつられてぶつかり合う鎧の音だった。

「遅れてすまない」

見かけとは裏腹に、口から出た声はまだ若い男のものだった。人間で言えばまだ二十代前半くらいだった。

そう、人間だったら。

明らかに彼を妖魔と然らしめるものがあつた。背中には獅子の尾、剥き出しの手足には獅子の指と鉤爪、そして顔には獅子の耳、牙があり、髪ですらも鬣を連想させる。<sup>たてがみ</sup>

「ご苦労様です、ディオンの將軍」

「ウェイザーか。久しぶりだな」

ディオンと呼ばれた男はドサツと無造作に席についた。

「ディオンの北の戦況はどうだい？」

ディオンの真向かいに座る黒髪の男は訊ねた。

「ふん、あんなやつらいたしたことはない。こつちがその気になれば象と蟻の戦いのようなもんだぜ。五十年前の妖魔大戦の方がよっぽど辛かったな」

「確かに。君らしい」

訊ねた男はフツと笑った。

「国王陛下の御出座です！」

彼らが話をして少々場の雰囲気緩和している時　彼らがあれこれと話している最中も青の女は口一つ利かず、どんな話題にも関心なくすましていた　彼らの王は入室してきた。

足早に現れ、身なりも鎧に簡素なマントだけを装着し、小姓を二人しか連れていないのを見ると本当に彼が一国の、妖魔の国の主なのかと疑うだろう。

席に座っていた者は全員起立した。

イリニウス・ヴァリノイウス　ヴァリノイアの王は席に近づき、  
「皆の者、ご苦労」

と言つて着席し、

「座ってくれ」

と促した。

起立していた男女は再び席に着いた。

イリニウスはさつと部屋にいるメンバーを見渡し、しばしの沈黙を経て切り出した。

「おそらく皆も知っているだろう。先日ネッサが帰還した。酷い状態だった。体の半身が凍傷にかかり、しばらくは集中的に治療に専念しなくてはならない。復帰できるのは相当後になる」

誰もが顔をしかめた。そして、その心の中で罵る相手は帝国軍。  
。青の女ですら顔には悲哀の相が見られた。

「ディオーン、北の戦況を詳しく報告してくれ」

「はい。と言っても俺が報告すべきことは皆ほとんど知ってると思う。一応言うのであれば、我々金獅子騎士団はヴァリノイア北部の六割は完全に奪還した。そしてまだ残りの四割を占拠するガイザードの奴らは北方の妖魔とも戦って疲労困憊している。今叩けばまだまだいけるだろうな。それくらいですよ」

「うむ。わかった。

マルティアス、東の状況も教えてくれ」

「はっ」

ウェイザーと話していた男は返事をした。そういえば、この男も鷹のように鋭い眼を持ち、鳥のような毛並みをしていた。彼も妖魔の一員だった。

「白隼騎士団はバーナムの森に潜伏していたガイザード軍に空より奇襲をしかけ、森の外まで掃討、撃退しました。奴らは森から出るとすぐさま帝国領に引き返す素振りを見せましたが、距離をとるとそこを拠点に野営をはじめました。まだ完全に諦めたのではないのです。でしょう。」

しかし、森の受けた被害は甚大です。奴らが野営するために伐採した木の数は数えきれず、野営跡地には木の燃えかすが残っています。伐採地は地面を晒し、踏み荒らされて荒地と化しています。しかしながらバーナムの森は生命力が強いですから、もとの美しさを取り戻すのに時間はかからないと思います」

イリニウスはそれを黙って聞いていて、ようやく口を開いた。

「ようやくバーナムの森は静寂を取り戻し、北の大地も我らの版図に戻りつつある。だが被害は甚大だ。失ったものが多すぎる」

「御意」

「魔法師団の魔術師<sup>ウィザード</sup>、妖術師<sup>ソーサラー</sup>、祈祷師<sup>バード</sup>達は未だに我々の結界<sup>バリア</sup>が消滅した原因を突き止められずにいる。

だが、もう少しで新たなバリアを張ることができるそうだ。そうだな、リーラ？」

「はい、陛下。魔法師団は目下新たなバリアの発動に全力を注いでいます。

そして報告があります。魔法師団は戦争が始まって以来帝国を護るように発生しているバリアの発生状況を確認することができました。正確には帝国と王国を隔てる壁のように発生しているようです。ただそれ以外のこと、つまり正確なバリアの成分、性質がまだわからずにいます。見た目が我々のものと全く違うものですから、迂闊に近づくのは得策とは言えません」

そう答えたのは先にディオオンに話しかけた青年だった。

イリニウスは肘を机に付き、顎を手の上に乗せて考えていた。

「ディオオン、北の大地では現状維持に努めてくれ。これ以上国土を失うわけにはいかないが、兵力を割くことも避けたい。あまり深追いしすぎてその間にヴァルアまで攻め込まれるのは避けたいのでな。マルティアス、君の騎士団も深追いはしないように。特に、帝国領付近は気をつける。敵方に突如として発生した不可思議なバリアはあまりにも危険だ」

イリニウスは命じた。

「了解」



「わかりました」

ディオーンとマルティアスはそれに応じた。

「ウェイザー、スパイの報告はどうだ？」

「あまり良い返事は期待できません。なにしろ、『あの人』の計画を全て知る人はご自身以外誰もいなかったのですから。そして当の本人は 星の夜 にどこかに行ってしまった。彼しか知らないところに いや、もしかしたらご自身も知らないところへ。知っているのは星々だけでしょう。『あの人』はそういう人ですよ」

「星の夜 か……彼はわたし達の目の前で夜空に消えたのだっただな」

「ま、それが『あいつ』らしいっちゃらしいんだがな」

ディオーンの一言が一気に張り詰めた空気を和ませた。

「だが、『彼』だったか？ その『彼』はもうそろそろしたら姿を現し始めるんだろ？」

「そう、計画に狂いがなければ『彼』はそろそろ現れる。そして、間違いがなければ『彼』はオーシアン大陸西岸側のどこかで赤竜騎士団の誰かに会うはずだ。その手筈は整っているか？」

王は質問した。

「はい。準備は万全です」

と答えたのは唯一の空席の後ろに控える、顔や体に刺青や化粧を施した女性だった。彼女が赤竜騎士団の暫定的な代表だった。

「《あの人》の指示通り、わたし達は《彼》がどこに現れても対処できるよう手を尽くしました。あとは時期を待つのみかと」

「うむ」

ディオンは訊ねた。

「《彼》の正体の目星は付いたのか？ それもやっぱり《あいつ》しか知らなかったのか？」

「我々が《あの人》より仰せつかったのは、我々の前に現れる人間に《あの人》の物を託せという伝言と、《彼》が現れるかもしれない時と場所くらいです」

「人間、か……妖魔ではなく……」

ディオンは上を向きながら呟いた。

「一体《彼》とは誰なんでしょうな」

「意外と、数年前から行方不明になっているバスティア公国大公家の長男だったりしてな」

「ありえないでしょう。エルディーン大公家の長男は放浪癖があつて、親もそれには迷惑していると聞きます。それに、《あの人》と大公家長男には何の接点もないはずでしょう？ それに、この時世

に放浪癖なんてのは自ら死を招く行為ですよ」

「だけど、《あの人》も旅は好きでしたからね。いつか、この世界中を旅してみたいと言っていましたよ」

ウェイザーは昔を思い出すように想いを馳せた。

青の女ですらも時を忘れて微笑んで想いを傾け、すぐに鋼鉄の仮面を被った。まるで、意志を出すのを拒み、<sup>おそ</sup>懼れるかのように。和んでいる時は終わり、彼らの眼差しは真剣なものに戻った。マルティアスは進言した。

「陛下、思ったのですが、このまま白隼騎士団をバーナムの森に置いておくのは危険ではないですか？ もしネッサ將軍がやられたような兵器を帝国側が再び持ってきたらひとたまりもありませんよ」

「わたしもそれが気がかりだ。まさか空を飛ぶネッサに攻撃を仕掛け、あれだけの被害を与えとは誰も予想はできなかった。しかし、あれ以降同じ兵器を使用してこないのを見ると、あの武器には生産性に問題があると見える。あれだけの威力を有するのには理由があるはずだからな。」

かの武器の破壊力は凄まじいが、ここで引いてはまたもやバーナムの森を失ってしまうことになる」

国王を含め、一同はどうすべきか考えていた、その時

「<sup>ケルベロス</sup>地獄の番犬 を招集しますか？」

と小さな、だがはつきりとした声がすると誰もがその声の源を振り向いた。

皆の視線の先にいたのは、青の女だった。

「黒豹騎士団をか？」

青の女は頷いた。

ディオンは賛成した。

「陛下、俺もその意見には賛同です。あいつらはケルベロスの恐ろしさを知ってるはずですからね」

部屋にいる將軍諸侯達は同意した。

「ヘイズ、他の二人は今どこにいる？」

「一人は砂漠に、一人はどこかに」

青の女はそう言い、口をつぐんだ。

「わかった。ヘイズ、黒豹騎士団をすぐに収集してくれ。そして、バーナムの警備にあたらせるのだ」

「御意」

「二人はいつ来る？」

「おそらく、早くても二月、三月は。それまでの間、私がバーナムに赴きます」

「將軍のお前がか？」

「はい」

その言葉を聞いてイリニウスは悩んだが、すぐに決断した。

「よし、ヘイズ、黒豹騎士団を招集してくれ。その間の警備はお前に任せる。頼んだぞ」

青の女は頭を下げ、席を立って退出した。

扉がバタンと閉まると、彼らは立ち上がった。

「それでは解散とする。皆休めれる時は体を休めるように。ディオ  
ン、マルティアス、君達も少しヴァルアでゆっくりしていったらど  
うだ？」

「そうですね。一日くらいゆっくりしていても許してくれるでし  
ょう」

「久しぶりに街にでも繰り出すか」

張り詰めた状況の中の、ほんのひと時の楽しそうな表情をみてイ  
リニウスは笑いながら退室した。

イリニウスが回廊を歩いていると別の通路から二つの人影が現れ  
た。

一人は女性だった。類稀な美貌をもつその女は背中まで伸びた栗  
毛色の髪を花飾りでとめ、王女に相応しい純白のドレスで身を包ん  
でいた。目鼻はすらつとしており、髪と同じ色をした瞳は大空のよ  
うに綺麗に澄んでいた。彼女の姿勢、仕草は細部に至るまで高貴な  
雰囲気漂わせていた。彼女の周りの空間すら輝くような錯覚を覚  
えさせる。

もう一人は少年　まだ十歳くらい　だった。彼は年に似合わず戦闘用の鎧を着用していた。母親に似た茶髪は美しく、その端正な顔と強固なる眼差しは意志の強さを示す。将来妖魔の国の主になるに相応しい人間になると、誰もが思うだろう。

「どうした、ヴェネッサ、イリウス？」

「父上、母上がお呼びですよ」

ヴァリノイアの真珠とまで謳われる娘は微笑した。天上の女神の如き微笑みだった。

「そうか。今すぐ向かおう」

「父上！」

「一体どうしたのだ、イリウス。王族たるものそう怒鳴ってはならん」

「父上、今日こそはこのイリウスに出陣を命じてください。ディオオン將軍とマルティアス將軍が帰還されたと聞き及びました。ぜひ、どちらかの部隊に配属させてください！　お願いです！」

まだ十歳になったばかりのヴァリノイア王太子はそう懇願した。イリニウスは笑い、息子の方に手を乗せた。

「何度も言ったが、まだ駄目だ。お前はわたし以上に優れた王になるだろうが、まだ早すぎる。それに十歳になったばかりだ。我々は次期国王を早々に失いたくはない。お前はまだ軍にとってお荷物にしかない。危険すぎる」

息子は溜息をついた。

「やはり駄目ですか」

「もうしばらくの辛抱だ。時期が来ればわたしはしっかりとお前にも出陣を命じる。お前は十歳にして策略にも、剣術にも優れている。他の少年達が今どうしているかと思うと、わたしはお前を誇りに思うぞ」

「そ、そうですね」

偉大な父親に褒められ、息子は顔を綻ばせた。

「勿論だ。お前こそ、次代ヴァリノイア国王に相応しい男だとわたしは確信している。だが、まだまだ学ばねばならんことが多い。さ、早く戦場に駆けつけたいのであれば急いで教師達の教えをマスターするのだ」

「はい！」

と言って彼は自室に向かって走り出した。

その様子を彼の姉と父はにこやかに見つめていた。

「ヴェネツサ。やはりもういいのか？」

「なにがですか？」

娘は母親譲りの美しい面を父親に向けた。

「いや、お前がもう気にしてなければいいが。ギーランのことだ」

「ああ、彼のことですか」

急にヴェネッサの顔は元気をなくした。

「もういいのです。彼のことはもう諦めました。

彼はとても優しくかったのに。何故、皇帝に即位した直後にヴァリノイアに戦争をしかけたのでしょうか。あれから三年の月日が経ちましたが、私はどうしても彼の仕業とは思えません」

「お前もそう思うか。わたしもだ。十数年前に彼を見た時、彼の中に偉大な何かを感じたのを覚えてる。それが何故、あんな風になっってしまったのか。

もともとはわたしと前ガイザード皇帝の間で約束したお前とギーランの婚約だが、お前達は互いに惹かれあったと思っていた。だが、ギーラン側はそれを一方的に破棄した」

「私もそう思っていました。父上達が決めた婚約ですが、わたしは彼に会った時しっかりと自ら進んで彼と婚約することを決めたのです。全てが偽りだったのでしょうか？」

「それを確かめるべく、我々は戦っている。

娘よ、わたしはヴァリノイアの始祖の名にかけて約束する。わたしは国民のため、人、妖魔のため、そしてお前の幸せのために、真実を暴くまで戦いを続ける。その気持ちは妖魔達も同じだ」

娘は微笑んだ。

「ありがとうございます。」



人と妖魔      いつの日か、共に幸せに来る日が来たらんことを「

ヴェネツサはそう呟き、下がった。

イリニウスはそれを見届けると、彼の代わりに政務に励む妻の  
ところへ向かった。

## 一三話 砂漠の薔薇は

サンドル・フォース、別名 デザート・ローズ 砂漠の薔薇 はガイザードの東、ネサハル砂漠の入口に位置する巨大なオアシスだった。砂だらけの空間に出現する緑溢れる山、澄んだ川。そこで生活する獣や怪鳥、そして人間達がいた。大半の人間は昔からそこに住む人々であったり、そこに移住することを許された人や、商人達だった。

オアシスの中心部には有名な 魔術師の塔 がある。その塔の主 昔はガイザード帝国に魔術師として仕え、後にヴァリノイアに赴いてそこで妖術と祈祷の業を学び、優れた魔術師、妖術師、ワイザード 祈祷師を輩出するヴァリノイアでもごく限られた者にしか許されない 導師 の称号を有する老人 は今を去ること三年前、ヴァリノイア戦役が勃発したのと同時期くらいに帝国軍から攻撃を受け、サンドル・フォース一帯を囲むバリアを発生させた。

その老人の名はアリューシャン・ムーンロッドといった。愛用の杖の名を二つ名に持つ高名な妖術師 スタッフ 光の魔術師 、砂漠の賢者 などと称される魔法使い メイジ であつた。魔術師時代、自分のウィザードとしての力に限界を感じ、ヴァリノイアにて妖術の業を極めた後はソーサラーを名乗った。元々ソーサラーとしての才能があつたアリューシャンは本格的に妖術を学び始めてからその才能を開花させた。

彼は光の魔法を用いていた。メイジは一つの系統の魔法しか使えず、必ず使う魔法の神を信奉しなくては魔法を用いることはできない。彼はその光の魔法を使ってバリアを発生させた。光の魔法 守護や癒しを得意とする魔法ならではの特殊な力だ。他の魔法ではバリアの発生は不可能なのだ。

ある日の夕方、アリューシャンは塔の最上階、彼の大きな私室にて空を眺めていた。部屋は半球型で、ゆっくりと回転していた。球

形の天井は部屋の半分で途切れ、外気と通じていた。なのでそこからはサンドル・フォース全体を見渡すことができる。その時は部屋から西の空を臨めた。夕暮れの陽の中、鳥は群を成して山の上を飛び、木々豊かな渓谷には綺麗な川が流れていた。

一方しっかりとした木の天井がある方には本棚が並び、どれもびっしりと書物に埋め尽くされていた。部屋の中には他にも宙に浮く球、地図、杖など、その道に通じる者が見れば涎を垂らす品々ばかりだった。

アリューシャンは部屋の壁のない方の淵近くに立っていた。

ドアがノックされ、「失礼します」という声がした。

扉を開けて入ってきたのはまだ若い男だった。見たこともない緑色の長い髪は額で左右に分けられ、紐で髪をとめていた。顔は不細工でも美しくもなく普通のそれであつたが、眼の奥に宿る知性は底知れない宇宙を感じさせる。彼の瞳は右が空色、左が虹色というこれまた不思議な組み合わせであつた。

彼は静かにアリューシャンに近づき、膝をついた。

「師よ」

アリューシャンはそちらを振り向くことなく

「我が弟子よ」

「はい」

「我よりも魔法の才に優れ、我と同じ系統の魔法を用いるそなたならば感じただろう。我らの神は苦しんでおられる。悪の勢力が均衡を破り、善の勢力は傾きつつある」

弟子は頭を下げた。

「我は啓示を受けた。ゆえに、お前に使命を与える。そなたにはその任務を全うする勇気があるか？」

「なんなりと」

弟子は強く、はつきりと応えた。はじめ師は弟子の方を見た。弟子は頭を垂れたままだった。

「我は一時的にバリアを解除する。その間にお前はサンドル・フォースを抜け、帝国領へ行け」

「承知<sup>つかまつ</sup>しました」

彼らはただそれだけの不思議な会話を終わらせると、弟子は部屋を出て行った。

師は弟子がいなくなると再び西の空、太陽が沈む彼方に眼を注いだ。

「我が友よ。今こそ、我が恩を返す<sup>とき</sup>刻」

\*\*\*

ウェイブラス騎士団將軍アリオンは直属の二個大隊　約二千人を引き連れてバヤードへ到着した。道を行けば誰もが足を止めて將軍を見た。バヤードやガイズに住んでいても、なかなか將軍をお目にかかれる機会は少ないのだ。

バヤード市内に入ると、住人が窓から、店先から顔を出して歓呼

の声をあげた。アリオンは平民に人気があつた。彼が小さな貴族の家の出で、どちらかと言えば庶民派だからだつたかもしれない。とにかく彼は一般民衆とも親しく接し、思いやりがあつたため、ウエイブラス騎士団が駐在するバヤードは平和な時を過ごしていた。

アリオンはそれらに手を振って笑顔で応え、バヤードの兵舎へ向かった。

兵舎に残る騎士達は全員総出で將軍を出迎えた。

馬を下りたアリオンは腹心の部下マルスヘルムに再会した。

「お疲れ様です、將軍」

「バヤードの警備ご苦労だ、マルス」

彼は副將の名を親しく呼んだ。

「長旅でお疲れでしょう。少し休んでは？」

「そうしよう。流石にガイズから馬で五日で来たのは身に堪える。仮眠を取らせてもらおう」

アリオンは兵舎内の特別室　將軍の専用部屋に向かった。彼の少し後をマルスヘルムは歩いていた。

部屋に入った將軍は毛皮でふかふかのソファに腰を下ろし、靴やマントを外していった。本来であれば將軍付きの小姓や兵舎に勤める執事にやらせるべき仕事であつたが、彼はそれを遠慮していた。

「なにか飲み物でもお持ちしますかな？」

「ああ、すまないな、マルス。冷たい水で結構だ」

「なんのなんの。將軍は我々に命じてくださるだけでよろしいのですぞ」

アリオンはフツと笑みをこぼした。

「年上のあなたにそう言えたものではないよ。わたしが將軍になったのだって、ただあなたが年を取り過ぎててわたしが適齢だったというだけのことだ。それに実力からして、あなたの方がわたしより一手も二手も上だ」

「將軍は冗談がうまいですな。この老骨、もう全盛期を過ぎてからはただ衰えゆくのみ。勝るのは年の積りだけ。いつ戦場でくたばってもおかしくないシロモノですぞ」

マルスヘルムは自虐したが、顔は笑っていた。アリオンはニヤリとした。

「年を取った竜は狡猾さを増すという諺の通り、あなたの戦士の勘にはまだまだ遠く及ばないよ」

マルスヘルムは机に杯を置き、アリオンの正面に座った。

「剣闘技大会のことですが、他の部隊からの推薦者はどのような腕前ですか？」

「他の二名の副将は、一人ずつ推薦してきた。ちなみに、わたしの部隊からの候補者はなしだ。今年はあまり出来が良いのがいなかったのだな。」

わたしは業務で忙しかったから彼らの実力はまだ見ていないが、話を聞くと悪くないらしいな。今日の夜、ここで実際に戦ってもら

うつもりだ。他の戦士の刺激にもなるからな」

「他の副将はまだ他の都市に駐在しているのですか？」

「そうだ。そのうちあなたと入れ替わりで一人バヤードに入ってもらうつもりだ。あなたも剣闘技大会優勝者として大会には出席せねばならんだろう」

「馬での旅は身に堪えますな。とくにこのような老人にとっては」

「ハハハ。まあそう言っな。

ところでだが、あなたの眼鏡にかなった者はいたか？」

「生きのいいのが一人」

「ほう、いたか。どんな男が楽しみだ。夜まで待ちきれんな」

ふたりは談笑し、水で乾杯した。

大勢の兵士達の前でふたりの男は戦っていた。一人は四十近くで、もう一人は三十手前くらいだった。將軍と副將のふたりは彼らの戦いを立って見ていた。

かなりの時間ふたりは戦い、動きも緩慢になってきたところでアリオンは「止め！」と言って戦いを止めた。

「フム、悪くないな。良かったぞ、ふたりとも」

観客と化していた兵士達の間から拍手の音が聞こえた。

汗まみれのふたりの男は將軍に頭を下げた。流石に他の副將から

推薦されるだけあって息を乱していなかった。

「今のをどう見る、マルス？」

「將軍の仰る通り、悪くないですな」

マルスヘルムは顎鬚あごひげを撫でながら答えた。

「よし、次だ。あなたの眼鏡にかなった男はどこにいる？ 早くその者の実力とやらを見てみたい。この二人のどちらかと戦わせようか？」

「ホホ、將軍はまるで楽しみを待ちきれない子供のようですな」

「からかうのはよしてくれ、マルス。  
さ、そろそろ良いだろう」

「シルヴァン、前へ出るのだ」

「はい」

群衆の中から、一人の青年が出てきた。  
アリオンはその青年に目をとめた。

「ほう、彼か」

將軍は青年に目を走らせた。首で切られた黒髪は艶やかでとても男のものとは思えない。整った顔立ち、澄んだ碧眼、高い鼻、きりりとした眉、彼に備わるもの全てが人間離れしていると言うか、男性的でなかった。



アリオンは目の前に女性がいるのではないかと錯覚してしまったがすぐに気を取り直した。

「身長が高いな。戦闘で有利だ。あまり肉付きがよくなさそうだが、筋肉は大丈夫そうだな。というより無駄な脂肪がない。理想的な体型だな」

「さすが將軍。一目で彼の体付きまでを見抜くとは」

「だが見がいいからといって戦いに有利なわけでもないのは言うまでもないな。

シルヴァンと言ったな。早速力のほどを見せてもらおう。それでは君は」

「お待ちを、將軍」

と制したのはマルスヘルムだった。

「なんだ、マルス？」

「残念ながら、彼を戦わせても無意味でしょう」

アリオンは怪訝な顔をした。

「どういう意味だ？」

「彼の戦闘を見るのは無意味、ということですよ」

「言っている意味がわからん」

「先の二人の対戦をみて確信しましたぞ。確かにあの二人は動きは悪くない。しかし、彼　マルスヘルムはシルヴァンを指差したに比べれば大したことはありませんな」

そう言うのを聞いて戦っていた男達は少々不愉快な顔をしたが、將軍と副將の手前、あからさまに不満を出すことは控えられた。

「そうは言うが、彼らと実力はそこまで変わらんだろう」

「戦えば、傷だけではすみませんぞ」

「どちらがだ？」

「彼らがです」

マルスヘルムは諭すような口調になった。  
アリオンは溜息をついた。

「あなたがそこまでして言うのなら彼の实力は本物なのだろうな？」

「將軍」

と、マルスヘルムは顔にできた傷痕を指し示した。

「この傷をつけたのはシルヴァンです」

彼の顔に残る白い傷痕。それは前にシルヴァンがマルスヘルムとの激闘の最中につけたものだった。

アリオンはその傷痕を見て少し驚いた。

「そうか。それなら何も言つまり。あなたに傷を付ける者なんてそういたものじゃないからな。」

だが、少々油断していたのではないのか？」

「これはこれは、將軍らしくないことを仰られる。我々戦士にとって油断とは死を意味しますぞ。それに、わしくらい戦の場数を踏めば自然と緊張は身に付くもの。いくら年老いたからといってそこまで落ちぶれてはおりませんぞ」

「失言だ。許してくれ」

アリオンは素直に謝った。

「將軍がそう思つのも仕方ないでしょうな。」

しかし、ここにいる誰も見ましたぞ。わしに傷を負わせた青年は無傷でその戦いを終えたのを」

アリオンは目を見開いた。

「無傷？ あなたは怪我をしたのに、この青年は無傷だと言つのか？」

「それに、申し上げるならば……わしは魔法戦闘具を使用しました。それも 第二形態 にまで展開して。そして彼が持っていたのはただ一本の剣のみ」

將軍の驚愕は通常ではなかった。

「まさか この青年が……」

將軍はシルヴァンの方を見ていたが、頭の中で考えることが多いので眼に入ったものがしつかりと頭の中に入っていないようだ。

「わしが將軍なら彼をウェイブラス騎士団の一番手にし、楽しみは大会まで取っておきますな」

アリオンは唾を飲み込んだ。

「わ、わかった……あなたの言う通り、彼を一番手として大会に出場することを認めよう」

シルヴァンは頭を下げた。

これは大変なことになるぞ。

アリオンは頭を駆け巡る衝撃の最中、そう心の中で呟いた。

## 一三話 砂漠の薔薇 は（後書き）

おまたせしました！ 第二部十三話更新しました。

四話ぶりの主人公登場ですが、セリフは「はい」の一言だけ（笑）

他の展開を描きすぎて主人公の影が薄くなっているかな？（笑）

ともあれ十一話と十二話を呼んで頂いた方は知っているとありますが、物語はいよいよ大きく動き出そうとしています。今後の展開にご期待ください！

あいも変わらず、感想や評価を大募集しています。よろしく願います！

それでは、また次話でお会いしましょう！

## 一四話 神々と魔法の理（一）

金の月の最終日、平和な国々では感謝祭が行われていた。一年に一度、今までの豊作を祝い、これからの豊穡を願って。

ウェイブラス騎士団はバヤード市内全域を警備していた。が、さすがに一日中巡回にあたるのは体力的にも、祭りに参加できないという気持ち的にも騎士団員の不況を買ってしまうと判断したアリオンは、連れてきた護衛及び補充要因も含めて順番に交代で出歩くことを許可した。これこそ、アリオン將軍の人心掌握の技だった。

その日はライカの仕事の最終日でもあったが感謝祭と重なるため、事前に客入りが少ないと予想していた主催側はその日の正午をもって発表会を終えることを決めていた。建物の中で店が閉店する度に、仕事仲間達は拍手をしてお互いを褒め称えあった。

最後の店が静かに閉まると中からは店主が従業員を労う声が聞こえる。ときおり、涙声まで聞こえてきた。彼らもその青春の全てをこの二ヶ月という期間に捧げてきたのだ。

「みんな、今日までよくがんばった。本当にありがとう」

カルダンも店内で従業員を労っていた。何度かこういう大舞台を経験している者は慣れているが、特に新人達はまだ信じられないような顔をしていた。泣く者もいた。

そう、本来であればこんな衣服発表会に店を出店できるのはあっても一生に一度なのだ。だがカルダンはもう既にこの大舞台を三回も経験し、どこでも成功させてきた。彼らの誇り、バスティア公国の誇りでもある。

「今年は、わたしが今まで経験した中で最も楽しく、そして一番売り上げがよかった年でもある」

お得意のジョークに男女は大笑いした。

「諸君はよくやってくれた。特にライカ、君には本当に感謝しているよ。」

名指しで呼ばれた少女は顔を赤らめた。

「この二ヶ月間、本当の店員でも臨時のバイトでもない君は一生懸命に働いてくれた。そしてその忙しい中私塾の試験にも合格し、晴れて明日からは有名校の生徒となる。おめでとう！」

皆励ましの言葉と拍手を惜しみなく送った。ライカは頭を下げて礼をした。

「さて、今日は運良く感謝祭だ。そして運悪く我々の仕事は先程終わってしまった。さらに売り上げ金は諸君らの給料分を差し引いても腐るほどある。皆、どうする？」

と問いかけた。その言葉を聞くと、男も女も息を吸い込み、叫んだ。

「パーティーだ！」

ライカやカルダン達は片付けを後回しにして、とりあえず街に出かけた。

その日の午後、彼女達とはにかく遊びまわった。まだ陽が高い時、宴はちょうど三次会の場所に移ったところだった。彼らは市内にたくさんある大広場の一つにいた。そこには椅子やテーブルが数えき

れないくらい並べられ、細い隙間を縫って料理を運ぶウェイターやウェイトレス、席に着いて酒を呷り豪華な肉料理に手をつける者達で溢れかえっていた。

まだ夜は先なのに、カルダン達はもう酔い始めていた。酔っていないのは金を預かる会計係数名とライカくらいなものだった。彼女は前の経験から自分は酒と相性が悪いと悟っていた。

その様子を遠目から認めた男は彼らに近づいた。

「ライカじゃないか！ 久しぶりだね。打ち上げかい？」

と声をかけられて振り向いた先には彼女の知り合いがいた。

「あら、シルヴァン！ どうしてここへ？ 今はお仕事の最中じゃないの？」

「今は自由時間だ。あまり時間はないけどね」

「おお、シルヴァンじゃないか。久しぶりだな。どうだ、一杯やらないか？」

「カルダンさん、もう酔ってるじゃないですか。気をつけてくださいよ」

「馬鹿言っちゃいかん。これくらいで酔うなどとは恥もいところだ。感謝祭の本番はまだ先だからな！」

そうは言うものの、カルダンは顔を赤くしていた。

シルヴァンとライカは苦笑した。

近くで怒鳴り声がした。そちらの方に目をやると、女性店員がなにやら箸を振り回しているではないか。彼女は地面にある何かを追



い回しているらしかった。徐々にこちら側に近づいてくると幕で攻撃されているものの正体がわかった。

それはシルヴァン達に気がつくと走ってきた。

「あれってマオじゃない？」

黒猫の口から肉の一部がはみ出していた。

あいつめ、盗み食いしたな。

猫はすかさずシルヴァンの後ろに回りこんだ。

（助けてくれ）

猫は懇願するようにシルヴァンを見上げた。

シルヴァンは溜息をついた。

「お客様、その野良猫を追っ払ってください！」

（ノラ猫だとお）

「お前は静かにしてろ」

シルヴァンは猫にそう静かに言い付け、

「すみません、うちの猫がご迷惑をおかけしました。こいつがなにかやったのなら、弁償します」

「ちょっと困りますよ、お客様。その猫は他のお客様の食べ物・・・」

その女性は初めて目の前に立つ男の容姿を見た。

うそ……綺麗

肩まで伸びた黒く艶やかな髪、細く高い鼻、綺麗に澄んだ青い瞳、小麦色の肌、高い身長、どれをとっても完璧だった。彼女は言うべき言葉も忘れて一瞬呆然とした。目の前の青年は彼女の好みにストライクだった。

そんな感慨も知らずにシルヴァンは女性に近づき、そつと手を掴んだ。

女性店員は体温を上げながら自分の手を掴んでいる手を見ると、その中には光るものがあつた。

「少ないですけど、受け取ってください」

と悩ましいほどの笑顔で言われて、彼女は自分の手を開くと銀色の硬貨が一枚滑り込まれていた。

「え、こ、こんなに？」

「ほんの気持ちですよ」

シルヴァンはニツコリと笑って言った。

「あ、あの、その……………」

女性はしどろもどろになりながらも何とかして言いたいことを伝えようと奮闘していた。

「こ、今夜一緒に、お食事でも」

そんな女性の慌てた様子を目に収めながら、シルヴァンは彼女の肩に手をやって遮った。

「あつちでお客さんが呼んでますよ」

「え、あ、は、はい」

女性は指差された方を見、名残惜しそうにシルヴァンを振り返りながら去っていった。

「いいの？ あんなにお金使ってばかりで。この前もあの件で結構使っちゃったじゃない」

なによ、あんな女に

ライカは幾分ブスツとしていた。

「僕は別に欲しい物とかないからいいのさ。たまにはああいう使い方もしないとお金も喜ばないだろ。さすがに最近は使い過ぎた感はあるけど」

「女性のハートを奪うのに？」

「誤解だよ」

シルヴァンはお手上げだ、と言うように両手を上げた。

「ニャー」

その泣き声で二人は猫の存在を思い出した。

「久しぶりね。どこに行っと思ったたら、こんなところで盗み食いとはね。野良猫と言われても仕方ないわね」

「キシヤー！」

吠えた。

「お前も肉を食べるかい？」

シルヴァンは猫を抱え上げてなだめた。すると猫はすぐにおとなしくなって「ニャー」と恭順の意を表し、甘えるように顔をシルヴァンの腕にこすりつけた。

「ご都合がいいこと」

猫は地面に座りながら与えられた肉を貪っていた。

シルヴァンは椅子に座り、

「ついでだし、今日は報告がある」

「何？」

「剣闘技大会に出場することがこの前決まった」

ライカは思わず立ち上がって「スゴイじゃない！」と叫んだ。周りの客や店員が怪訝そうにこちらを眺めているのに気付いて慌てて座った。

「カルダンさん、今の話聞きました？」

「ん、一体どうしたんだね？」

従業員達と話に興じていたカルダンは振り向いた。

「シルヴァンが剣闘技大会に出るんですって！」

カルダンは目をパチクリさせた。

「本当か？」

「本当ですよ」

シルヴァンは答えた。

今度こそ、カルダンは叫んだ。

「皆、聞いたか！ わしは彼は絶対にやってくれると信じていたぞ！」

「どうしたんです、社長？」

「シルヴァンだよ！ 彼は今年の剣闘技大会に出場するんだ！」

周りに座る客もカルダンの大声を聞いてそちらの方を見た。

カルダンの部下は「オオ！」と叫び、拍手喝采し、シルヴァンに駆け寄った。

その騒ぎは波紋を呼び、遠くの客まで何だ何だと言い出した。自分のことのように喜ぶカルダンは興奮し、酔いも加わったせいで椅子の上上がった。

「皆さん、お耳を拝借！ 今、こちらにいる青年が今年の剣闘技大会に出場することとなりました！」

完全に調子に乗っている。

客はそう聞くと唸り、スタンディング・オベーション立ち上がって拍手し始めた。

「すげえぞ、少年！」

「頑張りなさいよ！」

「どこの騎士団の何番手だ!？」

との声が飛び交った。

「シルヴァン、何番手になったんだ？」

「一番手です」

苦笑しながらも答えた。

「皆さん、お聞きください！ この青年は、あのアリオン將軍直属の騎士団、かのウェイブラス騎士団の一番手に選出されたのです！」

拍手と歓声がより一層大きくなった。騒ぎ出した客を静めるのに店員達もてんやわんやの騒ぎだった。

「すごいわね。一番手なんて」

「まあね」

「いつガイズに向かうの？」

「再来週にはもう出発してるかな。君の誕生日の少し前だ。悪いけ

ど一緒に祝えそうにないな」

「いいのよ。いつまでも祝ってもらうわけにもいかないだし。それより、誕生日プレゼントは大会優勝でいいわよ。他にはなんにももらえないわ」

「難しいプレゼントだな」

「いいのよ、本当は優勝なんてしなくても。大切なのは気持ちよ、き・も・ち」

ライカは極上の笑顔で簡単に言い放った。

こういう時のライカは「絶対優勝してよね」と言ってるんだな、と素早くシルヴァンは判断した。冷や汗をかいたような気分だ。

赤の月、第二週第一の日の夜、シルヴァンは兵舎で出発の準備をしていた。数少ない荷物を袋に詰め込んでいる時、部屋の扉が開けられ「面会したい女の子が来てるぞ」と告げられた。

シルヴァンが兵舎の入口に向かうと、ライカが待っていた。

「どうしたんだい？」

「ちょっと話したいことがあって」

「二人きりの方がいいか？」

「いえ、別に構わないわ」

「じゃあ立ち話もなんだし、僕の部屋にでも来るかい？」

「うん、いいけど……」

「けど？」

「いくらわたしがいいプロポーションしてるからって、変なことしないよね」

ライカは燦然と言いつつ。

シルヴァンは溜息をついた。

ライカは初めて宿舎の中を目にした。自分が知ってる建物とは全く違う造りだ。飾り気がなくて質素だ。それに、住む人も違う。彼女が知ってる人間達よりも粗野で、怖そうで、力強そうで、頼もしそうだ。

彼女は建物内に目を走らせながらシルヴァンに付いていった。

すれ違う人が「おいシルヴァン、女を連れ込むたぁいい度胸だな！」と笑いながら大声で叫ぶのでライカは顔を上げて歩くことができなかった。朱に染まる顔を見せたら、それこそその言葉通りの関係だと思われるしまう。

「シルヴァン、若い女性を兵舎に招くのはいい心掛けとは言えんぞ」

と彼らに声をかけたのはマルスヘルム准将だった。

シルヴァンは気を付けの姿勢をとりながら、

「すみません、閣下。こちらの女性は私の知り合いでして、僕がこの兵舎にいる間にどうしても中を見てみたいと言い張るものですから。彼女は私と同じバスティア公国の 竜巢の谷 出身です。どうかご勘弁の程を」



「そうかそうか。若い女性がむさ苦しい兵舎なぞを見学したいと申すのはなかなか珍しいの。では特別に許そう」

「恐れ入ります、閣下」

「シルヴァンがいつもお世話になってます」

ライカは挨拶した。

准将は顔を皺だらけにして微笑んだ。

「ホホ、こりゃ一本取られたの、シルヴァン。こんなに綺麗な女子を見たのは久しぶりだ。さすがバスティア公国、美女名産の地と謳われるだけのことはあるな。くれぐれも失礼のないようにな」

と言いつつ、マルスヘルムは去って行った。

二人はシルヴァンの部屋に向かった。部屋には誰もいなかった。

二人は下段の寝台に腰をかけた。

「で、話したいことってのは？」

## 一五話 神々と魔法の理（二）

早速ライカは切り出した。

「わたしね、入塾して早速塾の図書館を利用したの。すつごく広くて置いてある本の数はハンパじゃなかったわ。

でね、そこで魔法関係の本を見つけて片っ端から調べてみたの。あんまりいい成果は出なかったけど、ないよりはマシだったわ」

「どうだった？」

うーんとね、と言って頭の中身を整理した。

「動物と会話する方法について調べてみたわ。

まず、人間が動物になる ボリモルフ 変身 の術だけど、変身後しばらくは人の言葉を話したり理解できたりするんだけど、時間が経てば経つ程人間の理性を失って最終的には完全にその動物になっちゃうんだって。人間の理性がある間は、被術者は口で直接しゃべることができるからマオみたいな直接頭の中に語りかけるのとはちよつと違う気がするわ。この術はウィザードとソーサラーの コモン・マジック 上級共通魔法だつて。

次に テレパシー 精神感応 だけど、これは魔法職業の共通魔法で中級魔法だからメイジと言えども訓練が必要らしいわね。これだとマオの声<sup>ヒキユリア・マジック</sup>がわたし達だけにしか聞こえないってのはわかるけど、わたし達はメイジじゃないのは言うまでもないし。それにマオの声が脳に響く時、マオの口も一緒に動いてるのよ。だからマオは『何か』を『口で』言ってるんだわ。

最後に時間がなくて全部調べ切れてないけど、自然系統の特別魔法に動物と会話できるっていう術の項目があったわ。それも可能性

「していないわけではないけど、わたし達メイジじゃないしね」

「ケンタウロスの時と、プラーナの時で違う点はあったかい？」

「ケンタウロスの時のことはよく覚えてないの。ケンタウロスが何か喋ってたのは聞こえたけど、何を伝えたかったのかはさっぱり。ただあの時はケンタウロスが伝えたいことがわたしの口を使って喋ってたような感じだったな。」

プラーナについてはマオと全く同じよ。なんでシルヴァンにはプラーナの声が聞こえないのかしら？」

「さあねえ。検討もつかないや」

ふたりはそこまで話し込むと黙り込んでしまった。

「よし、じゃあ問題だ。ウィザード、ソーサラー、バードの違いを挙げよ」

すぐに頭の中から答えを搾り出す。

「<sup>ウィザード</sup>魔術師は魔法を幾何学的に分析、研究してその仕組みを理解して使用する者達のこと。呪文書っていうのは主に彼らが著述した物で、その中には魔法を使用するのに必要な呪文や<sup>スペル</sup>理論が書いてあるわ。故に彼らは間違えさえおかさなければ何度も同じ呪文を使用できる。呪文を覚えなくてはいけないけどね。」

<sup>ソーサラー</sup>妖術師はウィザード以上に魔法の才能が必要とされ、主に戦闘分野に特化したウィザードのことを指す。彼らは自分の内より流れ出る魔力を感覚的に操るため、呪文を覚えなくても自然に呪文を出すことができる。でもそれは言い換えれば“気分しだい”や“気まぐれ”であるため、未熟なうちは同じ呪文をかけようとしても結果が

微妙に違ったり、呪文自体を全く出せなかったりもする。上級ソーサラーになればその誤差やムラは限りなくゼロに近づくわ。さらに彼らには生まれつき先を見通す力、フォーサイト“予見”が必要とされている。これがない者は一流どころか上級ソーサラーにもなれないわ。だからウィザードより人数が少ないの。便利なところは呪文書を持ち歩かなくてもいいことかな。

バード祈禱師はウィザードともソーサラーとも一線を画す特別な存在で、その名の通り祈禱することで神々との疎通を図る者達のこと。神官クラス級の人達よ。これも特別な才能が必要で、主に音楽によって神々を祀りその見返りとして直接特別な呪文 フェイス・スベル信仰呪文と呼ばれるを賜ったり、預言を頂くこともあるわ。彼らが一番神に近い存在と言っても過言ではない。なりたくてなれるものじゃないから、なれる人は他の二つの魔法職業より人口は圧倒的に少ないわ。南の草原地帯に住む人々は伝統的に音楽が生活の一部になってるから、人口中のバード率がとても多いと聞くわね。

この三種の魔法職業に就く人間達を総称して魔法使いメイジと言う。  
どうかしら？」

「お見事。  
もう一つ問題。 コモン・マジック共通魔法、 ヒキユリア・マジック特別魔法、 フェイス・スベル信仰呪文、 ファースト・マジック初歩魔法の特徴を説明せよ」

フツ、と鼻で笑う。

「このライカ様にとつたらそんなのは愚問ね。でも仕方ないから答えてあげる。

共通魔法は仕えている神や用いる魔法の系統を問わず、その魔法職業であれば理論上は使用できる魔法のこと。わたしがさっき言った『ウィザードとソーサラーの共通魔法』ってのは、ウィザードかソーサラーの熟練者であれば使用できるって意味よ。あと、『魔法

職業の共通魔法』はウィザードもソーサラーもバードも用いることができるの。

一つの神の教義を信仰することで手にできる魔法が特別魔法。だから雷系統の魔法は、雷を司る神を信奉することで習得できるわ。特に顕著な例が信仰呪文でそれは神がバードにのみ与える術のことで、同じ神を信奉していてもウィザードやソーサラーは使うことができない。だけどその呪文の数は少ないの。

初歩魔法は、メイジみたいに魔法に生涯を捧げなくても、訓練次第で扱うことのできる初歩中の初歩の魔法を指すわ。  
どうかしら？」

「お見事」

「わたしさ、思ったんだけどどうしてメイジは一つの神様を信仰しないと初歩魔法以上の魔法 共通魔法や特別魔法 を使えないのかしら。雷系統の魔法を使ったり、自然系統の魔法を使えたら便利なのに」

「神々に対する冒瀆さ」

「そうなのかなあ」

「ちなみに、君はどの神を信じてる？」

「知りたい？」

ライカは小悪魔的な笑みでフフ、と笑った。

「いや、特に」

「訊きなさいよっ」

「ライカさんはどの神様を信奉しておられるんでしょうか？」

「教えな〜い」

シルヴァンはまた溜息をついた。

まずいな。最近溜息が多いぞ。これは気を付けないと。

「どうしても知りたい？」

「いや、別に」

「訊きなさいっ」

「どれを信じてんだ」

「愛と光の女神エリスよ」

「.....」

「もっと感動しなさいよ。若い女の子は皆エリスを信仰してるわよ。いつか目の前に理想の異性が現れるようにね。ちゃんとエリスの教えを守りさえすれば、僧侶とか尼でないわたし達にもいつか白馬の王子様が現れてくれるに違いないわ」

「そんなにうまくいくもんかね」

シルヴァンはボソツと呟いた。

「え？ 何か言った？」

「なんでもない。気のせいだ」

ライカはライカで理想の男性がどんな人なのか想いを馳せていた。

「もう一つ、これも個人的に訊きたいことなんだが……」

「なに？」

「君はどの系統の魔法が『最も強い』と思う？」

ライカはうーんと悩んだ。

「水は氷に凍らされるし、氷は炎に融かされるし。火は炎よりも弱い……。地系統は攻撃に特化してるワケでもなし。雷は攻撃力でいえば炎に劣る。でもやっぱり闇系統かな？」

「ふーん。そうか」

「シルヴァンはどう思うの？」

「教えなさい」

シルヴァンはさっきのライカの口調を真似た。  
ライカもシルヴァンも笑う。

一通り笑い終わると、シルヴァンは問うた。

「じゃあこれが最後の問題。魔法の『超常現象』について述べよ」

「え、なにそれ？」

ライカは初めて聞いた単語にキョトンとしてしまった。

「次までの宿題」

ライカは頬を膨らませた。

「そういえばなんでそんなに魔法関係のことを知ってるのよ。さっきの話も半分近く、いえ、ほとんど知ってそうな顔をしてたし」

「勉強してたのは君だけじゃないさ」

「フンツ。いいわ、シルヴァンの意地悪。」

どうせわたしも塾でイェン老師から直接魔法学を教えていただくから、そのうちあなたの知らないことまで学んでいくわ。ファースト・マジック 初歩魔法なら誰にだってできるから、いつかあなたを驚かせてやるわよ。シルヴァンをへこませる日が来るのもそう遠くはないかもね」

初歩魔法自体はまったく大したものではないがそれでも身に付けようとする者はいて、金持ちの貴族は大金を払ってメイジを雇い、嫡子に初歩魔法を教えさせたりする。ようするにたいいていは貴族の見栄っ張りなのだ。

「その前にもっと驚くべきことがある」

「何？」

シルヴァンは立ち上がって締めていた扉をスツと開けた。  
ドタドタッ！といって部屋になだれ込んできたのはウェイブラス



騎士団の男達だった。盗み聞きをしていたのだ。

皆倒れて下敷きになりあっている。彼らは互いに罵声を浴びせながらどうにかして立ち上がるや、シルヴァンを詰った。<sup>なじ</sup>

「女を連れ込むなんてズルイぜ、シルヴァン」

「お前に彼女がいたなんて知らないぞ」

「俺にも誰か紹介してくれ。そのお嬢ちゃんでもいいからよ」

シルヴァンはライカの方を振り向いた。

「こういうワケさ。驚いた？」

ライカの顔は髪と同じ桃色に染められていった。

「ささ最初から気付いていたの？　だ、誰もいないと思ってたのに」

シルヴァンはいたずらっぽく、

「そ。別に二人きりじゃなくてもいいって言っただろ？」

たちまちライカはさらに顔を赤くし、

「シルヴァンのバカ！」

と捨て台詞を残して足早に帰っていった。

後に残ったのは部屋の中でたむろする男達のみだった。

三日後　ライカの誕生日の二日前。

ライカは私塾で老師の特別授業を受けていた。イー・チェン・イエンは塾長自ら講義する貴重な授業を受けようとして教室には大勢の生徒が詰め掛けていた。私塾内でも特に大きい教室を使用していたがそれでも足りないで別の教室から椅子を持ってきたり、後ろの方には立ち見をしている者も見受けられる。その中にライカはいた。

「……………以上で本日の講義を終了とする」

と老師が締めくくると拝聴していた者達は拍手した。

「ああ、そうそう、諸君らはわかつてと思うが明日からは夏休みじゃ。次の授業は橙の月第三週第一の日である。忘れることのないよう」

ライカも拍手し、部屋を出ようと椅子から立ち上がろうとした時老師はそう告げた。

は？　休み？　聞いてないわよ。何よそれ。

ライカは教室から出た老師の後を追った。

「イエン老師、お待ちください」

「君か、ライカ君。どうしたんじゃ？」

「あの、わたし明日から休みなんて初めて聞きました。どうすればいいんですか？」

老師は自分の額を叩いた。

「これは迂闊じゃった。もう君には伝えたものと思っていた。年は取るものじゃないな。少し遅いが明日からこの塾　　というかガイザード中の塾　　は夏休みに入るのだよ」

「なんでこんな時期に夏休みなんですか？　わたしがバスティアにいた時は、どこも金の月の中旬に休みがあるっていうのは聞きまして」

「まあ帝国以外の国ならそうじゃろう。理由は簡単。今月末に剣闘技大会があるのは知っているな？　それじゃよ。うちの塾に通う生徒の多くは、金を持て余す人間を親に持つ者じゃ。彼らは剣闘技大会を子供達と共に見に行く。そうすると、その時期の塾の出席人数は三分の一も減ってしまう。それに彼らは旅行も兼ねておるので、行ったらしばらくは戻ってこないんじゃない。するとその間の授業約三週間分は欠席することになるでな。なのでガイザードの私塾の多くはこの時期に休みを設けるのじゃよ」

「そうだったんですか」

「伝え遅れたことは本当に申し訳ないと思う。一応その間も塾は生徒のために解放しておるので、暇な時は勉強に勤しんで貰っても構わんよ」

そっか。休みか。　　。どうしよっかなあ。

ライカは塾を出て女子寮に向かった。門に向かうと、そこには彼女の知り合いの姿があった。

「あ、カルダンさん。それにシルヴァンも」

最後の言葉には少し棘があったが、言われた方はただ爽やかな笑

顔を浮かべていた。

「どうしたんです？」

「お別れを言いに来た」

そう告げたのはシルヴァンだった。

「僕は明日ここを発って首都へ向かう」

「あ、そうなんだ」

ライカはちよつと残念そうに言った。

「いいなあ、することがあつて。わたし明日から夏休みのよ。今日知ったわ。どうしようかしら」

「じゃあ夏休みの予定は特にないのかい？」

「うん。だってさつきいきなりそう言われたんだもの。何も計画なんて立ててないわよ」

そう聞いてシルヴァンとカルダンは顔を見合わせた。二人とも笑っていた。

ライカがどうしたのかしらと思つてるとカルダンが口を開いた。

「もしよかつたらわしと一緒にガイズに行かないか？ 剣闘技大会を見ることができるぞ」

ライカは予想してなかったので驚いた。

「えっ！ なにかあつたんですか？」

「シルヴァンが剣闘技大会に出場できるから、出場者の身内や親族は数名であれば無料で観戦できる制度があるらしいんだよ。わしも昨日初めて聞いた。現地で受付を済ませればすぐに観戦できるそう  
だ」

ライカは前の確執など忘れたように 実際にはライカの一方的なものではあったが シルヴァンに御礼を言った。

「ガイズまでは馬で遅くても八日で着き、大会の初日は第五週第三の日だから、四日後に出発しよう。そうすればガイズを探検できるぞ。それでいいかな？」

「はい」

「よし、じゃあ決まりだ。そういうわけでシルヴァン、大会で会おう。応援してるからな」

「ありがとうございます」

「絶対優勝してよね。プレゼントよ、プレゼント」

「わかったよ」

シルヴァンもカルダンも苦笑した。

## 一六話 都へ吹く風

アリオン軍がバヤードを出て六日目、首都ガイズへの道程の約五分の四を踏破していた。彼らはガイズとバヤードの間にある街シュイツに滞在していた。この街を過ぎればガイズ到着は目前だった。

シュイツの街は朝を迎えていた。朝日が青と灰を混ぜ合わせたような色の街を照らし出す頃、街人はようやく家から出て商売の仕度を始める。バヤードやガイズ程ではないがそれでも大きな街であるシュイツは、ガイズと他の地域を結ぶ最終中継地点であつたので旅籠の数がとても多かった。道を行けばどこもかしこも旅館や高級ホテルでいっぱいだった。他にも旅行で訪れる人をもてなすため、繁華街や歓楽街で賑わう一面も持ち合わせている。

シュイツの一角、どこよりも宿泊施設の密集率が高いその地区は主にガイズと南方の地域を往来する帝国軍や、たまに団体客を泊めたりもしていた。

まだ日が昇って間もない頃、一人の旅人が広場の井戸へやってきた。

息が白い。夏の朝はどこも寒かった。

旅人は先客がいるのに気が付いた。先客の男は釣瓶から瓶に水を入れ替えている最中だった。馬に水をやるのだろ。男の側にはまだいくつか空の瓶が置かれていた。

「手伝いましょうか？」

「ありがとうございます」

旅人は腰を屈め、瓶に手を伸ばした。頭をスッポリとフードで隠して、俯いているので顔を確認するのは難しかった。

男が一つの瓶に水を入れ終わると、別のを渡した。

「朝から大変ですね。肌寒い中を一人でこんなに運ぶなんて」

「全部自分でやらないと気がすまないもので。そういう性分なんですよ」

「これからどちらに向かわれるのです？」

「ガイズへ。そこにちよつと用がありまして。あなたは？」

「あなたと同じです。これから首都へ」

「奇遇ですね」

「偶然ではありませんよ。これも運命神テサーナの思し召し」

旅人はフードの下で笑った。

男はいぶかしんだ。

この奇妙な男、前にどこかで会ったか？

「全てはテサーナの御心のままに」

この独特な言い回しと文句　聞いたことがあるぞ。それにこの声も。もしや

「お気付きになりましたか？」

旅人はフードを後ろに引つ張った。目にも鮮やかな金髪が砂のよ  
うに流れ落ちる。

「ああ、君か、トリスタン。久しぶりだな」

「お久しぶりですね、シルヴァン」

彼らはお互いに手を取り合った。

緑色の瞳をしたトリスタンは笑った。シルヴァンと似たような年齢だが、顔にはまだ子供時代のあどけなさが残っている。

シルヴァンは問うた。

「どうしてここへ？」

「我が神はわたしを帝国の首都へお使わしになりました。与えられた任務を全うするために。」

そういうあなたはもしかして剣闘技大会にでも用があるんじゃないですか？」

「まあそうだ。僕は大会に出る」

「それはスゴイじゃないですか。時間があれば応援に行きますよ」

「いいのか？ 神に仕える僧侶が俗世なんかと関わって」

「いいんですよ。ちょっとくらい息抜きは必要ですし。それくらいだったら神も許してくれるはず」

「チケットはどうするんだ？」

「なあに、それも問題はないです。大会に出席する位の高いテサーナの神官達に頼めば簡単に入り込ませてくれますよ。わたしにはコ



ネがありますからね」

なんだか妙に僧侶っぽくないな、とシルヴァンは思った。

「では、これで失礼します。わたしは一足先にガイズに向かいます。またお会いしましょう」

「ああ」

トリスタンは後ろを向いて歩き始めたが、数歩歩いたところで足を止める。

「失礼、一つあなたに伝え忘れたことがありました」

「何だ？」

「ガイズへ到着したら、パルクの酒樽亭へ行きなさい。そうすれば……」

とだけ言い残し、トリスタンは去った。

シルヴァンは無言のままその場に立ち、トリスタンの言葉の意図を考えた。

そこにはなにがある？

\*\*\*

シルヴァンと別れたトリスタンは自分の宿へ行き、宿代を支払って馬を返してもらった。

トリスタンは馬の背に鞍を乗せようとすると、面白いものを見た。

「おや、こんなところで黒猫とは珍しいな」

どこからともなく現れた猫は彼らに近づいてきた。猫はトリスタンの足元で“待て”の姿勢をとった。クネクネと動く尻尾がなんとも可愛らしい。

「綺麗な毛並みだ。手入れがしつかり行き届いているな。でも首輪がない。ということは野良猫か？」

黒猫は「野良猫」の部分に反応し、「シャー！」と唸って毛を逆立てた。

トリスタンは苦笑し、しゃがんで手を差し出した。

猫はその手を見つめ、手の上に何も無いのが分かると手を差し出す振りをして、掌を軽く引つ掻いた。“お手”はあえなく失敗した。猫は気分を害したようにその場を立ち去った。

猫も人も変わらないな。

トリスタンは立ち上がるうとし、その瞬間激しく咳き込んだ。地面に倒れたトリスタンは身を振り、悶え苦しんだ。咳は長いこと続いた。しばらくして咳がおさまると、口から離れた手には血の跡があった。

彼はその血をじっと見て拳を握り締めた。

トリスタンは口と手を拭い、ゆっくりと立ち上がった。彼は鞍を乗せ直し、馬に乗るとガイズへ急いだ。

\*\*\*

「アリオン將軍は貴族の出なのですか？」

ガイズへの道の途中、シルヴァンとアリオンは轡くつわを並べていた。

「その通りだ。バヤードの近くに小さな領地を持つ下級貴族の家だな。わたしの父　ハンサーネス家の現家長は男爵で、わたしは準男爵だった。だが剣闘技大会で優勝したことで父と同じ男爵の爵位を当時の皇帝陛下から賜り、騎士団の將軍になったことで子爵に昇格された。新たに領地を購入する権利は与えられたが、父はこのままでもいいと言い張るものでな。未だに貴族と平民の間の存在だ」

アリオンはそう答えた。

「ですが、アリオン將軍は民衆からも慕われていると聞きました」

「父も実は平民上がりなんだ。だから平民の辛さや厳しさは知っている。できるだけ自分の領地の税は高くせず、彼らが少しでも生活を楽に過ごせれるように努力してきた」

「立派なお父君ですね」

「わたしの誇りだ」

アリオンは誇らしげに言った。そう言うアリオンの横顔は輝いて見えた。シルヴァンはアリオンの父だけではなく、アリオン自身も民から慕われている理由がわかったような気がした。

「シルヴァン、君は美の国バスティア公国の　竜巢の谷　出身と聞いた。是非そのことを知りたい。教えてくれ」

シルヴァンはアリオンに伝えた。春から秋にかけて咲き乱れる宝

石のような花々のこと、村に流れる綺麗に澄んだ川のこと、遙かな  
ヴァリノイアへ続く大きなバーナムの森のこと、恐ろしい獣が巣く  
う グレイ・マウンテン 灰色山 のこと、そして 竜巢の谷 のこと。

アリオンはその話にじつと耳を傾けていた。

「美しいのだな、その村は。わたしも一度行ってみたいものだ」

「軍を退役された後に行ってみたらどうです？ 気に入られると思いますよ」

「そうだな、考えておこう」

彼らはいまだ馬に揺られていた。周りの景色は相変わらず拓けた  
農地が続き、緑、黄、茶色の耕され肥えた大地が顔を覗かせる。

「シルヴァン、もうそろそろでガイズに着く。その前にお前にいく  
つか教えておきたいことがある」

「はい」

「まず、大会の少し前まではお前達もガイズの警備に当たってもら  
う。実は先日、ガイズで嫌な事件が起きたのだ。知っているか？」

「いえ。何があったです？」

「ある夜、ガイズにある 第一の将 バラン殿の邸宅 正しくは  
ガイズの内部にある特別な領地 かまい が武装した集団に襲撃された。  
その時は使用人達が少なかったから被害者は少なかったが、バラン  
殿の奥方と二人の息子が誘拐された。今もその行方を搜索している。  
犯人どもの襲撃は速やかに、そして静かに行われた。何人かの使

用人も殺され、バラン殿の邸宅は無残に破壊されていた。ほぼ全壊だ。いくら夜中とはいえあれだけの被害を起こすには時間が足りない。犯人グループは荒らした形跡から大人数であると判明された。しかし、やつらは人目に付かずにバラン殿の領地に侵入し、消えるように逃げたらしい。どうも解せん。隠密行動が得意と見える。

今もバラン殿はその事件解明の最前線で指揮を取っておられる。だが、如何せん当時バラン邸が含まれる地区の警備を担当していたのは彼が率いるパラスラ騎士団だったのだ。無論、真つ先にパラスラ騎士団が疑われた。身内に裏切り者がいて、手引きをした、としてな。彼も気が気ではないだろうな。自分の信じる騎士団に裏切り者がいるなどとは信じたくないだろう」

シルヴァンは黙って注意深くその話を聞いていた。

「発生して一月半近く経つが事件は進展を見せていない。バラン殿もまだ諦めてはいないが、正直心の中ではもはや期待していないだろう」

「　　そうですか」

「こんな暗い話をしてすまない。だがガイズに行く以上は知っておいて貰いたい。今ガイズでどういう事件が起きていて、どういう陰謀が渦巻いているのかを」

「はい、心に留めておきます」

アリオンは頷いた。

「次の話だが、わたしくらい長年軍に仕えていれば、大体は顔を見ただけでその人物がどの騎士団員かわかる。それぞれの騎士団にも

特色とかがあって、例えばパラスラ騎士団は balan 將軍が厳格な方だから部下にも厳しくしつけする。故に街で厳しそうな顔をしている兵を見たら真っ先にそいつはパラスラ騎士団員であると疑えбайい。パラスラ騎士団は己に対しても厳しいと専らの評判なんではな。實際わたしもそう思う時がある。

だが、わたしの言いたいのはそういうことではないのだ。お前はまた全ての騎士団の特徴を理解していないからわからないと思うが、もし街中でお前の視界の内にクルバルティス騎士団員と、ゾーラ騎士団がチェイスタル騎士団のどちらかの騎士団員が入った時は気を付ける。そこは危険だ。バスティア出身のお前は知らないと思うが、帝国ではこの話は常識なのだ」

「その三つの騎士団には確執でもあったんですか？」

アリオンは肯定した。

「今から十数年前、当時 第六の将 だった現チェイスタル騎士団將軍にして 第二の将 ハイヴァーンが帝国の法律をひもとき、厄介な法を偶然見つけた。力の時代に制定され、もう忘れ去られたと思われるでいた、それが諸悪の根源だ。その法とは、一人につき一度のみ將の順位が一つ上の將に対して決闘を挑むことができるというものだ。將軍同士が一对一で決闘し、もし順位が下の者が勝った場合、順位は入れ替わる。制定された理由は、おそらく軍の士気をあげるためのものだと考えられている。

ハイヴァーンはそれを利用し、当時 第五の将 だったクルバルティス騎士団將軍ツァイスに勝負を挑み、これに勝利した。結果ハイヴァーンは 第五の将 に昇格され、逆にツァイス將軍は格下げされた。本来であれば彼にも復讐の権利 その忌わしい法を使って再びハイヴァーンに勝負を挑むこともできた。だが、彼はこれ以上帝国内に内輪揉めを広げるつもりはなかったたのでその場に留

まることにした。

だが、まだこの話には続きがある。その闘いが終わって間もない頃、再びその法が行使された。行使者は当時 第七の将 で、現ゾーラ騎士団將軍にして 第三の将 クインラン。クインランは格下げされたばかりのツアイソス將軍と対峙した。結果はクインランの勝利に終わる。噂では、ハイヴァーンが気の合うクインランにそうするよう仕向けたらしいが、確証はない。二度も敗北したツアイソス將軍はそれ以上將軍職を続けることはできなかった。騎士団内外から非難を浴び、彼は退役した。そしてその後釜になったのは現 第四の将 リマニウス・ルドアント將軍だ」

「そして今でもその確執は続いている？」

「そう。気性の荒い者が多いチェイスタルと、他の騎士団を馬鹿にする傾向の見られるゾーラの騎士団はそれらの將軍がそうであるように妙に気が合うらしい。やつらは今でも十何年前のことを話のネタにする。無論その二大騎士団とクルバルティス騎士団が仲が良いわけはない。他の騎士団もその二大騎士団をあまり好いていないがな。彼らは隙あらばお互いを潰そうとしている。騎士団間で喧嘩沙汰が多いのは彼ら 特にチェイスタルとゾーラの騎士団が原因だ。ツアイソス將軍をほぼ自ら解任状態にさせたとは言え、クルバルティス騎士団も將軍のことに關しては二大騎士団を恨んでいる。そして前皇帝陛下はこのことで頭を痛められ、この法律を全面的に廃止された」

「………帝国上層部でも争いごとが起きているんですね」

「愚かしいにも程がある。ハイヴァーンとクインランこそ、帝国の平和を乱すも者としかわたしには思えん」

アリオンは頭を振った。

「さらに、だ。ハイヴァーンには悪い噂ばかり付き纏う。クインランもだが、ハイヴァーンに比べれば大したことはない。噂の中には奴は悪の神格を信奉していると聞く。また、奴はかの有名なウルギア盗賊団出身という噂もある」

その言葉を聞いてシルヴァンは眉を寄せたが、その様子にアリオンは気が付かなかった。彼はまだ 竜巢の谷 の事件を知らないのだ。

「ウルギア盗賊団に籍を置いていたが、あまりの残虐ぶりに首領のウルギアでさえ恐怖し、奴を脱退させたいらしい。その時の戦闘でハイヴァーン相手に盗賊団は団員の四分の一を失ったとも聞いた。奴のそのような所業がウルギア盗賊団の名を高めたのであって、実際のウルギア盗賊団は大したことはないと言う者もいる。とにかく、奴に関しては良い噂は皆無だ」

そこまで言うと、嫌な空気を吐き出すようにアリオンは溜息をついた。

シルヴァンは苦い顔をした。

僕が戦った相手は雑魚だったのか？ だから村人は“一人も”死なずに済んだのか？

「とにかく、チェイスタルとゾーラの騎士団には注意しろ。挑発されても乗るな。まあお前なら大丈夫だと思う」

「はい」と相槌をうつ。

彼らがそうこうしているうちに太陽は頂点に達していた。そして、



遠くに大きな街並が見えた。

「將軍、あれが……………」

「そう。石造りの都、ガイズだ」

## 一七話 石造りの都

ウェイブラス騎士団三個大隊　バヤード駐屯のマルスヘルム軍から新たに一個大隊拝借してきたのだ　は首都へ踏み込んだ。とにかくでかかった。建物も、規模も、大きさも、何もかもが。そして、多くの建築物は切り出された石で造られていた。それが『石造り』の由来だった。

ガイズの巨大な南大門から入ると目の前には大通りがあり、一番目に付くのは、その大通りの遥か向こうに一際大きい建物　周りの建物ですらおもちやに見えてしまうほど巨大な建物があった。

ダレアース宮廷、ガイザード政府の姿だった。

遠目からでも周りの建築物と格の違いがわかる。白、黒、灰の三色の大理石がダレアース宮廷を構成していたから、見た目の力強さは圧巻だった。建物の間から突き出た塔、本殿、金宮、後宮、離宮の規模の凄さが垣間見える。

その政府の建物の上空を旋回している小さな姿が見える。小さくよく見えなかったのでじっと目を凝らした時、彼らの上に影が落とされた。ウェイブラス騎士団は上を見上げた。

影の正体は、大きな翼とその胴体だった。それは真っ直ぐ宮廷の方を指して飛んでいった。

「アリオン將軍、あれは竜ドラゴンですか？」

翼が撓しなり空気が振動する大音の中、將軍は大声で笑った。

「ハッハッハ！　あれを初めて見たか？　あれは竜じゃない。翼竜ワイバーンだ！」

「ワイバーン　」

「そうだ！ 伝説では竜族の眷属とか末裔と呼ばれている連中だ。帝国が軍事用に飼育している幻獣だ」

先程の影は五騎の翼竜で構成されていて、楔形の陣形をとっていた。その翼竜の上にはなんと人が座っていた。なんとも壮大な眺めだ。

「シルヴァン、あんなので驚いていたらこの先困るぞ！ あれはトウアドラン騎士団 フラウフェン將軍の幻獣部隊だ！」

シルヴァンは驚きに包まれていた。

＊＊

ウェイブラス騎士団は大通りを進み、あまりにも広い大広場に出た。その広場の中央には数匹のワイバーンがいた。隣には騎兵が談話していたり、餌をやったりして休憩していた。

彼らがその広場の端を通って縦断しようとした時、新たな数頭の翼竜が広場の上空に現れた。旋回しながら徐々に高度を下げ、着陸した。

アリオンが停止の合図を送ると伝令は騎士団中を駆けて行った。

「全軍停止！」

「全軍一旦停止！」

アリオンは相手の正体がわかったので、素早く馬から下りた。彼の側近もそれに倣う<sup>なら</sup>。

緑色の硬い鱗を持ち、竜と違って前足がない幻獣ワイバーンは専

用の鎧　唯一ともいえる弱点の柔らかい下腹や顔を守る革と鉄製の防具を装着していた。

その中で最も大きく、装備している鎧も他のワイバーンとは異なるそれに乗る騎手の一人が安全ベルトを外して鞍から軽々と跳躍、着地し、彼らに近づいてきた。よく見ると、その人物の装備する鎧もどこか豪華だった。他の騎手もそれに続いて地面に降り立つ。さきに着陸していた他の騎兵達は、上空にその姿が見えた時点で既に直立不動の構えで敬礼の姿勢をとっていた。

騎士達は兜を取った。例のリーダー格の男は初老で、豊かな白髪と見事なまでに整えられた口髭を太陽の下に晒した。

「お久しぶりです、フラウフェン將軍！」

「やはり君だったか、アリオン將軍」

両者は握手を交わした。

「いつこちらに戻られてきたんです？」

「十日程前だ。北方の妖魔の抵抗が弱まったのを機に帰ってきた。ちょうど時期も時期だったのだな。」

「おお、マルス！　久しぶりだな！」

「全くだな、フロウ！」

お互い親しい愛称で呼ばわった。二人の初老は抱擁を交わした。

「相変わらずだなによりだ。元気だったか？」

「もちろんだ。お前の方こそ、北の戦地でくたばったのではないか

とヒヤヒヤしていたぞ」

「ぬかしたな！」

二人は高らかに笑った。

その光景を尻目に、シルヴァンはアリオンに訊ねた。

「マルスヘルム准将とフラウフェン將軍はお知り合いなのですか？」

「ああ、あの二人は傭兵時代からの付き合いで、所属する騎士団は違えど今も昔と変わらぬ仲さ。いわゆる“腐れ縁”ってヤツかな。二人とも昔大会で優勝したのさ。確か先に優勝したのはフラウフェン將軍だったらしいな。マルスはなかなか認めたがらないが。

將軍と准将という位の差はあるが、二人ともこんなに気さくに接しているのは羨ましいことだな」

アリオンは優しく微笑みながら言った。

「フラウフェン將軍、今年の大会には女性を出場させると聞きましたよ！ それも一番手で。一体どういことなんです？」

フラウフェンはアリオンに向き直った。

「アリオン、もういい加減フロウと呼んでくれないのだぞ。他人行儀でいかん。君とわしの仲だろう」

アリオンは頭を下げた。

「身に余る光栄です。ですが、マルス准将とフラウフェン將軍との親密な仲にわたしのような者が割って入るような感じがして、なか

なかそうもいかないんです。我々の近くには軽々しくそのフロウの名を呼ぶ者までいますしね。そんなヤツと同列にされたくはありませんので」

フラウフェンはとっさにハイヴァーンのことが頭に浮かんだ。おそらくアリオンが言いたい相手もその男だろう。

「そんなに畏<sup>かしこ</sup>まらなくてもいいぞ。まあいい、いつかそう呼んでもらえる日を待つとしよう。

話を戻すが、実はその女性　女傭兵らしい　は我々が北方大陸で戦っている時に現地に訪問してきたのだ。彼女はトウアドラン騎士団に入隊したいと言ったのだが、わしらは最初真面目に話を聞かずに暇を告げた。女性のいる場所じゃない、と言つてな。だが『一人で妖魔と戦わせてみてくれ』と言うもので、戦わせて見れば獅子奮迅の戦いぶりだった。一人で何体もの妖魔を屠り、華麗に舞うその姿に誰もが惚れ惚れとしたものだ。あんな美しい戦い方をみたのは生まれて初めてかもしれん。わしは彼女に心底惚れ込んだ。だからその女性の入隊を認め、大会の一番手として出場させることを決めたのだ。もしかしたら君の部下と戦うかもしれんが、油断しないことを勧めるぞ」

そう聞いてアリオンも黙ってはいられなかった。

「將軍の方こそ、いくらウェイブラス騎士団が七大騎士団の中でも優勝から遠ざかっているとはいえ、下に見てると怪我をしますよ。シルヴァン、来い」

「はっ」

シルヴァンは下馬し、アリオンの横に付いた。

「フラウフェン將軍、彼は我が騎士団の一番手です。お気をつけなされよ。彼はマルスと戦って彼の顔に傷を付けた男ですから。しかも、マルスが魔法戦闘具マジック・ウエポンの第二形態まで展開して戦った末の結果です。いくらその女性が強いとはいえ、彼の前に出はしないでしような」

アリオン自身もまだその事実を認めるのは難しかったが、フラウフェンの方はもっと信じられなかったらしい。

「怪我？ マルスが？ それは冗談ではないのか？」

「耳も遠くなったのか、この老いぼれめ。本当だ」

マルスヘルムは傷痕を指し示した。

「………ついに前もオンボロか。『ダーク・ボイズン闇毒』の名も落ちたな」

フラウフェンは嘆くような口調で言った。

「オンボロはお互い様だ。お前も闘ってみればわかるさ。だがそれは大会までとっておけ」

フラウフェンは笑った。

「そうだな。本番が楽しみだ。シルヴァン、だったな。よろしく頼むぞ。わしはトウアドラン騎士団將軍フラウフェン、通称フロウ。第五の将だ」

「申し遅れました。わたしはウェイブラス騎士団十人隊長シルヴァ

ンと申します」

「ハハハ、礼儀正しいところもアリオンにそっくりだな。若いうち  
はもつとハツチャケた方がいいぞ、若者。それでは、まだ我々は空  
を巡回しなくてはならんから、これで失礼する。また会おう」

フラウフェンは再び翼竜の背に乗り、手綱を引っ張って離陸した。  
ワイバーンは着陸時と同様に旋回して徐々に高度を上げ、十分に舞  
いあがると飛び去った。

アリオンは前進の合図を出し、兵舎に向かった。

\*\*\*

途中、街中でシルヴァンは奇妙な騎士を見かけた。

「將軍、あの騎士がもっている“もの”は何ですか？」

アリオンはシルヴァンが指差す先を見つめた。

その騎士は身長の手分くらいある、長い鉄製の棒とも刀剣とも見  
えるような奇妙な形状のものを手にしていた。

「あれはパラスラ騎士団だな。前に言ったバラン將軍の騎士団だ。  
彼らが持っているものは“銃”<sup>ガン</sup>だ。帝国の科学研究所が最近開発  
した新しい武器で、何でも“火薬”<sup>パウダー</sup>という貴重なものを使用してい  
るらしい。まだ実用性に乏しいので今は試験段階だな。テストも兼  
ねてパラスラ騎士団が現在使用しているのだ」

シルヴァンはその武器に興味を惹かれた。

「研究所は魔法や科学、果ては妖魔のもつ妖力について研究してい  
<sup>アカデミー</sup>



て、近年魔法・科学の両方の分野の特性を一つの“形”にしようとしている。研究所職員の知り合いから聞いた話だが、数ヶ月前、研究所が開発した銃の原型となった兵器でヴァリノアの竜を一頭仕留めたのだ。その武器は“大砲”<sup>カノン</sup> といって火薬を大量に使って目標に“弾”<sup>バレット</sup> を発射し、爆破するものなんだが、ヴァリノアの竜相手に使ったのは特別製の弾だ。帝国お抱えの魔術師達が、火薬に氷系の魔法をかけたのだ。それは爆破はするのだが、火薬の特性である『熱を放出』するのではなく『熱を吸収』するらしい。つまり対象物を燃やすのではなく凍らせるのだ。

これはその竜　かの有名なヴァリノアの赤竜に<sup>レッド・ドラゴン</sup> 凄<sup>レキ</sup>い力を發揮した。赤竜は炎系統の竜だから弱点をつかれたわけだ。その竜も攻撃が届くとは思っていなかったのだろ<sup>う</sup>な。赤竜は攻撃を受けた後バステイアの方へ逃げたと報告があつたが、君の国でそういう話があつたか？」

竜……わたし　灰色山　の花畑であるものを見たの……赤竜……すごく綺麗で、大きかった……ライカの話……血のように赤い竜だったわ……ヴァリノアの竜……“彼女”は傷付いてたの……炎系統の竜……今日の出発の前に花畑に寄ったらいなくなつてたの。多分昨日の夜に飛んで行つたんだわ……竜巢の谷……やがて時代は過ぎ、増えてきた人間によつて住処を奪われた竜達が安住の地を求めて西の海を渡り始めた頃、竜巢の谷　からも竜は消え始めた……灰色山……元氣が出るように、ほら、わたしとシルヴァンしか知らないあの花畑の隅に咲く透明な赤い薔薇の花をあげたの……バステイアの方へ逃げた……村の伝承……ありがと<sup>う</sup>つて言ってくれたわ……僕達が村を出た日……花畑の窪地……竜……この傷はすぐ治る。だけど、わた

しより何倍も苦しんでいる方がいる。それに比べたら大したことはない……竜……二度と竜が谷に来ることはなかった……赤竜

僕はその竜を知っている

頭に激痛が走った。この世の痛みとは思えないほどの苦痛。彼は呻いて頭を抱え込んだ。

「おい、どうした！　大丈夫か！？」

アリオンは心配して馬上から声をかけた。なおもシルヴァンが痛そうに頭を抱えているので、近づいて肩を揺さぶった。

「しっかりしろ！　なにかあったのか？」

痛みが少しずつ引いていく　まるで痛みなど最初からなかったかのように。

ようやくシルヴァンは落ち着いたが、体中から汗が噴き出している。呼吸が荒い。

「すいません、急に頭が痛くなって。もう大丈夫です」

「そうか？　大会も近いから無理はするな。必要であれば医者にも診せろ」

「は、はい」

「二、三日お前は警備につかなくてもいい。ゆっくり休養してろ」

「わかりました」

アリオンはシルヴァンの様子を観察したが、一応異常はなさそうだったので行進を再開した。

「なにがあつたんだ？」

シルヴァンは首を振った。

「わかんないんです。將軍の話を聞いていたら急に頭が痛くなって何かが頭に浮かんだったんですけど、今のショックで忘れてしまいました」

「なんの話をしていたかな？      ああ、研究所の開発した兵器のことだったな。何か気分を害すような発言をしていなければいいが」

「………將軍。將軍はヴァリノイア戦役についてどうお考えなのです？      やはり妖魔は根絶やしにすべきだと思いませんか？」

アリオンは愁いに満ちた表情をしていた。

「      わたしは軍人にして政治家だ。だが政を司るせいをささるのは皇帝陛下だ。我々はそれに従うのみ。陛下の決定に疑問を抱いてはならんのだ。それが間違いに見えても。」

「………しかし、個人的な意見を言わせてもらうのならわたしは戦争に反対だ。戦は戦しか呼ばない。戦争では人も妖魔も傷付いていく。人に親が、子がいるのと同様に妖魔にも親がいて、子がいて、妻がいて、夫がいる。それらを我々は奪っているのだ。」

わたしの父が死ねばわたしが悲しむのと同じく、妖魔の子供も父が死ねば悲しむだろう。そしてその子は人間を恨み、憎む。また戦は続くのだ。そうやって歴史は繰り返されてきたといっても過言ではない。

わたしは平和な世を望む……馬鹿らしい夢だが、いつの日か妖魔と一緒に暮らせる日が来たら、いつも思っているのだ。死ぬ前に一度、ヴァリノイアに行ってみたい。人間と妖魔が平和に暮らす理想郷に」

最後の方は小さい呟きになって消えた。

「……………」

しかし、シルヴァンにはもはや周りの音など届いていなかった。

將軍の話聞いてると、不思議な感覚に襲われた。そして、最後僕は『何か』の結論に達しようとしていたんだ。……思い出せない。痛みの衝撃で忘れてしまった。僕の失われた過去と何か秘密があるのか？ それは一体何なんだ？

## 一八話 パルクの酒樽亭 のナナ

シルヴァンは パルクの酒樽亭 に向かっていた。先日、自称運命神サイナクレリックの僧侶にして 契約者コントラクター のトリスタンに教えられた酒場だ。

ガイズの夜は昼間と同じくらい明るかった。街灯には火が灯り、窓から覗ける店の明かりには人影が映る。人の行き来も昼とさして変わりはなく、民宿や酒場の喧騒は外まで響く。夜遅くにも関わらず元気な客引きの姿もちらほら見える。遊女達も手頃な相手を見かけては話しかけていた。巡回中の警備兵も三人一組くらいでガイズを歩き回る。

その中をシルヴァンは歩いていた。アリオンから与えられた休養日を有効に利用しようと、兵舎を出てきたのだ。鎧や防具をつけていては物騒なので、比較的軽装で身なりを整えた。無論腰にはセイバーを差したままで。

パルクの酒樽亭 は繁華街から少し離れた地区にある酒場だった。その辺りでは一番大きな建物で、結構儲かってそうだ。店内の騒ぎ具合からして今日も客入りはうまくいっているらしい。

シルヴァンはドアノブを回し、店の中に足を踏み入れた。ベルがカランコロンと鳴る。

店の中の喧騒はまた一段と凄かった。大声で誰が何を言っているのかわからないくらいだ。

シルヴァンが現れると一瞬客達は扉の方を向いて新客を認めたが、すぐに興味を失って元の話に戻った。何人かが彼を品定めするように見つめていたが、シルヴァンはその視線を無視して空いているカウンタ―席についた。

すぐに若い女の子がやってきて「ご注文は何になさいますか？」と訊いてきた。

「飲み物を一つ。アルコールの入ってないものならなんでも」

「かしこまりました」

黒髪の女の子はかわいい声で答え、厨房にかけて行った。思わずシルヴァンは微笑んだ。

なんだかライカを見てみたいだな。

シルヴァンは注文の品が来るまで、店の中を観察していた。

パルクの酒樽亭 は建物の三階フロアまで客用で、一階は厨房やカウンターもあるから他の階より人が少なく今は百人程しかない。丸テーブルに四から六人が一度に掛け、手にはジョッキを持って身内話に花を咲かせていた。

そういえば、さつきから男の店員の姿が見えない。給仕をしているのは女の子。それも若くてかわいく、身体的発育のいい女の子がほとんどだ。さらに彼女達はキワドイ衣装に身を包んでいた。胸元が広く開けられて豊かな曲線が浮かびあがり、腰辺りではキュツと締められていたのでさらに上半身が強調される。穿いてるミニスカはしゃがんだり腰を屈めるとその下にあるものが見えてしまいそうだった。貴族に仕えるメイドの服装を商業用にアレンジしたものらしい。皆客に笑顔を振りまき、チップを貰っている。

たまに女の子のお尻を触ろうとしてビンタをくらう者がいたが、それも愛嬌らしかった。叩かれた客は残念そうに首を振り、たまに触るのに成功して女性の嬌声を楽しむ狼藉者がいたが、自分の殊勝を仲間に報告しようとした瞬間さらに激しい一撃をくらった。それでも女の子達はいたって笑顔であった。

シルヴァンは部屋に目を走らせると隅にかたまる数人の男に目をつけた。柄の悪そうな男達は、なにやらテーブルを囲んでひそひそと怪しげに話し合っている。その周りの空間だけ客がいなかった。避けているようにも見て取れる。

その様子をじっくり見ていると、先程の女の子がやってきてカウンターの上に飲み物を置いた。

「おまたせしました」

シルヴァンは目の前に差し出された青い液体を見つめた。

「これはなんだい？ 初めて見たよ」

「あれえ、お客さんこのジュース知らないんですか？ プルーン・ジュースって言って、最近ガイズで流行ってて、アルコールが入ってないから子供にも人気があるんですよ。もちろん、大人の方にも人気ありますけどね。しかも三ルーアなんですよ」

シルヴァンは一口飲んでみた。爽やかな味だった。

「美味しい。面白い味だ」

「へへ、嬉しいです」

女の子はニツコリと微笑み、かわいらしい小さな舌をちょこんと口から出した。ガイザードやバスティアではあまり見られないちよつと低い鼻は、オーシアン大陸西岸部の主要国の中でも比較的南方に位置する地域の出身を思わせる。他の子にはあまり見られない容姿こそが彼女の魅力ともいえた。まだ幼い感じがするが、体から発せられる魅力はこれらの大人とヒケをとらない。

彼女はカウンターからグツと身を乗り出した。豊かな谷間が服から飛び出んばかりに前に迫ってくる。

「あたし、ナナっていいいます。ここで給仕やつてるんです。お客さんのお名前訊いてもいいですか？」  
ウェイトレス

「シルヴァン」

「へえ、カッコイイじゃないですか。見た目は文句なしの美形だし、名前もかっこいいなんて。どこから来たんですか？　なんでガイズまで？　ここで待ち合わせでもしてるんですか？」

ナナに一方的に捲くし立てられ、シルヴァンはちよつと押され気味になった。

「ええつとだな、順番に答えると、僕はバヤードから来た。ウェイブラス騎士団って名前は聞いたことあるかな？　僕はそこに所属している。今年は剣闘技大会があるからね。だからガイズまで来たんだよ。最後の質問だけど、別に誰とも待ち合わせをしてるわけじゃないんだ。知り合いにここに行けって勧められたものだから」

シルヴァンは核心を言わないように気をつけたが、勘の鋭いナナは何かに気がついたようだった。

「もしかして、大会に出場とかするんですかあ？」

ウツと詰まった。カルダンの時みたいに騒がれては面倒になると即座に判断し、ナナにそつと耳打ちする。

「察しがいいね。ただ、そのことは黙っててくれ」

「もちろんですよ。ここで騒いだら迷惑ですもんね。でもスゴいなあ、大会に出るなんて。あたし、シルヴァンさんのこと応援しますからね。へへ」

元氣な娘こだなあ……



「カッコイイ上に大会にも出るくらいの強い人だなんて。ほんとスゴイですよ。惚れ惚れしちゃう」

ナナはうつとりと熱い視線を送った。

「ありがとう。ところで他の客の給仕はしなくていいのかい？」

「いいんですよ。他のお客さんみんな若くないしカッコよくないしスケベだし、そんなにチップもくれないし。それだったらチップくれなくてもお兄さんとずっとしゃべってた方が楽しいもん。あ、別に催促してるわけじゃないですよ」

ナナの話を聞いてるとつい口元が緩んでしまふ。シルヴァンはそう感じた。

「君はカンバルド連合の出かい？」

「そうです。カンバルドの南のセスタリア公国出身なんです。もしかしてシルヴァンさんもですか？」

「いや、僕はバスティア出身だ。セスタリアからわざわざガイザードの首都に来るなんて何か特別な事情でもあるのか？」

ナナは考え込むようにうーんと言い、

「あたし、出稼ぎなんですよね。親も働いてますけど、弟とか妹が結構いるもんで、生活費を稼ぐの大変なんですよ。少しでも弟達に楽な生活させたいんで、親に頼んで少ない貯金を使わせてもらって宛もないのにガイズまで来たんです。で、一山当てて、と言うか良

い仕事見つけたんで、今のところはうまくいってますね。もつと稼いで親に楽しめたいですけどね。あたしも欲しい物とか買いたいし」

「まだ若いのに家族に仕送りするなんて偉いね。君くらいの年の知り合いがいるけど、大違いだよ」

シルヴァンはライカを想像していた。

ナナはまたかわいらしく「へへ」と笑った。褒められてポツと頬が朱に染まる。

「店員さんに男の人が見えないけど、全員厨房に回っているのか？」

「そうです。若い女が給仕した方が客受けいいんで、結構前から店長のパルクさんが女は給仕、男は厨房という分担に決めたんです。その方がチップのはずみもいいんで」

シルヴァンは後ろを振り向き、例の隅にかたまる男達のことを訊ねた。

「あの隅にいる連中は常連かい？」

「さあ、どうでしたっけ。最近よく顔を見せますけど、いつも端っこにはっかかり居て、他のお客さんと仲良くしないんですよ。別に喧嘩沙汰になったワケじゃないですけどね。」

そんなことより、特に待ち合わせとかしてないんですよ？ それじゃあ、この後予定とか空いています？ よかったらお食事とかどうですか」

ナナは期待しながら答えを待った。

「悪いけど、用があるんだ。やらなきゃいけないことがあるんでね」

「女、ですか？」

「違うよ。仕事だ」

「いいんですよ、隠さなくても。お兄さんくらいの美男子になれば女に不自由することなんてなさそうですもんねえ。その女の子は羨ましいなあ」

「だから違うって。それに、子供がこんな時間に男を食事に誘うなんて危険だ。なにされるかわかったもんじゃない。ちゃんと家に帰った方がいい」

ナナは子供と言われてムツとした。

「あたし子供なんかじゃないです。見た目より幼く見られがちですけど、これでももう十六歳なんですから。そそそれにあたし、は、はだ 体になら自信ありますよ。試してみます？」

ナナはさらに身を乗り出したので、胸が衣装からこぼれそうだった。

「い、いや、遠慮しておくよ」

「なんですか？ あたし、そういうことって初めてですけど、どうすればいいのかくらいは知ってますよ。殿方を満足させる技も少しくらいなら。剣闘技大会に出場する人と一夜を共にできるなんていう羨ましいこと他にありませんし、それにそれが初めての人だと・・・。それとも、わたしにはそんな魅力ってないんですか？」

ナナは目を潤ませる攻撃をしかけてきた。

「いいや、き、きみは……他のどの女の子よりもすごい美人だよ　本当に」

冷静なシルヴァンもどうすればいいのかわからず助けを求めようと辺りを見回した。すると、例の男達が席を立てて店を出て行くうとしていたではないか。シルヴァンにはその男達が妙に引かなかった。

トリスタンからはその場で待て、とは言われてないからな。

このまま追ってみるか？

果たしてシルヴァンは運命デサーナにかけてみることにした。

シルヴァンは席を立った。

ナナは行かせまいと、シルヴァンの腕を掴み、柔らかな胸を押し付けてくる。

「行っちゃうんですか？　もう少しくらい………来たばっかりなのに」

「すまないけど、仕事なんだよ。わかってくれ」

シルヴァンがそう言うのと、ナナは仕方なく腕を放した。やけに顔が沈んでいる。

ちよつと可哀想だったので、財布から銀貨を三枚取り出した。彼はそれを大胆にもナナの胸の谷間に忍ばせた。

「今日はそれで許してくれ。時間があればまた来るから」

ナナは貰ったチップの多さに驚き、顔を輝かせた。普通の人なく

れるより二十倍は多い。

「またいらしてくださいねえ」

ナナは笑顔で手を振った。

シルヴァンが店を出ると一番最初にしたこと。それは深い溜息だった。

どんどん財布が寂しくなっていくな。あのナナって子、頑固なところはほんとにライカそっくりだ。

彼の財布からはチャリンチャリンという惨めな音しかしなかった。今度は金銭感覚を養わないとな。これじゃあまたすぐ文無しになってしまう。

シルヴァンは気を取り直して、店を出た男達の行方を捜した。

## 一八話 パルクの酒樽亭 のナナ（後書き）

お待たせしました！ 第二部十八話更新しました！

毎回恒例のように新キャラが出てきてしまうワケですが、今回も新しい女の子「ナナ」が初登場です。彼女はそこまで本編と深い関係があるわけではない（という予定）なのですが、癒し系として周りの雰囲気と和ませる地位を確立させていきたいなあと思ってます（笑）

ただ、今後作者の都合によってはたまに登場させたりするかもです。どうぞお楽しみに。

というわけで、今後もスタリオン・サーガをお楽しみください！  
それではっ

## 一九話 渦巻く陰謀（一）

パルクの酒樽亭 を出た不審な男達はガイズの北東部 人気ひとけが  
少ない地区に向かっていた。どちらかというと娼館、遊廓、闇金  
融の根城が立ち並ぶ危険で妖しい地域だ。そんな中の一軒に男達は  
近づいていった。

その建物は周りの建物とは少し違った。二階建てでどこにでもあ  
りそうな家だったが、灯りはあるのに中に人がいる気配がせず、さ  
びれた雰囲気醸し出している。営利店とはまた違うらしい。

男達は建物の入口に近づくと、周りを注意深く何度も見回し、扉  
を三回、二回、四回と間をおいて叩いた。くぐもった声がした。

「なんだ」

「闇と血に」

男達のうちの一人がそつと呟いた。

「鎖の縛り」

扉の向こうにいる声の主は答え返す。

「死神の使者」

「赤い月はのぼる」

「死に栄光あれ」

扉から「入れ」という小さな声がした。

男達は音もなく扉をくぐり、すぐ閉めた。カチリと鍵がかかる音がする。

そんな様子を建物の影から聞いていた人物がいた。その人物はフードを被り、じつと物陰に身を潜めていた。

まったく身動きせず、時はその場で停止したのかと思われた。が、やがてその人影はゆつくりと身を起こし、先刻の連中と同じように周りを警戒しながら扉をノックした。

「誰だ」

「闇と血に」

「鎖の縛り」

「死神の使者」

「赤い月のはのぼる」

「死に栄光あれ」

「よし、いいぞ」

扉の前に立つ人影は深呼吸し、ドアノブに手をまわした。

扉を開けて目に入った光景は、普通の酒場となら変わらないものだった。人も椅子もテーブルも、棚にはワインが一本もないのを除けば。ちゃんと部屋に灯りはついているし、煙草の臭いもある。だが、異様な感じだった。

侵入者は右に目を走らせた。扉の横には頭のとっぺんが禿げ上がった中年太りの男がいた。

男は入ってきた人物を不審の目で見、フードの下から顔を覗いた。



その顔を見ると男は

「誰だ、テメー」

と勢いよく叫んだが、最後まで言うことはできなかった。

顎に強烈なアッパーカットが繰り出され、衝撃は脳を直撃した。一瞬で気絶し、体がそのまま床に叩きつけられるという直前、その体は攻撃者の手によって支えられた。激突音を響かせないための処置だ。

男は床にそつと横たえられた。歯は碎かれ、惨めな口腔を晒していた。

攻撃者はフードを取った。さらさら、と砂のように黒く艶やかな髪が流れる。異常な事態を目の前にして口や頬は引き締まり、男らしさを演出していた。双眸の碧眼も凛々しく輝き、なにか強い意志を感じ取れる。

青年は扉の鍵を閉めると、家に入った男達の行方を捜した。が、すぐに怪しいものが見つかった。カウンターの横に嚴重な錠が下ろされている鉄製の扉があった。それだけがこの部屋の中で唯一溶け込めていないものだった。

扉を開けようとしたがびくともしなかった。だが慌てずに鍵を探したがこれもすぐ見つかった。さっき倒した男の腰にたくさんの鍵がついてある鉄の輪があった。それを奪い取り、順番に鍵穴に差し込む。全部の錠をはずし、力を込めて鉄の扉をあけると、いやに寒い空気が流れてきた。

一瞬嫌な顔をしたが、音を立てぬようゆっくりと闇の中に足を踏み入れた。

扉の奥灯り一つない階段になっていた。手探りで進むしかなかったが、幸いなことに幅は細かったので両壁に手について進んでいった。道は途中で九十度に折れ曲がったりしていたのだが、枝分かれしてなかったので迷わなかった。

しばらく地下の世界に下りてゆくと前の方に明るい光が見えた。より一層慎重に、ゆつくりと光源に近づく。ある程度近づくとも光の下の光景が目に見え込んできた。

＊＊

牢屋だった。

壁には松明や灯火が掲げられている。火が揺れていることから、一応空気が循環していることがわかる。湿気がひどく、嫌な臭いがたちこめていた。

鉄格子の手前には例の男達が手に松明を持って立っており、いやらしい笑みを浮かべている。

約五メートル四方の大きさの牢獄には 囚われ人としては破格の対応であるベッド、本、化粧道具、トイレが備わっていた。それは牢獄という空間にしてはとも釣り合わないものばかりだった。そして、ベッドの上には 見目麗しい女性が腰をかけていた。

彼女こそ、その空間にある何よりも異様だった。虜囚として囚われているのは一目瞭然だったが、それにも拘らずその体から発せられる上品で気高い香り まるで貴婦人の一室にいるような雰囲気さえ覚える。それほどに彼女の誇り高さが窺える。

「どうですか、奥さん？ 体の調子は」

「・・・・・・・・」

「悪いところとかはありますか？ 病気にでもなられた日にゃ、こつちが上から怒られちゃうんでね。しっかり食いモンは食ってくださいや」

「・・・・・・・・」

女性は沈黙したままだった。眼光が怒りで燃えている。

「こつちの生活は満足していただけてますかな？ 必要な物があればなんでも言ってくださいよあ」

「・・・・・・・・」

「あんたの旦那さんは健気にもまだあんたらの行方を捜しているらしいですぜ。もう一月半は経つて言うのに。もう諦めりゃいいのによ」

「・・・・・・・・」

「旦那さんと子供のことが気になりますか？ それとも、やっぱり旦那がいなけりゃ“アッチ”の方でもご無沙汰ですかい？」

男達は下品な笑い声を上げた。

「黙れ、下郎！ さつさと去れ！」

女性の口から、威厳を秘めた声がした。

「おや、ようやく口を利いてくれる気になってくれましたか、奥さん。最初からそうしてくれればこつちの手間も省けるんですよ」

「貴様らのようなクズどもと話すことなどない！ とつとと消え失せろ！ 死神の犬め！」

男達の顔が怒りで白くなる。

「このアマ……こつちが手をだせねえからって調子に乗ってんじゃネエぞ！」

「うるさい、黙れ！ お前らのような裏切り者どもは、くたばってしまえばいい！」

「なあ、奥さん。こつちも仕方なくあんたを監禁してんだ。大人しくしてくれりゃ、悪いことはしねーよ。ちゃんと息子さんと旦那さんにも会わせてやるからよ？」

「下手な嘘だな！ 貴様らの言葉には一片の真実もない。あるのは“虚”と“嘘”だけだ！ 下等な脳ごときが考え出した策にわたしが乗るとでも思うのか？ だとしたらお前らは本当にクズだ！」

男達はついにキレた。

「ちよつと“お仕置き”が必要だな。なあ兄弟？」

「いいのか？ 閣下からお叱りを受けるぞ」

「構いやしねえ。多少のことなら閣下も許してくださいさるだろう。それに俺はもう我慢の限界だ。早く楽しみたかったんだからな」

「ああ、お前の言うとおりだ。主人に牙をむく犬にや、しつけが必要だぜ」

「自分が間違ってたってことを体に教え込んでやろうぜ」

男達は皆自分の得物を取り出した。

危険を察知した女性は近くにある本やらなにやらを適当に引つ張り出し、投げつけた。が、いくつか鉄棒にぶつかり跳ね返される。男の一人が鉄格子に走り、棒の間から女を捕まえようとしたが、女は「キヤアア！」と叫んで後ろに倒れこんだ。なおも男は手を伸ばしたのだが届かない。女は尻餅をついた状態で後退る。

「おい、どうする？」

「錠をぶっ壊す」

一人が言い放った。

周りの連中は反論した。

「おい、それは無理だろ。この錠は閣下方が二人がかりで  
施錠<sup>ロック</sup>の魔法をかけたんだぞ。無理に決まってるぜ」

「いや、違う。魔法は剣みたいな物理的攻撃の耐久性はハンパねえが、それも絶対じゃねえんだ。俺は前に同じように 施錠 された鍵がぶっ壊されるところを見たことがある。どうやって破るか？  
答えは簡単だ。ぶっ壊れるまで叩けばいい」

「そんなんで出来んのか？」

「ああ。魔法が強力であればあるほど時間と手間がかかるが、いつかは壊れる」

「ヘッ、じゃあさつさとやつちまおうぜ」

そう言っつて牢獄に取り付けられた扉の錠を剣で叩き始めた。鉄と鉄がぶつかり合い、火花が散る。錠の大きさは手にすっぽる収まる

くらいしかないのに、何度も叩くと最初に欠けたのは刃の方だった。しかしそれでも攻撃はやめない。

一方、牢の中にいる女性はようやく自分がしてしまったことを理解し、ベッドに身を寄せ、顔を埋めた。

剣がボロボロになり、使い物にならなくなった頃、

「おい、欠け始めたぞ！」

と女性を絶望に突き落とす声がした。

男達の中から歓声が上がる。

「いいぞ。その調子で」

男はそう言いかけ、後ろで何かが動くを感じた。

何かと思つてふと振り向いた瞬間、白光が一閃し、頭部に衝撃が走る。何が起きたのか理解する間も無く、瞬く間に男は失神した。

錠を破るのに夢中だった賊は、鈍い音がした方を見た。そこで、仲間が倒れるのを目撃した。

そして、倒れた仲間の側には剣を握る一人の青年の姿があつた。

男達は何があつたのか理解するのに時間がかかった。

その隙を見逃さず、青年はあざやかに空中に身を躍らせ、剣を振るう。

あわてて防御するが、動きが遅れた男達は後手に回るばかりだった。狭い空間では人数の多さは不利である。大振りするとどうしても仲間に攻撃が当たってしまうからだ。それを利用して、青年は攻撃を繰り返す。多人数相手だと突きは命取りになるから、青年は剣を受け流しながらセイバーを薙いだ。

男は青年の実力を甘く見、楽に勝負をつけようと大きく楯に振つた。青年はその太刀をすんでのことで避け、振り下ろされた瞬間柄の根元に向かって自身のセイバーを強烈に打ち込む。前に青年があ

る相手に対して使った技だった。敵の刃は手から離れ、すかさずくるりと一回転し、踵蹴りをお見舞いする。肺から空気が搾り出され、男は酸欠状態のまま気絶した。

残り三人。

「気をつける！ こいつ、やるぜ！」

互いに警告しあう。

今度は慎重をきして、二人がかりで勝負を挑んできた。じりじりと対峙し、間合いをはかる。最初に動いたのは男達の方だった。一斉に剣は振られたが、かすりもしない。

横に逃げた青年は残りの一人の男に向かって走った。

油断していた男は慌てて武器を構え直した。組み合わせになると力の優劣は明らかだった。踊り子のように華麗に舞う青年の剣舞に、戦う相手はとまどいを覚え、本来の力を出せなかった。相手の動きが緩慢になるやいなや、足を引っ掛けて男を床に倒した。頭を強打し呻く男の腹に踵落しをくらわせる。男は痛みに絶叫し、悶えた。

残り二人。

いつの間にか敵に囲まれていた。

男達の眼も、相手が素人じゃないのを理解すると本業のものとなった。

青年は左右に目を走らせ、いつ、どちらが攻撃を仕掛けてきてもいいように身構えた。

敵はアイコンタクトでタイミングをはかり、同時に攻撃してきた。片方は縦に、一方は横に剣を振った。

青年は片方の剣を受け流し、素早く横に飛ぶ。男は突きを出してきた。速い。

受け止めたが、飛んだ勢いと出された突きを避けたため、体勢を崩し床に転がる。その間に間合いを詰められた。続けざまに攻撃され、防戦一方になった。床に転がったままなので、攻撃できない。

ただ逃げるのみだった。

壁まで追い詰められたところでようやく立ち上がることが出来たが、次の瞬間、敵は目標の胴体を真つ二つに切断しようとした。「ハアッ！」との掛け声がしたが、空を切っただけだった。

男は上を見上げた。そこには空中であざやかに身を捻る青年の姿が。

啞然とした。人間技じゃない跳躍力だ。

青年は着地し、後ろを向いたままの男の首に手刀を放つ。ドウッ

男の体は崩れ落ちた。

「<sup>ラスト</sup>最後だ」

青年は死を告げる死神のように宣告した。

ただ一人残された敵は、仲間が皆床に倒れたのを改めて見て愕然とした。剣を握る手が震えている。

青年はゆっくりと敵に歩み寄った。

男は「ヒイイ！」と哀れな声を出し、後退る。次第に距離を詰められ、男は逃げようとしたが、なんと床に倒れる仲間の体に躓いて仰向けになった。

その瞬間、男は終わった　と確信した。彼が最後に見たのは、振りかぶられた右腕が顔に向かって突き出されたところだった。

戦いは終わった。

最後の一人が地に伏した時、ようやく青年は剣を鞘に収めた。

だが、青年の後ろに倒れる男　さつき踵落しされた奴　が痛みに苦しみながらも胸元から小刀<sup>ナイフ</sup>を取り出し、目標に向かって狙いを定めた。ナイフが投じられた瞬間、青年は振り向いてしまった。避けようとしたが、もう遅い。

ナイフは眼を貫き、鮮血が噴き出した



## 一九話 渦巻く陰謀（一）（後書き）

お待たせしました！ 第二部十九話更新しました！

去る二月二十一日に十八話をアップしたわけですが、その日、一日のPVとユニークアクセス数を更新することができました。ユニーク、PVともそれぞれもう少しで百と四百を記録できるところだったんですが、惜しかったです（笑）

これもひとえに読者の皆さんのおかげです、本当にどうもありがとうございます！今後まだまだ頑張り続けますので、応援よろしくお願いします。

また、感想や評価なども随時募集してます。そっちの方もぜひお願いします。

次回更新予定日は二月二十五日（月）です。それでは、またお目にかかりましょう！

## 二〇話 渦巻く陰謀（二）

ナイフは眼を貫き、鮮血が噴き出した　　はずだった。  
キーンと甲高い音が響き、ナイフは弾かれ、地に落ちる。それも二つ。

男は自分の奇襲が失敗したことに驚愕したが、それも束の間、目の前に自分が殺すはずだった対象の存在を認め、青年が足を振り上げ蹴ろうとしたのが最後の映像だった。

顎の骨が砕ける音がし、牢獄は静かになった。

「油断大敵」

青年と囚人は、牢屋に通じる階段にロープ姿の人影が立っているのを見た。

「最後まで気を抜いては駄目ですよ。それが命取りになる」

「やはりつけていたのか」

ロープの人物は階下に下りてきた。金の髪をした青年だった。

「いえ、正確にはあなたが先に入るのを見届けなくてはならなかったのだ」

「何故だ？」

「わたしは僧侶クレリックです。あなたにこの人達を倒してもらわなければなりませんでした。わたしは他人を傷付ける術は持っていない。それに傷付けたくもないので、武器は所持してません」

と言ったのはトリスタンだった。

「では、さっきのナイフは？」

「護身用です」

あっさりと答えた。

「僕がここに来るのがわかっていたのか？」

「勿論。だからこそ、あなたに パルクの酒樽亭 に行けと伝えたのですよ、シルヴァン」

青年 シルヴァンはふつ、と笑った。

「流石だな。 神出鬼没 コントラクター 契約者 の成せる技か」

「その通り」

さっきまでの殺伐とした空気など関係ないかのように、にこやかにトリスタンも笑う。

トリスタンはさて、と言い、牢獄の中に目を向けた。

「我々はあなたを救出に来ました。どうぞご安心を」

「あなた方はどなたですの？」

突然の事態をまだ飲み込めていない女性だった。

「詳しくは申し上げることはできません。いずれお話できる機会もございましょうが、今は我慢してください。ただ、我々はあなたの味方です」

女性は頷く。

「あなたは　ガイザード帝国第一軍、パラスラ騎士団將軍にして第一の將　 balan 卿の奥方、ガラティア殿で間違いありませんね？」

「はい。私が balan の妻、ガラティアです」

女性はすつと立ち上がった。先程までの男達に対する態度と一変して、貴族の妻に相応しい口調と言葉遣いになった。

「今しばらくお待ちを。この錠の魔法を解いてみます」

トリスタンは扉に付いてある錠を手にした。瞼を閉じ、何かに祈るように沈黙した。

どれくらいの時間が経っただろうか。数十秒、数分、もしかしたら数十分待っていたのかもしれない。

ふと、トリスタンは瞳を開けた。その顔にはなにも浮かんでいない。

「どうだった？」

シルヴァンは問うた。

「駄目ですね」

あっけなく回答した。

シルヴァンもガラティアもポカンとした。

「どうやら、今我が神はわたしにこの魔法を解く力をお与えになるつもりはないようです」

「ではどうするんだ？」

半ば呆れ気味でシルヴァンは訊いた。

「大丈夫。すぐに“来ます”よ」

その意味深な言葉はすぐに現実となった。

ブウン

低い音が地下の空間に響く。階段のすぐ下に光る魔方陣が出現していた。そして、宙から光が集結する。かつてマルスヘルムが魔法<sup>マジック</sup>戦闘具<sup>クウェボン</sup>をその両手に具現化した時と同じように。

光は人の形を作り　魔方陣と光は消えた。さっきまで魔方陣があつた場所にいたのはまたしてもローブ姿の男だった。だが、生地<sup>メイジ</sup>の作りがトリスタンのそれとは違う。魔法使い達が好んで使用するものだ。

男の容姿はとても印象的で、一目見たら忘れそうにない。額で左右に分けられ、ヘアバンドのような髪留めをつけて崩れないようにしている緑髪。そしてよく見ると、左右の目で瞳の色が異なる。右が空色、左が虹色という奇妙な組み合わせだ。そして手には一メートル程の杖が握られていた。

男は前に進み出た。

「サンドル・フォースはアリューション・ムーンロッド導師が弟子、妖術師のニルアド殿ですね？」

そう呼ばれた男はいかにも、という風に頷いた。

「デザート・ローズ 砂漠の薔薇 あるじ の主の命により参上仕りました。しかし、何故私の名前を？」

「わたしの名はトリスタン。テサーナ神の僧侶、契約者 とでも申しておきましょうか」

ニルアドはその答えで満足したように頷く。

「僕の名はシルヴァン。よろしくな」

「ニルアドです。以後お見知りおきを」

三人は握手を交わした。

「しかし私の名を知っているのなら話は早い。協力致しましょう」

「トリスタン、彼は大丈夫なのか？」

シルヴァンはそつと耳打ちした。

「大丈夫ですよ。彼は信頼に足る人物です きつと」

最後の方は不安げな呟きとなった。

ニルアドは扉に近づき、錠の前に手を翳し、短く魔法語 ルー  
ン語を呟いた。すると次の瞬間、いとも容易く錠は解かれ床に落ちた。あまりの手際よさにトリスタンも驚いた。

「何をしたんです？」

「何をと言われても……ただ呪文を解除しただけですが」

「それには強力な魔法がかかっているとこいつら 床に伸びている男を指差した は言ってたぞ」

ニルアドは首を振った。

「これくらい大したことではございません……師の仰られていた通りです。基本的に、このような悪行を行う者は魔力が弱いのです。悪の神々に仕えるメイジ達は俗世に対する欲が大きい者が多い。それ故に彼らは大体が弱いのです。中には強力な者もおりますが」

教師が生徒に説明するような口調で、ニルアドは言った。

「何故、帝国にはお抱えの魔術師がいるかご存知ですか？ その大きな理由は、彼らが弱いからです。彼らは金を貰う代わりに帝国に仕えている。何故金が必要か。俗世に対する欲があまりにも大きいからです。本来、メイジは己の信義、魔法の為にその生涯を捧げるものです。そのためには必要最低限まで俗世との関りを絶たなくてはなりません。しかし、欲深い彼らはそうせずに深く関わっている。これは魔法の精進に結びつきません。なぜなら、魔力は精神力と大きく関係するからです。楽な生活に満足し、悠々と過ごす者は魔力が強くなるわけがない。

だから彼らは弱い。だから徒党を組む。自らの弱さを互いに補うために。

ソーサリーでなくウィザードしかいないのもまた然りです。ソーサリーに成れるだけの力がある者はそんな条件下に決して満足しま

せん。また、ソーサラーに限らず更なる高みに己を導こうとする者は自ずとそのような道は不正解であると気付きます。彼らは金や他人の力などに頼らずとも己の力だけで足りるのですから。

研究に没頭する者も同じです。労苦に報いる形として神々は信徒に呪文を授けるのです。故に、いくら研究しようともそのような状態では高が知れています。おそらく魔法の原理は掴めたはいいが、初級や中級魔法ばかり、前に進まない結果しか出ないでしょう」

「では、ヴァリノイアはどうなんだ？ 彼らも王国に仕える独自のメイジの組織があると聞いたことがあるぞ」

「それについては私の口からはなんとも言えません。ヴァリノイアに赴いたことがないので。しかし、師が仰るには、帝国とは体制が違うらしいです。だから彼らは一人一人が帝国の者とは桁違いに強い。おそらく北方大陸の妖魔との度重なる紛争でかなり精神力が鍛えられているからでしょうな」

彼らがそう話し込んでいると、あの、と声がした。

「私には魔法の話はまったくわからないのですが、助けて頂いたことは感謝致します」

「いえ、奥方、こちらこそつい忘れてしまっていました。申し訳ございません」

トリスタンは扉を開け、中からガラティアが出てきた。子供を二人産んだと聞いたが、それにも関わらずその体軀はすらつとしていた。約一月半の監禁で頬は痩せこけていたが、見た目の美しさを損ねてはいない。



「助けて頂き本当にありがとうございます」

そう言って貴婦人は頭を下げ、トリスタンに手を差し出した。が、トリスタンはいきなり差し出された手を見て思わず身を引いた。

「どうした、トリスタン？」

「いかなさいました？ 私の手に何か？」

「いえ……ただ、これでも僧籍に身を置く者なので、女性の体に触れることは禁じられております。ご理解の程を」

あんなだけ普通の僧侶とかけ離れてるくせに、こういうところだけは律儀なんだな。シルヴァンはそう思った。

「そうですか。すみません、何も考えずに握手をしようとしてしまつて」

逆にガラティアが謝る立場になってしまった。

「一つ言い忘れてました」

ニルアドは言った。

「なんだ？」

「私も女です」

静寂　静寂。

シルヴァンもトリスタンもガラティアも目を見開いた。

「冗談です」

ニルアドは表情を変えずに 無表情のまま 言い放った。

しばらく間をおいて、皆溜息をついた。それが何の溜息だったのかはそれぞれの思惑の中でしか図れないだろう。

気を取り直してシルヴァンが言った。

「これからどうする？」

「ここから先はわたしとニルアドに任せてください。 後のことは我々でします」

「お待ちください、お願いがあります。 私達の二人の息子もどこかに監禁されています。どうか、彼らを助けてくださいませんか？」

「無論、そうするつもりです。 ただし、条件があります」

「な、なんでしょうか」

「それは救出後にお話します。 ご安心を。 簡単なことですし、決してあなた方に害のあるようなことはありません」

「は、はぁ……………」

「ということでシルヴァン、息子さんの救出も任せてください」

シルヴァンは頷いた。

「こいつらの始末はどうする？」

「それも私達がなんとかします」

そう言ったのはニルアドだった。

「わかった、後はよろしく頼む」

シルヴァンはニルアドに向き直った。

「しかし君はほんとに普通の人とは違うな。髪の色も、目の色も。何か理由があるのかい？」

「他の人間とは違う運命を辿る者は、その容姿も自ずと他人とは違う、と師は言いました。私のように髪の色、瞳の色が世の常と異なる人間は魔法に限らず何らかの才に非常に恵まれているそうです。事実、私の両親は髪の色が茶色でした。しかし、生まれた子供は緑色。数奇な運命だと思います。本来ならこんな色などありえないでしょう。」

あなたの近くにもそういう方はおられますか？」

シルヴァンはライカを想像した。彼女の髪の色は桃色。しかし、父ハイデンは茶、母ライラは金だった。加えて、ライカの瞳の色も桃色だった。

つまり、ライカの前に待ち受ける運命は他人とは異なるのか？

それにトリスタンも。彼の瞳は緑色だ。

シルヴァンはちらっとトリスタンを盗み見たが、無表情なトリスタンの顔からは何も窺えない。

シルヴァンは黙り込んだ。

そんなシルヴァンの回想を読んだのか、

「お気を付けを。<sup>フエイト</sup>運命とは必ずしも良いことばかりではありません。<sup>デステイニー</sup>その中には幸運と、<sup>ドリーム</sup>宿命も含まれます」

ニルアドは重々しく告げた。

「肝に銘じておく。じゃあ、僕はこれで失礼する。また会おう」

シルヴァンは階段をのぼった。一階に着くと、倒れていた男が起き上がるうとしていた。

すかさず強力な蹴りをお見舞いし、再び男を闇の世界へ引きずり込ませた。

星が見えない真っ暗な夜空の下、シルヴァンは外に出ると真っ直ぐ兵舎の方へ向かっていった。

## 二〇話 渦巻く陰謀（二）（後書き）

第二部二〇話更新しました！

前の伏線がようやく登場しましたね。彼は今後も主人公達と共に行動していく一人なので、どうぞ温かい目で見守ってください。

それではまた次話でお会いしましょう。次回更新予定は二月二十七日（水）ですが、もしかしたら火曜日辺りにアップするかもしれません。

評価、感想待ってます！よろしくどうぞ！

## 大会初日：二人の少女（一）

コツ、コツ

靴の音が響く。

そこは 牢だった。

“あの時”と変わらぬ情景。壁には油と松明が掲げられており、暗い部屋をぼんやりと照らしている。

その牢の中に、彼はいた。壁にもたれ、首は前に俯いている。薄汚れた金髪はぼうぼうに伸び、着ている服もみすばらかった。

その空間には彼以外の生あるものはいないかのように思われた。

靴の音はその鉄格子によって隔離された部屋の前で止まった。

彼は力の限りを振り絞って頭を上げ、目の前に立つ黒い影を射殺さんばかりの憎悪の眼で睨んだ。

「貴様が……………」

干からびた唇から呻き声のような呟きが洩れる。松明の炎が燃える音にさえ掻き消されてしまいそうな小ささだ。

影は獣の如き冷笑を浮かべた。

「元氣そうでなによりだ」

影はクツクツと笑った。

その声を聞いて僅かに囚人の体が震える。

「裏切り者め……………。何しに来た」

影は今度こそ高らかに嘲笑した。

「何をだ？ 決まっているだろう！ 貴様の魔力を貰いに来た。それ以外に我がお前を生かしておく理由があるとでも思うのか？」

囚人の瞳は怒りで爛々と燃え上がった。

「ハハハ！ 無様な様だな！」

「覚えておけ……必ずわたしがお前に復讐してやる」

「ほざくな、小僧！ 貴様ごときに何ができる！」

蔑むような視線を影は送った。

「フン、今日は貴様と会談しに来たのではない。とつと貴様から魔力を奪い、この臭い部屋から出たいものだ」

そう言つと、呪文<sup>スベル</sup>を詠唱し始めた。

長々とした呪文の詠唱が終わると、囚人の体から黄色い光が発せられた。その光はどんどん影に吸い込まれていく。

そして

絶叫。

「アアアアアアアアアアアアアアアア

！」

苦悶の叫び。

「やめてくれエエエエエエエエエエ

！」

「ハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！」





れ、大会目当てに訪れた旅行者で大いに賑わっている。大会を見れなくてもただ首都に旅行しに来た者や、一発当てようとしている者でこった返していた。店の主人や従業員は一人でも多くの客を呼び込もうと声を張り上げていた。

街中の店には帝国の繁栄を願った飾り物や、皇帝を称える美しい文句が書き並べられた幕が掲げられている。

親子連れや若い男女が入り乱れ、場所によっては歩くスペースを確保するのすら難しかった。

そんな中を一人の少女はとぼとぼと歩いていた。      ライカだった。

「ここはどこかしら？      また同じような道に来ちゃったわ。どうしよう」

と、切なげに呟いていた。      お決まりのパターン      迷子になったのだ。

開会式が始まるまでガイズを探検してくるとカルダンと約束したはいいのだが、色々な物に目移りしてしまい、結果的に帰り道が分からなくなってしまったのだった。

物騒な連中も多いから気をつけるようにと注意されていたので、いつも以上に周りに気を配っていた。

時々知らない人がライカの桃色の髪を珍しそうに見るのに違和感を感じたが、彼女は生まれて此の方『自分の髪の色がおかしい』などとは一度も思ったことがなく、『どこかに同じような人がいるはず』とも思っていたので、他人の目など気にしていなかった。

そんな視線を無視しつつ、目的地を搜索していた。知らない人に道を訊くのは恥ずかしいし、田舎者だと思われたくないので自力で探すことに努めた。

けれども、目的地は見当たらない。逆に遠ざかった感じさえする。ライカはどうしようどうしようとは焦りつつも、珍しい商品を見

つけるとそれに見とれてしまっていた。どうしようもない娘だった。フラフラと道を歩いていると、前方からとても美しい女性が歩いてきた。ライカよりほんの数歳年上に見えるが、その美しさに女であるライカも一瞬ドキツとしてしまう程だった。その女性もどこかライカのように、新しい物を初めて見た子供のように周りの光景に目を輝かせていた。

彼女がライカの側を通り過ぎると、近くにいた男たちがコソコソと話しているのが聞こえた。

「・・・・・・・・おい、あれ見たか？」

「ああ、すげえな。ガイズの中でもトップクラスの高級娼婦だぞ」

「マジかよ・・・・・・・・あれが噂の・・・・・・・・」

ライカは去りゆく女性に目を戻した。

あの綺麗な女の人、娼婦なんだ。とっても美人なのにな。  
悲しげなどでもいうような目でその女性の背中を見送った。

そろそろ約束の時間が迫ってきた頃、ライカは本格的に焦り始めた。

どうしようどうしよう、このままじゃ開会式に間に合わないわ。せつかく今日は面白いショーが見れるって思ってたのに。早くしないと、入場の受付もできないわ。こんな綺麗な服まで着てきたのに、どうしようどうしよう。

とまあそんな感じでライカはオロオロしていた。

彼女はとにかく大きい広場が通りに出ようとして、人ごみを掻き分けた。

ようやくして大きな広場に出ることができた。噴水が中央にあり、噴水を囲む階段にたくさんの人が腰掛けていた。その光景はとても

美しく、いかにも大都市、というのを連想させる。

しかし、彼女の目には何も入らなかった。一人の子供を除いて。彼女の前に、小さな子供が立っていた。年で言えば十歳にも満たないだろう。

黒い髪をしていた。着ている服は、昔は綺麗な状態であったであろうが、いまは汚れていて見る影もない。だが、面白いことにどこか似合っている感じがした。

その子供の周りだけ、人がいなかった。まるで行き交う人々が子供をわざと避けているように見えなくてもないが、“存在に気付いていない”と言った方が正確だ。誰も子供に対して注意を向けていない。子供の近くにいるのはライカだけだった。

ライカは立ち竦んだままだった。

子供はライカに近付き、手を握った。

「こつち」

小さな声は告げた。

ライカはその少年に手を引かれ、導かれるように歩いた。

子供に手を引つ張られてどこかに連れて行かれてる最中、わたしこの子に会ったことがあるかもしれない、と思った。

ライカの記憶の中にそんな子供はいない。だが、何故か最近会ったような気がしてならない。変な胸騒ぎを覚えた。

子供はライカを延々と導き続けていた。

どこへ連れて行くのかしら、と考えていた矢先、子供の足が止まる。

ライカは周りを見回した。

目の前にあった“モノ”  
超巨大な円形闘技場<sup>コロッセオ</sup>だった。剣闘技大会の会場である。

何度か遠くから見たが、近くで見るとその大きさはやはり圧巻的

だった。高さは建物十階分、四十メートル以上。長径百五十、短径百二十メートルに達する。そして今日、ここにガイザード帝国の最高権力者、ギーラン皇帝が訪れる。一般民衆が皇帝を目にできる少ないチャンスの一つだ。

そして大通りを挟んで、コロッセオの向かいにはこれまた大層な大きさの政府運営の賭博施設がある。そこは普段別の様々な用途に使われる施設だが、この時期は政府が貸しきっている。

ライカは近くにあった日時計を見た。まだ時間は十分あった。約束の場所に着いて、安堵した。

「坊や、どうもあり」

視線を下に送ると、ライカの手を握っていた子供は消えていた。周りを見渡したが、それらしい姿は見当たらない。ライカは首を傾げた。

どこに行ったのかしら。今度会ったらお礼をしなきゃ。

不思議な出会いがありつつ、ライカは賭場に足を踏み入れた。

施設の中は見事なまでに整えられており、高級感が漂っていた。

床一面が磨かれた大理石で占められ、壁には高名な芸術家が書いた絵画や彫刻が飾られている。

入るとすぐに横にいくつも並んだ受付があり、大勢の人達が並んでいた。親子連れから、その道のプロらしい輩も見られる。ここでは大会を見ることができない人でも参加でき、尚且つ大金を手に入るチャンスなのであるという意味、ここそがガイズに来る人達の一歩の目当てであると言っても過言ではない。

左の列の、一番人が少ないところにライカは並んだ。

横には掲示板があり、そこには騎士団ごと、個人ごとの人気度や現段階での倍率が記されている。

ライカは自然と一つの名前を探していた。  
どこかしら……

と、ブーツと突っ立っていると彼女は後ろから押され、転んでしまった。

「ごめんなさいっ！」

可愛い声がした。声の主はライカに手を差し伸べた。

「すみません、ブーツとして、前を見てなかったんです。怪我はありませんか？」

「いえ、大丈夫ですよ」

ライカは手を掴み、立ち上がった。

「ほんとにすみません」

「こちらこそ、ぼけつと立っててすみません」

お互い謝った。

目の前に立つ、自分と同じくらいの年の少女をライカは見た。  
第一印象は『可愛い』だった。黒い髪に、パツチリとした目、僅かに丸みを帯びた輪郭、あまり見られないちよつと低い鼻。たぶんセスタリアあたりの血が混じっているのだ。上から順に、柔らかそうな白肌、豊満な胸<sup>バスト</sup>、引き締まった腰<sup>ウエスト</sup>、小さなお尻<sup>ヒップ</sup>、すらっとした足が目に入った。

ライカは思い切って訊いてみた。

「ご両親はセスタリアの方ですか？」

「あ、なんでわかったんですか？　そうです、あたし、セスタリア出身なんですよ」

「わたし、バスティアから来たんで、セスタリアの人とかたまに見るんですよ。それでなんとなく似てるなあって思ってた」

「アハハ、嬉しいなあ。同じカンバルド出身の人に会えて。あたし、ナナって言います。初めまして」

「ナナさんね。」

わたし、ライカ。よろしくね」

ライカとナナは握手した。

「ライカちゃんも、ここで投票券買いに来たの？」

「うん。知り合いが大会に出るから、応援するの」

「うわあ、すごいな。じゃあ、大会とかタダで見れるんだ？」

「うん、そうよ」

「いいなあ。あたし貯金とかあんまりないからチケット買えなかったのよね。ほら、大会って初日だけでもチケットって一人千ルーアもするじゃない。幻獣の見世物とか、帝国魔術師の魔法ショ<sup>マジック</sup>ーとかしかやらないのに。ボツタクリよね、ほんと。最終日なんて六千もしちゃうし。馬鹿みたいだわ」

「う、うん、そ、そうよね……」

げつ。そんなにするんだ。知らなかったなあ。カルダンさんもシルヴァンも教えてくれればいいのに。

ライカは嫌な汗をかきつつ、ナナの話を聞いた。

「最近わたしの職場　酒場なんだけど　に来てくれた人が、大会に出るの。だからあたしも応援しようかなあって、今日は投票券買いに来たの。その人すごいカッコイイんだ。しかも優しいそうで、笑顔が素敵だったなあ」

「へ」

「ライカちゃんのその髪飾り素敵ね。どこで買ったの？」

「え、あ、これ？　これは　その知り合いに貰ったの。誕生日プレゼントに。別にいらなくて言ったんだけどね」

そう言いながらも、ライカの頬はほんのりと淡く染まっていく。先日、ガイズで再会したシルヴァンからプレゼントを貰ったのだ。

＊＊

「これ、プレゼント。やっぱり何かあげたくてね。形のある物の方がいいかなあって思ったんだ。　最近またお金使っちゃったから、あんまり高い物じゃないけど、我慢してくれ」

ラッピングされた小さな袋を手渡す。

「んもう、だからお金の使い方には気をつけなさいって言ったのに。でも嬉しいわ。ありがとね。」

あ、でもでも、これくれたからって優勝はちゃんとしなきゃだめよ。じゃないと許さないんだから」

「ハイハイ。わかってるよ」

彼は苦笑した。

＊＊

……ライカは恥ずかしげにその時のことを思い出していた。

彼女たちが身内話に花を咲かせていると、前の人が買い終わって順番がきた。

受付は中年の男性だった。彼は愛想よく、

「お嬢ちゃん達、どの投票券を買いに来たんだい？」

「あの、初めて来たんでどんなのあるのかよくわかんないんですけど」

「よし、じゃあ説明させてもらうよ。投票券の種類は三種類。優勝者と準優勝者を当てる二連勝単式投票券、優勝者を当てる単勝式投票券、優勝者の騎士団を当てる団体式投票券だ。倍率は基本的に先に挙げた順から大きくて、後の方ほど倍率は低いよ。購入する投票券の内容にもよるけどな。」

ちなみに、あそこの掲示板に騎士団ごと、剣闘士ごとの人気表、倍率表が掲載されてるぜ。定期的に更新してるから、もし複数買い求める場合はこまめにチェックした方がいいと思う。券の購入は今日で締め切りだよ。

で、どの券を买うんだい？ もう決めてるのかな？」



「ウェイブラス騎士団のシルヴァンさんの単勝券をください」

ナナがそう言うと、ライカの動きは止まった。

え、ナナさんの知り合いって

「えーっと……ああ、ウェイブラス騎士団の一番手、シルヴァンだね。いいのかい、お嬢ちゃん達可愛いから特別に教えてあげるけど、そんなにウェイブラス騎士団の人気は高くないよ。こっちもプロだから色々情報とかは仕入れたりするけど、今七大騎士団の中で年数的に一番優勝から遠ざかっているのがウェイブラスさ。やつぱりかたいのはパラスラとかチェイスタル、ゾーラ辺りだし、個人だと、パラスラが一番手コールとか、チェイスタルの一番手ケレンドスが人気あるね。そのシルヴァンってのは、今回大会に出場する剣闘士三十名中、現在二十四番目くらいの人気だね。あんまりオススメしないよ」

「いいんです。あたしの知り合いなんで」

その言葉を聞いて、ライカの眉がピクツと動く。

「そうかい。ま、大穴狙いつてもいいかもしれないね。ちなみにシルヴァンの単勝券だと、払い戻し金額は今のところ約五倍だ。彼はそこまで人気があるわけじゃないから、今から若干倍率が上がることはあっても下がることはないだろうね。で、いくら賭けます？」

ナナはポーチから財布を取り出し、机の上に銀貨を五枚置いた。

ライカも係の男も驚いた。

「こりゃたまげた。こんなに賭けていいのかい？ やめといった方が

いいと思うよ。五百ルーアったら大金じゃないか」

「へへ、せっかく応援するんだから奮発した方がいいかなって」

「わかりました。じゃあ五百ルーア頂きますね」

係の男は金を受け取り、領収書と投票券を渡した。

「どうも。」

お、こつちのお嬢ちゃんは何れを買います?。」

「わ、わたしも、同じのをください」

「わかりました。ウェイブラス騎士団のシルヴァンの単勝ね。いくら賭けます?。」

「え、え、えつと……」

慌てて財布の中を見た。銀貨一枚、銅貨十枚という内容だった。葛藤した。ここで全財産を投入して体面を保つべきか、先のことを考えて保守的な道を歩むべきか。  
結局、ライカは己の意地に負けた。

「……、……、これだけで……」

チャリン、と机の上に十一枚の硬貨が並べられた。

「まいどっ」

## 大会初日：二人の少女（一）（後書き）

第二部二十一話更新しました！

いよいよ第二部のメインイベントが始まりました。作中の大会期間四日間はいろいろな意味で充実させていきたいと思うので、頑張りたいと思います。

次回更新予定日は二月二十九日（金）です。それではっ

（評価や感想お待ちしております）

## 大会初日：二人の少女（二）

建物を出た後のライカはどこかナーバスだった。顔に影がさしていた。

ライカのことを心配したナナだったが、「う、うん、大丈夫」という気持ちの入っていない返事しか返って来なかった。

わたしのお小遣いがある……

ライカは途方に暮れていた。

「でも驚いたわ。ライカちゃんの知り合いってシルヴァンさんだったのね」

「うん。三年くらい前に知り合ったの」

「へえ」。あのだ、もしかして二人は付き合ってる？」

ライカは顔を真っ赤にした。

「ち、違うわよ。ただ同じ村の出身ってだけで、そんな関係なわけないわよ」

「そうなんだあ。よかった。また今度お食事に誘ってみよつと」

「え、食事？」

「うん、シルヴァンさんね、この前ウチの店に来てくれて、その時お食事にお誘いしたんだけど断られたの。用事があるって言うってたけど、なんだかあの態度はあやしかったなあ。女ですかって訊いたら否定してたけどね。でもね、あたしシルヴァンさんに『君は他の

どの女の子よりもすごい美人だよ』って言われたのっ、嬉しいわあ。もしかして、まんざらでもないのかなあ」

ライカの心の中で、とある感情の炎が燐<sup>くすぶ</sup>り始めていた。

食事……女……どの女の子よりも美人……まんざらでもない……

「あ、そういえばシルヴァンさんの言ってた知り合いってライカちゃんのことかな？」

「え、なにになに？」

「んとね、あたしが出稼ぎでガイズで働いてるって教えたら『君くらの年の知り合いがいるけど、大違いだよ』って言ってたなあ。その知り合いってやっぱりライカちゃんかな」

ライカの心の中で、決定的に何かが燃え始めた。桃色の髪と瞳が紅蓮の色に変わり始める。

その気配に、ナナもちよつと気圧される。

「ねえライカちゃん、訊いてもいい？」

「なに？」

「嫉妬してる？」

ライカは言葉に詰まった。

「嫉妬？」

「うん、そう、嫉妬」

……嫉妬？ わたしがシルヴァンに？

そういえば、わたしシルヴァンのことあんまり異性の対象として見てなかったかも。確かにカッコよくて強いし、優しいし、わたしが私塾で学べるのもほとんど彼のおかげだわ。村に居た時はみんなの憧れの的だったけど、同じ屋根の下で寝てる、なんて考えても別段緊張もしてなかったわ。

他に好きな男の子がいたわけでもないし、シルヴァンには彼女なんていなかったし。いつも一緒にいるのが当たり前だったわ。

嫉妬？ これが？ この感情が？ そうなのかな。わたしってシルヴァンとナナさんにやきもち妬いてるのかな？ いや、シルヴァンが他の女の子とイチャイチャしてた時も同じ風に感じてたのかな？ どうなんだろう。よくわかんないや、こんな気持ち意識したの初めてだし。

わたし、もしかしたらシルヴァンのこと好きなのかな？  
シルヴァンはどうなんだろう。

「ライカちゃん、大丈夫？」

ナナの声がライカを現実呼び戻した。

「う、うん。大丈夫だよ」

ライカの頭の中にふと何かが思いついた。

「あのさ、もしよかったら大会一緒に見に行かない？」

「え、どういうこと？」

「わたし、シルヴァンにナナさんも大会観戦できるように頼んでみ

るよ。一人くらい増えてもきつと大丈夫だよ。親戚ですつて言えばなんとかなるわよ」

「うわあ、ありがとう！」

ナナはライカに激しく抱きついた。柔らかい胸が無理矢理押し付けられ、息が詰まる。

「ぐえ」

「あ、ごめんね」

二人は待ち合わせ場所に向かった。

「あ、あれってシルヴァンさんじゃない？」

複数あるコロッセオの入口横、大会関係者以外立ち入り禁止となっている部分に、シルヴァンと係員らしい男が立っていた。

二人が近付くと、相手もこっちに気付いたようだった。

ライカが声をかけようとするより早く、ナナはシルヴァンに抱き付いた。

「久しぶりですね、シルヴァンさんっ」

「ああ、ナナか。君も来たんだね」

“ナナ”？ 呼び捨て？

「あたし、シルヴァンさんのこと応援しに来たんですよ」

と言いながらシルヴァンの腕を抱き、そこに深い谷間を押し付ける。

シルヴァンは苦笑いしたが、振り払おうとはしなかった。それがライカの感情を逆撫でする。ライカは自分のより“若干”大きい胸を凝視した。その視線で起伏に富んだ二つの丘を破壊するかのよう。

ナナはポーチから紙を取り出した。

「これ見てくださいよお。あたしシルヴァンさんにこんなにお金賭けたんですよ。この前三百ルーアもチップくれたから、自分のお小遣いも合わせてこんなに奮発しちゃいました。へへ」

ハ？ 三百ルーア？ チップ？ なにそれ？

もしかして、シルヴァンが言ってた『最近またお金使っちゃったから、あんまり高い物じゃないけど、我慢してくれ』ってのは、ナさんに三百ルーアも“プレゼント”したからわたしの誕生日には高い物買えなかったっていうの？

「そういえば、もうシルヴァンさんたらあの時あたしの胸に銀貨入れましたもんね。ちよっとドキってしましたよお。いゃん」

ピキッ。

我慢の限界だった。ライカの瞳が怒りで燃え上がる。

勢いをつけ、ライカはシルヴァンの足を踏んだ。が、危険を察知したシルヴァンは踏まれる直前で足を回避させ、逆に振り下ろされたライカの足の上を軽く踏んだ。

しかし、なおもライカの激情は収まらない。すぐさまもう一方の足で自分の足を踏んでいる男の足の脛すねをしたたかに蹴りつける。今度はクリーンヒットした。戦士ファイター顔負けの攻撃力だ。

シルヴァンは呻き、ど派手に地面に倒れた。



「だ、大丈夫ですかあ？」

慌ててナナが駆け寄る。

ライカは肩で息をしていた。

どうよ！

と誇らしげに心の中で呟いた。

立ち上がったシルヴァンは文句を言った。

「……何したって言うんだ」

「うるさいわね。気分よ、気分」

腕組みしたまま答えた。

罰よ、罰！

「それよりさ、ちょっと頼み事があるんだけど」

「……なんだよ」

「ナナさんも無料で大会観戦できるよう手配してもらえない？」

シルヴァンはしぶしぶ頷き、側に居た係員の男に話しかけた。

少し話し合った後、シルヴァンはオーケーサインを出した。

ナナはとても喜んでいた。

「カルダンさん達は先に上に行ってるよ。今日くらいは二人きりでシヨーでも楽しんだらどうだい？」

「うん、そうするわ」

「僕は開会式に参加しないといけなから、もう行くよ」

と言が残し、蹴られた足を庇いながらコロッセオの中に入っていた。

＊＊

シルヴァンはコロッセオ内南の剣闘士控え室にて休んでいた。

大会初日はまず皇帝によって開会宣言が行われる。そこには出場剣闘士が全員登場し、進行役から名前を読み上げられる。

その後、選手は退場し、続いて幻獣の見世物と魔術師達によるシヨールが行われる。幻獣のシヨールは戦わせるものもあれば、芸を見せるものまで様々だ。一方、魔術師達による魔法シヨールも見ごたえのあるものだ。

そこで初日は終わる。二日目、三日目、四日目为本番だった。

本来、剣闘技大会とは本を正せば御前試合であり、昔は帝国軍の士気を上げるために行われたのに端を発する。なので二日目からはコロッセオの観客席にてそれぞれの騎士団も空いてるスペースに入り、その騎士団の剣闘士を応援する。

二日目はまだ観客の方が多いが、最終日となると観客の数はほんの少ししかない。騎士団の威信もかかっているので応援も必死なのだ。

シルヴァンはリラックスしながら部屋の中にいる連中に目を配った。

シルヴァンと同じ若者から、中年まで見受けられる。だいたいのは同じ所属騎士団の者と団だんらん楽していたが、中には他の騎士団の人間と話している者もいた。

全ての騎士団が駐屯するガイズでは、騎士団間の区別がつきやすいよう体の目立つ所に色付いた“もの”を身に付けておくのが義務

付けられていた。多くの者は支給されている色付きの鎧を装備している。

それは大会期間中も同様だった。

その場にあるほとんどの視線の先に、その人物はいた。

紅一点、大会史上唯一にして初めての女性剣闘士　トウアドラ  
ン騎士団の色である紫の布を髪縛りに使っている若い女がいた。見た目からして、二十になるならぬの年齢だろう。それなのに、彼女はトウアドラン騎士団一番手の座についたのだ。

そんなわけで彼女は今大会の目玉だった。人気の面でも、上から五番目はかたいはずだった。

同じ騎士団の仲間とも話そうとせず、ただ壁を背にして座っている。周りの会話も耳に入っていないようだ。

シルヴァンもその女を見つめていると、目の前に三人の男がやってきた。

「お前がウェイブラス騎士団の一番手、シルヴァンか？」

と訊いたのは真ん中にいるリーダー格の男だった。東方系の顔付きをしている。

「ああ」

シルヴァンは座ったままで答えた。

男は腕に緑色の胴着　ゾーラ騎士団の証　を着用していた。

「聞いたぜ。お前、あの『闇毒』ダーク・ボイズンのマルスヘルムに勝ったってよ。それは本当か？」

シルヴァンはただ肩をすくめただけだった。  
男は笑った。

「ハハハハ！ やっぱりんなわきゃねーか。でもよ、あの爺さんの顔に傷を付けたってのは本当か？」

「……ああ」

「ケツ、それは本当だったのか！ あの爺さんも老いぼれたな！  
ダーク・ボイスン何が闇毒だ。はいとこそその二つ名みたいにくたばっちまえばいいのによ。どうせ役立たずなんだからな！」

それを聞いて、周りの連中、とりわけシルヴァンと他のウェイブラス騎士団の選手の目の色が変わる。  
が、それを制したのは、別の男達だった。

「おいりー、他の騎士団さんの悪口を言うのはよした方がいいぜ。  
どこに誰の耳があるのかわからねーからな」

そのりーと言う男と同じくらい口が汚そうな男が現れた。  
そいつも赤い鎧を装備していた。チェイスタル騎士団の者だ。

「おい、レーナウじゃねーか。ケレンドスはどうした？」

「今上でハイヴァーン將軍と話してる。後でこっちと合流するだろ。  
それにしてもよ、他の騎士団の副将を馬鹿にしちゃあマズイぜ。  
しかも、マルスヘルムつつたら大会の優勝者、俺達の大先輩じゃ  
ねーか。バチがあたるぜ、バチが」

「そうだな。もしそんなバチが当たってみろ、騎士団の位が一つ格  
下げされちまうぜ！」

と言い、ゾーラ、チェイスタルの団員は笑った。不愉快で下品な笑いだ。

それを尻目に、身動きする者がいた。橙はクルバルティス騎士団の面々だった。

なるほど、アリオン將軍の言ってたことは本当だったんだな。そうシルヴァンは考えた。

一触即発の雰囲気の中、控え室の扉が開けられた。

「これより開会式が始まりますので、パラスラ騎士団の方は外に来てください」

と助け舟が出された。

四人の男が出、しばらくするとチェイスタル騎士団は出てくるように告げられた。

その後五番目の騎士団、トゥアドラン騎士団が呼ばれた時、ようやくあの女は立ち上がり、控え室を後にした。

残りは二つの騎士団員のみとなった。

ウェイブラス騎士団の名が呼ばれ、シルヴァンは外の舞台に向かった。

## 大会初日：二人の少女（二）（後書き）

おまたせしましたっ！

前回更新した日に一日のPVアクセスを四百に更新することができました。ほんとうに嬉しいです（笑）

今後がんばっていきますんで、ぜひ応援してください。よろしく  
お願いしますっ！

## 大会初日：皇帝

ライカとナナは円形闘技場<sup>コロッセオ</sup>に入り、階段を上って最上階エリアに着いた。

階段から外の空間に出た瞬間、目の前に現れた光景は圧倒的なものだった。

上を見上げた瞬間、広がるのは 眩いほどに澄み切った青

空高く昇る太陽はコロッセオを金色に彩り、微かな微風<sup>そよかぜ</sup>は優しく頬を撫で、遙か遠くの空にはポツポツといくつかの白い雲 比較的降水量の少ないガイザードの気候が造り出す最高傑作の光景だ。

最大収容人数四万人程度のコロッセオはほぼ満席状態だった。ワイワイガヤガヤと楽しそうな声が飛び交い、会場を盛り立てている。初日の出し物を楽しそうに待つ子供連れの親子、仲良く二人きりで来ている恋人同士、団体で見物しにきたのであろう愉快そうに話している男達、これが唯一の楽しみだと言わんばかりにはりきっている老人達の姿が見えた。中には日除け傘を使って休んでいるやんごとなき人の姿も見られる。

通路や階段には等間隔で警備に当たる帝国軍騎士がいた。皆それぞれ腰に剣<sup>セイバー</sup>を差したり手に槍<sup>ランス</sup>を持ち、体のどこかに色付きの“もの”を身に付けてどこの騎士団所属かを示していたし、極疎らに魔術師の姿もあった。

ライカとナナは空席二つをやつとのことで見つけ、身を落ち着かせた。

その頃には騒ぎがだんだんと静かになりかけていた。もうすぐ開会式が始まるのだ。

「ライカちゃん、すごいね、小竜<sup>リトル・ドラゴン</sup>だよ！」

「うわぁ  
」

光り輝く大空を駆け巡るのは、竜族の亜種<sup>ネリリオン</sup>、リトル・ドラゴン。彼らは大型のドラゴンと異なって成体になっても大型種の子供程の大きさ、全長二、三メートルくらいにしかならず、知性も低い方なので飼育に適しているのだ。リトル・ドラゴンは幻獣の見世物にも出演し、空の巡回も担っている。だがそろそろ開会式が始まるので概地上に着陸して待機していた。

コロッセオは傾斜角二十度程の勾配になっており、どの席からでもコロッセオの中心部を見ることができ、最上部席からは文字通りコロッセオ全体が見渡せた。

コロッセオの中心部、決闘場は均された上質の砂と土が敷かれていて、最高の対戦状態を作り出している。決闘場と観客席は高さ約五メートルの壁で仕切られており、観客は上から戦いの模様を見守る仕組みになっていた。

そしてコロッセオの北側には、<sup>ロイヤル・ボックス</sup>皇帝家関係者席と貴族席が設置されている。真北の中上部がロイヤル・ボックス、その左右に貴族席、全貴族の中でも上の位の者が座れる。で、中部にはこれまた大きな踊り場。王者の場がある。ここで、大会最終日、優勝者は皇帝から直々に賞金五十万ルーア、王者の剣、冠を頂き、その場で優勝者に与えられる最大の特権。願望を一つ実現できる権利が与えられる。無論その願望とは皇帝自身の権力や力で達成されるものだけに限られ、ほとんどの優勝者は魔法戦闘具<sup>マジック・ウェポン</sup>の精製を依頼する。

決闘場と王者の場は三つの階段で繋がっていた。内二つはコロッセオの円に沿う感じで東西の左右から上がる仕組みになっていて、ここを使えるのは將軍クラスの者達だけだ。そして残り一つは真つ直ぐ王者の場につくように作られており、ここは大会優勝者のみが歩くことを許可される。

今、ロイヤル・ボックス内でも一際目立つ金銀細工を施された上座のみが空いていた。皇帝専用席だ。



通常、皇帝が先に座って開会式が始まるのを待つわけなどなく、『皇帝が来てから始まる』のが通例だった。そして今その皇帝がこの会場に向かっている。雰囲気は厳粛なものに包まれつつあった。貴族席の下段に位置する司会席あたりに動きが見られた。一人が何やら管のような物を握り、口に近づけると

「……皆様、本日はコロッセオに足を運んでいただき、誠にありがとうございます」

と、自分達の周りから同時にいくつもの、それでいて一つの声が出た。それは至る所から発せられ、見たことも聞いたこともない現象に会場はざわめいた。

「皆様ご安心ください。これは最近帝国の科学研究所が開発した魔具<sup>・アイテム</sup>でして、声音拡散機<sup>スピーカー</sup>といい、遠くの場所に同時に音声を届けることができます。是非声が聞こえる箇所を探してみてください。そこには穴があいており、そこから私の声が出てきているかと思われます」

早速その言葉通り探してみると案外簡単に音源は見つかった。ありとあらゆる場所にその穴は設置されており、そこから声がするという不思議な事象であった。

「今回の大会から試験も兼ねて使うこととなりました。不慣れであるとは思いますが、ご理解ください」

声はコロッセオ中に木霊した。余韻がまだ波を引いている。

「さて、もうそろそろこの会場に皇帝陛下がご到着されます。陛下がここに来られるまでに、剣闘士をこの場に招きたいと思います。」

皆様、拍手でお迎えください」

と司会の男がそこまで言うと、近くに座する楽師団が行進の演奏を始めた。この大きさの建物だと全体に音が届くはずなどないのだが、スピーカーを通していろいろ会場全体に心地良い旋律が流れた。

行進曲が流れると決闘場の東、西、南にある出入り口の一つ、南側から四人の男が現れた。

彼らは互いに対し十メートル近く間隔をあけ、決闘場の中央で北側に向かって左側に整列した。

続いて現れた者達は最初に出てきた団体の右隣に並ぶ。

その作業は七回行われ、上空からみると見事なマス目状になった。ところどころ出っ張ったり引っ込んだりしてはいたが。

彼らが全員整列すると

「今日この場に集った栄えある剣闘士を紹介いたします。

パラスラ騎士団一番手、コール・オフ・アイジエンド。同じく二番手、ヌスト。同じく三番手……」

最前列にいる剣闘士が紹介されると、観客は歓声を送る。

「……、トウアドラン騎士団一番手、シン。同じく二番手……、ウエイブラス騎士団一番手、シルヴァン。同じく……」

女剣闘士の名前はシンといった。

「以上、総勢三十名が今大会に出場致します」

拍手は止み、しばらくして司会は再び口を開いた。

「皇帝陛下の御成りです」

その言葉と同時に剣闘士は片膝を地面につけて頭を垂れ、客は起立して北に向かって頭を下げ、帝国軍騎士は直立不動の姿勢で最敬礼をした。

決闘場ではシルヴァンは横目で隣にいる女性が誰よりも遅く跪いたのを見た。

ロイヤル・ボックスの後ろ、皇帝家関係者が使用する階段から現れたのは、わずか二十歳にしてガイザード帝国の頂点に君臨する若者　ギーラン・ダレスだった。

金の刺繍が施されてキラキラ瞬く紫の豪華なマント、その下から見える純白の衣、頭上には色とりどりの宝石に満たされた球状の王冠が眩しい。それらの光は持ち主の威光を示し、かつ輝かせた。

決闘場へと続く階段の前には棒が立てられ、先端には例の管のようなものが付いており、その管は司会席の床に直結している。皇帝がしゃべると、スピーカーを通して声が響く仕組みなのだ。

皇帝は前に進み出た。

「大儀である」

しんとした静寂の中、張りのある声のみが響く。

「今日、この場に来たことを余は非常に嬉しく思う」

民は一層恭しく頭を垂れた。

「これからの四日間、皆には思う存分楽しんでもらいたい。それが余が臣民のためにできる、数少ない報いだ。

我、ギーラン・ダレスはガイザード帝国皇帝として、ここに剣闘技大会の開幕を宣言す」

皇帝としてはあまりにも短い宣言を終えるとコロッセオに、ガイ  
ズに唱和が号する。皇帝は右手を高々と上げた。

「コール・ギーランギーラン皇帝陛下万歳！ コール・ガイザード帝国に繁栄あれ！」

「コール！ コール！」

「コール！ コール！」

その歡呼の声に皇帝は手を振り、応える。

シルヴァンは面を上げた。そして皇帝を見つめる。  
だが 眉を顰める。

あれは誰だ？

彼の心に浮かんだ疑問。それは一体何なのか？

時間にして約数分、民衆の声に応えていた皇帝は自分の専用席に  
座ったが、その後も称美の唱えは続く。

「以上を持ちまして、開会式を終了とさせていただきます」

司会者がそう述べると楽師団はまた演奏を始めた。  
それに従い、後から入場してきた順に剣闘士は退場した。  
シルヴァンは退場する際、一度だけ後ろを振り返った。  
その視線の先にいたのは、ギーランだった。

コロッセオは興奮の声で溢れていた。

第一部、幻獣の見世物<sup>ショー</sup>では帝国が飼育している珍しい獣を、トウアドラン騎士団員が操って様々な曲芸、果ては決闘まで披露する。草原地帯よりも南方の乾燥地域に生息していると言われる長い鼻と二本の牙、一つの角を持つ巨象<sup>エレファンティデア</sup>、体中から生えている大きな角、角質化し鋭利な槍と化した鼻の犀<sup>ライナ</sup>、北のロンガ山脈の洞穴に生息する犬ぐらいまで巨大化し、マスコットみたいにチヨコチヨコと地面を動き回る針土竜<sup>エキドゥナ</sup>、ロンガ山脈手前のノールン湖が原生の、陸上生活と二足歩行が可能な人間の子供ぐらいの大きさの蛙<sup>アニュラ</sup>……。実は、これらの幻獣は元々は小さかったり角はなかったりしたのだが、帝国が品種改良と異種間交配を重ねた結果、現在のような生態となったのだ。

人々はそれらを見る度に笑い、面白がり、怖がり、驚いた。

中でもリトル・ドラゴンとワイバーンの空中アクロバット飛行には誰もが賞賛した。リトル・ドラゴンとワイバーンに関しては品種改良が難しく、かといって本来が十分に有能な種族であったので本当の姿を留めたまま飼育されている。

そして剣闘技大会初日の第二部こそその日のメインだった。魔術師による魔法の催しだ。

手に呪文書を置いて呪文<sup>スペル</sup>を唱えると、観客はその光景に魅了された。

共通魔法の浮遊<sup>レレテーション</sup>で宙を飛び、空間瞬間移動<sup>ワープ</sup>で消えては現れ、消えては現れた。

特別魔法は火球<sup>ファイア・ボール</sup>、灼熱はより気温を暑くさせ、氷霧<sup>アイス・ミスト</sup>で一気に熱を冷ます。雷の黄色い光は人々を恍惚とさせ、光の魔法は安らかな時間を与える。

魔術師のパフォーマンスに見物客は大満足だった。そんな光景をコロッセオの最上部にて、何の感慨もなく見つめる

人物がいた。

（いかがです、帝国魔術師の魔法は。<sup>ショー</sup>シルヴァン？）

頭の中に声が響く。シルヴァンは驚き、キョロキョロと相手を探した。

（ご安心を。今私は<sup>テレパシー</sup>精神感应であなたに話しかけています）

（ニルアドか。今どこにいる？）

（あなたと同じく、この茶番劇を見物しています。他人には決して見えませんが）

（<sup>スケルトン</sup>透明化の魔法も同時に使えるのか？ そんなこと聞いたことはないぞ）

（帝国魔術師程度の実力ならそれが限界でしょう。限度や制限はありませんが、我が師は長年の鍛錬で同時に四つほどの魔法を完成できるまで己を高められました。現在私はせいぜい二つが限度です）

（すごいな。さすが 光の魔術師 の弟子）

（あなたはこのショーをどう思います？）

いまだ決闘場で繰り広げられる“神秘”にシルヴァンは目を戻した。

（君の言っていた通りかもな。魔法を見世物に使ってことは少なからず、魔法の尊厳を損ねているんじゃないのかな）

（ご明察の通り。だから彼らは弱いのです）

前と同じ台詞を聞き、シルヴァンは苦笑した。

（なあ、二、三訊いていいか）

（私の答えられる範囲のものであれば）

（何故ウィザードは呪文詠唱の際呪文書を開かなくてはならない？）

（メイジになろうと決めた時、私は既にソーサラーの才能を師に見出されてましたので、ウィザードの仕組みは良く解りません）

（君の師匠は元ウィザードだったな。その時のことをなんとなく言ってた？）

（確か、ウィザード時代は魔法の理論を覚えるのに苦労したそうです。呪文書には呪文の他に唱える際のアクセント、抑揚、身振りも記載されているらしいのですが、それを一度に行うのはいかに上級ウィザードといえども非常に難しかったそうですね。だから彼らは肌身離さず呪文書を持ち歩き、詠唱の際は必ず必要な項目が載るページを開いているんです。ま、これも訓練次第、簡単な魔法であれば見なくても呪文を完成させることはできるらしいですが。

呪文書を見ないで魔法を唱える、これがソーサラーへの第一歩です）

（魔法ってのは難しいな）

（真にもって）

（……なあ、君はどの系統の魔法が『最も強い』と思う？）

すぐに返事が帰ってきた。

（一つの魔法も極めておらず、全ての魔法を極めることが不可能なメイジが畏れ多くも全ての魔法を代表して申し上げることとはできません。一つ言わせていただくなら、適材適所という言葉があります。時と場合により、魔法の発揮する効果は様々で、状況によっては火の魔法が水の魔法を凌駕すること、水が雷を凌駕することもあります。）

ただ、私は光の神イーヴァのソーサラーです。光の魔法は守護と癒しを主に司り、攻撃者から身を守るためには最適の魔法だと思います。そしてその光と対を成す闇の魔法こそ、我らが最も危惧すべき対象なのです。憚りながら、闇系統の魔法こそ『最も人を傷付ける』魔法と考えております）

（そうか……）

シルヴァンは遠い目になった。

（トリスタンから、今日このあとどこかで落ち合おうとの伝言です）

（場所は？）

（その指定は特に。どこがいいですか？）

（そうだな。パルクの酒樽亭で）

（そのように伝えておきます。それでは、これで失礼します）



（ご苦労様）

と言ったきり、交信が途絶え頭の中に声は響かなくなった。  
シルヴァンはじつと魔法の神秘を見ていたが、途中で飽きて兵舎  
に帰った。

明日、いよいよ大会の本番が始まる。

大会初日：皇帝（後書き）

おまたせしましたっ。

先日、ついに一日のユニークアクセス百人を突破しました（嬉）  
今後頑張り続けていきたいと思います。それではっ。

## 大会二日目：一番手

初日に引き続き、二日目も快晴だった。というより、ガイズにはあまり雨が降らないのでこのような天候が普通だった。

大会初日は何の問題もなく予定通り開催され、大盛況を収めた。だが今日からの三日間が本番だ。

朝、日が昇ると同時にコロッセオ前の広場にトーナメント表が公開された。同時にガイズにある七大騎士団の兵舎にも表が配布された。

二日目は十五試合行われ、三十人全員が戦うこととなる。翌三日目は第二回戦、第三回戦の計十一試合が、最終日は準決勝と決勝の計三試合が行われる。そして日を追うごとに見物客の人数は減り、最終日は四万人の収容人数に対して僅か三千人しかいなくなる。なぜなら最終日のチケットは一枚だけで、一家庭の平均年収の三分之一にもなるからだ。

よって残りの席は帝国騎士が占めることになる。しかし、その席に座れる騎士も騎士団内で家柄、金銭の取引、実力の大小と様々な選抜がある。運悪く漏れてしまった者は仕方がないのでガイズ各地に警備に回らなくてはならない。彼らが試合の結果を知れるのは勤務終了後か、口伝えに聞くかなり曲げられた情報だけだ。

今、ウェイブラス騎士団兵舎でも準備を整えるべく出場する三選手は食堂で対戦表を見ながら食事を摂っていた。

「どうかな、三人とも調子は」

聞いたのは過去の大会優勝者、マルスヘルム准将だった。

「まあまあですね」

似たような回答を三者三様の言い方で答える。

マルスヘルムは机の上にある対戦表を手に取り、しかめ面で顎鬚あごひげを撫でた。

「ふむ、表面上、皆相手は互角といったところか。うまくいけばシルヴァン以外は問題ないじやろうな」

「そうですか」

「しかしこのトーナメント表を作成したのは一体どこのどいつだ。緒戦から一番手同士を戦わせるなど馬鹿なことをするのは。剣闘士と観客の身になってみる、二日目のチケットを購入した者は大いに喜んだるに違いないわ」

「それを作ったのはクインランだ、マルス」

そこへ現れたのはウェイブラス騎士団最高司令官、アリオン・ハンスーネス將軍だった。

皆席を立ち、敬礼するがアリオンは手を振って着席を促した。

「クインランですか、あの若造め」

「そう言っな、別に作為的に決めたわけじゃないんだし」

「いや、ありえますぞ。あの男なら人為的にやるに違いないとわしの第六感が告げてますな」

アリオンは苦笑した。

「シルヴァン、相手はお前と同じ一番手だが、そんなに気にすることはない。マルスと戦ったのなら、相手がどんな奴だろうと怖くはないぞ」

「はい」

「落ち着きさえすればお前にも十分勝機がある」

「コテンパンにしてやれ」とマルスヘルムは言い退けた。

＊＊

ナナとライカはコロッセオ前で待ち合わせをしていた。合流した二人は早速席を見つけるべく足早にコロッセオ内に入った。

観客席はロイヤル・ボックス区画を含めると九つに区切られている。つまり、七大騎士用のと客用の応援席が設けられているのだ。最終日、入場を許された客は全員真南の一角に収容される。

ライカ達はウェイブラス騎士団の応援席に真っ先に向かった。席を探している途中、ライカはカルダンを見つけた。

「あ、カルダンさん。それにクロージエンドさんも」

「おはよう、ライカ君」

と、爽やかに挨拶したのは国際衣服組合ギルド会長のクロージエンドだった。

「クロージエンドさんも来てたんですね。知りませんでした」

「わたしはもともとガイズに居を構えているから、毎回この大会は

見物するんだよ。勿論二日目から最終日までのチケットは全て抑えた」

「金の無駄遣いだろ」

カルダンだ。

「構わんよ、投票券さえ当たれば十分にお釣りがくるだけの金額を賭けたからな」

「誰に賭けたんですか」

「パラスラ騎士団のコール・オフ・アイジェンドに一万三千だ」

ナナとライカは絶句した。

「破産してしまえばいいのにな」

「ホッホッホ、わしの予想が外れることはない。なにせ今まで外れたことがないからな」

「三回しか投票券を買わず、しかも全て大会前の人気が一番だったやつじゃないか」

「いいんだよ、勝ちさえすれば。外れてもわしは破産しないがね。だがお前だってあの少年　シルヴァンとかいう　に相当な金額を賭けただろ」

「たかだか八千だ。これ以上賭けると妻に叱られるんでな」

「尻に敷かれているな。情けないぞ、友よ」

次元の違う話に付いていけないので、ライカ達は早々にその場を立ち去った。

「ねえ、ナナさん、さっき言ってたコールって人そんなに人気あるの？」

「え、もしかして、ライカちゃんコールさんのこと知らないの？」

「う、うん、わたしシルヴァンくらいしか出場する人知らないし」

「そうなんだあ。コールさんはね、ガイズの近くにとっても大きな領地を持つ大貴族アイジエンド侯爵家の長男さんなんだよ。だからアイジエンド伯爵とか言われる位高貴な方なの。しかもまだ二十歳だし、おまけに超美形、男からも大きな支持を得てるって話なの」

「そんな若いのにもう伯爵様なんだ」

「ほら、あそこ見て」

ナナの指の先にあるのは、観客席の最前列にかたまる若い女性達の集団だった。

「あれ全部コールさんのファンの子達よ。応援幕までつくってるし。それだけ熱心なんだよ」

その光景に、流石にライカも引いた。

「ねえ、シルヴァンとどっちがカッコイイ？」

「どっちだろうなあ、あたし遠目からしか見たことないけど、いい勝負ってところかなあ。だってコールさんにお目にかかれるなんてめったにないんだも」

「でもさ、でもさ、かつこいいからって強いワケじゃないよね？」

「とっても強いよ」

あっけなく宣告され、ライカはウツと詰まった。

「だって大会に出るくらいだし、騎士団の一番手だも。弱いわけないじゃん。カッコイイし、強いから男からも人気あるんだよ」

と付け加えられ、ライカはしょんぼりと黙ってしまった。

そんなライカを励まそうと、ナナは小悪魔的な笑みを浮かべて

「大丈夫だよ、ライカちゃんのだ〜い好きなシルヴァンさんだってカッコイイんだしさあ」

ライカの耳元で囁いた。

「べ、別に好きじゃないわよっ！」

ナナは残念、というふうに肩をすくめた。

そして何かを思い出したように「あ、そうだ」と手を叩いた。

「昨日さ、ショーが終わった後店に戻ったらさ、夜またシルヴァンさん来てくれたんだあ。もしかして、あたしに会いに来てくれたのかなあ」



うつとりとしたナナの顔をライカは横目で睨んでいた。

「あ、そろそろ第一試合が始まりそうだよ」

ナナがそう言うのと、ライカはコロッセオの中心に顔を向けた。

＊＊

剣闘士は東と西に分かれ、それぞれの控え室にいた。

控え室はピンと張り詰め、喋る者は誰もおらず、咳さえすれば緊張感が切れてしまう雰囲気だった。精神統一している者、入念に得物の手入れをしている者、動いて体を温めている者、準備運動をしている者など多種多様な格好で待機している。

今日戦う相手は自分とは逆の方角の控え室にいる。決闘場に行つた時、初めて対峙するのだ。

そして、今この場にいる相手がもしかしたら明日自分と戦うかもしれないと思うと、自然と意識してしまう。

それはシルヴァンも例外ではなかった。昼過ぎに彼の試合は始まるのだが、彼は早めに到着していた。

シルヴァンはチラとある剣闘士を見た。その視線の先にいるのは、シンという名の女性剣闘士だった。

アリオンに似て白が混じった金髪は耳と額を隠して後ろで纏められてポニーテールになり、ほっそりとした体付きからは全くその攻撃力を予測するのは不可能だ。秀麗な顔はとても女傭兵だとは思えない。

腰に二本の剣を差していた。二刀流なのだろうか。

シルヴァンとシンが今日勝てば、明日の第二回戦で彼らは戦うことになる。

シンは緊張しているようには見えず、むしろそのリラックスして

いる姿勢からして眠っているようにも見える。彼女は壁を背に座り、目を瞑<sup>つぶ</sup>っていた。

試合に出た者は明日にならない限りこの後控え室に戻ってくることはない。敗者も勝者も試合が終われば控え室に經由することなく自分の居場所へ帰還する。

扉が開けられ、

「第五試合が終わりました」

と告げられると、シンは立ち上がり、優雅な歩きで控え室から出て行った。

自分の出番が来るまでシルヴァンはゆっくりと調子を整えておく予定だった。

だが、あまりにも早くその予定は崩れた。

「第六試合が終わりました」

と告げられたのは、シンが部屋を出て行き、時間からして試合が始まってすぐだったのだ。西の控え室にいた剣闘士は驚天動地に陥った。どっちが勝ったのか？ 皆恐らく同じ答えを出していただろう。

シルヴァンはそれを確かめるべく急いで決闘場に向かった。

決闘場に向かう通路で、シルヴァンは前から来る人影を認めた。

息を乱さず、汗一つかかない玲瓏な女性の姿は、シルヴァンに一瞥を投げ、僅かに微笑んで通り過ぎた。

その後姿を後に、決闘場に向かう。

決闘場に繋がる入口からは、決闘場に散乱された紙 負けた投票券が散らばっているのが見えた。試合の勝敗に不満 格上が格下相手に負けた場合や、最頂の剣闘士が負けた場合 があれば、観客は容赦なく罵声を飛ばし、購入した投票券を投げ捨てる。

敗者がその光景を見るのは辛いだろう。券の散らばり具合から、先の試合は人気があつた方が勝利したことが解る。

今そのゴミを一生懸命回収している係員の姿が見られた。彼らが全部回収すると、アナウンスが流れた。

「続きまして、第七試合を始めます。選手入場です」

入口にいた係員が、行進を促す。

シルヴァンは砂地に足を踏み入れた。

同時に、対面の入口から彼の相手も姿を見せる。

「西、ウェイブラス騎士団一番手、シルヴァン。東、ゾーラ騎士団一番手、リー・ウェン」

決闘場には剣闘士二人の他に、退役した帝国軍騎士の中でも特に位の高かった者二人が交代交代で審判を務め、壁の側に救護班が控えている。また、万が一の場合に備え魔術師も待機していた。

決闘場の中央で、黄と緑の剣闘士は対峙した。  
くさりかたひら  
鎖帷子を来た審判二人がそれに近付く。

「使用する得物は種類も数も自由、相手の生死は問わないが、一方的な惨殺行為は禁止とする。それを破った場合は即失格とする。また、我々審判が勝敗を判断した場合はそれに従うこと。以上！」

そう淡々と述べ、試合前の最終確認をすべく審判二人はその場か

ら離れて話し合った。

「よう、シルヴァンだったよな、奇遇だな」

口を開いたのは昨日マルスヘルムや他の騎士団を馬鹿にするような発言をしていたリーという東方系の男だった。年齢はシルヴァンより少し上くらいだろう。

「運命つてのは皮肉だな。悪いが、今日この場で大会から消えてもらうぜ」

シルヴァン是一向に口を開かず、リーに関心がないかのようにコロッセオの観客に目を配っていた。その態度にイラッとしたのか、リーは口を歪めた。

「どうせ今日がお前がこの場に立てる最後の機会だから教えてやる。トーナメントの組み合わせはランダムでなったんじゃないやねえ。クインラン將軍がわざとこういう形にしたんだぜ。お前らみたいな弱小騎士団の一番手を初っ端でぶっ倒せば、ウチの騎士団の人気はあがって逆におたくらの株は下がるって寸法だ」

「最初から知ってる」

初めてシルヴァンは口を開いた。

「ゾーラ騎士団つてのは卑怯者の集団なんだつてな」

「なにイ！」

リーは醜い渋面を作った。

審判が確認を終え、

「これより試合を始める。互いに間隔を取りなさい」

シルヴァンは背を向け、その言葉にすぐ従った。

その背に

「<sup>セイバー</sup>剣つてのは時代遅れの武器だつて事を証明してやるぜ」

と呪詛の言葉をリーは吐き付けた。

約十五メートルの幅を取ると

「構えッ！」

シルヴァンはセイバーを縦に構え、騎士の礼をした。

リーの方は礼などせず、<sup>スピア</sup>槍を前にしただけだった。

試合開始の合図であるベルの音がコロッセオに轟いた。

「始めイッ！」

両者はまだ動かない。相手の間合いを計っているのだ。

観客はといえば、実はこの試合が本日のメインイベントだったので大盛り上がりだった。歓声を上げ、拳を振り上げ、鼓舞する。

しかし、そんな応援も剣闘士二人には届かない。彼らは既に己の、互いの世界に入り込んでいた。

両者は徐々に時計回りに動き、間合いを詰め始めた。

立ち位置が百八十度入れ替わった時、リーが打って出た。

射程範囲の長いスピアを突き、すかさず退く。それを難無くシルヴァンはかわした。

スピアは大人数相手でも一対一でも抜群の効果を発揮するので、用いる剣闘士は多い。だがそれだけ競争率が激しい中、大会に出場したのだから相当な使い手なのだろう。

リーは何度も突いては退き、突いては退くの攻撃を繰り返した。シルヴァンはそれをかわすだけで攻撃に転じようとはせず、客観的に見ればリーの優勢だった。

スピアが横に薙がれると、素早く掻い潜り、敵に詰め寄る。初めてシルヴァンが攻撃に移った。

しかしその行動を予期していたのか、切り払うスピアの勢いそのままに体に引きつけ、柄の中央を中心に回して見事な円を形成し、防御壁を形成する。あまりの速さに一本の槍が円形の楯に変化してしまったとの錯覚を覚える。これではどんな攻撃も跳ね返してしまうだろう。

駄目もとでシルヴァンはセイバーを出したが、案の定弾き返される。

「ケケケ、バーカ！　んなモン通用しねーよ！」

体ごと回転させてさらに勢いをつけ、再び薙ぐ。くらえばひとたまりもない攻撃力だ。

体にぶつかってしまう直前、彼は跳躍してそれを回避する。

その瞬間を見逃さずリーは空中で身動きが取れない敵目掛けて思いつ切り突いた。

客席からは「ああ！」とか「キャア！」という悲鳴が上がる。

ニヤリと笑みを浮かべたのも束の間、リーは自分の必殺技が失敗したのを悟る。

カキーンと甲高い音がした。

なんとシルヴァンはスピアの尖った穂<sup>ほ</sup>を、セイバーの刀身で受け止めたのだ。一朝一夕で身に付けることのできる技ではない。

軽やかに後ろ一回転を決め、着地する。その姿は息一つ乱さず、

華麗に髪を掻き揚げる仕草に歓声が上がる。

リーは内心少々焦っていた。あれだけの速度、破壊力を持つ技を回避できる者はそうそういない。まして空中では“避ける”ことは不可能なのだから。

高慢なプライドが真実を認めない。

再び攻撃に転じる。

ありとあらゆる方向から技を繰り出し体のバランスを崩そうとするが、シルヴァンはそれ以上の速度で体を操り紙一重の差で衝突を免れる。

極めつけは、リーが渾身の力を振り絞って放ったスピアの上に片足で着地したのだ。

この時客の大半はシルヴァンの虜となった。

リーはそこで始めて相手が只者でないことを理解した。緊張で掌に汗が滲む。

「来ないのか？」

と言い放ったのはシルヴァンだった。

リーは十八番が敢え無く失敗したと相手の余裕怒り、冷静さを欠いた。

「言わしてやんぜツツ!!」

スピアを縦横無尽に操り、倒さんとする。円状に回転する槍は旋風を起こし、砂を巻き上げる。

シルヴァンとは言えば、攻撃が激しさを増しても顔色一つ変えず対処する。しかもスピアの速度に慣れてきたのか、回転している槍にさえ応戦し、動きを止める。その度にリーはスピアを再び回転させなくてはならない。

時間が経つに連れ、次第に体力がなくなってくるのをリーは感じ

た。時間にして二十分経過していた。本来であればその二倍近い時間は動けていただろうが、ずっと攻撃し続け、対戦相手は逃げるばかりなので腕が疲れてきたのである。息も上がってきて肩で呼吸していた。

逆にシルヴァンはこれまた試合開始時と全く変わらない姿勢で構えていた。

業を煮やし、リーは挑発した。

「どうした！　なんで攻撃してこねえ！　怖気づいたか！」

その言葉とは裏腹に、シルヴァンは全く怖がってなどいない事を感じていた。

「わかった」

冷ややかに告げられた瞬間、リーの背中に悪寒が走った。

さっきまでの防御姿勢は一体なんだったのか、と思わせるほど執拗な白い閃光は逃れようとする相手を捕らえ、着実に追い詰めていく。

距離を詰めてしまえばスピアの射程範囲は不利なものへと変貌する。故にリーは敵を懐に入れてはならなかったのだ。

もう遅かった。

剣の奏でる調べは激しさを増し、ついに槍は主の手から離れた。興奮は最高潮に達した。

しかし、勝者の放った一言を聞いたのであれば、誰しも驚愕の極みに達するだろう。

「拾えよ」

リーは初め何を言われたのかわからずにいたが、すぐさま憤怒の



表情になり我を忘れた。

地面に落ちる槍を拾い、あらん限りの力で敵目掛け、投擲した。審判の止め<sup>や</sup>の言葉も間に合わず、槍は高速で飛ぶ。

もう試合の勝ち負け、相手の生死などリーには関係なかった。ただ相手が苦しみ、自分のプライドが満たされたかっただけなのだ。

が、彼はすぐ、またしても攻撃が効を成さなかったことを知るハメになった。

槍はシルヴァンの手前、数セートのところで停止した。シルヴァンは飛んでくるスピアをなんと右手一本で捕捉したのだった。

観客が驚きに目を見開いた次の瞬間、槍は持ち主目掛けて再び投擲された。それも神速で。

リーは避けなかった。否、動けなかったのだ。

彼の得物は耳を掠め、遙か先の壁にビンとのめり込んだ。壁にはひびが入り、スピアは半分以上が煉瓦の中に埋もれている。

リーの腰は砕け、尻餅をついた。

審判はその光景を見て慌てて旗を上げた。

「勝者、シルヴァン」

と、場内に宣言<sup>コール</sup>され、一瞬の間において大喚声がどよめく。

コロッセオに投票券の紙吹雪が舞い、罵声、嬌声、歓声が飛び交う。

シルヴァンは剣を鞘に収め、

「僕の知り合いにじゃじゃ馬娘がいるが、そっちの方が手強かったな」

とまだ腰を抜かしているリーに言い捨て、華麗に礼をした。

決闘場を出る際、歓声に応えるべく彼は両腕を天高く突き上げた。「どうだった？」というようなポーズだ。

それにさらなる大歓声が応じる。

シルヴァンは満足した表情で決闘場を後にした。

＊＊

「クシユン！ クシユン！」

ライカは鼻を擦った。

「どうしたの、ライカちゃん？」

「ん〜、誰かがわたしの噂でもしたのかなあ」

「いやあ、それにしてもシルヴァンさんスッゴクかっこよかったねえ。やっぱりすごいなあ」

興奮しきった顔でナナは呟く。

「そうでしょー」

「やっぱりあたし、あの人だったらいいかも……」

「なにが！？」

鬼の形相で問い詰める。

「な、なな、なんでもないよ。こつちのことよ」

慌てて誤魔化す。

ライカは慚然とした表情を決闘場に向けた。

「続きまして、第八試合を始めます。選手入場です」

アナウンスされると、シルヴァン以上の絶叫が轟いた。とりわけ女性の声が。

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

!!!」

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
！！ コールさま ！！」

「コールさまよー！！」

「コールさまゝ！！」

「コールさー！！」

「コールさまゝ！！ コールさまゝ！！」

「余裕で勝っちゃってくださいね、コールさまー!!」

「コールさま〜！ そんな奴ちゃちゃつと倒しちゃつてくださーい  
！！」

あの女性集団から黄色い声援が飛ぶ。  
ライカもナナも溜息を吐くと共に、何故かちよつと安堵した。  
あんなんじゃないなくて良かったな、と。

## 大会三日目： 銀の牙（一）

赤の月、第五週第五の日　大会二日目が終わりに、三日目がきた。前日はどんでん返し有り、波乱万丈有り、予想通り有りの一日だった。ゾーラとウェイブラスの一番手が早くも対戦し、下馬評を覆してウェイブラスの若者が勝利したことは噂好き<sup>ゴシップ</sup>な街人の話題の一つになった。ゾーラの一選手、リー・ウエンを除いて他の騎士団の一選手は皆勝利を収めた。

だが、全ての試合が安全に終わったわけではない。ハイヴァーン率いるチェイスタルの一番手ケレンドスは対戦中相手に致命傷を負わせた。傷は酷く、もう軍職は続けられない、というのが医師団の見解だった。

無論賛否両論があつたわけだが、基本は死をも覚悟で出場しているのだから、というのが主な意見だった。

幸いと言うべきか、その不運な剣闘士はウェイブラス騎士団の者ではなく、第七の将　ジェイス・ランバルディーン<sup>ゴディス</sup>の騎士団員だった。

その結果に、眉を寄せたのはウェイブラス騎士団副将、マルスヘルム准将だった。

「あの青二才は何を教育しておるんだッ！！」

怒りを顕に、血で顔を赤くさせる。

「やはりやりおったか！　いつかはやると思っていたぞ！！」

「落ち着け、マルス」

と宥める<sup>なだ</sup>アリオン・ハンサーネスの米噛みもピクピクと震えてい

る。あまり感情を頭にしないアリオンには珍しく、怒っているのだ。

「これが落ち着いておられますか！ 一人殺したようなものですぞッ！」

「確かにそうだ。だが、ケレンドスのやつもルールに則<sup>のっと</sup>ってやったのだからやつに非はない」

「それは重々承知です！ だが！」

「お前の言いたいことは痛いほどわかる。わたしも同じだ」

ようやくマルスヘルムは落ち着きを取り戻し、呼び出していた二人の騎士を向いた。

「早ければお前たちは準決勝、おそければ決勝でケレンドスと対戦する。わかっておろうが、一切情けはかけるな」

「ただし殺すなよ」

というアリオンの言葉にも怒気が含まれている。

シルヴァンともう一人の男 三人のうち、一人は昨日敗れたのだ は頷いた。

\*\*\*

第一回戦ではどの騎士団も一人は敗戦していた。  
今日行われる第二回戦は昨日の第一試合の勝者がシードなので、

他の十四名が戦い七名が勝ち残る。続いて行われる第三回戦ではシードの一人が加わって四人が残る。

その四人は最終日、くじ引きで対戦相手を決める。つまり今日の試合を勝ち残った者は相手が誰になるのか予想できないのだ。

シルヴァンは東の控え室で休息していた。

相手の戦力は未知数。あまりにも不確定要素が多すぎる。彼は昨日の試合を見ておかなかったことを後悔していた。が、いまさら後悔しても仕方がないのでリラックスしている、というのが彼の決定事項であった。

シルヴァンは座りながら自分のセイバーを見つめた。

調子は悪くない。昨日のように動けるなら、勝機はある。

扉がノックされ、シルヴァンの出番が来たことが告げられた。

入口からコロッセオを覗くと、その光景は幾分昨日とは違った。

まず客席に“色”が付いている。それは帝国軍騎士が己の体に支給される色付きの武具を装着しているからだ。観客専用席に収まりきらない分は、各騎士団応援席の前部が観客用になり、後部はそれぞれの騎士団が座を占めている。

上から見れば南北部分を除いて白、赤、緑、橙、紫、黄、青の七色が綺麗に円を形成していることだろう。

パラスラの白、チエイスタルの赤、ゾーラの緑、クルバルティスの橙、トゥアドランの紫、ウェイブラスの黄、最後にゴデイスの青だ。

彼らは概それらの色をした鎧、鎖帷子、胴着を目立たせていた。シルヴァンは自分の腕に巻いてある黄色い布を見た。

時は近い。

気持ちを落ち着かせようと、深呼吸をした。

昨日は実力以上のものがあつた。何故なら相手が“卑怯者”だつ

たからだ。今回は違う。

百メーラほど前方の入口には同じように、一人孤独に佇む影がある。

「西、トウアドラン騎士団一番手、シン。東、ウェイブラス騎士団一番手、シルヴァン」

熱された砂地に、二人の剣闘士は進んだ。

決闘場の中央で相見ゆ。あいまみ

互いに相手の姿を見つめあった。

男とは思えないほど艶やかな黒髪、大空のように澄んだ碧眼、誰もが虜になってしまいそうな美貌、すらっとした身長に鍛えられた体軀。腰には一本のセイバー。

一方、額と耳を隠す綺麗な白混じりの金髪、黒曜石のように光る瞳、小さな潤んだ唇、見事なまでに整えられた顔の輪郭、そしてあまりにもバランスのよい体付き。腰には二本のセイバーが。

二人はそこで対峙する。

どちらの眼にも戸惑いや緊張、怯えの色はない。

審判の二人は例の如く説明を終え、その場を離れた。ずっと女の方を見つめていると、

「どうかした？」

と透き通るような声が訊ねた。

シルヴァンは話しかけられた事に慌て

「い、いや……」

「そう」

シンはフツ、と微笑んだ。

どう見ても剣闘士には見えないとシルヴァンはこの時思ったのだが、後にそれが誤りだったと悟る事になる。

そして相手を甘く見すぎていた、ということも。

「離れなさい」

彼らはゆつくりと間隔を取った。

「構えッ！」

シルヴァンは剣を抜いて騎士の礼をし、続いてシンも優雅に腰を曲げて礼をした。

「始めイッッ！」

歓声が轟く。特にトウアドランとウェイブラスの陣営から。

が、試合開始してすぐ、歓声は静かになりゆく。

観客は目の前の状況をいぶかしんだ。

シンが構えない。剣を抜こうとさえしない。

シルヴァンですらも状況が掴めていなかった。

「お願いがあるの」

客席には聞こえない声でシンはシルヴァンに語りかけた。

シルヴァンは構え続けるのを止めない。いつ何が起きてもいいように。

「これに触ってみてくれない？」



その不可思議な問いの意味は何なのか？

シンは徐に腰からセイバーを引き抜いた。  
おもむきろ

銀の剣だった。鋼より鮮やかに光り、鉄よりも光沢を放つ。  
しろがね

彼女はその剣の刃をシルヴァンに向けた。

「少しだけでいいから」

返答はない。

シンは肩をすくめた。

「しょうがない。まあ当然よね」

そう言つて鞘に収める。

「でも、わたしがこの勝負に勝ったら触ってみてくれない？ 無反  
応は肯定と取るわよ？」

沈黙

「じゃあイエスってことで」

と、シルヴァンは跳び、セイバーを振るう。

が、刀身は直撃する手前で停止する。

シンの白刃が応戦したのだ。

さっきとは別のもう一本の鞘から瞬間的に抜いたのだ。その速度、  
まさに神技。

「慌てないでよね」

こんな状況にも拘らず、その美しい女性は楽しんでいるように見  
て取れる。

その自信の源は一体なんなのか。  
剣を払い、二人は距離をとった。

そこで再び歓声が響き始めた。

シルヴァンの表情は真剣そのものだが、いまだシンの方は微笑を  
崩さない。

シルヴァンは近付き、シンの顔に向かってセイバーを薙ぐ。

シンは避け、白刃を顔に狙いを定めて突くがシルヴァンは後転跳  
びしながら足で攻撃者の顔を蹴ろうとする。

が、攻撃を回避しながら攻撃を繰り返す方も凄いが、相手も然る  
者、同じように後転跳びで蹴り上げられる足を僅かな差で避ける。

体勢を整え、シンが動いた　　と思った刹那、鋼の打ち合う音の  
みが鳴り渡る。

見えるのは剣が動く軌跡だけだった。それと互いに交じり合い、  
どこからどこがシルヴァンので、どこからどこがシンのものか判断  
するのは難しい。

刃と刃の領域は互いにぶつかりつつ、相手の領域を侵食しようと  
蛇の如く動き回っていた。

その一步も退かない攻防はあまりにも長いこと続いた。

彼らを中心に砂埃は飛び、風は舞い、音は激しさを増す一方。  
応援団は固唾を吞んで見守っていた。

その時点で経過時間は三十分を優に超えていた。

変化が生じた。片方がもう片方を押し始めたのだ。

どっちが優勢なのか？　答えは

一方がバランスを崩した　それはシルヴァンだった。

よろめくシルヴァンを、シンの白刃は逃さない。

シンは屈み、大腿筋にエネルギーを溜め、前に跳躍した。あまり

にも速い。

剣が躍る　が、シルヴァンは上に跳躍し、空中で軽やかに回転する。高さ四メートルは跳んだだろう。

後方に回られたシンは後ろを振り向く。

通常、そのような人間離れた技を見れば誰しも驚くだろう。その証拠に、コロッセオには「ああッ！」という驚愕の声が洩れる。しかし彼女の顔に浮かんでいたのは驚愕ではなく、純粹な“悦び”だった。

さらにその唇から発せられた言葉、

「やるじゃん」

は、シルヴァンに動揺を誘い込む。

その隙をシンは逃さず、再び跳んだ。今度はシルヴァンは飛べなかった。

剣を払い、応戦する。

本気を出さなければ負ける、と彼は判断し、持ち前の剣舞を披露する。

変幻自在に宙を駆けるセイバーの前に、シンもただ受け流すだけで精一杯だった。

次第にシンは壁際に追い詰められ、状況は圧倒的にシルヴァンに有利だった。

シルヴァンはほぼ勝利を確信し、鎧で保護された腹を刺そうとする。

が、セイバーは目標を見失う。

シルヴァンの頭上に影が落ちた。

ああ、太陽を背に、シルヴァンと同じように空中に身を躍らせているではないか。しかも、その高さはシルヴァンのよりも高い。その姿はまるで空を飛ぶ白鳥のようであった。

シンが着地した時、シルヴァンは焦り始めていた。何故ならその

時、シルヴァンが肩で息をし汗を流しているのに対し、シンは汗一つかかず息も乱していないからだ。  
シンはまだ微笑んだままだった。

「さてと、準備体操は終わりね」

言い方に比べ、愕然とするような内容だった。

今までの動きは全て小手調べだったと思わせるほどの速度でシンは走る。

あわてて剣で対応するが、勢い付いたシンの白刃を受け止めきれない。

シンが腹に蹴りを叩き込むと、シルヴァンは後ろに弾き飛ばされた。

砂まみれになりながらも立ち上がった刹那、彼の視界に白光が煌く。

反射的に身を掀ると、さっきまで彼の顔があつた場所に刃が突き刺さっていた。

矢継ぎ早に刃を突き刺し、シルヴァンの首を刎ねんとしていた。  
砂地を転げ回り一打一打を回避するが、その度にシンの刀が振り下ろされる。

シルヴァンが立ち上がった後も追跡する刃の勢いは衰えず、またもやシルヴァンは転倒した。

こうなっては仕方ない　シルヴァンの脳裏に浮かんだ決断。

シルヴァンはわざとその時立ち上がろうとしなかった。相手が突いてくるのを待っていたのだ。

案の定シンは上から刃を振り下げたが、シルヴァンはその攻撃を体全体で避けずに顔を少しずらしただけで回避した。

刀身が地面に刺さる瞬間、シルヴァンは両足をシンの腕に絡ませ、固め技を決めようとした。

が、シンは足を絡まされた時点で体に勢いを付け、前に倒れこむ

形になった。そんな状態でも手は剣を放していなかった。

シンの手はシルヴァンの足から解放されたが、着地に失敗して地面に倒れた。

チャンスだ。

だが、シルヴァンにもう襲う力はない。心臓は爆発寸前まで鼓動し、喉は渴き、手は振るえ、足は動かず、汗を垂れ流し、息遣いは荒れ、汗と砂が混ざって彼の体は汚れていた。

そんな状態の中、シルヴァンは敵を見つめた。

女剣闘士は悠然と立ち上がり、乱れた髪を整える姿は場違いなほど美しく、身に付けている衣服と装飾品さえ普通のものであれば、彼女ほど『美』という言葉が似合う女性はいないのかもしれない。

「我流にしてはすごいわ。太刀も鋭いし、目標に向かって最短距離を走ってくる。それに動き自体も素早いしね。ただ、やっぱり無駄が多いかな、他の我流の人に比べれば少ないとは思うけど」

と、そこで舌でいったん唇を湿らせる。

「……とても楽しかったわ。北方大陸で戦った時以来かな。ヴァリノイアにいた時の方がもっと楽しかったけど」

あくまでその口調は試合開始時となんら変わりなかった。しかしシルヴァンにとっては死を告げる死神デーモンの如き終了の宣告であった。

「わたし達”はね、ある人　わたし達は”彼”って呼んでるを捜してるの。”彼”はどんな人でどこにいるのかも全く分からないから、手がかりを元に捜索してる。

でね、わたしの仕事はこの大会に出る剣闘士の中に”彼”がいるかどうかを吟味しなきゃいけないの。で、わたしは候補を二人見つけた」

観客の声は彼らに届かない。もうすでに勝敗は喫しているのだ。

「一人はコール・オフ・アイジエンド。そしてもう一人は」

シンはゆつくりと指を差した。

「あなた」

シンが何を言っているのか、シルヴァンには全く理解できなかった。ただでさえ脳細胞が酸素と養分を要求しているのに、意味不明な発言に付いていく余地はない。

シンは銀造りの刃を抜き、柄をシルヴァンに向かって差し出した。

「約束守ってくれる？」

天使のような微笑だった。場違いにも程がある。

シルヴァンは自分の敗北を悟っていた。相手との差は歴然とし、且つ埋めがたいものがある。

勝者に従うべく、彼は刃の柄を握った。程好い重みが加わってくる。見た目は普通のもので変わらない。だがこれに何の意味が？

「どう？ 何か感じる？」

シルヴァンは何度も握りを変え、感触を確かめたが何も起こらなかった。

「いや……」

シンは溜息をついた。玲瓏な美貌が初めて見せる、愁いを帯びた

表情だ。

「そう　残念。ハズレか……」

その瞬間、“それ”は起こった。

剣の銀が輝<sup>しろがね</sup>き

頭の中になだれ込む、“爆発”　そして消失。

「  
！！！！」

銀の剣は手を離れ、カキンと音を立て砂地に落ちる。

体を曲げ、シルヴァンは苦痛に顔を歪めて苦悶の表情をする。力が入った手は頭を抱え込んでいた。青白い血管は皮膚から浮かび上がり、額から汗が滲み出していた。

シンはハッとした。

「もしかして　」

その拳はギュツと握られ、喜びと戸惑いの感情に満ちていた。

まだシルヴァンは苦しみ続けている。

客席からも、不審と疑問の声がする。

シンは只一人、満足げに頷いていた。

「すみません」

と審判の一人に話しかける。

「棄権します」

「ハ？ お前何を言っているんだ？」

審判は思わず聞き返した。

「今言った通りです。わたしは棄権します」

審判は顔を見合わせ、相談を始めた。

「棄権する自由は剣闘士にあるはずだわ」

ときつぱりと言い渡され、赤い旗を前、白い旗を後ろにして交差させ、司会席に向けた。

「え……え……え」と、シ、シンの棄権により、シルヴァンの勝利」

と覇気のないアナウンスが場内に響くと、かなりの間をおいてブーイングの荒らしが巻き起こった。

「なにやってんだ！」

「意味わかんねーぞー！」

「金返しやがれー！」

「この腰抜けどもー！」

けれどもシンだけは満足な顔をしていた。



まだ地面に崩れるシルヴァンの側に鞘を置き、

「その剣はある偉大な方がその息子の為にお造りになられた物。名は シルバー・ファンク 銀の牙、大切になさい」

シルヴァンは気力を使い果たし、そこで気絶した。

その光景は、見るものが見たならば勝者と敗者の立場が全く逆の想像をするだろう。まさか地に伏す男が勝者、凜々しく直立する乙女がまさか敗者などと、だれが予想し得うるのか。

シンは西の出入り口に向かう途中で一度だけ振り向いた。

シルヴァン……どこかで聞いたような名前だが、誰の名だったかな……。

それになんとなくだけど“あの人”に顔立ちが似ているわ。

まさか、“あの人”の血族の方か！？

いや、違うはずだわ。

なぜなら、“魔王”の血を受け継ぐ人はもはや“あの人”しか残っていないのだから。

そしてシンは歩き去った。

シルヴァンは審判に担ぎ出される形で決闘場を後にした。

## 大会三日目： 銀の牙（二）

白く

淡く

ここはどこだ？

僕は何をしていた？

僕はどこにいた？

僕は誰と戦っていた？

僕は 誰だ？

「おお、目が覚めたか」

初老の男の顔が映った。白髪交じりで髭を蓄えた目付きの鋭い、だが優しさに満ち溢れた眼を持つ男だ。

「わしがわかるか？」

「はい……ここはどこですか？」

「医務室だ」

周りを見た。彼はふかふかの医務用ベッドに身を横たえていた。清楚な白で彩られた広い医務室には多くのベッドが並列に何行も配置されている。とても静かで、窓から差し込む光は淡く優しかった。その部屋には彼ら二人しかいなかった。

「痛みはあるか？」

試しに頭を振ってみたが、異常はない。

「大丈夫です」

「さっきの試合で何があった？」

思い出してみた。シンという名の剣闘士の實力の前に敗れ、彼女から銀色の刃　セイバーを受け取ったことまでは覚えてる。そしてその後頭に痛みが走ったのも。

「……お前さんが嘘を言うとは思えないしな。かと言ってそのような不思議な現象があるものかの」

「すいません、ご期待に添えなくて」

シルヴァンはすまなさそうに謝ったが、マルスヘルムは首を振った。

「気にするな、次の試合で頑張ればいい」

キョトンとした顔にシルヴァンはなった。

「え？　いや　あれ？」

「なんじゃ、そこは覚えてないのか。シンは棄権したのじゃ。理由はわからないがな」

「棄権？　何故ですか？」

「さあな、わしにもわからん。わしはあの後フロウの奴に問うた、一体何の真似だ、とな。そしたら奴は『わしにもわからん。ただシンにある人物を捜していて、その人に会ったら棄権する、とだけ言われたのだ。それが我々とシンの交わした契約条件だ。まさかそれがお前のところのボウズだとはな』とぬかしおったわ。シルヴァン、シンと知り合いだったのか」

「いえ、全くの初対面です。ただ僕もあの時『ある人を捜してる』と告げられましたが、僕には何の意味だかさっぱりわかりませんでした」

横の棚に、二本のセイバーを見つけた。一つはカルダンから譲り受けた物、もう一つは

「どちらにしろシンの捜していた人物はお前さんじゃったわけだな」

シルヴァンは首を傾げた。

あんな強い女性にはあったことなんてないな。

いや、あるとすれば三年前以前だ、それがシルヴァンに思い当たる可能性だった。

だが、捜しているのにどんな人かもわからない、というのはどういうことだ？

「体が無事ならそろそろ動き始めた方がいい。昼過ぎの第二試合でチエイスタル騎士団のレーナウと戦うことになっているからな」

そう聞いてシルヴァンの瞳は燃え上がった。

それを次の試合にむける気合と受け取ったのか、マルスヘルムは笑いながら去り際に

「そうそう、心配して見舞いに来てくれてる人達がいるぞ。あんまり心配かけるなよ」

と、医務室を後にした。

マルスヘルムが部屋を立ち去るのとはほぼ同時に彼にペコリと頭を下げて、医務室に入ってきた女の子が二人いた。

「シルヴァン！ 大丈夫？」

と、声を掛けたのはライカとナナだった。彼女達は居ても立っても居られないような顔をしていた。

「ああ、大丈夫だよ」

「ほんとに？ ほんとに大丈夫なの？」

「本当だ、この通りピンピンさ」

と笑い、シルヴァンは二の腕に力瘤ちからこぶを作る。  
ライカとナナは安堵の溜息をついた。

「あんまり心配させないでよね」

「ごめんごめん」

「……さっきの試合の女の人強かったね。なんだかシルヴァンが手も足もでないくらい強そうに見えたよ」

「確かに強かった 実際手も足も出なかったんじゃないかな」

「そ、そうなんだ」

「でもなんでシンさんは棄権しちゃったんですかねえ？」

ナナは不思議そうに呟いた。

「さあね。僕にもわかんないよ」

「あのさ……」

「ん？」

「実はさ、さっきの試合の結果というか内容に不満だった人達がさ

」

「『八百長試合だ』とかって言ってた、かい？」

「う、うん、わたしはそんなの絶対信じてないけどね」

「あたしもです」

「ありがと。でもやっぱり僕が観客だったら絶対おかしいと思うな。まあとりあえず過ぎたことは仕方ないし、次の試合で汚名返上といくか」

シルヴァンはそう意気込んだ。

ライカとナナは微笑む。

ナナは何かを差し出し、シルヴァンは受け取った。

「これは？」

「あの、お昼ご飯です。大したものじゃないですけど、もしよかったら食べてください」

ライカとシルヴァンは彼の掌にある林檎を見つめた。

いつの間にイ      と思ったのがライカであることは言うまでもない。

「ありがとう、後で頂くよ。      そろそろ準備でもしようかな」

「じゃ、わたし達もう行くね。また応援してるから」

「がんばってください」

彼らが立ち去った後、シルヴァンは新しいセイバーを手にした。

見れば見るほど吸い込まれていきそうな銀色の輝き      それは見るものを魅了してしまう。

片刃の形で、オーシアン大陸西岸部で主流となっている両刃のそれよりも厚さが薄く、切れ味が良さそうだ。どことなくカルダンから貰った水の国スーン産の剣に似ている。

振ってみると、軽くて扱いやすかった。

試し切りを試してみたかったが、物騒だし周りに手頃な物がなかった。それでシルヴァンは諦めて医務室を出た。

\*\*\*

三回戦に備えて控え室で休んでいる最中、シルヴァンは同じ部屋にコール・オフ・アイジェンドがないか捜したが、それらしい人物はいなかった。

別の控え室にいるか、どこかで休んでいるのだろう。

シルヴァンは次の試合で新しい武器 シルバー・フアング 銀の牙 を使うつもりだった。

決闘場に出ると、いささかシルヴァンの応援は少なくなったようだった。

「西、チエイスタル騎士団二番手レーナウ。東、ウェイブラス騎士団一番手シルヴァン」

中央に進んだシルヴァンは相手を見つめた。嫌な目付きをした男だ。シルヴァンは一種の嫌悪感を覚えた。

「よう、八百長野郎」

レーナウは早速挑発を開始した。

「前の試合はすごかったな。あんな無様に地面に跪いてたのに、どうしてあの女は棄権なんかしたんだ？ どんな技使ったんだよ、教えてくれや」

レーナウは質問したが、それに対してシルヴァンは無表情に無視した。

「おい、聞こえねえのか、ボケ」

「静かにしてくれ」

目を細め、返事をするのもめんどくさそうな調子で返した。



「アアン!？」

どうやらチェイスタルやゾーラの騎士団は短気な者が多いらしい、というのが挑発した反応を冷静に分析したシルヴァンの判断だった。さらに何かを言おうとしたレーナウだったが、審判に「離れなさい」と横入りされた。

後ろを振り向いて歩いている最中、シルヴァンは深呼吸をして気持ちいを落ち着けていた。実はさっきの試合のことを多少は引きずっていたのだ。

落ち着け。こんなところで、こんな奴に負ける僕じゃない。

「構え」と言われてもやはりレーナウの方は礼などしなかった。

一方、シルヴァンは相手がどんな男でもしつかりと騎士の礼をし、左手にシルバー・フアングを握った。

「始めいイッツ!！」

開始の合図 スピーカーを通されたゴングの音 がコロツセオに鳴り響くとほぼ同時に、鋼鉄爪クロウを手にしたレーナウは動いた。クローとは獣の鉤爪ナックルを模った、長さ約五十センチの鉄でできた“爪”を二から三本鋼鉄拳に付属させたような武器だ。扱いが難しい分、熟練者は自由自在に綾取って他の武器の追隨を許さないことで知られる。但し、それは熟練者でなければただの鉄クズと化すのと同義だ。

果たして、このレーナウという男の実力は如何程か。

クローがシルヴァンの衣装を掠める。その攻撃速度だけでも、伊達に一騎士団の二番手だけはあった。

だけどシン程じゃないな。彼女の攻撃はもつと速かったはずだ。シルヴァンは少し気持ちが楽になったのを感じたが、油断は禁物、

と自分を戒めた。

次は繰り出される攻撃を、シルバー・ファングを用いて難無く受け止めた。

キーン

が、シルヴァンは驚いていた。

何故なら、彼はクローを“左手一本で受けた”のに対し、なんとレーナウはシルヴァンの“防御”に“耐え切れなくなって両手のクローで刃を押していた”のだ。レーナウの赤くなった顔から、彼が相当な力を出しているのが察せられる。

一瞬にして攻防の立場が入れ替わってしまったのだった。

ぼんやりと、シルヴァンは眺めていた。顔を真っ赤にしながら刃を押し戻そうとする男と、それを涼しげに片手一本で相手をする男の顔の対比は滑稽さを醸し出していた。

なんだ、この体に湧き上がるような力は。

こんな力が眠っていたのか？

この力はいったいどこからやってくる？

この刃からか？

シルヴァンは己の左手に握られた銀しろがねの刃を見下ろした。

刃自体はさつきとなんら変わらない状態だった。

シルヴァンは首を振り、改めて敵を観察した。

敵の男は早くも額から汗を流し、顔を真っ赤にしていた。腕の欠陥が浮かび出るほど力を込めていた。

しかし、シルヴァンは左手一本に力を込めただけで相手を押ししている。

シルヴァンはさらに力を入れた。ズズズ、とレーナウは後ろに押され始めた。地面に踏ん張る足の跡が色濃く砂に残る。

次第にセイバーはクロー自体を押し、剣先が顔に近付いてくるとレーナウの顔は蒼白になった。

それを見て、シルヴァンはフツと笑い、一気に力を抜いて横に逃げた。力のベクトルは拮抗する相手を見失い、レーナウは物理法則にしたが導つてものすごい勢いで転倒した。

「グエツ!」「ウオツ!」「ギャツ!」と呻きながら、四回転、五回転、六回転したところでようやく彼の体は停止した。体中砂だらけとなりところどころ出血して赤くなっている。

レーナウはハツとし、顔を上げたが目の前に敵はいなかった。周りをみると遠くでシルヴァンが刃を鞘に収めて悠然と見下ろしていた。

さらにレーナウに追い討ちをかけるように、観客席は失笑の嵐であつた。

開始直後に早くも見事な転びっぷりを披露し、果ては相手に情けをかけてもらっていたのだ。

観客はこの時再びシルヴァン側に傾きつつあつた。その理由は今の十数秒の戦いを見ていてはつきりしている。

レーナウは慌てて立ち上がり、憎しみで顔を歪めた。

「オラアアアツツ!!」

掛け声と共に追撃を加えようとするが、またしても力負けする。

シルヴァンはレーナウが攻撃してくるたびに優雅に回避し、攻撃するチャンスをあつさりと放棄する。

それが五分、十分、十五分も続けられると、客は劇を見ている感覚になつてきた。

そして観客の興味は次の試合へ変わりつつあつた。次の試合はあのコール・オフ・アイジエンドが出陣するからだ。

レーナウの応援は確実に少なくなり、もはや勝敗は目に見えていた。

汗だくのレーナウを尻目に、シルヴァンはシルバー・フアングを観察していた。

が、それを隙と判断したのかレーナウは懷から小さな球を出し、シルヴァン目掛けて投げつけた。とっさにシルヴァンが判断してその球を払おうとしたのは流石ともいえるが、その瞬発力が仇となっていた。

剣先が球に触れるや、球は破裂し、赤い液体が飛び散った。その赤い血の如き染料はシルヴァンの顔全体を染めた。

シルヴァンは呻き、膝をついた。赤い染料が目に入ってしまったのだ。

満足げにその光景を見届けたレーナウは

「バーカ！ そりゃ特殊な染料でな、なかなか取れねえぜ！ 何にも見えねえだろ！！」

と、哄笑した。

途端にコロツセオからは歓声      レーナウ側<sup>サイド</sup>      と、ブーイング

シルヴァン側      が轟いた。

レーナウはコロツセオを不敵な笑みで見回した。ブーイングしてくる客を相手にしているかのように。

「アアン、卑怯だア！？ バカじゃねーのか、こっちはきちんとルールに則ってんだろぅが、黙ってるクズどもが！！」

審判は何も言わない。つまり、彼らは目潰しも一つの武器であると認め、ルールに違反していないと決断したのだ。

「残念だったな、呪うんだったらテメエを恨めや！！」

レーナウはいまだ膝について顔を抑えるシルヴァンの左後ろに回

り、飛び掛った。

シルヴァンは目を開いてみたが、何も見えなかった。視界が赤く染まっていて、痛みが走る。

クソッ、痛みのせいで集中できない！

音がした。

発信源からして、左後ろに回りこんだのか？

いや、わからない、どっちだ？

左？ 右？ 後ろか？

シルヴァンは焦った。

僕が敵の立場なら、すぐにでも仕留めに行くだろう。

鋼鉄のクローがシルヴァンを襲おうとした時、“それ”は聞こえた。

左後ろだ

躊躇する暇もなく、シルヴァンとはにかく左後ろの方向にシルバ  
ー・ファングを出した。

カキイン

鋼と銀はぶつかり合った。

もし もし、シルヴァンが今目を見開くことができたならば、  
驚愕を通り越したレーナウの顔が映ったことだろう。

レーナウは思わず退き、場所を変えて攻撃をしようとした。

…… またあの声が聞こえた。

右前

そこに剣を出すと、再度攻撃を防げた。

真後ろに飛べ

躊躇わない華麗な飛躍はレーナウの突きを見事に回避する。

左に切り込め

シルヴァンは今考えたいこと　その声の主について　があつたが、とりあえず胸の奥にしまっておく事にした。目を閉じている分音に全神経を集中させねばならない。目を閉じているのに、シルヴァンの動きは最前と変わらぬ優雅さだった。

レーナウはバランスを崩したことが幸いして剣の猛襲から逃れることができた。

コロッセオはすでにシルヴァン一色だ。もうレーナウを応援しているのは極僅かな者達だけである。

シルヴァンは叫んだ。

「誰だ、お前は!?!」

審判二人と、レーナウでさえ怪訝な表情になる。

「どこにいる!?!」

シルヴァンは辺りの気配を探った。

一人……二人……三人……間違いはない、医療班と魔術師達を除けば審判とレーナウの三人しかいない　感じられない。

誰だ、僕に話しかけてくるのは?

ニルアドか?　精神感応テレパシー?　違う、これはテレパシーじゃない

い！

誰かが僕に“話しかけている”んだ！

後ろだ

透き通るように美しく、それでいて威厳に満ちた声がするや否や、シルヴァンは振り向いて受け止める。

畳み掛ける

指示に従い、見えない敵を相手に次々にあらゆる剣技をお見舞いする。不思議とその言葉どおりに従えば、相手が追い詰められていくのが手に取るように分かる。カキン、カキンという甲高い音と、相手の焦ったような息遣いが、しっかりとした証拠であった。シルヴァンの頭の中では実際の様子と相違ない情景が映し出されていることだろう。

殴れ

思いつき右腕を突き出すと、ボキッと鈍い音がした。偶然放たれた右腕はレーナウの口にクリティカルヒットしたのだ。

しかし、これは“偶然”なのか？

続いてドサツという音がし、しばしの間をおいて、

「レーナウ失神により、勝者シルヴァン」

拍手と歓声とブーイングと花吹雪が飛び交う。

だがシルヴァンの耳には届かない。見えない敵を相手にしたことで、謎の声のせいでかなり体力と精神力を使い果たしたのだ。

彼が今目を開いて周りの光景を見たのであれば、地面には無残に

仰向けに倒れるレーナウの姿、空には太陽の光を浴びて白光を放つ紙吹雪、そして周りには前の試合を批判していた者でさえいまはシルヴァンの虜になっていのがわかったであろう。

そして、あの時、戦闘中に目を開くことができたのなら、シルバ―・ファングの銀が妖しく煌いていたことも。

シルヴァンは歡呼に応える余裕もなく、審判に肩を貸されて退場し、医務室へ向かった。

\*\*\*

その日の夜

そこは、暗い部屋だった。

部屋の中で複数の影が動いた。

「赤竜騎士団のシンより。“彼”を見つけた。“あの人”については依然手がかりなし」

暗さでわかりにくい、微かな光に照らし出されるのは額と耳を隠す綺麗な金髪を持ち主、女剣闘士の姿であった。

「必ずイリニウス陛下と、将校閣下方にお伝えして。そして、西岸部に散らばる同志達にも伝えて」

クイイ、と鳥の鳴き声でした。

「じゃあ、急いで」

部屋の窓が開けられると、その物体らは真っ暗な夜空に向かって



上昇し、飛翔した。それは、隼、鷹、鷲など勇猛な鳥類の姿であった。

彼らが夜空の暗黒に消えると、シンは窓を閉め、カーテンをかけた。再び部屋は暗闇に包まれる。

しばらくした後、シンは徐に呪文<sup>スベル</sup>を唱え始めた。

「ゲツベラ・クルイト・ゴースイー・サ・ダスラ」

トランスフォーム  
変化 の解除の呪文だった。

「スル・クル・ハンダーテュル・キナスト・ゾージ」

詠唱が終わると、彼女の体に小さな変化が生じた。

頭部の金髪からチョココンと可愛らしいものが出てきた。そして、腰部分からもふさふさとしたものが。

頭から生えたもの、それは狐の耳。腰から生えたもの、それは狐の尾。

シンは尻尾と耳を優しく撫でると、背伸びした。

「フワァー、やっぱりもとの姿が一番よね。常に人間魔法の 変化の呪文を継続させるなんて、わたしみたいに妖力が小さい妖魔には厳しいわあ。疲れたし、今日はもう寝よつと」

と呟き、愛嬌のある笑顔を浮かべてベッドの中に潜り込んだ。

## 大会最終日：聖騎士（一）

ドオン、ドオン

赤の月、第五週第六の日　　赤の月の最終日、ガイズの青空に、  
花火が散る。

帝都ガイズの街は人、人、人で溢れていた。初日でさえいつも以上に人の数が多かったのに、その初日ですら華やかさを失っていたと思わざるを得ない程の混み具合だ。

煉瓦の道路は人の行き交いでほぼスペースが埋まっており、憩いの場である各広場も所狭しと人や馬が存在していた。夏ももう終わりに差し掛かっているのに、人が寄り集まっているせいで気温が上昇していた。

昼前なのに酒場ははやくも満員になる店も多く、店側としては嬉しい限りだった。

そして客の専らの噂は言うまでもなく本日の大会の行方についてである。昨日全四試合が行われ、その勝者四人が今日雌雄を決し、王者が誕生するのだ。

「誰かねえ、優勝するのは」

「コールに決まってんだろ。あいつこそが最強さ」

「そうだそうだ、俺はあいつに千ルーアも賭けたんだぞ、負けてもらっちゃ困る」

「何言ってやがる、ケレンドスだよ、奴しかいねえって。あの戦いつぶりを見ただろ、あんな情け容赦ない攻撃に太刀打ちできる奴なんてそうそういねえよ」

「確かにな、ケレンドスの攻撃力は随一だ」

「俺はボーカスだと思うな。残った四人の中で唯一一番手じゃないのはあいつだけだ。番狂わせを起こしてもらいてえな」

「番狂わせと言えばシルヴァンだろ。二回戦のシン戦は腑に落ちない内容だったが、他の試合では他を寄せ付けない見事な戦いだっただぞ」

「……一体今日は誰と誰が最初に戦うのかな」

「俺は是非とも、コールとシルヴァンの試合を見てみてえ。あいつらの戦い方に共通してるのは『華麗』とか『優雅』ってところだな。考えてもみる、あの二人が戦うところなんてよ」

「全くだぜ、さぞかしすげえ試合になるんだろうな。畜生、俺も見に行きてえぜ」

「今日見に行けるのは金持ちの連中だけだからな、羨ましい限りだ」

「フツ、俺は今日観戦しに行くぜ」

一人が自慢げに言った。

「ナニイイツツツ!!」

「ナニイ!」

「裏切り者め」

「なんて薄情な奴なんだ、見損なつたぜ」

「な、なんだよ、別にいいじゃねーか」

「一人だけ金持ち気分か」

「ちげーって、お前らだって一度くらいは最終日の試合を見たいと思うだろ、俺は今日のチケットを彼女にプレゼントしたんだよ。」

……愛の言葉と共にな」

「オオオオオオッ！！」

「オオッ！」

「プロポーズか、プロポーズ！」

「で、どうだったどうだった？」

「勿論オーケーさ」

聞き手は拍手して恋の成就を祝った。若干の皮肉も混じっていたが。

「そうさ、今日は二人きりで見に行くんだ。高かったぜ、二人分もチケットを手に入れるのは」

「二人分もか！？ お前相当頑張ったな。ていうか、お前この後の生活大丈夫なのか？」

「そう、そこが問題なんだが……すまねえが、二、三ヶ月泊めてく

れない？ それか少し金貸してくれ」

「フザケンナッツ！！」

その男性は見事彼女と結ばれたが、代わりに大きなものを失ったという……

とまあそんな感じの話題だった。

その噂を余所に、朝十時頃、コロッセオ内部にてくじ引きが行われ、対戦相手が決定される。そして今剣闘士達が会場に到着しつつあった。

\*\*\*

コロッセオの一室に大会運営委員会と警備兵、ほんの数名の将軍諸侯らが集まっていた。

その大きな部屋の中央に、台の上に置かれた箱があった。

箱の前に立つのは二人の男、シルヴァンとボークスであった。

箱の横に立つ、運営委員会の中年の男が口を開いた。

「そろそろ時間だな」

と言った矢先、部屋の扉が勢いよく開けられた。

「遅れて申し訳ないつ。なにぶんここに訪れたのは初めてなもので、場所がわからなくて迷ってしまったよ」

「おお、コール選手じゃないか。待ってましたよ」

「いやいや、遅れてしまったかな？」

「いいや、ギリギリセーフだ」

「そうか、それはよかった」

現れた男は微笑み、二ツと白く磨かれ抜いた歯をチラリと見せた。シルヴァンは振り向き、その青年を見た。見かけたのは初めてではないが、意識して見たのは初めてだった。

扉の前に立つ男は、すらつとして身長はシルヴァンと同じくらいで、体付きもしっかりしている。パラスラ騎士団の証である純白のマントを羽織り、鋼の鎖帷子で身を包んでいた。鍛え上げられた彼の体軀からは、無駄な脂肪はどこにも見当たらないはずだ。必要な栄養分は結果的に全て筋肉へと変換されてしまっていた。鼻は細く高く、双眼はシルヴァンと同じ青色をしていて、整った輪郭の顔であった。

しかもその整いようといったら、男であつても惚れてしまいそうな美しさだ。シルヴァンも綺麗だとか言われるが、もし気の利いた吟遊詩人が彼のことを形容するのであれば、美の神々が至高の業の限りを尽くして創り上げた人間像に、誤って魂を吹き込んでしまったと表現するだろう。言うなれば、『伊達男』という言葉が一番似合うのかもしれない。

しかも彼の醸し出す雰囲気は決して雅やかな女のものではなく、非常に上品な『漢』のオーラも放っているのだ。それが女も、男さえも引き付ける彼のカリスマ性だった。

そして最もシルヴァンの眼に留まったもの、それは彼の髪だった。そこまで長くはなく、前は目に差し掛かるくらいの長さで、左右の襟足は細く三つ編みにされて垂れている。しかしシルヴァンの注目したのはそこではない、髪の色だった。それは、“金色”というよりも“黄色”をしていた。黄の髪は光を反射せず、人の視線を真っ先にそこに注目させていた。

シルヴァンの脳裏に、例の言葉が思い浮かんだ。

他の人間とは違う運命を辿る者は、その容姿も自ずと他人とは違う、と師は言いました。

髪の色、瞳の色が世の常と異なる人間は魔法に限らず何らかの才に非常に恵まれているそうです。

かつて、光の妖術師ニルアドはシルヴァンにそう告げた。

一体このコールという二十歳の青年にどのような才能、はたまた運命があるのか。

コール・オフ・アイジエンドがシルヴァンの隣に立ったところで、運営委員の男が言った。

「そろそろ時間ですし、本日の対戦を決めるくじ引きを始めます」

「一人足りないようだが？」とコールは手を上げて問うた。

「いいでしょう、ケレンドス選手は一番最後に引く事になってるから、いてもいなくても彼の引くくじは一つしか有りませんからね」

「ハハハ、そういうことか」

「では、ボーカス選手からこの箱の中にあるくじ、もとい番号の付いたボールを取り出してください」と、台の上にある穴のあいた箱を指し示す。

ボーカスは前に進み出、中身をかき混ぜるようにして一つのボールを掴み出し、見せた。

「ボーカス選手、一番」

壁際に控えていた他の運営委員の者が壁にかけられている大きな紙にボーカスの名を書き込んだ。

「続いてシルヴァン選手」

シルヴァンも無造作にさっと一つの球を取り出す。

「シルヴァン選手、三番」

これでシルヴァンの相手はコールかケレンドスのどちらかになることが決まった。そして、コールが引き当てた運命の対戦相手とは？

「コール選手……、四番。」

よって、準決勝第一試合はボーカス対ケレンドス、第二試合はシルヴァン対コール・オフ・アイジエンドという取り決めに決定いたします。決勝はその両試合の勝者が対戦します」

思わず部屋中から溜息が洩れた。

「第一試合は今より二時間後、正午ちょうどを目処に始めます！」

\*\*\*

部屋を出、どう時間を潰そうと考えていると声を掛けられた。

「待ってくれ、シルヴァン」

振り向いた先にいたのは、言うまでもなく黄髪と碧眼の男、コー



ルだった。

「初めまして、と言った方がいいかな。お互い初見ではないが、ちゃんとした挨拶はしたことがないからな」

「そのようだな」

「やはりな。じゃあしつかり挨拶をしておこう。僕はコール、正式にはコール・オフ・アイジエンド伯爵で、パラスラ騎士団の千人隊長だ。おっと、別に自慢したいわけじゃないからな、気にしないでくれ」

「僕の名はシルヴァン、バスティア公国の 竜巢の谷 出身だ。よろしくな」

「こちらこそ。だがすまないな、これから敵として戦うって言つのに話しかけたりなんかして、きつとこれも作戦の内だと思ってることだろう」

「いや、気にしてないよ」

「そうか、それはありがたい、感謝するよ」

「何か？」

「一度君と話したいと思っていた。話じゃなくても、お互い知己とまではいかないまでもそれなりに親しくしたいと思っていたんだぜ」

「どうしてだい？」

「それも話したいと思っていた。だがここは場所が悪い、もしよければどこか落ち着ける場所に行かないか？」

コールはコロッセオ内部の関係者区域の一施設に案内した。

「まあ座ってくれ。どうした、別にとって食おうとしてるわけじゃないんだ、腰掛けてくれ」

シルヴァンは勧められた席に座った。

その施設は大会スタッフが使用する通路の横にある簡素な休憩所で、何人か二人をチラチラと見ながら飲み物を摂取していた。

コールはさて、と切り出した。

「初めに僕が君と話したいと思っていた理由だが、僕の試合は毎回必ず君の試合の後だったのだよ。だから君の試合は全部観戦させてもらっていた。そこで僕の抱いた感想を素直に述べるとだ、君はかなり強い。おそらく僕が今まで戦ってきた中でも相当な使い手の一人だ。その強さの秘密を少しでも解き明かしたかったのださ」

「買いかぶりだ」

「いや、違うね、僕はこれでも人を見る目はある方だぜ。我流とは言えあの見事な剣捌き、華麗に飛ぶ姿には脱帽した。僕も動きは良い方だが、あれほどではない。これは単なる予想に過ぎないが、次の試合で僕はかなりの苦戦を強いられるだろう」

コールは真顔でシルヴァンを賞賛した。彼ほどの男が褒めちぎるのだから、シルヴァンの腕前はやはり凄いのだ。

「君は僕の試合をどう見る？」

「いや、すまないが君のは一度も見た事がない。一回目はただ単に見忘れていたんだが、二回目と三回目はどちらも医務室にて治療を受けていたんだ」

「ハツハツハ、そういえばそうだったな！　ということは君が僕の戦い方を見ていない分、僕にもチャンスはあるのかもな！」

コールは聞いている側も気持ち良くなるような笑い声を上げた。彼は相手の凄いとこは素直に賛美し、自分に不利な状況すらも笑って言いのけている。その自信こそが彼の強さなのかもしれない、とシルヴァンは感じた。

しかもシンと同じくシルヴァンの剣術を我流と見抜く眼力の持ち主でもある。

これは容易ならぬ相手だ。

コールはふと真顔に戻り、シルヴァンに顔を近づけた。

「ところでだが君の戦った全三試合の中で、唯一と言ってもいい、ほぼ勝負に負けた試合のことだが……」

「ああ、シンのことか」

「そう。僕は別に男尊女卑の心を持っているわけじゃないから、強いものは強いと偏見なしに評価したい。彼女は強かった、それも異常なくらいに。昨日、一昨日の試合　リー戦とレーナウ戦を見る限り、彼ら二人は何かない限り君には勝てない。君はそれだけの実力者と見た。が、それを考慮しても彼女の強さは別格だ。何か秘密があるんだろうか」

「僕もだ。あの身のこなしは生まれてから身に付けられるものじゃないように感じたな」

「そう感じたか。いや、実はあの戦いを見て僕もシンと戦いと思っていたんだ。弱い相手と戦って勝つより、強い敵と戦って学ぶことはとても多い。是非一度手合わせ願いたいものだな」

その直向ひたむきに強くなろうとする姿勢と気質に改めてシルヴァンは好印象を覚えた。

「それに何故シンは棄権なんかしたんだ？ あのと戦中君とシンの間に何があった？」

シルヴァンは言うべきか言わないべきか迷ったが、マルスヘルムから聞かされたことをそのまま教えた。

「……なるほど、つまりシンの探し人は君だというわけか。だが初対面なんだろう。前に会ったことは全くないのか？」

ここでまたシルヴァンは考えた。彼は三年前以前の記憶を失っていて、その前だったら有り得るかも知れないということ。

少しの間吟味した後、このコールという青年は信頼できると判断し、包み隠さず事実を述べた。

「……ふむ、俄にわかには信じられない話だが、ここでなんの根拠もなく否定するのは愚拳に等しい。その話は僕の心の中にしまっておこうと爽やかにコールは応えた。

「できればこのことはあまり口外しないで貰いたいな。うちの上司達も知らないことなんで」

「ハハハ、それは嬉しいな、君の上司ですら知らないことをこの僕に教えてくれるとは。それは、君が僕を信用してくれている、と勝手に判断していいことなのかな？」

シルヴァンにとってはこの上ない回答が帰ってきた。  
やはり、この男を信頼したのは正解だった。

「勿論。この事を知るのは僕の出身の村の人達くらいだけだ」

「それは嬉しい限りだ、そのような数少ない親密な人達の中にこのコールが列されるとは」

すると、コールは席を立ち、

「その信頼に応えよう。改めてご挨拶させて頂く。

我が名はコール・オフ・アイジエンド、歴史あるガイザード帝国のアイジエンド侯爵家の第一子なり。皇帝陛下より伯爵の地位を賜り、帝国第一軍パラスラ騎士団の千人隊長を務めさせて頂いている。貴殿の親友の列席に加えて頂いた御礼に、我は如何なる時も貴殿を友とし、貴殿が悩みし時は絶えず共に支え続け、貴殿の敵は我の敵とし、共に戦うことを誓う」

騎士の礼をした。

シルヴァンも立ち上がり、同じく騎士の礼をした。

「その言葉、痛み入る。では、こちらでも僭越ながらご挨拶させて頂こう。」

我が名はシルヴァン、竜巢の谷より参りしは、親の顔も自分自身すらも忘れた男。それでも我を友と呼びし者の為、我は何時如

何なる時も友を第一とし、決して裏切らないことを誓う」

どちらから、と言うでもなく二人は握手を交わした。

「よろしくな、シルヴァン」

「こちらこそ、コール」

二人は微笑んだ。その光景は絵にしたくなるほどに輝いていた。

「それでは、用も済んだことだし僕はこれにて失礼する。次会う時は敵同士だが、それでも互いの健闘を祈ろう。次は砂地の決闘場で

」

コールは悠然と歩み去った。

その後姿は気品に満ち溢れていて、窓から差す太陽の光で神々しく煌いていた。

\*\*\*

剣闘士によるくじ引きが終わると、すぐに対戦表がコロッセオ前の大広場に公開された。その時それを見た者達の反応と言えば、慌ててその場で議論する者、何かわかつているかのように頷く者、対戦の取り決めに喜ぶ者など多種多彩であった。

それはライカとナナ、カルダンとクロージェンドも例外ではない。

「やっぱりあの二人は戦うんだね。いつかは戦うとは思ってたけど」

「なんだかあたし怖いなあ」

「なんで？」

「んー、正直シルヴァンさんには勝ってもらいたいけど、ライカちゃんも見ただけどコールさんだつて凄く強いじゃない。だから一筋縄ではないかないし、なんかどっちが勝つにしても無事じゃ済まないって思ったの」

「そんな不吉なと言わないでよ、応援するこっちがそんなんじゃないってシルヴァンに届かないわよ」

「う、うん、わかってるわよ。ちゃんと全力で応援するもの」

「でも大丈夫かなあ」

「うん……」

一方

「コールに決まっとる！」

「いいや、シルヴァンだ！」

「フン、思い出してみろ、昨日のシン戦はどう見てもあの勝負はシンの勝ちだろう」

ウツとカルダンが詰まった。  
そこに付け込み、

「つまりだ、実質あの試合の勝者はシンであり、敗者のシルヴァンでは到底あのコールには勝てんのだよ。本来はシンとコールが準決勝で戦う定めだったのだ」

「いや、何か理由があってシンは直前で棄権したのだ」

「では訊こう、その理由とは何だ？」

「む……多分、シルヴァンに恐れをなして……」

「冗談も休み休み言え！ お前もわかっているはずだろう！ シンはシルヴァンに情けをかけたのだよ」

「一体なんの訳あつてだ」

「そんなことわしの知ったこっちゃない。どちらにしても、シルヴァンじゃあ役不足だ。お前もくじ運がないな」

クロージエンドのホッホと声高らかに笑う姿をカルダンはずっと睨んでいた。



## 大会最終日：聖騎士（二）

正午

コロッセオは満員御礼だった。観客数はそのうちの一割にも満たず、他は全て帝国騎士が占めていたが。とにかくうるさかった。規律ある騎士団員でさえ、この日の結末に想いを巡らせ、常に議論しあっていた。警備に当たる兵士は気が気ではないはずだ。

この日、今まで騎士団席に座っていた客は全員真南の席に収まり、騎士団席には座れる限りの騎士がぎゅうぎゅう詰めになって着席している。

空を飛ぶトウアドラン騎士団の幻獣、ワイバーンやリトル・ドラゴンの騎手は、ドーナツ状の円に綺麗な七色の色と他の二つの柄が着色されているのが見えた。

いつもと変わりなく、青空に浮かぶ太陽はガイザード全土を明るく照らしていた。

この日、ロイヤル・ボックスの一席　皇帝席の隣に佇む一つの黒い影があった。フードで顔を隠すローブ姿の魔術師、アーバインである。最終日になってようやく登場してきたのだ。フードの下からその表情を覗いたならば、退屈しきつてめんどくさそうな顔を見ることができたかもしれない。

ロイヤル・ボックス付近でも動きがあった。貴族席の上段に将専用席があつて通常はそこで七人の将は観戦するのだが、最終日だけ将は自分の騎士団の区域にて勝負を見守るのが習慣となっていた。それは自軍の剣闘士を応援するのと同時に、昂ぶり過ぎた部下を戒めるのが目的だ。

今、時刻は迫りつつあった。

赤のチェイスタルと青のゴデイスの將軍が王者の場に通じている三つの階段のうち、それぞれ左右の階段を使って決闘場に降り立ち、

東西の入口に向かった。

「これより準決勝第一試合を開始いたします。選手入場です」

入口に二人の剣闘士の姿が現れると、各騎士団から地を揺るがすかの如き怒号が発せられた。応援団は立ち上がり、腕を振り回して声を張り上げている。

所属している騎士団だけじゃない。他の騎士団ですら良い戦いぶりを選手には惜しめないエールを送っていた。それは観戦客も同じだった。

現れた選手に、二人の將軍はなにやら話しかけている。多分落ち着けとか、頑張つてこいとか言つて部下を鼓舞しているのだろう。ボーカスは、青い魔法戦闘具を着用しているジェイス・ランバルディーンに話しかけられると真摯な眼差しで頷いていた。その一方でハイヴァーンとケレンドスはニヤニヤしながら談話していた。その様子から、緊張のかけらなど一切見当たらない。

「西、ゴデイス騎士団二番手、ボーカス。東、チェイスタル騎士団一番手、ケレンドス」

肩を叩かれて励まされた剣闘士は中央に進んだ。その姿を、二人の将は入口付近で見守っている。

その後ろ、コロッセオ内部でシルヴァンとコールは別方向からながらも同じ光景を入口の穴から見届けていた。聞こえるのは応援とも騒音とも判断しがたい音のみであった。

そして、試合開始の鐘がなった。

シルヴァンは静かに銀の剣を見や<sup>しろがね</sup>った。

銀の輝きは色褪せることなく彼の体を映す。

昨日の謎の声はあれ以降一度も聞こえることはなかった。それはシルバー・ファンングを手にした時も同じだった。

あの、鐘のように澄み切った、威厳のある声の主は一体誰なのか。あの声はどこから来たものなのか。

テレパシーじゃない。明らかな人の声だ。周りの人間には聞こえない、自分のみが聞くことのできる謡うような声。

眼が使い物にならなくなった時、声は自分の代わりにあらゆることを指示してきた。声に従うと、自然と体はいつものように滑らかに動き、まるで舞うように自分が動いていたのを覚えている。

実際あの時今までで最も体がよく動いたのを覚えている。力に満ち溢れていたのも。そして今まで経験したことの中で、昨日の不思議な体験が最も不気味だった。

自分の事を知っているような存在が自分に話しかけてきたような感覚だ。もしかして、声の主は自分を知っているのか？

だとすれば誰？ どんな存在？ 何のために僕に話しかけた？ その物思いを打ち破り、彼を現実世界に引き戻す大歓声が聞こえた。

シルヴァンが決闘場を見ると、膝をつく剣闘士の姿があった。

試合時間は二十分というところだ。

審判二人は互いに頷いて旗を上げた。

「勝者、ケレンドス」

決勝に進出する男が一人決まった。

ケレンドスはただ薄ら笑いを浮かべてハイヴァーンのところに戻った。ハイヴァーンは元来た道に戻り、ケレンドスは入口の暗闇に消えた。

うなだれるボーカスは満身創痍の状態で帰還した。そのボーカス

を優しく迎えたのはジェイスだった。通り過ぎるボーカスをシルヴァンは眺めた。全身汗まみれで、息も絶え絶えである。

どこかおかしい、とシルヴァンが思ったのはボーカスの顔色が蒼白で、唇の色が紫だということに気付いた頃だ。フラフラ、と夢遊病者のように歩行していたボーカスは、突如としてボタンと倒れた。その場に駆け付けたシルヴァンは直ちに彼を仰向けにし、意識を確かめた。戻りかけていたジェイスはその異変に気付き、係員も近付いてきた。

「どうした!？」

「いきなり倒れたんです」

シルヴァンはボーカスを横たえ、心拍と呼吸、瞳孔の動きを調べた。よく見ると、彼の傷口がどす黒い紫に変色している。

「……まさか、痺れ薬が武器にすり込まれていたのか」

「まだ間に合います、急いで彼を医務室へ!」

「クソッ!!!」

ジェイスはボーカスを抱え、脱兎のスピードでその場を去った。あとに残ったのは眉をしかめるシルヴァンと、呆然とする運営委員の者達だけだ。

\*\*\*

しばらくした後、西側の入口にアリオンが訪れた。彼も怪訝な顔をしている。

「何かあったのか？」

シルヴァンはさっきの事を事細かに説明した。

アリオンは人目も憚らず舌打ちし、「ハイヴァーンの奴め、そう来るか」と呟いた。

「お前は気にしなくても良い。とりあえずは目の前の戦闘に集中しろ。相手はあのコールだ、用心してかれよ」

「はい」

「あの若さで千人隊長を務めるほどの実力者だ。腕の力だけではなく、戦略にも長けているはずだ」

「はい」

アリオンはそこでフツと微笑んだ。

「楽しんで来い」

＊＊

「西、ウェイブラス騎士団一番手、シルヴァン。東、パラスラ騎士団一番手、コール・オフ・アイジエンド」

シルヴァンには前方百メートル先から向かってくる、白のマントを靡かせる男の姿が見えた。その後ろには鍛え上げられた肉体を見せ付ける四十代前半の男の姿が　　 balan 卿だ。

周りの音がうるさいが、正直どうでもいいくらい耳に入らなかった

た。

「コール！！ コール！！」

「<sup>コール・コール</sup>コール万歳！！ コール・コール！！」

「シルヴァン！！ コール・シルヴァン！！」

「<sup>コール</sup>いいぞ！！ コール！！」

黒髪の青年と黄髪の青年は砂の戦場にて対峙した。  
シルヴァンの表情を見て「何かあったのか？」と、コールは訊ねた。

シルヴァンが事の次第を手短に説明すると、

「気に入らないな」と額に皺を寄せ呟いた。

シルヴァンはコロッセオを見渡した。

「すごい応援だな」

「ああ」コールも話題を変えるのに賛成だったのだ。

「それにしてもだが……君の応援は……」

「すまない、気にしないでくれ」

コールですら苦笑いしてしまう光景が南の方角にあった。

最終日だというのに、観客席の一角を占めるコール専属応援団の姿がそこにはあった。目測でも五十名近く居るはずだ、なぜならそ

こだけオーラが違<sup>ちが</sup>うから。応援幕まで拵<sup>しな</sup>え、みんな白い衣装で統一していた。

しかも応援する声のそうだが、大きさも男顔負けの音量だ。明らかにそれとわかる応援がコロッセオ中に憚りなく響く。

「コールさま」

「コールさま」

「勝ってくださいね〜」

「ケチヨンケチヨンにしちゃってください」

シルヴァンもコールも苦笑するしかなかった。一体どうやって六千ルーアという大金を手に入れたのだろうか。二人はその出自を知りたい反面、知らないほうがいいだろうと思った。

「噂には聞いていたが相当、いや、かなりモテるんだな」

「……ありがたいんだが、ああいう女の子はちょっと苦手だね。もっと静かな子がタイプなんだよ。あーゆう人達に疲れてるからかもしれないけどな」

「そうなのか。いや、でも驚いたよ、君がそういうことを話すなんて」

「なんだ、朴念仁ってイメージでもあったか？」

「まあ多少は」

「フフ、そのことに関しては親がうるさくてね。街娘はどうこう、伯爵家の令嬢がどうのとやかましくて。僕としては優しく受け止めてくれる女性が好みなんだが」

「約束してる人でもいるのかい？」

「誰も。本当さ、親が何でもかんでも決めようとするんだが、その度に僕は直談判しなくちゃならない。だって結婚なんて一生モンじやないか。あとから取り止め、なんてのは家名を汚す事になるんだぜ、それだけではどうしても避けなくては。しかし、僕くらいの年齢の貴族の子供は婚約していてもおかしくないし、場合によっては結婚してる者もいる。そろそろ真面目に考えないといけない時期なのかな。」

無論恋したことがないわけではないけど、それは一種の憧れみたいなところがあったし。できれば素の僕を見てくれて、あんまり騒がない女の子に出会ってみたいものだ。それがどんなに侯爵家の目からみれば賤しい身分の人であつても」

「……そこまで言うなら、一人君にピッタリのいい子がいるかもしれない。優しくて話していて楽しいし、おそらくその子には約束している人はいないはずだ。年は君よりちょっと下くらいかな」

シルヴァンもコールも笑った。おおよそ試合前には相応しくない内容の話だ。これから両者は敵として戦わなければならないのに、和んだ雰囲気を作ってしまったている。

「ハッハッハッハ！ それは是非とも紹介してもらいたいな！ それとどうだ、大会が終わったら少し飲みに行かないか？ 大会の結果に拘らずさ」



「いいね。行きつけの酒場にその女の子がいるんだ。多分気に入ると思うよ」

「それは嬉しい。だけど、紹介してくれるからといって手加減はしないぜ」

「当然」

二人の好漢は審判が近付いてくると距離を空けた。

「構え」

シルヴァンは腰から二本ある剣の内一本を抜いた。それは シルバー・フ 銀の牙 アング ではなかった。

実を言うと、シルバー・フアングは使いたくなかった。奇妙な体験が、シルヴァンに例の武器を使わせることを良しとしないのだ。シルヴァンは切羽詰った状況に追い込まれるまでは封印しておこうと決めた。

コールは背中から得物を取り出した。それは約一メートル二十センチの刃渡りの大剣だった。

その武器を見たシルヴァンの口から「クレイモア……」という呟きが洩れた。

クレイモア ソード 大剣と分類される両手用の剣の中では小さい部類で、使いやすさ、軽さで知られ、素早さが恐れられる武器だ。

コールは一撃一撃の重みよりも機敏性を重視したと思われる。もしくは自前の腕力で攻撃力をカバーできるからか。だがセイバーよりは明らかにクレイモアの方が威力は高い。

両者は互いに騎士の礼をし、構えた。そこで初めて二対の碧眼が

ぶつかり合った。

「始めイツッ！！」

二人は足を動かしながら徐々に間合いを詰め、間隔が十メートルまで縮まったところでいきなり激突した。

ガキイイーン！！ 鈍い音が響く。

二人の力比べはほぼ互角の均衡だった。シルヴァンが押せばコールが巻き返し、コールが押せばシルヴァンが巻き返すと言う風に。

埒が明かなくなったので、二人は離れた。

先手必勝　シルヴァンが走った。向かってくるシルヴァンを迎え撃とうとしたコールだったが、クレイモアの射程範囲内に入る直前でシルヴァンは地を蹴った。

瞬間、コールは上空の敵に大剣を突き刺そうとしたが、敵はその上をいつていて届かないと判断する。　素早く振り向く。

コールが反転するより早く着地したシルヴァンはそのままコールに切りかかろうとしたが、コールの大剣が間一髪でセイバーを防ぐ。コールはセイバーを払い、蹴りで応戦するがシルヴァンは楽に避ける。それに応じてシルヴァンもハイキックで頭を狙うが、コールは後ろ転回で回避し、最後に鮮やかに後ろ宙返りを決めた。すごく敏捷な動きだ。

動きが止まった。

今二人は次にどう打って出ようか検討しているのだ。

再び、二体の鳥は合見ゆ。

それからというものの、將軍も、兵士も、客も　誰もが応援するのを忘れて目の前の戦闘を見つめた。

まるでそれは舞台劇のようであった。最初から示し合わされたか

のように繰り出される攻撃を、くるのがわかっていたかのように身軽に避ける。

二人は決闘場を平面だけではなく立体的にも活用した。壁を駆け上がって移動したり、互いの頭上を何度も越えた。

その対決は見紛うことなき『舞<sup>ダンス</sup>い』である。彼らは己の剣技だけでなく、軌跡の美しさまで競っているかのようなものであった。傍目から見れば無駄な動きにしか見えない身の振りも、彼らにとっては非常に重要な意味を成していたのだ。一つ一つの動作が美しく、力強かった。

客席からは見えないが、シルヴァンとコールは真剣そのものの眼差しをしていたが、顔は笑っていた。

どれくらいの時が経ったのだろうか。誰もが時間を忘れ、固唾を呑んで試合を見届ける。その瞬間は、時はその意味を成さなかった。汗が飛び、切っ先が顔を掠めても彼らは動きを止めない。むしろその運動量と速度は増す一方だ。

ただただ、長い時間だけが過ぎた。

両雄の動きが止まったところで、ようやく時は動き始めた。

シルヴァンとコールは構えたままだが、どちらも攻撃しようとはしない。全ての手の内は出し尽くしたのであった。

コールはふと大剣を下に向け、深く呼吸した。戦いが始まって以来、そこで初めて目がそれた。

「やはり君は強いな」

と言うコールの息は弾んでいた。一方、シルヴァンも荒い呼吸をしているが、コールほどではない。

汗が、額を、頬を、顎を、首を、鎧を伝わり、熱砂の大地に落ち、ジュツと蒸発する。今、太陽は宙高く昇りつめ、気温は最高潮だっ

た。

コールは天を仰いだ。

仕方ない。使うか。

「このままだと先に僕の方が潰れちまうだろうな……、暑いのは苦手だよ、まったく。それに湿気もひどい。乾燥していた方がいいんだが……」と、ボソツと呟く。

視線をシルヴァンに戻した時、シルヴァンは何かを察知した。何を、何故感じ取ったのか。

それはコールの表情がさっきまでとは違う全くの真剣なものに変わったからか、それとも彼の放つオーラが周りの空気を変えたからか。

何をする気だ。シルヴァンは警戒してセイバーを構え直した。

「本気を出させてもらう」

腕を翼のように広げる。

何をしてくるのか、と思った矢先

「ゾンド・ユーリー・ハンスリル・チュラーシン・クラッサ・ベル」

コールの口からルーンの詠唱が発せられた。

瞬間的にシルヴァンは動いた。呪文の詠唱であれば、<sup>スベル</sup>なんとしてでも防がなければ。それとは別に、彼の脳裏には、もしかして、という嫌な予想が浮かんていた。

だが、コールは唱え続けながらもシルヴァンの攻撃を防御した。その最中も詠唱は続く。

「トル・ケニワズコ・デュルーサ・サィイン・ベッルン／ゴフーオ

「ト」

邪魔をしたいシルヴァンであったが、相手が防御だけに徹してしまつてはそう崩せるものではない。それに相手はコールだ。並大抵の技では攻略できない。

チィッ！ クソッ！

なかなか攻めきれないシルヴァンは悪態を吐いた。

「パラシア・スーン・パウ・ルールラ・ケース！ パラスラ！」

完成。コールはシルヴァンから飛び離れた。

……そして最後の言葉を叫ぶ。

「我が神、電神パラスラよッ！ 我に其<sup>そ</sup>の力をッ！」

空気が変わる。コールを中心に、台風の目の如く渦を巻き始めた。バチバチッ

電気が擦れ合う音がした。静電気が発生した時のような音だ。

バチバチッ バチバチッ

さつきよりも大きな音だった。音の間隔も短い。

バチッ バチッ

徐々に静かになり、それらの奇妙な音は気のせいか、と思い始めた頃 コールの体から青く、黄色い光が見えた。その光はコールの体を静かに巡り、彼の持つクレイモアにまでうねった。

そして

バチバチバチバチッ！！！！！

コールの体の内側から金色の光が迸った！

コールは光と化し、辺りを眩しく照らした。あまりの眩しさに皆

目をそむける。コロッセオに一つの太陽が誕生した瞬間だった。

シルヴァンは頑張って光の中心にいるコールを認めようと必死になった。

……ゆっくりと、光は弱まった。光が収まると、さっきまでコールがいた場所に、いた。全身に電の黄色い光を纏い、黄色の髪を天に向かつて逆立て、微笑している彼が。青い瞳とのコントラストが、より彼の美しさを際立たせていた。

その光景はあまりにも人間離れしていて、人々に畏怖の念を抱かせた。まるで神々や、その使徒を目の前にしているかのような。

観客席にいるライカの、いや、コロッセオにいる知識のある者の口から「聖騎士……」という言葉が洩れた。

前に本で読んだことがある。

パラディン  
聖騎士 それは神に認められた存在。

神自らが敬虔な信徒 騎士を選び出し、眼鏡にかなった者に与えられる称号。それは一つの神格に対してただ一人と定められている。

選ばれた者は神ご自身の手解きによって、魔法を扱うことができ。その威力や効果は計り知れない。何故なら、神がその時代時代で必ずしも聖騎士を選ばれるとは限らないため、記録が少ないのだ。わかっているのは呪文書が必要とせず、かつ修行次第で魔法使いでないのに上級な魔法すらも簡単に使えるということ。即ち、そこいらの魔術師より遥かに強敵なのだ。そして全ての聖騎士に共通していること、それは『戦士』であること。それは長らく謎とされてきた。

なぜ僧侶や神官、魔術師に特別な力を与えず、一介の武人に力を授けるのか。一説には、神の気まぐれだとか、決められていた運命だとか、何かを代償に特別な力を手に入れた、という仮説が数多く存在するが、真相は謎に包まれている。その謎を知るのは神と聖騎士

士のみである。

それはオーシアン大陸の公おおやけな歴史に、約百五十年ぶりにパラスラ  
神パラディンの聖騎士が現れたことが記された日であった。

## 大会最終日：聖騎士（三）

コール・オフ・アイジエンドは電いなすまを身に纏いし電神の使徒　聖バ  
騎士ラティンとなつて真の姿を現した。

鮮やかな光を見つめていたアリオンの口から小さな呟きが洩れる。

「電神パラスラ、か……。彼“も”か」

アリオンはコールを親友を見るような眼で見つめた。

そしてもう一人。驚きに目を輝かせる皇帝の横にいる不気味な影  
アーバイン。

その得体の知れない生物は嬉しそうに「ほう」と呟き、妖しげに  
紅の双眼を煌かせ、舌なめずりした。

シルヴァンは目の前にいる神に認められし男を凝視した。

「電神の聖騎士か……」

そう呟くや、コールが僅かに動くのを見、あわてて横に跳ぶ。そ  
の判断は正しかった。

間一髪でシルヴァンはコールのクレイモアを避けることができた。  
さつきまでコールのスピードよりも遥かに速い。今かわせたのは  
運が良かったからだ。



「何故、動きが早くなつたのか不思議かい？」

笑いながら問いかけた。微笑みは残酷なまでに慈愛に満ちていた。

「人間つてのは、脳で考えたことを体の各部分に伝えるまでに若干の時間差がある。<sup>タイムラグ</sup>それを電気の特性を利用して、伝達速度を速くすれば人はもっと速く動けるし、もっと早く物事を考えることができる」

コールは再び走った。

今度はシルヴァンに避ける時間はなかった。体を横に流しながら、右手に握ったセイバーで払おうとしたが、これは間違いだった。

なんと、コールが纏う電気はクレイモアを伝い、それに触れたセイバーを伝い、シルヴァンの体に伝導したのだ。

瞬間的に身を引いたのが幸いしたのか、痛みはあつたが大きいものではない。しかしもっと甚大な被害を彼は受けていた。右腕が動かないのだ。しばし痙攣したかと思えば、シルヴァンの意思に反して急に硬くなったりする。

「ほう、右腕だけですんだか、さすがだな。普通はそこで全身麻痺で倒れてるところなのに」

シルヴァンはとりあえず逃げた。が、コールはそれを追わない。かなりの間隔を確保したところで右手を無理矢理開き、左手に持ち変える。

コールはクレイモアをシルヴァンに向けた。

「ゾンド・イール・ヤアユ・ナルカ　ズ・ベイシンス・ワンサーフル　バイハーギア・ルッドマンテ・ジェンク！」

電矢の呪文。クレイモアから稲妻が発せられた。それは真つ直ぐにシルヴァンを襲う。

シルヴァンは左に避けた。それも紙一重の差でかわしたのだが、よく見ると衣装の一部が焼け焦げている。何十万もの電圧が、今彼の横を駆けたのだ。

電の魔法は雷の魔法より威力は小さいが、技の数で勝り使い勝手がいい。加えて電系統は肉体よりも神経にダメージを与えることで知られる。

夏は湿気が多いので電気発生 conditions は良くはない。それでも電気が発せられた事により熱が生じて空気は乾燥し、徐々に電により環境をつくり出してゆく。

休む間もなく、コールは同じ呪文を唱える。

シルヴァンは動かなかった。最前思いついた、あることを試したかったのだ。

青く黄色い稲妻が直進する。

シルヴァンはセイバーを頭上高く放り投げた。すると、電気の矢は突如として方向を変え、セイバーに吸い込まれるようにしてぶつかる。

「よしっ！」

シルヴァンは剣を避雷針にしたのだった。

セイバーは空中で明るく輝き、地に落ちて砂と接し、無数の砂はアースとなって電気を分散する。シルヴァンはそつと剣を触った。電熱によって若干熱くなっているが、見事に剣に溜まった電気が拡散されたのだ。

シルヴァンはホツとした。一か八かの賭けだったが、うまくいったのだ。とりあえず、急場凌ぎの対処法は見つかった、あとはどうコールを切り崩せばいいか。

コールはコールで、自分の放った初級魔法が防がれたことなど意

に介した様子もなく、ただ前方の敵を眺めていたが、繰り返し同じ呪文を詠唱する。しかしシルヴァンは同じ方法でこれを防ぐ。

次第に安心してきたシルヴァンだったが、どうやって相手と組み合えばいいのか。なにせ剣と剣が触れ合ってしまったら、コールの電はシルヴァンの体にまで伝導するのだ。これでは倒すどころか組み合うことさえ不可能だ。

コールは突然詠唱している呪文を変えた。

「ゾンド・ドルラ・イン・ナン・クルーア      アンニー・フェイ・  
グバラッダ・キオマーヴ！」

見た目は最前と同じ電撃である。それは同じように宙に浮くセイバーに直撃した。

しかし！

なんと、直撃したはずの電気の流れが、セイバーを経由してシルヴァンに向かっていくではないか。

その一連の流れを見極めるのが僅かに遅れ、シルヴァンに稲妻が直撃する。電はシルヴァンの体を金色に染め、彼の体の中身を浮かび上がらせる。

「グアアアア！！」

それは ライティング・ウエーブ 電波紋 の呪文だった。

あまりの衝撃に思わず膝をつく。電気はシルヴァンの脳に悪い作用を与える。今シルヴァンはいつもより物事をしつかりと考えられない。辛うじて肉体がまだ彼の意志に従え得るのは、コールとシルヴァンに距離があったことと、電波紋 の呪文は周りの物質に波紋状に分散されるので必然的に威力が弱くなってしまうからだ。だが、十分な効果は効果はあげることができたようだ。

「悪いが、これで終わりだ！」

コールが宣言し、クレイモアをシルヴァンに向けて 電矢 を放つ。

「ゾンド・イール・ヤアユ・ナルカ……」

シルヴァンは為す術なく、ただ敵の攻撃を待ち受けていた。コールにはどこにも隙が見当たらない。加えて魔法を用い、近くにいても離れていても彼の電撃からは逃れられないのだ。

コールは強い シンといい勝負なのではないか、とボンヤリ考えていた。

「ズ・ベイシンス・ワンサーフル……」

諦めというより、感嘆と賞賛の念が勝っていた。

そんな男とまだ戦いたかった。だが戦えたとして一体何ができる？ 思考回路はさつきより衰え、体もろくに動かないのに。

「バイハーギア・ルツドマンテ・ジエンク！」

クレイモアの剣先に電気が収束し、溜め込む。今までよりも強力だ。くらえばひとたまりもないはずだ。

……け

シルヴァンの耳に、微かに、だがはつきりとあの声が聞こえた。

……抜け

こんな時だというのに、シルヴァンはその声を捉えようと耳に全神経を集中させた。

クレイモアは光の大剣と化し、それ自体が光の矢に変わる。電気を帯びたことで大剣の温度は灼熱化しているはずだが、コールは気に留めた様子もない。その秘密は彼の両手にしてある特殊な皮手袋に由来するのか。

……を抜け

電は、切っ先で球状に爆発寸前に膨れ上がった。

シルバー・ファンゲ  
銀の牙 を抜け！

今度こそ、はっきりと何を言っているのか聞き取れた。

その瞬間、光の球は爆発し、電撃は奔流の如き怒涛の勢いで発射される。

ギュ                      ンツツ！！！！

躊躇せず、シルヴァンは右腰から銀の刃を引き抜き、それを前に翳す。

こんじき いなすま しろがね  
黄金の電と、白銀の刃がぶつかり合う。

バチバチバチバチバチッ！！！！

驚くべきことが起きた。電気は銀の刀身に伝わるが、持ち主の体まで届かない。何故か。それは、刃が電気を吸収したから。稲妻の

勢いが衰え、完全に消えた後もしばらくの間刀身では電気が纏わりついてしたが、小さなバチツという音と共に完全になくなる。

コロッセオは沈黙した。術者のコールも 被術者のシルヴァンも。特に、コールの驚きようと言ったらなかった。あぐりと口を開け、目をまん丸に見開いていた。

シルヴァンは呆然と、妖しげに光る銀の刃を見つめた。青く揺らめくオーラが刃から立ち昇り、銀を妖しく彩っていた。

これが、あの稲妻を吸い取ったのか？

そうだ

シルヴァンの考えを読むように、声がした。

その刃が、あの電撃を『無効化』したんだ

シルヴァンは思った疑問を口にした。自分の予想が否定されると半ばわかりつつも。

「お前は、この刃自身か？」

違う。それは単なる魔具だ。マジック・アイテム 未知なる効果を多く秘めた、な

「……だが、これのおかげでコールと対等に戦えるわけだな」

半分正解だが、半分外れた。今の君じゃ、まだ足りない

「……どうすればいい？」

コールが走ってきた。格段にその速度は上がっている。とりあえず応戦した。シルヴァンの予感が的中した。コールの電

気はシルバー・ファングによって無効化されているので、刃で対応する限りコールの能力は恐れるに足らない。素手で触れてしまった時は別だが。

コールの顔に、焦燥の表情が走る。彼もこのような状況は予期していなかったようだ。

君にとって重要なのはタイミングだ

声は淡々と告げた。

単刀直入に言おう。“舞え”

言葉の意味を理解しようと努めながら、コールの対応にも手際よく応える。シルヴァンは防御体勢に移っていた。これではコールも崩せにくかるう。

「どうすればいい？」

シルヴァンは同じ質問をした。その言葉を聞いたコールは一瞬怪訝な表情をする。

目を閉じる。そして感じる。今の君は眼から入る情報に惑わされすぎている

言われた通りに目を閉じてみる。声の主は最後にさらっと、シルヴァンにとって重要なことを告げた。

僕の指示に従えば、自ずと君の体は動き出すだろう。昔と同じようにな

「昔だと！ 知っているのか！？」

今は集中しろ。いつか話す機会もくるだろう。いいか、騙されたと思って“踊る”んだ

踊る？ 舞う？ 一体何をさせようと言った。

昔 僕は何をしていた？ 踊り子？ 歌い手？ 芸人の一座？  
考えられないな。

この状況下において、シルヴァンは自分が客を前に踊っている自分の姿を想像し、はにかんだ。

ものは試した。踊ってみよう。あの声のおかげでこの前は助かったようなものだしな。

「……やってみるか」

シルヴァンは深呼吸し、舞い始めた。それは一見、戦闘を無視した演舞であった。が、歴戦の戦士や、コールくらいの実力者からしてみれば目の前の敵が繰り出す踊りはあまりにも不気味に感じさせるのだ。

考えてもみる。いきなり踊りだすんだぞ。馬鹿じゃないのか？

コールは困惑していた。

彼の感慨をよそに、シルヴァンは踊り続ける。役に立たない右腕と、銀を握った左手を華麗に振り回し、軽やかに足を振り上げ、舞踏会の麗人のように回り続ける。彼も驚いていた。自分が踊れる事に対して。別人が自分の体を使って踊っているとし考えられない感覚だった。

その姿に誰もが コールですら見とれた。が、さすがは聖騎士コール。一瞬で我に返り、攻撃のタイミングを窺い一気に間合いを詰める。



来るぞ

シルヴァンは目を瞑ったまま、踊り続けた。シルヴァンは、彼の胸にこみ上げてものに気が付いた。妙な安心感。目を閉じているのに、相手の攻撃が手に取るようにわかる。

そして何の考えもなく出す一撃が、しっかりとクレイモアに呼応するのが感じられる。

いいぞ、その調子だ。もっとステップを踏め。大事なのはタイミングだ

例の声が、内面世界に浸りこむシルヴァンの耳から遠くなる。もはや、シルヴァンはただ情熱的に踊っていた。汗が滴り落ち、地面でジュツと音を立てる。一心不乱に舞い続ける姿は、まさしく踊り子そのものだ。

顔には出さないが、コールは内心結構焦っていた。

聖騎士に選別されて約五年、自分はさらに鍛錬に励んだつもりだった。体に電流を纏う、上級魔法のライティング・ロープ電衣ライティング・ロープを使えるようになつたし、中級魔法は楽に幾度も唱えられるようになった。

だけれども、神より授かりしその能力を持つてしても彼、否、あの刃の前では意味を成さなくなってしまう。あれは電気や雷を吸収、無効化する魔具なのか？

そしてなによりあの“演舞”。なんの訳あって踊るのか。

こういう場合、踊る理由は三つある。

一つは『バード祈祷師』。祈祷によって神より力を授かるのだ。祈祷にも種類があつて、歌う、踊る、祈る、拝む、讃える等様々だ。だが、剣を持つて戦うバードなど聞いたためしがない。それに、バードでフェイス・スベルあれば信仰呪文やの一つや二つは放ってくるだろう。

二つ目。油断を誘う。相手の隙を作ろうとしても踊っている方が隙だらけなのは常識だ。それをわかりつつも踊るのは、その奥に作戦があるからか。実際、コールは一瞬油断した。

三つ目。この考えを思い浮かべたコールは笑った。もっとも可能性が低い答えだからだ。

それがシルヴァンの本当の戦闘スタイル。

しかし、パラスラの聖騎士はすぐに否定した。いや、有り得るかもしれない、と。彼が物思いに耽っている最中も躍りは続いていた。

どうだ

「……不思議だ。何かに満たされていく感じた」

上出来だ。もうそろそろ目を開いてもいいぞ。だが、それでも舞い続ける

「わかった」

ゆっくりと、瞼を上げると、回転するコロッセオが映った。いや、彼が回転しているからだ。

コールが見えるな？

視界の中にクレイモアを構えるコールの姿が見えた。

「ああ」

では、攻撃開始だ

シルヴァンは屈み、鮮やかに飛んだ。

今度はしっかりと相手の動きを見る。極僅かな隙を作れ。そこを突くんだ

再度、碧眼の両雄は激突した。

剣で切り結ぶ最中も、演舞は終わらない。逆に尚一層激しくなっていく。

コールは後手に回っていた。電衣によって各段に動きは早くなっているハズだ。それなのに何故後れを取る！？

疑問は焦りへと変わっていくが、面には出さずずっと耐え忍ぶ。

シルヴァンも新たな戦闘方法を身に付けたはいいが、決定打に欠けていた。

「……考えがある」

やってみろ

シルヴァンの考え付いた打開策とは。

まずとりあえず滅多打ちに刃を突き出した。目的はコールのクレイモアをどけること。

シルヴァンの痛烈な打撃にクレイモアは弾かれるが、コールは放さずに持ちこたえる。

そこが狙い目だった。

シルヴァンは右足で力のないクレイモアを蹴った。大剣と足が触れ合う瞬間、当然の如く電流はシルヴァンの右足の機能を麻痺させ

$$z_0$$

シルヴァンは痛みに顔を歪めながらも、体を屈めて健全な左足を軸にくるりと回転し、バランスを崩したコールの膝を右足で蹴り飛ばす。その時も体に電流が走り、シルヴァンの腰から下は完全に機能停止したのだが、コールを転ばす事に成功した。

コールが地面に仰向けになるとほぼ同時に、シルヴァンは腰が碎けながらもシルバー・ファングをコールの喉仏に押し当てる。

コールは一瞬目を見開いたが、何か悟ったように息をつき、言った。

「負けだ」

呆氣に取られていた審判は我に返り、慌てて旗を上げた。

「……勝者、シルヴァン」

一瞬の間をおき、大歓声が轟いた。

「才才才才才才才才才才才才才才才才！！！！！！！」

「やってくれたぜツツツ！」

「スゲエぜ、二人ともツツ!!!!!!」

「お前ら二人とも優勝だ！！！」

その一方で

「シクシクシク」

「コールさまあゝ」

「あああ、コールさまあ  
」

「わたし達のコールさまがあああああ」

観客席のコール応援団は垂頭喪気すいとうそうきの様であつた。が、

「……ねえ、あのシルヴァンって人もかつこよくない？」

「……うん、よく見るとイケメンよねえ」

「なに言つてんのよ、コールさまが一番に決まつてるじゃない」

「確かにコールさまほどではないけど、コールさまよりもお強いし  
ねえ」

「ああ、駄目、わたしシルヴァンさんの虜だわ」

「あたしもよ」

「あたしも」

「いえ、絶対コールさまよ！」

「そうよそうよ、コールさまが一番よ！」

とその一角が、新たな戦場となつたのは言うまでもない。

シルヴァンは刃をどけ、鞘に収めた。

コールは埃を払いながら立ち上がり、負けたのに相も変わらずな微笑を浮かべた。体を麻痺させているシルヴァンを見つめて、シルヴァンの肩に触れ、電流を送り込む。

「これで大丈夫だ。君の体は正常な状態に戻ったはずだ。電気の操り方次第では、相手を麻痺させたり、逆に適切な電流を流し込んで元通りにすることは造作もない」

言葉通り、シルヴァンの肉体を侵していた麻痺はまるで嘘のように取り除かれた。

シルヴァンは立ち上がると、コールと握手した。

「恐れ入ったよ。まさかこの聖騎士コールが敗北するとは。まだ修行不足だな」

「そんなことはないよ。君はとても強かったぜ」

「そう言ってもらえると嬉しいな。」

だがしかし、まさか麻痺を覚悟であんな攻撃をしてくるとは、思ってもみなかった。そこが僕の敗因かな。いや、それだけじゃない。急にあんな踊りを見せられたら油断してしまったよ」

「……戦闘中、何か言っていなかったか？」

「ん？ ああ、気にしないでくれ。独り言さ」

わかつているぞ、何か秘密があるんだと告げるような眼をコールはしたが、何も言わなかった。

「次はケレンドスだな。がんばってくれよ。このコールに勝ったんだ、負けは許さないぜ」

「ああ、まかせておけ。必ず“ケリ”はつけさせる」

「ケリ？」

「いや、気にしないでくれ。こつちの話だ」

「そうか。」

……これを受け取ってくれ」

コールは徐に左手の皮手袋を外してシルヴァンに渡した。

「友情の証だ。その手袋は特別製で、いろんな効果がある。熱、寒さ、電気、ありとあらゆるものを防ぐ役割を果たす。もし君が今後僕のような輩を相手にした時に、少しでも役に立てると思う」

「ありがとう。この恩は忘れないよ」

「“我々”にとって友情は借りではない。ある意味でそれは無償の愛と同じようなものだ。そうだろう？」

「まさしく」

「健闘を祈る。さらばだ」

コールとシルヴァンは対面し、再び騎士の礼をした。  
コロッセオの誰もが コールやシルヴァンを気に入らないチエ  
イスタルやゾーラの騎士団員を除いて 惜しみなく拍手を送った。

「コール・コール!!」

「コール・シルヴァン!!」

「<sup>コール</sup>万歳!! <sup>コール</sup>万歳!!」

「コール!! コール!!」

「シルヴァン!! シルヴァン!!」

両者は去りながら、手を振って歓声に応えた。するとさらに大きな拍手が寄せられた。

\*\*\*

「よくやった」

アリオンはシルヴァンの善戦を労った。

「よく<sup>パラディン</sup>聖騎士に勝ったな。これはすごいことだぞ」

「ありがとうございます」

「本当によくやった。褒めても褒めたりないくらいだが、次は決勝が控えている。約三十分後だ。少しでも体を休めて、万全の調子で



決勝に臨め」

「はい」

＊＊

「すみません、ご期待に添えませんでした」

コールは頭を下げた。

「気にするな、お前はよくやった」

渋い声の正体は balan 卿である。彼はコールの肩を叩いた。

「……お前はパラスラの聖騎士だったのだな。わたしも知らなかったな」

「すみません、我が神より必要以上に聖騎士のことを口に出すのは禁じられておりますゆえ」

「そうなのか。だが、いいものを見れた、生で聖騎士の姿も拝めたしな。さっきの敗北は今後のお前にとってより良いものになるだろう。今後も精進に励めよ」

「はっ！」

再び頭を下げ、通路に消えた。

その後姿を見つめていた balan の脳に、ある声が語りかけてきた。

（クッククク。見事な戦いぶりでしたね、balan 卿）

（貴様か）

（クククク、あんたの手下に聖騎士がいたのは予想外だったが、いい具合にあの小僧が倒してくれましたよ。これはあんたも、あのシルヴァンとかいう小僧とアリオンに感謝しなくてはな。自分の部下を死なさなくて助かりましたね）

（何の用だ）

（何も。ただあの小僧もあんたの部下のおかげで疲労困憊してるってワケですよ。これでケレンドスの優勝は決まったようなものだ）

（ゲスだな）

（そう言っていられるのも今のうちだ。わかっているだろうな、優勝者が皇帝に魔法戦闘具のことを依頼した直後だ。誰を殺すのか決めたか？ 言っておくが、ジェイスとクインラン以外だぞ。ジェイスはいつも魔法戦闘具を装備してやがるし、クインランにはまだ利用価値がある）

（……）

（フン、今決める。さもないと貴様の家族のいずれは近いうちにその首を晒す事になるだろう）

バランは苦悩に顔を歪めた。

（……だ）

（よし、決まりだ。後は手筈通り頼みますよ、 balan 卿。そうすればちゃんとあんたの家族は解放する）

（約束は守れ）

（エイジャ、通信を切れ）

（了解）

そして テレパシー 精神感応 の回線は途切れた。  
ただ一人、 第一の将 balan の姿だけが残された。

## 大会最終日：聖騎士（三）（後書き）

久々の更新です（汗）いやあ、どうも最近中々手が進まずに困つて  
ます。第二部ももう少しで終わりなので、それまでどうかお付き合  
いください。それではっ

## 大会最終日：覚醒め

西の控え室にて、シルヴァンは一人座り込んでいた。

不思議と緊張感はなかった。あとはただ自分のすべきことをするのみ。それがもし駄目だったとしても、悔いることはない。

コールから貰った皮手袋を左手にはめた。大き過ぎず小さ過ぎず、丁度いいぐらいのフィット感だった。

その左手で シルバー・ファンゲ 銀の牙 を握る。なんとも言えない相性の良さを感じた。

あの声は聞こえない、また聞こえなくなったのだ。もしくは、声の主が話しかけるのをやめたか。あの声はこちらから話しかけても応えず、あつちの都合によって会話できることをシルヴァンは理解した。

「なかなか不便だな……」

あの言葉が引っかかる      声が告げたあの言葉

僕の指示に従えば、自ずと君の体は動き出すだろう。昔と同じようにな

昔      僕は何をしていたんだ？      その想いが、シルヴァンを締め付ける。

やがて最後の舞台が整えられたことが告げられた。  
シルヴァンはゆっくりと立ち、部屋を後にした。

\*\*\*

入口には既にアリオンが到着していた。

「休めたか？」

「はい。ただ……先の戦いでかなり疲れてます」

「しょうがないな。お前が闘ったのは聖騎士だ。パラディン並大抵の戦闘能力では到底敵う相手じゃない、それとお前は闘い、勝利したんだから代償は大きいだろうな。」

だが、聖騎士に選別されるのが極僅かな者達なら、彼らに勝てるのも極限られた者達だけだ。誇っていいことだぞ」

「はい」

「……次で最後だ。しっかりやってこい」

「はい……。將軍、ボーカスはどうですか？」

ボーカスは、ケレンドス戦後にいきなり倒れた剣闘士だ。彼はジェイス・ランバルディーン將軍の部下だった。

「ああ、彼か。安心しろ、大事には至っていない。どうやら強力な痺れ薬が原因だ」

「やはり、ケレンドス戦の影響でしょうか」

「十中八九。ボーカスの傷口から痺れ薬が体内に回ったと医師団は言っていた。つまり、奴の武器にすり込まれていた、と」

二人は怒りで顔をしかめた。

「許せないですね」

「わたしがお前なら、徹底的に叩きのめすが、お前はどうか？」

「同じですね」

アリオンは微笑んだ。

「じゃあ、やってこい」

「了解しました」

＊＊

「これより、決勝戦を行います。選手入場です」

割れんばかりの歓声が轟いた。

「西、ウェイブラス騎士団一番手シルヴァン。東、チエイスタル騎士団一番手ケレンドス」

剣闘士二人は中央に進み出た。

「ケレンドス！！ ケレンドス！！」

「チエイスタル！ チエイスタル！」

「シルヴァン！ シルヴァン！」

「コール・シルヴァン！」

最後まで勝ち残ったシルヴァンとケレンドスは互いを見つめた。  
一方は　艶やかな黒髪と碧眼の美青年。

もう一方は　下卑た笑いを浮かべた浅黒い肌をした短髪の男。  
年はシルヴァンとさほど変わりはないだろう。

「離れなさい」

意外にも一言も会話することなく二人は距離をとった。  
しかも、

「構え」

なんとケレンドスは騎士の礼をしたのだった。これにはシルヴァンも驚いた。

「始めいッ！！」

合図と同時に、ケレンドスは動いた。いや、放ったと言うべきか。ケレンドスは太股に差してあったナイフを、芸人の一座が行う曲芸のような動作で複数投げた。動かしたのは二つの腕だけだが、放たれたナイフの数は十近くにものぼる。

シルヴァンはいくつかを払い、残りの分は横に逃げて回避したが、またケレンドスは同じ攻撃を繰り返してくる。一体何個のナイフを忍ばせているのか。

触れないように気をつけながら避け続ける。このナイフ一本一本にも痺れ薬が仕込まれているのかもしれない。もしそうならば、絶対に直撃だけは避けなくてはならない。

身を翻し、一気に距離を詰めるが、ケレンドスは予期していたかのように身を退く。



続いてケレンドスが出した得物は　剣だった。まさか、それでシルヴァンと勝負しようというのか。

シルヴァンは矢継ぎ早に刃を繰り出すが、ケレンドスは見事それらを切り払った。その動きだけでも彼がここまで残れた実力を十分に物語っている。

しかし、ここで速度を落とすシルヴァンではない。神速の如く手を動かすスピードを上げる。

あまりの速さにケレンドスは後手後手に回るが、防御と言うよりは『逃げ』ているのでそう簡単に組ませてはもらえない。なかなか賢い戦略であった。

シルヴァンは痺れを切らし、詰め寄った。ついにケレンドスを捕まえ、組み合う。そうなればもはやシルヴァンの独壇場だ。ケレンドスに焦りの表情が走る。

上下左右から刃を突き、ケレンドスのバランスを崩した。すかさず腹を蹴り、倒す。

勝った！

その瞬間、シルヴァンには珍しく冷静さを欠いた。それは優勝を目前にした慢心からか、ケレンドスを相手にした怒りにも似た感情からか。

そして、見た。ケレンドスがニヤリと笑みを浮かべるのを。彼は何かを投げた。それはあまりにも小さく、速かったのでシルヴァンの身にぶつかるまで何が起きたのかわからなかった。

「ウツ！」

肩に僅かな痛みが走る。シルヴァンがそこに目をやると、三本の針が刺さっていた。と同時に腹に蹴りが叩き込まれ、後ろに吹っ飛ぶ。肺から空気が押し出され、数秒喘いで落ち着く。

ケレンドスはゆっくりと立ち上がる。その顔には特大級の邪悪な笑みがあつた。

しかしその笑みもシルヴァンがすつくと立つのを見ると途端に驚きに変わる。

差された針を、シルヴァンは無造作に抜いた。抜く瞬間痛み顔に顔を歪ませた。血が糸を引き、白い衣装に赤い斑点が浮かぶ。

「チツ、死にぞこないめ」

ケレンドスの口から呪詛の言葉が洩れた。

この言葉から察するに、針には恐ろくなんらかの毒が仕込まれているのだろう。相手を殺すのは反則になることから、ボーカス同様痺れ薬である。

そして、この時シルヴァンが取る行動は二つに絞られる。

一、動かない。動けば体内を巡る血液の流動が激しくなり、より一層毒の侵攻が進む。この場合、相手が打って出ないとこちら側からはどうしようもない。

二、早めに決着を付ける。

シルヴァンが選んだのは果たして

彼は走った。後者である。

ケレンドスの驚きをよそに、シルヴァンは動き続けたが、ケレンドスは逃げた。

五分後、シルヴァンは体に異常を感知した。右肩を中心に、体の各部位が動かないのである。

「ようやく効いてきやがったか。どういう体してやがるんだ、象ですら三分あれば麻痺で動けなくなる代物だぞ」

ペツとケレンドスは唾を吐いた。

やはり、仕込まれていたか。

ケレンドスは剣を握りなおし、攻めた。シルヴァンは逃げるしかなかったが、体がほとんどいうことをきかない。あっという間に追

い詰められた。

「チィイツ！ しぶてえな！」

ケレンドスは地面の砂を掴み、シルヴァンに投げつけた。

「クソッ！」

途端にブーイングの嵐である。

残された力を振り絞って、ケレンドスから逃げた。その時、シルヴァンは地面に肩膝をついていた。シルバー・ファングを差し、寄りかかっているほどの重傷だ。

「ハア、ハア」

「……これで終わりだな」

「いくつか訊きたいことがある」

「ん？ 何言つてやがる、お前はもう負けなんだよ」

「お前達は何を企んでいる？」

「？」

「先日の balan 卿邸宅襲撃事件の主犯はお前達だろう」

ケレンドスは驚愕した。

「てめえ、なんでそれを知ってる！？」

と言ってから、しまった、と顔をしかめる。

「お前の口からちゃんと訊きたい。何が目的だ」

「……事件の真相をほぼ把握してるってことは、生かしちゃおけねえな。多分、この大会が終わった後お前は始末されるぜ。

いいぜ、教えてやる。どうせこの後お前は全身マヒで気絶し、その後二度と目覚めることなく一生を終えるんだから、冥土の土産に全部教えてやる」

「……」

「きつと閣下も少しくらいなら許してくれるはずだ。大会終了後、パラスラ騎士団は反乱を起こす。奴らは国家転覆と皇帝暗殺未遂の咎で肅清される」

「……」

「驚かねえな。ってことはやはり知り尽くしてるってことか、なおさら生かしちゃおけないな。

主犯格は 第一の将 バラン、奴を中心に計画は行われる。

バランは将の一人を殺し、そいつが襲撃事件の犯人だと告発するが、証拠不十分を指摘される。詰問されて追い詰められたバランはパラスラ騎士団の名を使って反乱を起こそうとするのを、我々が未然に防ぐというシナリオだ。反乱軍を鎮圧した後、我々はバランに先の襲撃事件は全て自作自演 協力者はパラスラ騎士団であったことを告白させる。無論嘘だがな。

パラスラ騎士団はそんなこと聞いてもないし、バラン邸を破壊もしていない。おまけに被害者であるバランも逮捕され、皇帝暗殺

の罪も加えられて投獄される。重罪を犯したパラスラ騎士団は解体、肅清され帝国第二軍であるチェイスタル騎士団が第一軍に昇格され、反乱時の功績によって俺は特別な地位を約束されてる」

「何故、他の騎士団を陥れようとする？」

「クククク、こんなに簡単に地位、名誉、金全てが手に入ることはないからな。 balan ですら今や俺たちの言うことを聞かざるを得ない状況だ。家族が人質じゃあ反抗もできないからな。パラスラ騎士団に個人的な恨みはねえが、自分達より上の位にいるってのが気に入らねえ。だからあいつらにや悪いが消えてもらっ、ってワケよ」

「そんなことをして一体なんになるって言うんだ」

「面白いからさ！ 楽しいからさ！」

審判に聞こえないように、ケレンドスは叫んだ。

「手柄を上げれば俺も貴族、楽な生活が待ってる。サイコーじゃねえか！」

フツフツと、シルヴァンの心の中にどす黒いといってもいい憎しみと怒りが沸いてきた。それは収まることを知らず、膨張し続けた。

「お前らのせいでどれくらいの人が苦しむと思ってるんだ」

「んなもん知ったことか！ ようは俺らに都合がよければそれでいいんだよ、何千人の平民や傭兵どもが苦しむからどうしたってんだ。黙って俺らに従えばいいんだよ！」

「クズだな」

「ああん？」

「ゲスだな、お前らは」

「そう言ってられんのも今のうちさ、お前はここで負けるんだからな、ハハハハハハハハハハ！」

人は怒りを乗り越えた時、何かを悟るという　今のシルヴァンがそうだった。

彼はゆっくりと立ち上がった。

「……化け物め、まだ動けんのか」

代われ

声と言った。シルヴァンは抵抗することなく“受け入れ”た。  
何かが変わる。

シルヴァンは“叫んだ”！

「

」

それは　それは　“竜”の　妖魔の咆哮だった。  
咆哮は空気自体を震わせ、ガイザード中に響き渡った。

北に向かった咆哮は、ガイザード軍と交戦中の妖魔を震え上がらせた。

「こ、これは　　竜！　撤退だ、撤退しろ！　竜が来るぞ！」

妖魔はただガムシヤラに逃走した。

その様子を呆気に取りられた顔で見いていたのはガイザード軍の兵どもだった。

西に向かった咆哮は、砂漠にいる二人の旅人に届いた。

「これは　？」

「……竜だな。急ごう、ヘイズ將軍の招集もあつたからな」

「ええ、急ぎましょう」

東に向かった咆哮は、バリアによって跳ね返され、ヴァリノイアに届くことはなかった。

その咆哮をコロツセオ内で聞いた存在は四人。

一人は　ライカ。彼女は叫びを聞いた瞬間、あまりの轟音に耳を塞いだ。

二人目は　シン。コロツセオ最上部で見物していた彼女は驚愕とも歓喜ともつかないような表情を浮かべ、独り言ちた。

「まさか　“四人目”か！？　聞いたこともないわ、“四人目”なんて　。クソツ、ウェイザー殿かネツサ殿がいれば　。いや、もしかして、彼が、“彼”が、“あの人”！？　まさか、そんなありえるか？　でも“あの人”の思いつきそうな考えだわ」

三人目は　マオ。ひっそりと物陰に隠れていた黒猫は、咆哮を聞くと全身の毛を逆立て、唸った。

そして四人目　その存在は

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「どうした、アーバイン！！」

騒ぎはロイヤル・ボックスで起こった。

突如としてアーバインという謎の魔術師が頭を抱えて転げ始めた。

「どうした！　何があったんだ、アーバイン！」

「あ、頭ガアアアアア！　割れるウウウウウウ！」

「誰か、誰か！　そうだ、魔術師ども、アーバインを介抱しろ！  
急げ！」

「ハッ！」

アーバインは魔術師の魔法によって空中に浮遊し、コロッセオから退場した。

しかし、突然アーバインが倒れた時のギラン皇帝の焦りようあれは何か理由があるのか？

一方、シルヴァンにも確実に変化は起こっていた。瞳の青は氷のように冷たく光り、激情のオーラが迸っている。

銀の刃は同じ色の光沢を妖しく発し、禍々しさを露呈している。

シルヴァンの口から、轟くような声が洩れた。



「お前らはただの盗賊だ。貴族というものは、民を守るために在る。<sup>あ</sup>国を乱すような輩には相応しくない称号だ」

「言つてろ！　くたばれ！」

ケレンドスは突進してきた。

剣がシルヴァンの体にぶつかる寸前、剣は消えた。

「え？　え？」

ケレンドスは自分の右手を見た。  
ない。

「え？　え？」

ない。右腕の途中から先がない。

「え？」

左の方も見た。やはりない。左腕の途中から先がない。

ポト

何かが落ちる音がした。よく下を見ると　あつた。彼自身の腕が。

不思議な事に、傷口から血が吹き出ない。どちらからも。

何度も三箇所　地面と左右の腕を行き来した視線は最終的に敵の顔にいきついた。

「自分の腕が切られた感覚はどうだ？」

そう告げられて、ようやく痛みがやってきた。地獄にも勝る激痛だ。

「ギャアアアアアアア！」

ケレンドスは崩れ落ちた。

よく見ると、傷口から血が出ないのは、傷口が凍っているからだ。血液が凍っている。

「謀反者には相応しい結末だな」

ケレンドスが顔を上げると、シルヴァンの右腕がゆっくりと後ろに振りかぶられた。

その右腕は弓の如く撓り、矢の如く放たれた。

鈍い音を残し、ケレンドスは十メートル近く吹き飛ばされた。砂地が血に染まる。今度はちゃんと流血した。

ケレンドスはピクピクと痙攣し、動かなくなった。

慌てて審判が駆け寄る。

「……死んではないいな」

「そのようだ。ということは、気絶と判断するか？」

「ウム」

旗が上がる。次いで、場内にアナウンスがコールされた。

「勝者、シルヴァン」

一瞬の間をおいて、大歓声が轟いた。

その瞬間、アリオンは小さくガツポーズし、ハイヴァーンは悔しさに顔を歪めた。

シルヴァンは騎士の礼をせず、手を振って歓呼に応えた。

医療班が急いで駆け付けたが、凍結している傷口を見て首を傾げる。

「優勝者は王者の場へ」

優勝者のみが使用を許される中央階段にゆっくりとシルヴァンは進んだ。

左右の階段をアリオンとハイヴァーンも使っている。と同時に、コロッセオにいる他の五人の将も王者の場へと向かった。

そんな中の一人、バラン卿は

（ケレンドスが負けたのは予想外の進展だ。だが、計画に支障はない。予定通り殺人を実行しろ）

（……）

ただ一人だけ苦い顔をしていた。

将全員が王者の場に着いて間もなく勝者の姿が見えた。

シルヴァンは赤い絨毯に膝をつく。

王者の場には将をはじめ、非常に位の高い貴族、神官、大臣達が直立していた。それらの後ろには魔術師部隊が控えている。

ゆっくりと、もったいぶるような足取りでやってきたのは帝国最高権力者ギーラン皇帝であった。左右に数名の小姓を従えている。

その場にいる全員が頭を垂れた。

「優勝者シルヴァンよ、よくここまで勝ち残った。褒めてつかわす」

シルヴァンはより一層平伏した。

「優勝者のそちには、余直々に冠、剣、賞金を与えよう」

と言つて小姓からオリブの葉で編まれた冠を受け取り、頂かせた。次に「受け取るがよい、王者の剣だ」と、シルヴァンに金銀細工の剣を渡す。

そして最後に、横から流れてきた机の上に並べられた金貨百枚を示して

「賞金の五十万ルーアだ。これすべてそちの物となる。これらは帝国銀行に預ける形となるが、いつでも引き落とせるから安心するがいい」

息をつく。

「さて、そろそろ本題に入ろう。そちは余に何を望む？ 叶えられる限りのことであれば何でも叶えよう」

ふと、アリオンは balan が腰にある剣に手を当てているのを見かけていぶかしんだ。

おかしい。何故魔法戦闘具所持者の balan 卿が武器を持っている？ アリオンの疑惑は、balan の手によって剣が若干鞘から引き抜かれたことで膨れ上がった。

何をする気だ？

「さあ言うがいい。例年の優勝者は例外なく魔法戦闘具の精製を希望する。そちもそれが望みだろう？ さあ」

「畏れながら陛下、私めの望みは魔法戦闘具の精製ではございません」

途端に、その台詞を聞いた者達がざわめき始めた。まさしく異例のことがおきようとしている。バルンの手も、つ、と止まる。

皇帝は驚いた。

「ほう、魔法戦闘具以外の何を望むと言うのか？ 金か？ それならば賞金に加えてさらに増額もさせよう。地位か？ それならばそちに爵位を授けよう。名誉か？ 大会優勝以上の名誉はないと思うのだが、それでも一体そちは何を望むと言うのだ？」

「公平な裁きを」

シン

水を打ったような静寂が辺りを満たした。その頃、コロッセオの観客達は一部を除いて退場していき、兵士達も結果について話し合っている。王者の場で起きていることについて、思いを巡らす者などば皆無であつた。王者の場にいる者達を除いて。

「ほう、つまり、そちは余に恩赦を求めているわけか。それならばそちの望む者に恩赦を与えてつかわす。誰だ、言うてみるかい。例え死刑囚だったとしても即時無罪釈放にしてやらんことないぞ」

「陛下、憚りながら死刑囚を即刻釈放するのはあまりにも」

「大臣よ、そちは誰に向かって口を利いているのだ？ 余の決定は絶対だ。異論でもあるのか？」

「ハアア！ 滅相もございません」

皇帝に睨まれた禿げ頭中年男性はすぐさま跪いた。

「畏れながら陛下、私めが望むのは恩赦ではございません」

ギーランは怪訝な顔付きになった。

「恩赦ではない      するとなんらかの冤罪を証明して潔白を示した  
いというのか？」

「いえ、それも違います」

「なんだ、もったいぶらずに言え。何が望みだ」

「告発でございます」

皆どういつリアクションをしていいか困っている顔を浮かべる。

「告発      」

「左様でございます。私はある人物を国家転覆の罪で告発いたします」

「オオ！」

どよめきが洩れた。

「シルヴァンとやら、余はそちに確かになんでも望みを叶える  
と申した。が、そちの望んだのは『公正な裁き』であったな。よっ

て余はそちの望み通りその告発について、告発の真相の是非を見極めるべく、全力で取り組むよう裁判機関に訴えかけよう。が、しかしだ。そちの望んだ通りにことを進めようとしたならば、そちの告発がもし嘘であった場合　嘘が発覚したり証拠が見つからないとしたら、次に裁きを受けるのはそちであり、そちこそ国家転覆の疑いで裁かれるのだぞ。それでもいいのか？」

「構いません」

「そうか。それならば言うがいい。そちは誰を告発するのか？」

「私は　」

シルヴァンの眼が光った。

「私は、第二の将　ハイヴァーン將軍を国家転覆及び先のバラン邸襲撃事件の主犯として告発いたします　」

## 大会最終日：神降臨す

「私は 第二の将 ハイヴァーン將軍を国家転覆及び先のバラ  
ン邸襲撃事件の主犯として告発いたします」

時が止まった。誰にも最初言葉の意味を理解できていなかった。  
初めに口を割ったのは当然の如く

「貴様ツ、何を言つてやがる！」

一歩前へ出たのはドぎつく目を吊り上げたハイヴァーンだった。  
肩が振るえ、こめかみがピクピクしている。シルヴァンはまだ床を  
見たままだ。

「てめえ、答える！ 何を証拠にふざけたこと抜かしてやがるんだ  
！」

「控えよ、ハイヴァーン」

ギーラン皇帝は尊大な態度で遮った。

「陛下ツ、こいつはこの俺に、一介の兵士が 第二の将 ハイヴァ  
ーンに国家転覆というんでもない罪を擦り付けようとしているん  
ですッ！ これが黙ってられますか！」

ハイヴァーンはシルヴァンを差しながら怒鳴ったが、ギーランは  
めんどくさそうに手を振った。

「ハイヴァーンよ、余はこの者の告発の真相を追究すると約束した。



それがこの者にとって善と悪、良し悪し　有罪か無罪、真か嘘かを問わず、必ず突き止めると約束した。それはもう決定したことであり、覆すことはできん。このシルヴァンがそう言わない限り」

「やい、てめえ！　今ならまだ許してやる、その事実無根の告発とやらを撤回しやがれ！」

「陛下、私の希望は変わりません」

「貴様ツ！」

「ハイヴァーン、邪魔をするな。今聞いた通りこの者の願いは変わらない。よってそちは余の名において裁かれることを覚えておけ。だがハイヴァーンよ、そちの申すようにこのシルヴァンの申し立てが嘘即ちでまかせであるならばそちに非はないだろう。そうだな？」

と訊ねたのは彼の周りに佇む老人達　神官を始め大臣クラスの者達にだ。

それにはさすがにハイヴァーンも了承するしかない。法廷の場にて身の潔白を証明すればいいだけのことなのだから。彼は忌々しげにシルヴァンを睨んだ。

「無論ことは慎重に進める。……シルヴァン、告発したからにはそれ相応の証拠があるのだろうな」

「はっ」

「ならばこの決着は裁判所にて執り行ふ。余も出席しなければならん」

シルヴァンが制する番だった。

「いえ、陛下。裁きはこの場にて行っていただきとう思います。すでに証拠をこの場に運んでおりますゆえ」

「な、それは本当か！」

その声はギーランだけでなく、王者の場にいる者全ての口から洩れた叫びだった。

「絶対な証拠と思っております。もしその証拠が全て出揃った時点でもお疑いになる場合は、これ全て私がハイヴァーン將軍を陥れようとしたとして逮捕、拘束していただいても構いません。それほど自信のあるものにございます」

その自信に満ちた発言に、ざわめきが広がる。一体どのような証拠が持ち出されるのか楽しみであると同時に、もしかして本当にハイヴァーンが全ての犯人なのか、という疑いが膨れ上がってきた。

「よろしい。ではその証拠とやらをここへ」

「畏まりました」

とだけ言うとシルヴァンは立ち上がり、赤絨毯の上から身をどけた。

「すぐに参ります」

その言葉の真意は一体なんなのか。答えはすぐやってきた。空間が“開いた”。いや、正確に表現するならば、皆の見える

前で空間が縦に裂けた。裂け目からは緑色の光が顔を覗かせている。円形に広がり、不気味な緑の光が口を開いている。

緑の円のから、何かが飛び出した　靴の爪先だ　そして全体が出た。

「ガラティア！」

balan は愛する妻をひしと抱きしめた。

「ああ、ガラティア、心配したぞ！」

「心配をかけてごめんなさい、 balan 」

いきなりの展開に何人ついていけたろうか。襲撃事件で拉致された balan 卿の奥方、ガラティアが現れたのだった。

シルヴァンは頃合をはかって、

「陛下、これが第一の証拠です。拉致されていた balan 卿の妻、ガラティア殿でございます。彼女は犯人の顔を見ております」

「……それは真か？」

ガラティアは夫から身を離し、凜とした表情で言った。

「はい、陛下。私はしかとこの目で犯人の顔を見ました。この男です！」

と、憎しみの念を込めてハイヴァーンを指差す。ハイヴァーンは睨み付けるが、なにも言わない。

「私達の家を破壊し、私と息子達を連れ去ったのもこの者が主犯です！」

「……その子供達はどこだ？」

「シルヴァンさん？」

ガラティアを吐き出して閉じた空間は再び開かれた。今度出てきたのは赤子を抱く五歳の子供だった。ガラティアも balan も駆け寄った。

「おお、無事だったのか、マリウス、リユート！」

balan は憚りなく泣いた。ガラティアも。彼ら親子は約二月ぶりに再会し、涙の対面をはたしたのだった。その姿に心をうたれ、目頭を押さえる者、ハンカチで目を拭う者もたくさんいた。

「マリウス殿、証言を」と、シルヴァン。

まだ押さえないはずの少年リユートは礼儀正しく皇帝の前でお辞儀をし、声を張った。

「こうていへいか、ぼくははんにんのかおを見ました。この人です」

と、母親と同じ人物を差す。指の先にはハイヴァーンがいた。

「ご苦労だ。……わかっていると思うが、シルヴァンよ、これだけでは全く足りないというのが」

「勿論です、陛下」

展開を見守っていた長老達が話し合い始める。

「大臣、どういことですか？ 足りない、というのは」

「なあに、簡単なことですよ。この証言だけでは全く証拠になっていないということです。 balan 卿のご家族が見つかったというのももし balan 家族の陰謀だったら？ それを否定するだけの証拠もないし、ましてやハイヴァーン將軍を犯人とする言葉もどこからどこまで真実なのか証明できるものがない。ハイヴァーン將軍を陥れようとする陰謀なのかもしれませんよ」

「なるほど、ありえますな」

彼らはああでもないこうでもないで静かに論議を開始した。

「陛下、それでは最後にして最大の証拠をご覧に入れたと思います  
す」

シルヴァンはゆっくり、堂々と告げた。

コッ コッ

皇帝家関係者のみが見える階段から足音が響いてきた。

一つの影が現れた。フードで顔をすっぽり覆っている。彼はゆっくりと王者の場に下りてきたが、近衛隊の騎士に阻まれた。

「貴様、何者だ！ ここは皇帝家専用通路だぞ！ 下の兵士達は何をやっているんだ！」

「“彼”も証拠です」

騎士はシルヴァンを見、目の前の人物を見、と何度も同じことを繰り返した。

人影はフードを取った。出てきたのは鮮やかな金髪と緑色の瞳だった。その瞳は妖しく光っていた。

「お前は　トリスタン！」

叫んだのは誰でもなく　なんとテサーナ神の神官達だった。

トリスタンは騎士を横にどけ、下に下りてきてシルヴァンの横に立つ。

「トリスタン、お前、何故ここにいる！」

「控えなさい、我が信徒よ。あなたが目の前にしているのはただの僧侶ではありません」

トリスタンの口から出てきたのは彼のものではなく、威厳に満ちた女性の声だった。その荘厳さ、壮大さは決して人間の口から出せるものではない。

ふと、神官達の胸元から光が溢れた。慌てて探ると、皆白光を放つ輝くメダルが握られていた。そのメダルは、どの神に仕えている者でも必ずもつ物で、どの神に仕えているかを示す物であり、同時に

「お許しください、テサーナ様！」

テサーナの神官は等しく平伏し、額を地面につけた。事情を読み取った他の神の神官も膝をつく。

メダルにはもう一つ意味がある。彼ら自身の神が世に降臨された際、その旨を告げるのがこのメダルの役割だった。つまり、今この

メダルが告げるのは　神が降臨したというただ一つの事実。

そして、テサーナの高位な神官は知っている。目の前に立つトリスタンという男が　契約者　と呼ばれていることの意味を。それは　気まぐれな運命神テサーナがこの人物を介してこの世に降り立つということ。彼には神が宿っているのだ。

それは他の神にしても同様に良くあることで、他の神官もその事情はしっかり理解している。

しかし問題がある。人の世の理に大っぴらに干渉しない神々が、あえて人前に姿を現したことだ。もしかこの事件は神々の問題にも関わってきているのか？　だとすれば大問題に発展する可能性が高い。

「ほう、なかなか面白いな。それで、証拠を見せてくれ」

神を前にしてもその態度を改めないギーランはさすがともいえる。

「御覧なさい」

トリスタン　いや、テサーナはポケットから黒い六面体のサイコロらしき物を床に投げた。

コロコロ、と転がりピタ、と止まる。

「我が前に真実の運命よ　其の扉を開けよ」

神々しい声は詠唱するように唱えた。テサーナと化したトリスタンが手を翳すと六面体は光り、眩い光は空中に魔方陣を描く。見ている者の口から溜息が洩れた。なんとも美しい光だ。

見よ！　魔方陣の上にある家が映し出された。それは絵画という二次元的なものではなく、ホログラム“三次元立体映像”だった！　人々はまだにも美しく、鮮明に映し出された光景に見とれた。が、疑問がある。　この家、どこかで見たことがないか？

一人が叫んだ。

「これは 破壊される前の balan 卿の屋敷ではないか！」

ハッ！ そうだ、これは balan 卿の家だ。

「その映像は恐らく今より二月前のものです。今、テサーナ様は二ヶ月前の状況を再現されようとしているのです」

とは、平伏する神官の言葉だ。

皆息を詰めて見守る。

今、映像は動いていた。突然何十人もの人影が屋敷の外に出現し取り囲み、壊し始めた。映像はある一点 三人の人にクローズアップされた。彼らの前に、大人と子供と赤ん坊が連れてこられた。

三人の人影は頭を隠すフードを取った。現れたのは

「ハイヴァーン！」

「エイジャ！」

「ロマリウス！」

誰かが魔術師の二人を差した。

「捕らえよ！」

「チイ！」

女魔術師は素早く呪文を詠唱し、消えた。

もう一人の若い男魔術師は、逃げる前に魔法で束縛され、取り押



さえられる。

「エイジャが逃げたぞ！ 魔術師部隊、追え！」

何人かの魔術師が呪文書を開き、空中に消えた。

「クソ！」と、取り押さえられているロマリウスの口から洩れた。

「この映像、どこかで見た顔だと思っていたが、襲撃しているのは全てチエイスタル騎士団の面々ではないか。ということは、今回の事件は騎士団絡みだったというわけか」

「く……」

「暗黒神の信徒よ、姿をあらわせ！」

テサーナは光る手をハイヴァーンに突きつけた。ハイヴァーンの鎧が音を立ててはずれ、厚い胸板を露出させた。胸には奇妙な刺青が掘つてある。

「それは、もしかやデーサーンの紋章では！」

「間違いない、悪の神デーサーンの信徒が体に刻み付けるという紋章ではないか！ ということは、ハイヴァーン將軍は、悪の神に仕えているのか！」

「う……」

ハイヴァーンの額から汗が垂れた。

「この映像、真か？」

「陛下、この御業はテサーナ神の奥義でございます。過去の事象を再現するというのは、運命神にしかできない能力、他の神にはできません。我々テサーナ神の信徒はこの映像を全くの真実と信じます。もし裁判が開かれた場合、我ら信徒は全力でこれらのことを真実と認めます」

「我らはテサーナの信徒ではございませんが、この業は運命神だけが使えるものと心得ております。我々もまたテサーナの神官と意見を一致します」

「さて、どう言い訳する、ハイヴァーンよ。ここにいる全員がこれを事実と信じているそうだ。お前が暗黒神に仕えていようとは夢にも思っていなかったぞ。残念極まりない。奴らが逃げようとしたということは罪を認めたということか？」

「く……」

「ハイヴァーンを捕らえ、連行しろ！」

將軍を始め、近衛兵、魔術師がにじり寄る。

ハイヴァーンは腹を決めた。腕を広げ、口を開き呪文を唱えようとした。

緊張が走る。急がなくては！  
が

「陛下、お待ちを！」

それはシルヴァンの声だった。

ハイヴアーンも含め、皆彼を見た。

「なんだ、シルヴァン。そちはもう十分役目を果たした。これから我々でことを片付ける。下がっておれ」

「恐れながら陛下、この告発とは別にもう一つお願いしたいことがあります」

「なんと！ 一つでは足りず、また余に願いを申し付ける気か！ だがそちは今回、ある事件の真相を暴くのに大いに貢献してくれた。しかしそれは後にしろ」

「陛下、私はハイヴアーン將軍と一対一の決闘を所望します」

誰もが目を見開いた。

「な……」

「シルヴァンよ、自分がなにを申しているのかわかっているのか？」

「勿論です。陛下、私とハイヴアーン將軍を戦わせてください。もし私が勝てばそのまま彼を犯罪者として逮捕し、もし彼が勝てば彼が暗黒神の信徒であるということも含め、今回の罪を帳消しにさせていただきますでしょうか？」

今度こそ、皆驚愕した。

「そんなことできるわけがない！ 馬鹿馬鹿し」

「面白い！ よかろう！ そちの望むように計らおう！」

ギーランは手を叩き笑いながら告げた。

「これは楽しみだ！　おい、今すぐ準備しろ！」

「陛下、それはいくらなん」

「黙っている！　面白いぞ、大会の優勝者が　第二の将　に挑戦状を叩きつけるとは！　よし、望みどおりハイヴァーンよ、そちが勝てば全てを余の名に置いて赦そう！　そちが暗黒神の信徒だということも、バラン邸を破壊し家族を拉致したことも、チェイスタル騎士団全体の罪も全面的に赦す！」

「陛下、私にその権利をお譲りください！　誰よりもその権利は私にあるはずです！」

と、バランは激しく言った。彼こそ家族を拉致され、危うく全ての犯人にされそうになったのだから当然といえば当然だ。しかし、

「バランよ、そちの気持ちもわかるしそれもまた一興だ。が、余はシルヴァンと約束した。今から変えることはできません。これは決定事項だ。さあ二人の戦士よ、決闘場に行くがよい！」

「クククク、ハハハハハハ！　助かったぜ、まさか俺を訴えた奴に俺が助けられるとは！」

ハイヴァーンは哄笑し、一人早々と決闘場に向かった。アリオンがシルヴァンに駆け寄る。

「シルヴァン、お前相手が誰だかわかっているのか、あのハイヴァー  
ーんだぞ！」

シルヴァンはアリオンを真正面から捉え、しっかり頷いた。

「大丈夫です。なんとかありますよ、きっと」

「なんとかって言ったって、お前」

「僕の“なにか”がそう告げてます。悪を裁け、と　大丈夫です。  
必ず生きて帰ってきますよ。それより將軍、もし僕が勝った場合、  
ハイヴァーンは捕まります。それを見て暴動を起こす輩がいるかも  
しれません。気をつけてください」

「おまえ……」

「行つて来ます」

王者の場を去る時、 balan 家族が皆等しく礼をするのを手で制し、  
階段を下りた。

既にハイヴァーンは堂々と仁王立ちしている。

二人は対峙する。審判などいない、互いだけの世界、戦場、墓場。

「小僧、礼を言っぜ、てめえのおかげで助かった」

「黙っている、賊が」

途端、ハイヴァーンは激昂す。

「ああん！？」

「来ないのか？」

挑発することで相手に油断を誘う 戦いは始まっている。

「クツクツク……ならシヨツパナからブツ飛ばしてやる！」

両手を左右に突き出し、叫ぶ。

「ユゲニ・バンッソー・ドンウォ・リ・バーレー！ ヘイル・プレスッバージュヨー！」

フォトン  
光の粒子が形を成す。

禍々しいほどに赤く、黒い鎌。そして鎖。

両の手に人間大の巨大な鎌が& a m p ; # 2 5 6 8 1 ; まれており、それらをこれまた大きく、長い鎖が結んでいる。

ハイヴァーンは口元に冷笑を浮かべ、言う。

「小僧、これが俺様の ブラッディ・サイズ 血みどろ鎖鎌 だ！」

まさに血。その魔法戦闘具に相応しい名。

シルヴァンは動じることなくシルバー・ファングを鞘から抜く。

君の敵じゃない

声は言う。

委ねろ。全てを

「君は誰だ？」

「死ね！」

右手が一閃。超高速で鎌が放たれる。  
それを剣一本で防ぐ。風が舞い、轟音が発す。

知りたければ、いけ

疾走。

一気にハイヴァーンまで駆ける。

「クツクツク、かかってこいやあああああああああああああああああああああ  
ああああああ！」

走りながら、シルヴァンは構える。

僕は君だ

声は告げた。

銀色の剣と、鮮血の鎌がぶつかる。  
光が満ちる。音が満ちる。

シルヴァンは謎の声を聞いて確信する。理由はない。ただそう思っただけ。

このまま戦い続けることで、自分自身が見出せると。

自分自身を見つけるには、戦うしかないこと。だが、そうすれば自分がみつかる。

記憶を失う前の自分を、今の自分は知らない。

ただ、はつきりしているのは、自分がみんなの知るシルヴァンだということ。それだけ。

今後何が起きようとも、変わることのない事実。それが自分を突き動かす。

自分の人生はまだ始まったばかり。ほんの赤ん坊の命なのだ。

僕は、これからも戦い続ける。

それが、僕だから。



## あとがき

「大会最終日：神降臨す」の終わり方が、アレ？ と思った方がいらつしやるかもしれませんし、いらつしやるかもしれないかもしれませんが、とりあえずこういう次第です。

昨年度の末頃から開始したスタリオン・サーガですが、ここで一旦幕を閉じさせていただきます。

まずは、最終話の投稿が遅れたことのお詫びから。

ほんと

にすいません。。。。

。。。。

言い訳にしかありませんが、スランプ続きでなかなか筆が進まなかったこと、突如として家のインターネット環境が崩壊、約一週間の間原始の生活を送ってました。

ほんとーにすいません。

で、本題に入ります。

本作品を書き始めた時からいろんな伏線を伏せてばかり。全部回収していく自信はあったのですが、今年で高校三年生になり、受験やらなにやらで、学業との両立が難しくなっていました。

故に、今回はこういう措置を取らせていただく事となったわけです。楽しみにしてくださいだった皆さん、すいません。申し訳ないです。いつかは物語を完成させたいと思っている次第ですが、それがいつになるのかは未定です。

ほんとダメダメばかりですいません。

今回初めて作品を書いてみたわけですが、作品作りのよさを知る事が出来ました。もともとは友人がこのサイトに小説を投稿していて、自分もそれに感化されて始めてみたわけなんです。

小説を書いてる最中、自分だけの物語を作れるという幸せな時間を提供してくれた全てに感謝したいです。

呼んでくださった皆さん、ほんとーにどうもありがとうございます。でした。

いつかまたいろんな話をかけたらいいなあと思ってます。

お付き合いしていただいてありがとうございます。

それではっ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2529d/>

---

スタリオン・サーガ

2010年10月10日07時16分発行